

博士学位請求論文

指導教員 松田和信教授

般舟三昧経「行品」の研究

佛教大学大学院
文学研究科仏教学専攻

吹田隆徳

目次

1 序論	1
1.1 《般舟三昧經》	1
1.2 《般舟三昧經》梗概	4
1.3 《般舟三昧經》原形論	14
1.3.1 支婁迦讖訳の問題	14
1.3.2 支婁迦讖訳の編纂過程	17
1.3.3 高麗本と三本の異同	18
1.3.4 形式と思想の境目	21
1.4 研究の目的と方法	24
2 般舟三昧の系譜	27
2.1 赤沼・ハリソン説の再検討	27
2.1.1 作意の用例	28
2.1.2 随念の用例	32
2.1.3 他文献との比較	35
2.1.4 赤沼・ハリソン説再考の必要性	36
2.2 臨終見仏	37
2.2.1 《無量寿經》	38
2.2.2 《阿弥陀經》	39
2.3 臨終見仏と般舟三昧	40
2.3.1 臨終見仏の特質	41
2.3.2 般舟三昧の特質	44
2.4 《八千頌》に見る批判	45
2.5 小結	46
3 般舟三昧の役割	49
3.1 視覚化の手順	49
3.1.1 念仏観	51
3.1.2 不浄観	53

目次

3.2 仏像がない環境の想定	55
3.2.1 外的証拠	55
3.2.2 内的証拠	57
3.3 般舟三昧から仏随念へ	59
3.4 修道論上の位置づけ	63
3.5 小結	64
4 不可解な三昧の説明	67
4.1 項目列举型の説明	67
4.1.1 項目の内容	69
4.1.2 般舟三昧との関連性	71
4.2 経典解釈論	72
4.3 阿毘達磨論師の解説	73
4.4 不可解な説明の目的	75
4.5 《首楞嚴三昧經》	77
4.5.1 実態のない三昧	79
4.5.2 首楞嚴三昧の力	81
4.5.3 三昧の力と発菩提心	83
4.6 小結	85
5 結論	89
付録 A	95
付録 B	123
略号・参考文献	171

1 序論

本研究は《般舟三昧經》を対象とし、行品と呼ばれる章の分析に基づいて、般舟三昧の原初的な様相を考察する。この經典は原初形態が想定されており、一思想の原始的な姿を論じる土台が整えられている。また支婁迦讖訳（179年）が現存することから、少なくとも二世紀に遡る情報を取り扱うことができる。原初的な様相の考察により、この三昧が、どのような者たちによって、いかなる修道論上の要請に応えるべく提唱されたのか、その最も原始的な部分を明らかにする。そしてこの考察を通して、当時の大乘仏教の実態を垣間見ることが最終的な狙いである。この章では本論に先立って必要となる事項を述べておく。まず現在の学界で言われている本經について述べた後、經典全体の梗概や各章の要約などを示す。続いて先行研究を概観しながら、分析範囲を行品に限定する理由を説明する。本研究の具体的な目的と方法は最後に述べる。

1.1 《般舟三昧經》

本經は般舟三昧（**pratyutpanna-buddha-saṃmukhāvasthito nāma samādhiḥ*: 現在仏が面前に立つという三昧¹）を提唱し、この三昧によって現世でいながらに見仏する方法を説いた初期大乘

¹ 本文で示したサンスクリットはチベット訳 *da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzugs pa zhes bya ba'i ting nge 'dzin* からの還梵である。これまで *pratyutpanna-buddha-saṃmukhāvasthita-samādhi* という複合語に関して二通りの解釈例が提示されている（cf. Harrison 1990, 3. fn. 1. see also 梶山 1992, 239–242, 林 1994b）。一つには *pratyutpanna-buddhānām saṃmukhaṃ avasthitasya samādhiḥ* と解釈し、「現在諸仏の面前に立つ人の三昧」と理解する。二つには *pratyutpanna-buddhānām [bodhisattvasya] saṃmukhaṃ avasthitānām samādhiḥ* と解釈し、「現在諸仏が〔菩薩の〕面前に立つ三昧」と理解する。Harrison (1990, 3. fn. 1) は以上の二つの提示した上で前者を取っている。しかしながら、複合語のうちの *avasthita* に関して °*avasthitasya* といった格を想定し、「〔面前に〕立つ人の」と理解している点に疑問を生じる。そもそも本文で示したように、*pratyutpannabuddhasaṃmukhāvasthito nāma samādhiḥ* というのが本来の形である。これは《十地經》に見る般舟三昧が *pratyutpannasarvabuddhasaṃmukhāvasthitaś ca nāma bodhisattvasamādhiḥ* (DBh 179, 4) と記されていることから確認できる。さらに《三昧王經》所説の三昧が *sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcito nāma samādhiḥ* (SRS I 15, 9) と記され、この他に《八千頌》(ASP 940, 21–942, 5) に列挙される六十二種の三昧や、Mvy (No. 506–623) に挙げられる三昧も皆同様の形で記されている。これらの用例に鑑みると、°*avasthita-samādhiḥ* という複合語は °*avasthito nāma samādhiḥ* の省略形とみなければならない。そして A nāma B という場合、A の

經典である。この經典の思想的特徴として般若空思想と阿弥陀信仰の共存が挙げられるが、これに関して、先行研究では、般若空思想を基調としながら阿弥陀信仰との融合に經典編纂の動機をもち、所説の般舟三昧は仏随念 (*buddhānusmṛti*) が空思想によって展開したとみられている。この見解は赤沼 (1927ab) によって最初に提示されて以来、Harrison (1978ab) が従い、末木 (1989, 328) が先行研究を再考した際にも前提とするなど、現在までの定説となっている。

現存する資料は中央アジアで発見されたサンスクリット語写本断片 (Hoernle 1916²)、チベット訳 (PNo. 801, DNo. 133)、T 416 (闍那崛多訳『大方等大集經賢護分』)、T 417 (支婁迦識訳『仏説般舟三昧經』)、T 418 (支婁迦識訳『般舟三昧經』)、T 419 (失訳『拔陂菩薩經』) の四つの漢訳に加え、近年、ガンダーラ語写本断片とさらなるサンスクリット語写本断片の存在が報告されている (Harrison et al. 2018)。支婁迦識訳に見る「怛薩阿竭」(**tasagada*) や「須摩提」(**suhamadi*) などの音写語からガンダーラ語の原典の存在が示唆され³、本經の成立地が西北インドであるとも論じられてきたが⁴、実際にガンダーラ語写本断片が発見されたことより、少なくともこの地域における流布は確実視されることになる。

支婁迦識訳のような最初期の資料が現存することに加え、本經に阿弥陀仏への言及があることから、70 年代前半までの研究は諸本や浄土經典との先後関係を論じるものが大半であった⁵。諸本の先後関係に関しては、T 419 を最古とみて注目する傾向もあるが⁶、それでも研究者の興味の中心にあったのは支婁迦識訳であった。經録類に重訳の事実が確認されない以上、支婁迦識訳と伝わる T 417 と T 418 のどちらが先行する、つまり真撰にあたる

格は B に依存する (e.g. *samādhirājam nāma samādhim*: AAA 12, 14, *padmā nāma lokadhātur*: KarP 7, 18)。したがって省略形を解釈する際にも、*°avasthitasya* のような格限定複合語ではなく、同格限定語として解釈しなければ齟齬をきたすことになるだろう。尚、本文で示した和訳名はこの三昧の内容を鑑みた上での意識となっている。

² 香川 (1962) によって紹介されている。また Hoernle (1916, 89–93) に掲載された F.W. Thomas によるテキストと英訳は、Harrison (1990, 280–299) によって再校訂され、新たな英訳と共に提出されている。

³ cf. 西村 (1987, 113)、藤田 (1970, 433)、辛嶋 (2010, 33–34)。

⁴ cf. 静谷 (1974, 303)。

⁵ 年代順に並べると、赤沼 (1927ab)、望月 (1930)、椎尾 (1933)、境野 (1935)、漆間 (1937)、藤原 (1938)、常盤 (1939)、望月 (1942)、林屋 (1945)、望月 (1946)、香川 (1958)、色井 (1963)、眞野 (1966)、平川 (1968)、塚本 (1968)、藤田 (1970)、宇井 (1971)、西 (1972)、静谷 (1974)、櫻部 (1975ab) などの研究がある。

⁶ cf. 望月 (1930, 307)、色井 (1963)。

かを決定する必要があったのである。現在では T 418 が支婁迦讖訳と同定されているが⁷、このような背景が本経の成立史的研究を他の大乘經典に比べて著しく進展させる要因となった。

浄土經典との先後関係に関しては主に《無量寿經》や《阿弥陀經》との間の先後が論じられている。そして提示された見解は必ずしも一致を見ない。相対する見解の代表例をここに挙げておくと⁸、望月(1930, 305–311)は訳経史的な観点から、本経が浄土經典に先行し、《阿弥陀經》に見る「若一日……若七日、一心不乱其人臨命終時」(T 12, 347b01)や、《無量寿經》に見る「齋戒清淨。……常念至心不斷絶」(T 12, 310a01–02)の説は本経の「一心念若一晝夜若七日七夜」(T 13, 905a15–16)を受けたとみる。これとは逆に眞野(1966)は本経が浄土經典を受けたと見る。その論拠としては本経に見る「随所聞」(T 13, 905a08)という句に注目する。これは聞いた通りの阿弥陀仏の特徴に従うという趣旨を述べたものであるが、この句を取り上げて、従うべき特徴を先駆けて説いた浄土經典の先行性を主張する。このように相対する見解が提示されているものの、前者は訳経史的な観点に重点を置き過ぎており、後者は資料の分析に基づいてはいるが、「随所聞」一句は論拠としては乏しい。このような状況で藤田(1970, 224)は、先後関係に関して、「並行的に成立したものと見るのが無難」と言い、現状でこの問題に決着はついていない。

70 年後半になると、ポール・ハリソン(Paul Harrison)が当時現存していた資料を網羅する研究を行った。その成果はチベット訳のテキスト(Harrison 1978a)と、その訳注研究(Harrison 1990)として提出されている。ハリソンはこの他にも、T 418 の英訳(Harrison 1998)や、般舟三昧を仏随念との関わりにおいて論じた研究(Harrison 1978b, 1992)など、本経に関して総合的な研究を行っている。特に 1980 年の博士論文(Harrison 1990 として刊行)に提示された、支婁迦讖訳の原形に関する仮説(ibid., 236–249)は本経の原形論に大きな進展をもたらした。そのハリソンの研究成果に基づいて、本経の原初形態が行品まで(i.e. Chapter 1–3)であった可能性が末木文美士によって提示される。つまり末木(1989)において、行品と四事品以下に見る形式と内容の相違が検討され、行品がそれ以降の章に先行すると提示される。その詳細は第三節において確認するが、この末木説は梶山(1992)が検証を行った上で賛意を示すなど現在の有力説となっている。

⁷ T 417 を真撰とみる研究として、望月(1930, 307)、境野(1935, 883–892)、常盤(1939, 495, 498)、椎尾(1933, 219)、池本(1958, 91–92)、色井(1963)、眞野(1966)などがある。

⁸ 本経と浄土經典の先後関係について提示されている説を大別すると三説となる。すなわち、本経が浄土經典に先行するとみる説(望月 1930, 311、椎尾 1933, 220)、浄土經典が本経に先行するとみる説(赤沼 1927ab、池本 1958, 93–94、眞野 1966、色井 1978)、それぞれ独立に成立したとみる説(藤田 1970、西 1972、大田 1983)である。

原形論が更新されたことによって、これまでと見方が大きく変わるのは阿弥陀仏である。従来、阿弥陀仏への言及が行品にしか現れないことから、その存在は他方仏の単なる一例に過ぎないと消極的に捉えられてきた⁹。しかし末木説以降は、原形部分（行品）でしか言及されない阿弥陀仏こそが当初の対象であり、次第に諸仏へと一般化していったという見方が可能となっている¹⁰。

1.2 《般舟三昧經》梗概

ここで經典全体の内容を概観しておく。本節では諸本の構造、各章のロケーション、そして各章の概要を示す。いずれもチベット訳の構造を基準に作成し、諸本に異同が見られる場合には言及してある。また表などに見られる“2C”などの英数字は、PSS による区分と対応する。便宜上、チベット訳の章は算用数字、漢訳の章は漢数字で表記する。各章の概要は諸本に見る構造上の違いや、他の經典との関連などを含め簡略に述べてある。

尚、参考までに、諸本をおおまかな年代順に並べると、次頁に図として示した様に、ガンダーラ語写本断片（一—二世紀¹¹）、T 418: 支婁迦讖訳（二世紀）、T 419: 失訳（三世紀¹²）、T 417: 支婁迦讖訳からの改訂版（三—五世紀¹³）、サンスクリット語写本断片（不明¹⁴）、T 416:

⁹ cf. 望月（1930, 310）、静谷（1974, 302–303）、藤田（1970, 223–224）、Harrison（1978b, 43）、大田（1983, 138）、玉城（1981, 94–103）。

¹⁰ cf. 梶山（1992, 293–297）。

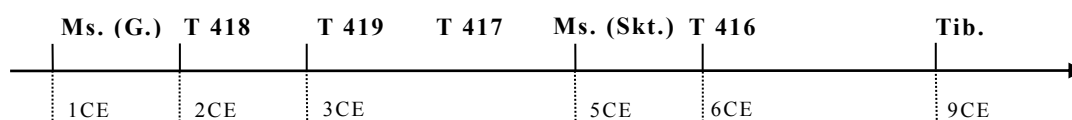
¹¹ 書誌学的な観点から推定された年代である。上限として紀元前一世紀まで遡る可能性も指摘されている。cf. Harrison et al.（2018, 121–123）。

¹² T 419 は『開元録』（T 55, 485b08–486b15）では後漢時代の訳とみなされており、実際にその時代の訳語の特徴が認められている。cf. 椎尾 1933, 219, 林屋 1940, 1238–1241。

¹³ T 417 は T 418 の抄本とみられているが、編纂年代を知り得る情報は経録類に記載されていない。林屋（1945, 571）は例えば T 418 に「泥洹」とあるのが T 417 では「涅槃」へと改められているなどの変更点に着目し、当時流行していた訳語を使用したとみて西晋時代（265–316）の抄出とみている。一方、塚本（1968, 97）は同じく訳語の上から東晋時代（317–420）とみる。しかし櫻部（1975a, 179）は訳語だけで年代を論じることには警鐘を鳴らす。T 417 の年代はあるいは不明とした方がよいかもしれない。see also Harrison（1990, 253）。

¹⁴ この断片の年代は不明であるが、香川（1962）は言語的特徴や内容の簡略さから、闍那崛多が 594–595 年の間に訳した T 416 の原典よりも古いと推定する。Harrison（1990, 302）においても同じ見解が述べられている。

闍那崛多訳（六世紀¹⁵）、チベット訳（九世紀¹⁶）となる。T 419 には章立てがないため諸本の構造には反映していない。また両写本断片に関しても反映していないが、サンスクリット語写本断片は 14E–14J (Harrison 1990, 275–302)、ガンダーラ語写本断片は 7E–7G (Harrison et al. 2018, 129) に相当すると報告されている。



¹⁵ T 416 は『三宝記』（T 49,103c01）に開皇十四年（594 年）の十二月から翌年の二月にかけて訳出されたと記されている。see also 『開元録』（T 55, 548b14–b15）。

¹⁶ 本経が『デンカルマ』（芳村 1974, 128: No. 99）、『パンタンマ』（川越 2005, 10: No.61）、『ブトン仏教史』「目録部」（西岡 1981, 72: No. 218）という古い経録に記載されていることから推定。特に『デンカルマ』の年代については学説の一致をみないが、いずれも九世紀の範囲にとどまっている（824 年説: 山口 1978, 1985; 836 年説: 原田 1982, 羽田野 1983）。

第一章

諸本の構造

T 418/T 417		Tib.	T 416
問事品第一 ¹⁾ 行品第二 ²⁾		Chapter 1	思惟品第一
		Chapter 2	
		Chapter 3	
四事品第三		Chapter 4	三昧行品第二
		Chapter 5	見佛品第三
譬喻品第四		Chapter 6	正信品第四
		Chapter 7	受持品第五
無著品第五	削除	Chapter 8	觀察品第六
四輩品第六	四輩品第五	Chapter 9	戒行具足品第七
		Chapter 10	
		Chapter 11	
		Chapter 12	
授決品第七	削除	Chapter 13	
擁護品第八	擁護品第六	Chapter 14	稱讚功德品第八
羅耶佛品第九	削除	Chapter 15	饒益品第九
請佛品第十	削除	Chapter 16	具足五法品第十
		Chapter 17	授記品第十一
		Chapter 18	甚深品第十二
無想品第十一	削除	Chapter 19	現前三昧中十法八法品第十三
十八不共十種力品第十二 ³⁾	削除	Chapter 20	不共功德品第十四
		Chapter 21	
		Chapter 22	
勸助品第十三 ⁴⁾ 獅子意佛品第十四 ⁵⁾	勸助品第七 ⁸⁾	Chapter 23	隨喜功德品第十五 ¹⁰⁾
至誠佛品第十五 ⁶⁾	至誠品第八 ⁹⁾		覺寤品第十六
佛印品第十六 ⁷⁾		Chapter 24	囑累品第十七
		Chapter 25	
	Chapter 26		

¹⁾ 1A–2C が該当。²⁾ 2D–30 が該当。³⁾ Chapter 22 の内容が Chapter 20 に先行。Chapter 21 は存在せず。⁴⁾ 23A–23G が該当。⁵⁾ 23H–23V が該当。⁶⁾ 23W–23X が該当。⁷⁾ 24A–24B, 26B–26F が該当⁸⁾ 23G, 23V を除く。⁹⁾ 23X を除く。¹⁰⁾ 23G を除く。

ロケーション（頭出し）

Chapter	Tib.	T 416	T 417	T 418	T 419
1	D 1a1 N 1a1 P 1a1 L 1a1 Ph _a 120a4 U 252a7	872a06	897c29	902c27	920a07
2	D 8a7 N 13b11 P 8b4 L 12a5 Ph _a 129a6 U 261a1	874b22	898a26	904b03	921a27
3	D 11a2 N 18a2 P 11a7 L 16a6 Ph _a 133a4 U 264b3	875b22	899a09	905a03	921c29
4	D 15b3 N 25b4 P 15b7 L 23a3 Ph _a 139b5 U 270b6	877b12	899c09	906a13	923a07
5	D 16b7 N 27b7 P 17a5 L 25a3 Ph _a 141b1 U 272b3	877c29	900a04	906b18	923b16
6	D 18b2 N 30b5 P 18b8 L 27b3 Ph _a 143b4 U 274b7	878b23	900a13	907a07	923c17
7	D 21b1 N 35b3 P 22b1 L 32a3 Ph _a 147b3 U 278b8	879c17	900b15	907c08	-
8	D 24a4 N 40a6 P 25a1 L 36a7 Ph _a 151b1 U 282b7	881a03	-	908b20	-
9	D 28b2 N 47b3 P 29b3 L 43a1 Ph _a 157b2 U 289a2	882c07	900c17	909b13	-
10	D 32a1 N 50a7 P 31a8 L 45b4 Ph _a 162a4 U 295b8	-	901a15	910a15	-
11	D 32b5 N 54b1 P 34a1 L 49b2 Ph _a 163a6 U 295a2	884a03	901a26	910b10	-
12	D 33b6 N 56a4 P 35a3 L 51a3 Ph _a 164b5 U 296b3	-	901b12	910c06	-
13	D 34b2 N 57a3 P 35b7 L 52a3 Ph _a 165b4 U 297b2	884a21	-	911a02	-
14	D 38b4 N 63b5 P 40a3 L 58a5 Ph _a 171a6 U 303a4	886a20	901b28	912b19	-
15	D 41b2 N 68a6 P 43a2b L 62a7 Ph _a 174b7 U 307a1	887c03	-	913b29	-
16	D 45a2 N 74a4 P 46b7 L 67b5 Ph _a 180b4 U 311b8	889a12	-	914b28	-
17	D 49b6 N 81b6 P 51b6 L 75a1 Ph _a 186b7 U 318b4	890c13	-	915c10	-
18	D 50b4 N 83a4 P 52b4 L 76a5 Ph _a 187b8 Ph _b 1a1 U 319b8	891a03	-	915c23	-
19	D 53b4 N 88a1 P 55b6 L 80b6 Ph _a 191b8 Ph _b 8b5 U 324a6	892a19	-	916b21	-
20	D 54b5 N 89b4 P 56b8 L 82b2 Ph _a 193b1 Ph _b 10a6 U 325b6	892c24	-	917a21	-
21	D 57a6 N 93b4 P 59a8 L 86a6 Ph _a 195b2 Ph _b 13b5 U 329a6	-	-	-	-
22	D 58b3 N 95b6 P 60b5 L 88a5 Ph _a 197a3 Ph _b 15b3 U 331a3	892c11	-	917a06	-
23	D 59b2 N 97a5 P 61b3 L 89b4 Ph _a 198a5 Ph _b 16b8 U 332a6	894a24	901c27	917b07	-
24	D 65a1 N 106a6 P 67a8 L 98a4 Ph _a 206a7 Ph _b 25a4 U 340a1	897a22	901b29	919b07	-
25	D 67b7 N 111a3 P 70b1 L 102b4 Ph _a 211a1 Ph _b 29b2 U 344a3	-	-	-	-
26	D 69b1 N 113b4 P 72a4 L 105a3 Ph _a 213b2 Ph _b 31b8 U 346a6	897b19	902c12	919b22	-

Chapter 1

本經の冒頭部である。仏陀がラージャグリハのカーランダカ竹園に五百人の阿羅漢たちと共に滞在中の設定で話が始まる。全員が阿羅漢であるというのは「ただ一人、具寿アーナンダを除いて」 *ekam pudgalaṃ sthāpayitvā yadutāyusmantam ānandaṃ* (cf. ASP 8, 22–23) であるという、《八千頌》などと共通の設定が見られるのが特徴である。そこへ対告者となるバドラパーラがやってくる。かれは八人の菩薩の一人として有名な在家者であるが、およそ 146 もの功德 (IJ–IY) を具えることのできる三昧がどのようなものかを仏陀に質問することから話が展開していく。

Chapter 2

仏陀がバドラパーラの質問に答えるべく般舟三昧を紹介する。そしてこの三昧を会得すれば、上述の功德 (IJ–IY) を得ることは難しくないと言う。そこでバドラパーラは般舟三昧を人々のために説き明かしてくれるよう求め、仏陀は般舟三昧とは何かを約 150 項目を列挙して説明する (2D–2J)。T 418 ではこのように項目を列挙する所から行品 (第二章) が始まっており、そこから次の Chapter 3 までが本研究の対象となる。

Chapter 3

この章では般舟三昧の実践が期間などの詳細や七つの譬え (夢中見仏の譬え、無碍の譬え、娼婦の譬え、空沢の譬え、夢中帰郷の譬え、不浄観の譬え、影像の譬え) と共に説明される。Chapter 3 は行品の中心的部分であるだけでなく、本經の中心であるといっても過言ではない。阿弥陀信仰の側面はこの章にのみ現れる。

Chapter 4

ここでは般舟三昧の会得に必要な四つの法が説かれる。このような形式での説明は《迦葉品》 (KP 2, 2. etc.: *catvāra ime kāśyapa, dharmā bodhisatvasya...*) などとの共通性を思わせる。この章で重要な点として挙げるべきなのは仏像と經典の書写への言及が初めて現れるということである。

Chapter 5

冒頭 (5A) では法師 (**dharmabhāṇaka*) を尊敬する必要性を説き、法師に対して否定的な感情を抱く者は般舟三昧を会得することはできないという。ところが冒頭以降で法師が話題にあがることはない。この章の趣旨は般舟三昧によって十方の仏を見ることができ

る旨を説くことにある。それによって多聞となり、六波羅蜜や五分法身など無量の功德が円満になると説く。尚、この章は T 417 では削除されている。

Chapter 6

般舟三昧の教えを受け入れる者とそうでない者が話題になっており、それが非仏説の話 (6E) に展開する。三千大千世界を七宝で満たして仏を供養するより般舟三昧が仏説であると理解することの方が功德が大きい (6H) といった、大乘經典に典型的な表現と共に般舟三昧が仏陀の説いたものであり正統なものであると主張する。この章にみられる「身体を高めず (*abhāvitakāya)、心を高めず (*abhāvitacitta)、戒を高めず (*abhāvitasīla) ...」 (6D) といった悪比丘の表現は原始經典に共通するものがある¹⁷。尚、T 419 はこの章で終わっている。

Chapter 7

前章と内容は類似しており、般舟三昧を受け入れる者の功德について説く。しかし前章のように非仏説の話に展開するのではなく、仏滅後の最後の五百年を話題にしながら、般舟三昧の教えを受け入れて保持しようとする者たちを仏が加護することを説く。ここに見る法滅思想は《金剛般若經》に見るのと同様の法滅句 *anāgate 'dhvani paścime kāle paścime samaye paścimāyāṃ pañcaśatāyāṃ...* (VC 30, 22–23) で説かれている (7A, 7D)。尚、この章にはガンダーラ語写本断片が現存する箇所 (7E–7G) がある。

Chapter 8

冒頭 (8A) では般舟三昧の実践方法が説明される。しかしこれはあくまで導入であって、この章の趣旨は仏のように現等覚する本体とは何かということに始まり、一切法を般若空的な観点で分析する仕方を説くことにある。

Chapter 9/10/11/12

Chapter 9 ではバドラパーラが般舟三昧の教えを承ける出家菩薩の態度について質問する。そこで仏陀は戒が清浄でなくてはならないと答え、出家の菩薩が波羅提木叉を守らなければならないことを説く (9A–9B)。林住の強調 (9H) や怠惰な菩薩の描写 (9I) からは《迦葉品》や《護国尊者所問經》などとの関連を思わせる。Chapter 10 は般舟三昧の教え

¹⁷ cf. AN III, 106, 4. see also Skilling (2010, 15–17) .

第一章

を求める大乘比丘尼の模範的態度について、Chapter 11 はこの三昧の教えを求める在家菩薩の模範的態度について、Chapter 12 はこの三昧の教えを求める大乘優婆夷の模範的態度が説かれる。どれも全体的に短い。尚、Chapter 10 と Chapter 12 は T 416 に存在しない。

Chapter 13

バドラパーラが仏滅後の般舟三昧の行く末について仏陀に質問する。仏陀は自らの入滅後、将来的にこの三昧の教えが隠没するであろうことを述べるが、同時に法滅時に瞻部洲で般舟三昧を実践する者たちが幾人か現れて、衆生たちに教えを残すであろうことも告げる。そしてバドラパーラを筆頭とする八人の菩薩たちは、その役割を担うべく本經を伝持していくことを仏陀に告げる。そしてその場にいた五百人の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷たちも同じく伝持することを告げる。尚、T 417 では削除されている。

Chapter 14

ここでは Chapter 4 と同じく般舟三昧の会得に必要な四つの法が説かれ (14B)、般舟三昧を書写して広めようとする者は種々の災難から逃れ (14C-14D)、神格によって守られることが述べられる (14E-14H)。尚、この章にはサンスクリット語写本断片が現存する箇所 (14E, 14H, 14J) がある。

Chapter 15

この章の前半部 (15A-15G) はディーパンカラのアヴァダーナとなっている。ディーパンカラの前生であるスダッタが無上正等覚を得るまでの間に、クシェーマラージャ、ヴィドゥッデーヴァ、そしてラシュミラージャという三人の仏のもとで、般舟三昧を修習しながら梵行を続けていたことを述べ、般舟三昧が仏智の獲得に与える影響の大きさを述べる。しかしその後、この章でディーパンカラが話題にあがることはなく、般舟三昧を会得するために四念住を修することを述べて、諸法の自性は空であるとみるべきことを説く。また章の終わり (15O) では般舟三昧の教えが隠没しないように仏陀が神と人に教えを付嘱する。

Chapter 16

バドラパーラが仏陀を食事へ招く。家にやって来た仏陀たちを街の全員が見ることができるようになると願うバドラパーラの心の内を知って、仏陀が神通の力によって家を大きく透明にする(16G)など、《維摩經》との関連性を思わせる内容がある。食後の法話は般舟三昧の会得にはいくつの法を具えるべきかという観点で進められ、合計で五つの法が示される。尚、T 417 では削除されている。

Chapter 17

仏陀が過去に授記を受けた時の話を始める。ディーパンカラに出会い、かれからこの三昧を会得したと告げる。般舟三昧を会得したことにより、多くの仏たちから教えを聞き、授記を与えられたという。しかし授記が与えられるか否かの焦点は、般舟三昧の会得ではなく、一切法を特徴(**nimitta*)の無いものと観察するかどうかに置かれており、仏陀はバドラパーラに一切法が無相であると学ぶよう勧める。非常に短い章である。尚、T 417 では削除されている。

Chapter 18

バドラパーラは般舟三昧を修習する態度について仏陀に質問する。仏陀は四念住の教えに沿って、一切法を対象化するような方法で般舟三昧を修習してはならないと言い、般若空的な態度で修習すべきことを説く。尚、T 417 では削除されている。

Chapter 19

この章では菩薩が空性や無相の態度で般舟三昧の教えを承けるべきことを述べる。このような態度でいれば増上慢や論争が起こらないからであり、論争の無いことを重んじる菩薩こそが般舟三昧の教えを承けるべきであるという。その後、仏陀は般舟三昧の教えを承けるために必要な十の法、さらに八つの法を保つべきことを説く。尚、T 417 では削除されている。

Chapter 20/21/22

Chapter 20 では前章で説かれた八つの法を具えたと菩薩が仏の十力を得ることができると説く。続く Chapter 21 ではこの三昧を会得した菩薩が四無畏を得ることを説く。さらに Chapter 22 では同じくこの三昧に入った菩薩が十八不共法を得ることが説かれる。この Chapter 20–22 の間はチベット訳と漢訳で構造上の相違が見られる。まず漢訳は

Chapter 21 (四無畏) をもたず、Chapter 22 (十八不共法) が先で、その後に Chapter 20 (十力) が配置され、その終わりにこれら二つの章を総括した偈が説かれる (cf. T 416 894a19–a22, T 418 917b03–b05)。すなわち、チベット訳された原典の構造は漢訳のそれには見られない Chapter 21 (四無畏) が新たに加えられ、十力、四無畏、十八不共法という順番に並び替えられているとみるべきであり、成立史的段階が見て取れる部分となっている (cf. Harrison 1990, 156. fn.1, 166. fn.1)。尚、T 417 ではすべて削除されている。

Chapter 23

過去の仏たちと同様に般舟三昧の教えを随喜しなければならないこと、そしてその功德の大きさを仏陀が説く (23A–23F)。その後にアヴァダーナが語られる (23H–23O)。それはシンハマティ如来からこの三昧を聞き、それに随喜したヴィシェーシャガーミンが転生してブラフマダッタという王子になり、ラトナという法師から同じくこの三昧を聞いて、随喜したことによって最終的にドリダヴィールヤという仏になったというもので、説話によって随喜のもつ功德の大きさを強調する。さらに仏陀はこの三昧が実践されていることを聞いたなら、たとえ百由旬離れた場所であっても求めて行くべきであり、それを説く者に仕えなければならないことを説く (23P–23V)。漢訳では続いて二つ目のアヴァダーナが挿入され (23W)、偈頌 (23X) で終わるが、チベット訳には偈頌のみが残されている。その内容は仏陀が過去に王であった頃、般舟三昧の教えを知る比丘に仕えた時の話であり、この三昧の教えを知るものが稀であり、それを知る者に仕えて教えを承けることの功德の大きさを強調する。

Chapter 24

仏陀が涅槃に入った後に現れる菩薩たちのために、般舟三昧の教えを承けて書写して残しておくことを述べる (24A–24B)。これ以降の話は漢訳に存在しない。その後は般舟三昧の会得に必要な四つの法が説かれる (24C–24E)。そして法滅時に般舟三昧を長く世に留めようと努力する菩薩の福德の大きさが計り知れないことを説く。

Chapter 25

この章はチベット訳にのみ存在する。般舟三昧の会得に必要な四つの法が説かれる。そこから法滅時へと話が展開し、将来に般舟三昧の教えを広めようとする者が仏たちによって庇護され、十力、四無畏、十八不共法などの仏の要素を具えるであろうことを説く。

Chapter 26

仏陀が般舟三昧の教えを付嘱する。この教えを長く世にとどまらせるために書写し、他にも広めなければならないことが説かれる。付嘱が終わると、その座にいる全員が歓喜して仏陀の教えを讃えて本経が終わる。尚、諸漢訳に 26A に相当する部分は存在せず、26E に相当する箇所が冒頭部（つまり 26E, 26B, 26C, 26D, 26F の順）になっている。

1.3 《般舟三昧經》原形論

標題に示すように、本研究が分析を行う範囲は行品と呼ばれる章に限定する。行品は般舟三昧の実質的な内容を説いた章であるだけでなく、これまでの成立史的研究によって導き出された本經の原初形態に含まれる。本節ではそれらの研究を概観し、分析対象を行品に限定する意義を確認する。現在で有力となっている原形論は末木(1989)によるものであるが、この研究はそれ以前の支婁迦讖訳の研究の上に成り立っているため、以下で順を追って確認していく。

1.3.1 支婁迦讖訳の問題

支婁迦讖訳には T 417 (高麗本にのみ現存) と T 418 の二つが現存するが、支婁迦讖が二度訳出したという伝承は確認できない¹⁸。その訳出事情については『出三蔵記集』「般舟三昧經記」(T 55, 48c10-c16) に次のように伝わる。

般舟三昧經。光和二年(179年)十月八日に天竺の菩薩佛朔が洛陽で暗唱した¹⁹。その時の伝言者であった月氏国の菩薩、支〔婁迦〕讖が河南洛陽の孟福(元士)に伝え、付き添いの菩薩張蓮(少安)が書き下ろして(筆受)、後に普及させた。

¹⁸ 經録類に見る支婁迦讖訳に詳しい研究として、望月(1930, 305-306)、椎尾(1933, 214-220)、境野(1935, 883-892)、常盤(1939, 489-498)、林屋(1945, 544-555)などを参照。

¹⁹ 『出三蔵記集』「支讖伝」(T 55, 96a01-03)によれば、翻訳の際に佛朔が用いたのは胡〔本〕であったらしい(元/明は梵とする)。「胡」は一般にインドを含め中央アジアまでを指し示す場合があるが、ここでいう胡というのは主に梵〔本〕との対比で用いられる場合を言う。Boucher(2000)によれば、胡本はカローシュティー写本、梵本はブラーフミー写本であったとされる。胡本をカローシュティー写本とみることにについて、Boucher(2000)が挙げる論拠には次のようなものがある。まず『悉曇藏』(T 84, 369a21)に「胡字というのは佉樓(**kharoṣṭhī*)の書である」(胡字謂之佉樓書)という文言が引用されている。佉樓に関して『出三蔵記集』「胡漢訳經音義同異記」(T 55, 4b06)には「次に佉樓、その書は左に〔向かって〕行く」(次日佉樓。其書左行)と記されている。右から左に向かって書かれるのはカローシュティー写本に見る特徴である。

般舟三昧經。光和二年十月八日。天竺菩薩竺佛朔於洛陽出²⁰。菩薩法護(?)²¹。時傳言者月支菩薩支讖授與河南洛陽孟福字元士。隨侍菩薩張蓮字少安筆受令後普著在。

支婁迦讖の役割は「伝言者」と記されているが²²、原典を将来した佛朔がこれを暗唱し、それを支婁迦讖が漢語に訳したとみられている²³。佛朔と支婁迦讖の共同作業によって訳されたとみて、それが同じく支婁迦讖によって僧孟福に伝えられ、それに付き添っていた張蓮が書き下ろしたものが支婁迦讖訳の原形ということになる。このように支婁迦讖が関わった翻訳作業は179年の一度だけであり、二つの支婁迦讖訳が現存する事実を肯定する伝承はない。

またT 417は一卷(八品)、T 418は三卷(十六品)であるが、諸経録の記載は必ずしも一致しない。『出三蔵記集』(T 55, 6b12)には以下のように記載されている。

般舟三昧經一卷『舊録』云大般舟三昧經。光和二年十月八日出。

『出三蔵記集』によると、支婁迦讖訳は元々『大般舟三昧經』という名称で知られていたようである。上記の引用では「一卷」となっているが、これは高麗本の読みであり、宋/元/明の三本では「二卷」となっている²⁴。巻数に関する伝承の異なりが検証を困難にする

²⁰ 「出」は難解な語である。「暗唱する」と理解したが「翻訳する」と理解することもできる。cf. Waley (1957, 196), Link (1958, 67b), Robinson (1967, 298. fn. 28), Boucher (1998, 487. fn. 73, 2008, 93) .

²¹ この「菩薩法護」については問題がある。竺法護を意図したものとみるのが妥当であろうが、しかしかれは支婁迦讖よりも70–80年後の人物であり(cf. 境野 1935, 887–888)、Harrison (1990, 259. fn. 47)はこの菩薩法護が後代の加筆であるとみる。尚、『出三蔵記集』「支讖伝」(T 55, 96a4–a06)にも同じ内容の記述があるが、そこに法護の名前は出ていない。

²² 「伝言者」について『高僧伝』(T 50, 324b15–b17)には支婁迦讖が本経を「伝訳」したと記されている。さらに『出三蔵記集』「道行経後記」(T 55, 47c04–c09)を参照すると、支婁迦讖は「伝言訳者」(元/明の読みに従う)と記されているから、支婁迦讖は単なる伝言者であったのではなく、佛朔との共訳と中国僧への伝言を担っていたとみるべきである。共訳とみることについては望月(1930, 305–306)、境野(1935, 106–107)、宇井(1971, 509)を参照。

²³ cf. 境野(1935, 107)、林屋(1945, 552) .

²⁴ 経録本来の記載を一卷とみるのか、二巻とみるのかについては意見が分かれている。平川(1968, 109–110)は同じ『出三蔵記集』の別な箇所(「新集異出経録第二」T 55, 14b20–b21)では二巻と記載されており、この場合には異読が見られないことから本来は二巻であったとみる。一方、Harrison (1990, 258–259)は『開元録』(T 55, 478c20)に「祐(i.e.『出三蔵記集』)に一卷はあるが三巻〔の記載〕は無い」(祐有此一卷。無三卷者)と記されていることなどから、本来は一

だけでなく、法護による同名の『般舟三昧経』二巻の存在も混乱を招く要因となっている。道安録の時点では『更出般舟三昧経』²⁵という名称で記載されていたようであるが、『出三蔵記集』（T 55, 08a01）では支婁迦讖訳と同じ名称で『般舟三昧経』二巻として記載されることになる。続いて『衆経目録』（T 55, 120a23）と『三宝記』（T 49, 52c27）を順に見る。

般舟三昧経一卷 是後十品。後漢世支識別譯。

般舟三昧経二巻 光和二年十月八日譯初出。見『聶道真録』『呉録』及『三蔵記』。『舊録』云大般舟三昧経。

最初に引用した『衆経目録』では支婁迦讖訳は一卷とされており、さらに別訳となっている。というのも、上述した法護訳『般舟三昧経』二巻がこの目録における完本として扱われ（cf. T 55, 115c03）、その完本の後の十品を別訳したものが支婁迦讖訳とみなされているからである。T 417（一卷）は主に全体の間部分に欠けているのであって、後半部分を訳したものではないから該当しない。次に引用した『三宝記』に見る支婁迦讖訳は二巻と記載されており、ここまでで T 417（一卷）と T 418（三巻）に一致する記載はない。これら二つを思わせる記述は『開元録』（T 55, 478c09–c10; c20–c21）になって初めて現れる。

般舟三昧経三巻 一名十方現在佛悉在前立定経。『舊録』云大般舟三昧経或二巻（一卷^{三本}）光和二年譯初出。與大集賢護経等同本。見『聶道真録』及『呉録』。

般舟三昧経一卷 是後十品重翻。祐有此一卷無三巻者。見『靜泰録』。或加大字。第三出。『祐録』云光和二年十月八日出。

このように『開元録』（730 年）には三巻と一卷が記載されている。しかしこの三巻は『大般舟三昧経』のことであり、過去の経録では一卷あるいは二巻として記載されていたものである。つまり、『開元録』に記載されている三巻という情報はこれよりも古い経録には

巻であったとみる。尚、林屋（1945, 550–552）によれば、一卷以外の巻数は『三宝記』系の経録のみに現れる。

²⁵ 「更出」の語が改訂あるいは別訳のどちらを意味するのか定かでない。例えば境野（1935, 887）は『更出般舟三昧経』がいわゆる『大阿彌陀経』に対する『平等覚経』のような存在ではないかと推定する。更出に関してこの他に椎尾（1933, 219）、林屋（1940, 407–408. fn. 13）、宇井（1971, 508–509）、Harrison（1990, 263. fn. 53）を参照。また同じ様な用例として法護訳『更出阿闍世王経』がある。これは『道安録』に記載される『普超三昧経』（T 627）の別名とされているが（cf. 宮崎 2012, 12–13）、この場合は『開元録』（T 55, 22b–b26）に「支〔婁迦〕讖が先に訳しているので更出という」（支識先譯。故云更出）と記されている。

廻り得ない。また一卷に関しては同じく後の十品となっているから、T 417 は該当しない。このように奥書や経録を見るかぎり、支婁迦讖訳が二つ現存する事実を肯定する伝承は残されておらず、これらの資料は検証されなければならないことになる。

1.3.2 支婁迦讖訳の編纂過程

経録などに一致する記載が見当たらない以上、支婁迦讖訳の実態は資料の分析によって見出していなくてはならない。そしてこの点に関して先学は大きな成果を挙げており²⁶、T 417 と T 418 のどちらが真撰かにとどまらず、支婁迦讖訳の原形に関する仮説までもが提出されている。

要点から先に述べておくと、T 418 には問事品から譬喩品前半 (T 13, 907c07) までの範囲で、高麗本と三本の間に顕著な異同が見られるが、その異同は高麗本から三本に見るかたちへと改訂した際に生じたものである。この異同を改訂の跡として最初に指摘したのは林屋友二郎である²⁷。林屋 (1945) は三本ではなく高麗本が支婁迦讖訳である可能性を指摘し、同時に T 417 が T 418 (三本) からの抄本であることにも言及しており (ibid., 560–564)、現在の支婁迦讖訳に関する定説の大本となる指摘を行っている²⁸。この林屋説は Harrison (1990, 232–235) の詳細な文献批判によって裏付けられることになる。ハリソンは高麗本の譬喩品前半までを A 版 (Redaction A) と呼び、三本 (全章) は後代の手が加わっているとみて B 版 (Redaction B) と呼ぶ。散文自体 (経の導入部を除く) に大きな差はないが²⁹、しかし

²⁶ 支婁迦讖訳の編纂過程を研究したものとして望月 (1933, 4252–4254)、林屋 (1945, 544–578)、櫻部 (1975a, 1978)、Harrison (1990, 221–254) がある。本項ではこれら研究の成果に基づいて概観を行う。

²⁷ 望月 (1933, 4253) も同じく高麗本と三本との異同に注目しているが、支婁迦讖訳と法護訳を合併した際に生じたとみる点に違いがある。

²⁸ 櫻部 (1975a, 1978) でも同様の趣旨が述べられている。

²⁹ 全体を通して大きな変化のない散文に関して、ハリソンは Chapter 7–26 が後代に支婁迦讖と同じ訳風で訳された可能性を指摘し (Harrison 1990, 233, 19–28)、支婁迦讖の弟子たちを想定する (ibid. 266, 25–36)。『出三蔵記集』「般舟三昧経記」(T 55, 48c13–c16) には支婁迦讖訳出の 29 年後 (208 年) に弟子たちによる校訂があったと記されている。

建安十三年 (208 年) に、仏教寺院にて校訂し完全な状態にした。後に写す者がおり、皆が仏に帰依した。また、建安十三年戊子の歳 (208 年) の八月八日に許昌寺で校訂されたとも言われている。

B版に見る偈頌の部分に関しては、同じ經典内の散文はおろか他の支婁迦讖訳にも共通しない訳語を含むことから後代の訳出とみる。また高麗本の譬喩品後半 (T 13, 907c08) 以降では三本との顕著な異同が見られなくなることから三本と同じB版に属すると見る。つまり、高麗本 (T 418 の底本) はA版 (Chapter 1-6) とB版 (Chapter 7-26) を合併したものである³⁰。以上のような編纂過程が明らかにされ、高麗本にのみ現存するA版だけが支婁迦讖訳の原形に遡るといふ仮説が立てられる。そして T 417 は T 418 を抄出したものであり、A版からではなくB版からの抄出とみられている。次項では真撰とされる T 418 に焦点を当てて、高麗本と三本に見られる異同の詳細を確認する。

1.3.3 高麗本と三本の異同

高麗本と三本の間に見られる異同の中でも、特に注目されるのが経の導入部と各章末の偈頌に見る異同である³¹。以下に示した経の導入部 (T 13, 902c27-c28) などは改訂の跡がわかりやすい用例といえるだろう。

高麗本	三本
佛在羅閱祇摩訶恒迦憐。摩訶比丘僧五百人皆得阿羅漢獨阿難未。	聞如是、一時佛在羅閱祇迦鄰竹園中、與大比丘衆比丘五百人、皆是阿羅漢、諸漏已盡、無復塵垢、生死悉除、而得自在、心已解脫、照明於慧、譬如大龍、聖智通達、所作已辦、衆行具足、棄捐重擔、所欲自從、已捨諸有、其行平等、得制其心、度於彼岸。唯除一人賢者阿難。

建安十三年。於佛寺中校定悉具足。後有寫者。皆得南無佛。又言。建安(+十*)三年歲在戊子八月八日於許昌寺校定。

*建安三年は西暦 198 年に相当するが、戊子 (208 年) の干支と合致しないため、建安十三年 (208 年) と校訂して読む。cf. Harrison (1990, 260) .

³⁰ 合併版成立までの経緯は Harrison (1990, 232-233) に言及されている。尚、それは櫻部 (1991, 51-52) や梶山 (1992, 249-252) によって紹介されている。

³¹ Harrison (1990, 223) によると、高麗本と三本とに見る異同は本文中に挙げた経の導入部と、各章末の偈頌、それに異読を加えた三種類あるという。そのうちの異読に関して今回取り上げていないが、それは Harrison (1990, 224-227) が編纂過程を知る上で重要とはみなしていないことによる。異読自体は三本の方が高麗本に比べて整った単語が用いられていると指摘されている cf. 櫻部 (1975a, 178, 1978, 134) .

このように高麗本と三本ではまったく異なる。この異同に関しては、櫻部（1978, 132, 5-11）の言うように、高麗本から三本のかたちに増広したと見る方が自然である。逆に三本から高麗本へと縮小して、三本に見られない「摩訶桓」の語（櫻部 1978, Harrison 1990 共に *mahāvāna* と還梵する）を追加したと見るのは理に適わない。

次に各章末の偈頌に見る異同に関して、本経は基本的に各章の内容を末尾の偈で再説する形式を取る。四事品（Chapter 4-5）から譬喩品（Chapter 6-7）の範囲内ではその偈に関して異同が生じている。その異同というのは、高麗本は散文になっているのに対し、三本では韻文になっているというものである。この異同は合計三箇所に見られるが、一例として四事品前半（i.e. Chapter 4 の章末）の偈頌（T 13, 906a28-b17）を以下に参照する。

高麗本	三本
<p>時佛説偈而歎曰。常當樂信於佛法。誦經念空莫中止。精進除睡臥。三月莫得懈。坐說經時安諦受學。極當廣遠（1）。若有供養饋遺者。莫得喜。無所貪慕。得經疾（2）。佛者色如金光。身有三十二相。一相有百福功德。端政如天金成作（4）。過去佛當來佛。悉豫自歸。今現在佛。皆於人中最尊。常念供養（5）。當供養於佛。花香擣香飯食具足。當持善意。用是故。三昧離不遠（6）。持常鼓樂倡伎。樂於佛心。常當娛樂（7）。爲求是三昧者。當作佛像。種種具足種種殊好。面目如金光（8）。求是三昧者。所施常當自樂。與持戒當清潔高行。棄捐懈怠。疾得是三昧不久（9）。瞋恚不生。常行於慈心。常行悲哀。等心無所憎惡。今得是三昧不久（10）。極慈於善師視當如佛。瞋恚嫉貪不得有。於經中施不得貪（11）。如是教。當堅持諸經法。悉當隨是入。是爲諸佛之道徑。如是行者。今得三昧不久（12）。</p>	<p>佛爾時頌偈言。 常信樂於佛法 受誦是道德化 精進行解深法 立具足等慈哀 1 當普說佛經理 廣分布道法教 愼無得貪供養 無所著得是法 2 在不正瞋恚興 意善解便離欲 常樂定三昧禪 謹愼行得是法 3 當念佛本功德 天金色百福相 諸種好有威德 現譬如像金山 4 悉見知諸世間 過去佛及當來 并現在人中尊 天中天皆說是 5 當供養斯善救 上好華衆擣香 欣誦心奉飯食 得是法終不久 6 鼓琴瑟諸伎樂 簫成供佛形像 欣然意悅無量 尊道法得不難 7 當造起佛形像 諸相好若干種 黃金色無穢漏 疾速得是道尊 8 堅固教常以前 聽是法無亂心 常捨離懈怠行 得三昧疾不久 9 無恚害向他人 當行哀得慈法 普救護功德地 得三昧疾不久 10 常恭敬於法師 當奉事如世尊 無得惜是經法 得三昧疾不久 11 愼無得疑斯經 佛讚是正道化 一切佛所歌歎 得三昧疾不久 12</p>

他の資料 (Tib., T 416, T 419) は三本と同じ韻文となっており、先の導入部も同様に高麗本だけが他と相違している。またこの部分は全 12 偈の構成となっているが、第 3 偈に該当する散文は高麗本には見出だせない。T 419 に関しても韻文とはなっているが第 3 偈をもたない。この偈が追加されているのは T 418 (三本) と T 416、ならびにチベット訳であり、韻文へと単に置き換わっただけでなく、内容からも高麗本から三本へという流れが見て取れる。また高麗本は散文となっただけのもの、その始まりに「時佛説偈而歎曰」とあるように、韻文を散文で訳したかのような特徴である。このような異同が四事品章末 (i.e. Chapter 5 の章末) と譬喩品前半 (i.e. Chapter 6 の章末) の合計三箇所が生じている。そして以上のような異同は譬喩品前半までの間にしかなく、後半 (Chapter 7) 以降では見られなくなってしまう。Harrison (1990, 232–235) はこの境目に着目することで、T 418 の編纂段階を二分する。それが先に示した A 版と B 版である。前者は簡略な導入部と散文で訳された章末の偈という特徴をもち、高麗本の譬喩品前半 (Chapter 6) までの該当する。後者は改訂を経て整えられたかたちをもつ三本 (全章) が該当する。また B 版に見る改訂が単なる加筆であったのか、あるいは異なる原典に基づく訳出かという点に関しても、Harrison (1990, 232, 8–11) は後者を想定する。B 版に見るかたちが他の資料と近似する傾向が見られる以上、単独で行われた加筆とは考えられない。経の導入部に関しても、B 版からは T 416、T 419 やチベット訳と同じく、五百人の阿羅漢を形容する「諸々の漏を尽くし…」 (諸漏已盡) 云々の定型句が整えられた原典が予想される³²。また四事品の偈頌に関しても、B 版からは T 416 やチベット訳と同じく第 3 偈が追加された原典が予想される³³。

以上、A 版や B 版といった編纂段階が T 418 に見られることを提示した上で、Harrison (1990, 236–249) は支婁迦讖による実際の訳出箇所が A 版であるという仮説を提出した。A 版だけに見られる簡略な経の導入部と韻文を散文で訳すという特徴は、報告されている支婁迦讖の訳風と一致するばかりでなく³⁴、この仮説は T 419 が A 版の終わりと同じ Chapter 6 相当で訳出を終えている点にも説明を与えるものであった。

³² cf. T 416, 872a6–a11, T 419, 920a7–a11, PSS 1A. see also Mvy (No. 1075–1088) .

³³ cf. T 416, 877c02–c27, PSS 4E.

³⁴ 経の導入部が簡略 (特に「聞如是」にあたる句を欠く) のと、韻文を散文で訳出するというのは支婁迦讖訳の特徴として指摘されている。cf. Harrison (1990, 232. fn. 24) , Nattier (2008, 73–76) .

1.3.4 形式と思想の境目

ハリソンの提出した仮説は徹底した文献批判の上に成り立っており、本経の原形論に新たな知見を与えるめざましいものだった。その成果を踏まえて、末本文美士が本経の原初形態に関する新たな見解を提出することになる。末木(1989)は行品と四事品以下に見る相違に成立史的な段階を見出し、行品までがそれ以降の章に先行して成立したとみる。本経の原形論として、現在ではこの末木説が最も有力となる。末木説の内容は梶山(1992, 253–257)による検証の際にまとめられているが、本研究が分析対象を行品に限定する意義を明確にするために、以下でその内容を確認していく。

本経には偈による再説で章を終えるという形式上の特徴があることは既に述べた。したがって行品の章末にも偈が説かれているが、行品だけは特殊になっており、散文(3N)と偈頌(3O)によって重複して再説されている。前者は完全な散文であり、四事品などに見たような韻文を散文で訳したものではない。この重複に関して、

	T 418	T 417	T 419	T 416	Tib.
散文 (3N)	○ (=A版)	○	○	○	×
韻文 (3O)	○ (=B版)	○	×	×	○ ³⁵

ハリソンは、偈頌(3O)はB版に属するものであり、後代の編纂者が散文(3N)の後に挿入したものとみる(Harrison 1990, 233–235)。つまり、A版の散文の後にB版の韻文が部分的に合わさったようになっているわけである。他の資料を見てみると、上記の表に示すようにT 416とT 419とも散文で章が終わり、これとは逆にチベット訳は散文をもたず韻文で終わっている。したがって、T 419(三世紀)とT 416(六世紀)からは行品の章末に偈のない原典が、一方チベット訳(九世紀)からは散文が韻文へと置き換わった原典が予想される。

この差は行品の章末には本来的に偈が無かったことを示し、四事品以下との間で形式上の対比をなすことになる。この形式上の相違を成立史的な段階と捉えた末木は、さらに内容に立ち入って、行品と四事品以下では以下のような相違が見られると指摘する(以下、末木1989, 322–323より引用)。

- (1) 行品においては阿弥陀仏がその三昧の対象として極めて重要視されている。ところが四事品以下には阿弥陀仏への言及が殆ど見られない。唯一の例外は、三巻本で言えば四事品の偈に「阿弥陀仏刹諸菩薩の如きは、常に不可計の仏を見る」とある箇所のみである。この箇所

³⁵ チベット訳の偈頌(3O)はT 418とT 417に比べて二偈分(v. 1–2)増加している。

は『賢護経』やチベット訳にもあるが、チベット訳によると固有名詞としての阿弥陀仏と見るべきかどうか疑問がある。また、たとえ阿弥陀仏に言及しているとしても、喩えとして挙げているだけであり、三昧の対象としてではない。

(2) 行品によると、「一心に念ずること、若しは一昼夜、若しは七日七夜」によって阿弥陀仏を見ることができるとある。ところが、四事品においては、「経行して休息することを得ず、坐することを得ること、三月」等と、三か月の行を必要としている。『賢護経』や蔵訳も同様である。従って、三昧を得るまでの過程に行品と四事品の間で相違があり、後者の方が複雑化していることが知られる。

(3) 四事品には、諸本いずれも、三昧を得る為に仏像を用いることが述べられている。ここから般舟三昧と仏像の関係が注目されることになる。しかし、行品においては仏像について全く言及していない。勿論、言及していないからと言って、前提にされていないとは断言できない。しかし、初期の般舟三昧の形成には必ずしも仏像は不可欠ではないと考えられ、従って、行品で仏像に言及されないのも意味のあることと思われる。

(4) 行品の終わりの方では、「三処、(即ち)欲処・色処・無想処、この三処は意の爲る所ならくのみ」と『十地経』の三界唯心を思わせる箇所があり、その後、有名な「心は是れ仏」等と唯心的なブツダ観が表明される。ところが、このような発想は本経中でこの箇所のみであり、むしろこの箇所では、心への執われも身体への執われと同様に批判されている。また、姪女の喩えや小乗の不浄観との類比のように、全般に素朴で般舟三昧の原形をうかがわせる面が強い。

ここに挙げられた項目のうち、特に第一項と第三項に関しては本研究と関わりが深いので取り上げておきたい。第一項は阿弥陀仏に関する相違を述べたものであるが、末木が例外として挙げた四事品の偈(5E: v. 6ab)の「阿弥陀仏刹諸菩薩…」に対応するチベット訳は「無量の寿命をもつ菩薩が生まれて、百千もの多くの世界の守護者を見たように」*ji ltar byang chub sems dpa' tshe dpag med skyes nas/ 'jig rten mgon po brgya stong mang po mthong gyur pa/* となっている。そしてこの偈は「同じ様に、この菩薩の三昧を会得すれば、百千もの多くの仏、英雄を見るだろう」*de ltar byang chub sems dpa'i ting ngen 'dzin 'di thob na/ sangs rgyas dpa' bo mang po brgya stong mthong bar 'gyur/* と続く。これは般舟三昧を会得した菩薩が現世で多くの仏に見えるのを、無量の命ある者が生涯で多くの仏に見えるのに譬えたものであるから、文意からしてもこの部分に阿弥陀仏は認められない³⁶。とすれば、阿弥陀仏が登場するのはやはり行品のみということになる。

³⁶ 以上は既に梶山(1992, 295–296)によって検証されている。

続いて第三項では仏像に関する相違を述べている。仏像への言及は行品にはなく四事品(4D)から登場するため、行品に限れば、般舟三昧が仏像を前提とするかについての見方が変わってくる。仏像の存在は本經の年代設定に影響を与えるだけでなく、特に視覚化における役割という点で般舟三昧の様相にも影響を与えることになる。尚、末木(1989)は仏像が行品に登場しないことに意義を見出し、般舟三昧の展開に仏像は必要なかったと推測する(ibid., 328)。このように末木(1989)は形式上のみならず内容面でも相違することを示した上で、行品のみを対象として従来の研究を見直す必要性を提起する(以下、末木1989, 323より引用)。

このように、行品に述べられた行法や理論には、四事品以下とは異なった特徴が見られる。とするならば、形式上のみならず、内容から言っても行品と四事品以下では一線が引かれ、そこに成立史的な段階を見ることは十分に可能と言つてよいのではあるまいか。従来の般舟三昧經もしくは『般舟三昧經』の研究はこの点を無視しており、異なる段階に属するものを一纏めにして論じてきたため、その本質を見誤った点もあったように思われる。この点を考慮した上で、もう一度思想史的な位置付けを考え直す必要がある。

また末木(1989)では触れられなかったが、四事品以下と異なる内容として経巻信仰の存在を挙げることができる。四事品(4D)に「この三昧への熱望を通じて、この三昧が〔世に〕長くとどまるため、何としてもこの三昧が保たれる〔ために〕、よく書写して本として提供すること」*ting nge 'dzin 'di 'dod pas ting nge 'dzin 'di yun ring du gnas par bya ba'i phyir ci nas kyang ting nge 'dzin 'di 'dzin par legs par bris shing glegs bam sbyin pa dang/* とあるのが初出であり、行品に經典の書写に関する記述はない。このように行品を境目として阿弥陀仏や仏像、そして経巻信仰など重要な点での相違が生じているのであって、末木(1989)が提起するように、行品と四事品以下で一線を引くという研究態度は新たな知見を得る上で疑いのないものと思われる。

1.4 研究の目的と方法

冒頭で述べたように、本研究では般舟三昧の原初的な様相を考察する。特にこの三昧が、どのような者たちによって、いかなる修道論上の要請に応えるべく提唱されたのか、その最も原始的な部分を明らかにしようとする。その目的は般舟三昧自体の解明もさることながら、本経のような最初期の大乗經典に見る思想の考察を通して、当時的大乗仏教の実態を垣間見ることにある。先行研究の成果を踏まえると、行品が原初形態のうちの主要な章であり³⁷、尚且つこの章だけの検討が過去の研究を見直す上でも良い機会として捉えられている。それゆえ本研究では行品に限定した分析を行うこととする。

分析にあたってはチベット訳 (PSS) と漢訳 (T 416, T 417, T 418, T 419) の五つの資料を用いる。しかし、本文中の引用に関しては原語の想定と他文献と比較する上での利点を考慮してチベット訳を用いる。当然ながら、他の資料との間に重要な異同が見られる場合には適宜言及する。また今回の分析対象となる行品について、T 418 では第二章 (T 13, 904b24–906a11)、T 417 も同様に第二章 (T 13, 898a08–899c07) であるが、T 416 では第一章思惟品後半 (T 13, 875a02–877b10)、T 419 (T 13, 921b17–923a07) に章立ては存在せず、チベット訳では Chapter 2 後半 (2D) から Chapter 3 (3A–3O) までとなっており一様ではない。行品というのは主に T 418 における名称であるが、表記が煩瑣になることを避けてこれらの範囲を行品と称し、主なロケーションの表記方法としては PSS による区分 (2D などの英数字) を用いる。行品は漢訳でおよそ五紙ほどの量に過ぎないが、この範囲に般舟三昧とは何かを説明する部分が二箇所ほど見出せる。本研究ではそれを内容によって前半 (2D–2J) と後半 (3A–3O) に区切り、実質的な内容を説く後半から分析を始めることとする。

続いて本研究の全体的な構成を簡略に述べておく。原初的な様相を考察するにあたって、今回は般舟三昧の系譜と役割という二つの項目に沿って考察を進めていく。すなわち、第二章において般舟三昧を仏随念 (*buddhānusmṛti*) の発展形とみる先行研究の再検討を行い、新たな観点から般舟三昧の系譜を辿る。第三章では禅経類に見る視覚化 (visualization) の手順を参照し、仏像が存在しない当初の環境を想定した場合、何が必要となるのかを問うことで般舟三昧が担っていた本来の役割を明らかにする。以上までが行品後半の分析となる。続く第四章では前半の分析となり話題が変わる。行品前半では項目を列挙して般舟三昧を説明するが、内容がかなり不可解となっているため検討を加える。また本経のみならず、同じ形式で三昧を説明する經典が他にも存在しており、本経の検討に引き続いて、《首楞嚴三昧經》を取り上げる。この經典における首楞嚴三昧の実態は極めて不明瞭であり、三

³⁷ 問事品 (1A–2C) も原初形態に含まれるが、これは本経の序文にあたる部分であるから問題とす
るに及ばない。

味の名を冠する経典であるにも拘わらず、実践などの詳細を解説することがない。そこでこの経典が三昧の実践以外の何を目的に編纂されたのかを考察する。この章は原初的な様相の考察からは外れることになるが、本経との対比を念頭に考察を行っていく。第五章は結論である。般舟三昧の原初的な様相について、主に第二章と第三章の考察結果に基づいてまとめる。そしてこの三昧の原初的な様相から浮かび上がる本経本来の思想的立場に関する仮説を提出し、最終的にその立場に見る大乘仏教の展開度合いを測ってみたいと考えている。尚、付録 A は行品 (T 418) の和訳と訳注であり、付録 B は行品の諸本対照テキストとなっている。

2 般舟三昧の系譜

本章では般舟三昧の系譜を辿る。先行研究において般舟三昧は仏随念 (*buddhānusmṛti*) の発展形とみられている。これは主に漢訳における「仏を念じる」(念仏) という表現に基づいて立てられた見解であるが、「念」から想定される原語は *anu-Smṛ* 以外にも複数存在する。それにも拘わらず、これまで他の原語が用いられている可能性はまったく検討されてこなかった。それゆえまずは先行研究の再検討から行う。その後、系譜を辿る新たな視点として浄土經典の説く臨終見仏に注目して再考する。この見仏形態は般舟三昧と同じ構造で説かれ、現世での見仏という点で共通するが、臨終見仏が臨終時という特殊な時間帯に限定される一方で、般舟三昧は現世でいながらに行えるようになっている。再考ではこのようにお互いの見仏形態に見る共通性を指摘し、その特質を比較することにより、般舟三昧が臨終見仏の発展形であると論じる。

2.1 赤沼・ハリソン説の再検討

先行研究として挙げることができるのは赤沼 (1927ab) と Harrison (1978b) の二つである。これら二つに提示された見解は、般舟三昧を仏随念の発展形とみて一致する¹。赤沼 (1927ab) が仏随念との関連を論じた最初の研究となっているが、それは以下のような観点から始められる (以下、赤沼 1927a, 98-99 から引用。旧字は新字に改めた)。

般舟三昧經を取り出して云ふならば、この經典は、大阿弥陀經と般若經の調和融合といふ所に創作動機を持ち、形に於いて、大乘化された三昧の高潮であり、さうしていかに、両系經典を調和融合せんとしたかと云ふに、大阿弥陀經系統の經典は仏陀及び仏陀の慈悲を説くことを主とするものであるから、その仏陀が我々衆生に如何に関係するか、その関係を原始經典以来の念仏に求め、念仏を三昧化して、その念仏三昧の意義を、般若の思想を以てしたものであると見ることが出来ると思ふ。以下、このことの証明のために、原始經典に於ける念仏と三昧の思想を探り、それを跡づけて、般舟三昧の地位を見やふと思う。

念仏 (*buddhānusmṛti*) は、その語が示すやうに、仏陀を憶念することである...

¹ この二人の見解が現在の定説とみてよい。特に Harrison (1978b) 以降、般舟三昧は仏随念との関連で語られるようになっている。cf. Harrison (1992, 220-221), Yamabe (1999, 133-137), Skilton (2002, 82f.), Boucher (2008, 8-9), White (2009, 97), Osto (2018, 188) .

このように赤沼 (1927a) は般舟三昧を三昧化された仏随念とみる。またその背景には《無量寿經》などの浄土經典に刺激を受けた般若教徒がいるとみている (cf. 赤沼 1927b, 225)。ここでは念仏という用語が用いられているが、それを“*buddhānusmṛti*”として考察を進めようとしている点に注意する。確かに漢訳において般舟三昧は念仏によって会得されると表現し得るが、この場合の念の語に想定される原語としては、*anu-Smṛ* 以外にも *manas(i)-Kṛ* や *citta* といった可能性が考えられる²。本經の原語を知るに資する資料として、現在までに発見されている写本はどれも断片に過ぎないため、今も昔もチベット訳に頼る他ないが、結局、赤沼は原語を精査することなく仏随念とみなして考察を進めてしまっている。般舟三昧が仏随念の発展形であると論じる上で、まず第一にこの点に問題があるといわなければならない。そしてこの赤沼説の影響下にある研究が Harrison (1978b) であり³、ハリソンも赤沼と同じく般舟三昧を仏随念の発展形とみる (ibid., 40⁴)。したがって以降ではこの見解を赤沼・ハリソン説と呼ぶ。

ハリソンが赤沼と異なるのは原語が想定できるチベット訳を用いて検討を行っている点である。Harrison (1978b) はその第五節において本經の用例を引きながら、般舟三昧がいかなるものかを論じている。その際に用いられた主な用例は五つ (3A, 3B, 3C, 3F, 8A) あるが、このうちで仏随念を説いた用例はたった一つ (3F) だけであり、さらにこの用例が般舟三昧を説明したものかどうかは検討の余地がある。そこで以下ではそれらと同じ用例を引いて再検討していく。

2.1.1 作意の用例

本項では Harrison (1978b) に引かれたうちの三つの用例 (3A, 3B, 3C) から再検討していく。まずは 3A と 3B の用例から引用する。

バドラパーラよ、その般舟三昧とは何か。そこでバドラパーラよ、比丘、あるいは比丘尼、あるいは優婆塞、あるいは優婆夷であれ、戒を完全に保った上で、その者はひとり閑かな場所に向かい、座ってから、次のように考える。『かの世尊、如来、阿羅漢にして正等覺者なる阿弥陀仏 (**Amitāyus*) はいずれの方角にとどまり、〔身を〕保ち、時を過ごして、教えを説いておられるのか』と思い起こしなさい。その者は聞いた通りの (**yathāśruta*) あり様に従って

² cf. 藤原 (1940, 39–40) .

³ cf. Harrison (1978b, 55. fn. 1) .

⁴ see also Harrison (1992, 220–221) .

(**ākāratas*)、この仏国土より西の方角に百千俱胝の仏国土を過ぎた〔ところにある〕スカークヴァティー世界 (**Sukhāvātī*) に、かの世尊、如来、阿羅漢にして正等覺者なる阿弥陀仏が、今現在、菩薩衆に囲まれ、付き随われて、とどまっておられる。〔身を〕保っておられる。時を過ごしておられる。教えを説いておられると作意する。さらにその者は乱れない心で如来を作意する (**manas(i)-Kr*) のである。

bzang skyong/ da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa zhes bya ba'i ting nge 'dzin de yang gang zhe na/ bzang skyong/ de la dge slong ngam/ dge slong ma 'am/ dge bsnyen nam/ dge bsnyen ma tshul khirms yongs su rdzogs par spyod par 'gyur la/ des gcig pu bden par song ste 'dug nas 'di snyam du/ bcom ldan 'das de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas tshe dpag med de phyogs gang rol na gnas te 'tsho zhing gzhes la chos kyang ston cing bzhugs/ snyam du sems bskyed par bya'o// des ji skad du thos pa'i rnam pas sangs rgyas kyi zhing 'di nas nub phyogs logs su sangs rgyas kyi zhing bye ba phrag 'bum 'das pa na 'jig rten gyi khams bde ba can na bcom ldan 'das de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas tshe dpag med de da ltar byang chub sems dpa'i tshogs kyis yongs su bskor cing mdun du bdar te bzhugs so// 'tsho'o// gzhes so// chos kyang ston to/ snyam du yid la byed de/ des kyang sems ma g-yengs pas de bzhin gshegs pa yid la byed do//

PSS 3A. cf. Harrison (1978, 42).

バドラパーラよ、菩薩は在家者であっても、あるいは出家者であっても、ひとり閑かな場所に向かい、座ってから、如来、阿羅漢にして正等覺者なる阿弥陀仏を聞いた通りの (**yathāśruta*) あり様に従って (**ākāratas*) 作意する。そして戒蘊に過失なく、注意力 (**smṛti*) を乱すことなく、一昼夜、あるいは二〔昼夜〕、あるいは三〔昼夜〕、あるいは四〔昼夜〕、あるいは五〔昼夜〕、あるいは六〔昼夜〕、あるいは七昼夜のあいだ作意する。その〔菩薩が〕もし七昼夜のあいだ心を乱すことなく阿弥陀如来を作意する (**manas(i)-Kr*) ならば、まさしくその〔菩薩は〕七昼夜が満ちてから世尊、阿弥陀如来を見る。その〔菩薩が〕もし昼間にかの世尊を見なくとも、眠ったその〔菩薩の〕夢のなかでかの世尊、阿弥陀如来はその顔を現す。

bzang skyong/ byang chub sems dpa' khyim pa 'am rab tu byung ba yang rung gcig pu dben par song ste 'dug la/ de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas tshe dpag med ji skad du thos pa'i rnam pas yid la byas te/ tshul khirms kyi phung po la skyon med cing dran pa g-yeng ba med par nyin zhag gcig gam/ gnyis sam/ gsum mam/ bzhi 'am/ lnga 'am/ drug gam/ nyin zhag bdun du yid la bya'o// de gal te nyin zhag bdun du sems mi g-yeng bar de bzhin gshegs pa tshe dpag med yid la byed na/ de nyin zhag bdun yongs su tshang ste 'das nas/ bcom ldan 'das de bzhin gshegs pa tshe dpag med mthong ngo// de gal te nyin mo bcom ldan 'das ma mthong na/ de nyal ba'i rmi lam du bcom ldan 'das de bzhin gshegs

pa tshe dpag med de'i zhal ston to//

PSS 3B. cf. Harrison (1978, 42–43).

以上二つの用例について、ハリソンは本経に見る阿弥陀仏とその仏国土への言及が現存する資料のうちで最初期（支婁迦讖訳: 179 年）のものであると言い、ここに説かれる阿弥陀仏は単なる一例であって、般舟三昧の対象は諸仏であったとみている（Harrison 1978b, 43）。これは末木（1989）によって原形論が更新される以前の主張であるが、本経は 5B などにおいて十方に無量の仏を見ることを説いており、それを一例とみる理由として挙げている（ibid., 43）。さらにハリソンが注目したのは二つの用例に共通して見られる「聞いた通り」（**yathāśruta*）という句である。この句は、当時、仏に関する口伝あるいは書写での伝承があったこと、さらにそれを視覚化（visualization）の材料として使っていたことを示していると指摘する（ibid., 44）。

さて再検討の際に留意すべき点がある。それは本経には上記 3A の用例のように「般舟三昧とは何か」（**katamaś ca sa pratyutpannabuddhasaṃmukhāvasthito nāma samādhiḥ*⁵）という体裁で始まるような、般舟三昧を説明していることが明白な記述が極めて少ないということである。Harrison (1978b) が引いた五つの用例のうちでは 3A と後に参照する 8A の用例の二つしかない⁶。したがってこれら二つの記述に見る内容は般舟三昧が何かを知る上で最も信頼度が高いことになる。先にも触れたように、仏随念に言及するのは 3F の用例一つだけであって、信頼のある 3A の用例に仏の随念（**anu-Smr*）は説かれていない。そしてこの用例に説かれているのは、仏の作意（**manas(i)-Kr*）に他ならない。それは 3B の用例を見てもまったく同じである。

では実際に仏随念の用例（3F）を検討する前に、3C の用例について触れておきたい。この用例で般舟三昧が説明されることはないが、般舟三昧以前の見仏形態が示唆されており重要である。

その菩薩は天眼の取得でもって如来を見るのでもない。天耳の要素の取得でもって正法（**saddharma*）を聞くのでもない。神通力の取得でもってその世界へ一瞬で赴くのでもないが、しかしバドラパーラよ、その菩薩はまさにこの世界にいながらにしてかの世尊、阿弥陀如来を

⁵ チベット訳 *da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa zhes bya ba'i ting nge 'dzin de yang gang zhe na* からの還梵である。

⁶ 本経において「般舟三昧とは何か」*da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa zhes bya ba'i ting nge 'dzin de yang gang zhe na/* が説明されるのは、既に参照した 3A と 2D の二箇所のみである。8A の用例では「この菩薩摩訶薩の三昧（i.e. 般舟三昧）をどのように修習すべきか」*de la byang chub sems dpa' sems dpa' chen po'i ting nge 'dzin 'di ji ltar bsgom par bya bya zhe na/* が説明される。

見て「私はその世界で過ごしている」と理解して教えを聞く。そして解説を聞いてそれらの教えを把握し、理解し、記憶するのである。かの世尊、如来、阿羅漢にして正等覺者なる阿弥陀〔仏〕を敬い、尊び、恭敬し、供養する。その菩薩はその三昧から出ても、聞いたとおり、記憶したとおり、理解したとおり、それらの教えを他の人にも詳細に解説するのである。

byang chub sems dpa' de lha'i mig thob pas de bzhin gshegs pa mthong ba yang ma yin/ lha'i rna ba'i kham thob pas dam pa'i chos nyan pa yang ma yin/ rdzu 'phrul gyi stobs thob pas 'jig rten gyi kham der skad cig tu 'gro ba yang ma yin gyi/ bzang skyong/ byang chub sems dpa' de 'jig rten gyi kham 'di nyid na gnas bzhin du/ bcom ldan 'das de bzhin gshegs pa tshe dpag med de mthong zhing bdag nyid 'jig rten gyi kham de na 'dug pa snyam du shes la/ chos kyang nyan to// 'chad pa thos nas kyang chos de dag kun 'dzin to// kun chub par byed do// 'dzin par byed do// bcom ldan 'das de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas tshe dpag med de la bkur stir byed do// bla mar byed do// ri mor byed do// mchod par byed do// byang chub sems dpa' de ting nge 'dzin de las langs nas kyang ji skad du thos pa dang/ ji ltar bzung ba dang/ ji ltar kun chub par byas pa'i chos de dag gzhan dag la yang rgya cher yang dag par 'chad do//

PSS 3C. cf. Harrison (1978b, 43).

ここで否定的に扱われている天眼や神足通といった能力の必要性は、般舟三昧以前に考えられていた見仏形態がこの世界と仏国土との空間的隔たりを解決する術をもたなかったことを示している。また上記引用のチベット訳には欠落しているが、漢訳の対応箇所では諸神通に加えて「ここでの〔生涯を〕終えて、あそこ〔にある〕仏国土に生まれて、やっと思えることができるのでもない」（不於是間終。生彼間佛刹乃見⁷）という一節がある。これも実際にその仏国土に生まれる必要性が言われているのであって、本経はこれらの見仏形態を否定的に説きながら、般舟三昧がこの世界にいながらにして阿弥陀仏に見えることが

⁷ T 13, 904a29–b01. T 418 以外では、T 416: 又亦不於此世界沒生彼佛前。而實但在此世界中（T 13, 875c28–876a1）、T 417: 不於此間終生彼間。便於此坐見之（T 13, 899a19–a20）、T 419: 菩薩亦不從是下世往生彼。但自故住是世（T 13, 922a24–a25）となっている。チベット訳は当該箇所には欠落しているが、しかし序文（1Y）に説かれるバドラーパーラの質問の中には「かれら菩薩たちはこの世界で死没して、それら仏国土にいるのでもなく、その菩薩たちがまさしくこの世界にいる間に仏を見て、教えを聞く……三昧とは何でしょうか」*byang chub sems dpa' de rnams 'jig rten gyi kham 'di nas shi 'phos te sangs rgyas kyi zhing de dag na gnas pa yang ma lags la/ byang chub sems dpa' de rnams 'jig rten gyi kham 'di nyid na gnas bzhin du sangs rgyas rnams kyang mthong la chos kyang nyan cing [...]* *ting nge 'dzin gang lags//* とあり、ここに同一の趣旨が説かれている。

できる見仏形態であると主張する。以上、この 3C の用例は般舟三昧の成立に影響を与えた見仏形態を想定する上で有効となる。

2.1.2 随念の用例

さて問題の仏随念の用例であるが、Harrison (1978b, 45⁸) が般舟三昧を論じる際に用いた 3F の用例は「仏随念とは何か」を説くところから始まる。3F の用例に関して注意しなければならないのは、この用例だけでは仏随念がどのような文脈で説明されたのかを知ることができないということである。したがって再検討としては直前の 3E にも注目し、仏随念が説明されるに至る経緯を明らかにする必要がある。

その〔菩薩は〕何度も作意する (**manas(i)-Kr*) ことによってかの〔阿弥陀〕如来を見る。この般舟〔三昧と呼ばれる、〕菩薩の三昧にとどまって、その〔菩薩は〕かの〔阿弥陀〕如来を見てから「世尊よ、いかなる徳目 (**dharma*) を具えれば、菩薩摩訶薩はこの世界に生まれることができるのでしょうか」と質問する。このようにしてどのような仏国土であれ、〔そこに〕生まれたいと思う者は、その時、如来に〔このように〕質問するのである。このように質問されて、世尊、如来なる阿弥陀〔仏〕はその菩薩に次のように言う。「善男子よ、仏随念 (**buddhānusmṛti*) の修練を行い (**nisevita*)、そして修習 (**bhāvanā*) を多く行くと、この〔スカーヴァティー〕世界に生まれることができる。仏随念の修練を行い、そして修習を多く行くと、この〔私の〕仏国土に生まれるだろう。善男子よ、ではその仏随念とは何かということ…」

*de phyi phyir zhing yid la byed pas de bzhin gshegs pa de mthong ngo// da ltar gyi sangs rgyas mngon sum
du bzhugs pa'i byang chub sems dpa'i ting nge 'dzin de la gnas te/ des de bzhin gshegs pa de mthong nas/
bcom ldan 'das/ chos gang dang ldan na/ byang chub sems dpa' sems dpa' chen po 'jig rten gyi kham 'dir
skye bar 'gyur/ zhes zhu ba zhu'o// de bzhin du sangs rgyas kyi zhing gang dang gang du skye bar 'dod pa
de'i tshe de bzhin gshegs pa la zhu'o// de skad zhus nas bcom ldan 'das de bzhin gshegs pa tshe dpag med
des byang chub sems dpa' de la 'di skad ces bka' stsal to// rigs kyi bu/ sangs rgyas rjes su dran pa kun tu
bsten/ nges par bsten cing bsgoms la mang du byas na/ 'jig rten gyi kham 'dir skye bar byed do// sangs
rgyas rjes su dran pa kun tu bsten/ nges par bsten cing bsgoms la mang du byas na/ sangs rgyas kyi zhing
'dir skye bar 'gyur ro// rigs kyi bu/ de la sangs rgyas rjes su dran pa de gang zhe na/*

PSS 3E–3F. cf. Harrison (1978b, 45).

⁸ see also Harrison (1992, 221) .

このように文脈を読んで再検討すると、仏随念がいかなる経緯で説かれたのかが明らかになる。すなわち、3F の用例における仏随念は阿弥陀仏国に往生する方法として説明されたものである。またそれが阿弥陀仏の金口直説であることを考慮すると、仏随念の説明を聞いている菩薩は既に般舟三昧の中に入っているとみななければならない。それでも尚、この仏随念の記述が般舟三昧を説明しているとみるならば、この菩薩は般舟三昧の中で阿弥陀仏から再び般舟三昧の説明を受けるという不合理な状況に陥ってしまう。やはりここは菩薩の質問の通り、阿弥陀仏国に往生する方法を説明して仏随念が説かれているとみるべきであって、この 3F の用例は般舟三昧の説明にはあたらない。般舟三昧に入って仏随念の説明を受けるというように、これら二つはあくまで別な概念として考えなければならない。

以下で最後となる 8A の用例を検討し、般舟三昧の説明としてはやはり作意 (**manas(i)-Kr*) が説かれている点を確認する。

バドラパーラよ、そこでこの菩薩摩訶薩の三昧 (i.e. 般舟三昧) をどのように修習すべきかという、バドラパーラよ、つまり私 (世尊) が今汝の前で座って教えを説いているかのように、バドラパーラよ、菩薩はかの如来、阿羅漢、正等覚者なる仏たちが仏の座にお座りになって、教えを説いておられると作意するのである。その〔菩薩は〕あらゆる様相の最上なるものを具え、容姿が美しく、端正で、見目麗しく、完全な身体を具えた者としての如来たちを作意する (**manas(i)-Kr*) のである。〔すると〕如来、阿羅漢、正等覚者なる仏の、百の福德によりそれぞれ生じた〔三十二〕大丈夫相 (**mahāpuruṣalakṣaṇa*) を見るだろう。

bzang skyong/ de la byang chub sems dpa' sems dpa' chen po'i ting nge 'dzin 'di ji ltar bsgom par bya zhe na/ bzang skyong/ 'di lta ste dper na nga da ltar khyod kyi mdun na 'dug cing chos ston pa de bzhin du/ bzang skyong/ byang chub sems dpas de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas de dag sangs rgyas kyi gdan la bzhugs shing chos ston par yang yid la bya'o// des rnam pa thams cad kyi mchog dang ldan pa/ gzugs bzang ba/ mdzes pa/ blta na sdug pa/ sku yongs su grub pa dang ldan par de bzhin gshegs pa rnams yid la bya'o// de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas kyi skyes bu chen po'i mtshan re re yang bsod nams brgyas bskyed par blta'o//

PSS 8A. cf. Harrison (1978b, 45).

この 8A でも前掲の 3A や 3B と同様に仏を作意すべきと説いている。この他にも、

「同じようにバドラパーラよ、菩薩摩訶薩は在家者であれ、出家者であれ、如来がおられると聞いたそれぞれの方角に注意力をたもち、心を散乱させることなく、仏を見るために、かの如

来を作意する (**manas(i)-Kr*) のである。このようにしてその菩薩は如来がヴァイドゥールヤの像 (**pratimā*) の如く美しく立っているのを見るだろう」

*bzang skyong/ de bzhing du byang chub sems dpa' sems dpa' chen po khyim pa'am rab tu byung ba yang
rung/ phyogs gang dang gang na de bzhin gshegs pa bzhug par thos pa'i phyogs de dang de longs su dran
pa dang ldan zhing sems g-yeng ba med pas sangs rgyas mthong ba thob par bya ba'i phyir de bzhin gshegs
pa de yid la bya 'o// de ltar byang chub sems dpa' des de bzhin gshegs pa bai dū rya'i sku gzugs bzang por
gnas pa mthong bar 'gyur ro//*

PSS 3I.

など、行品には仏の作意を求める記述が散見されるが⁹、これらも皆、般舟三昧を説いたものとみてよい。以上、般舟三昧の説明としては決まって仏の作意 (**manas(i)-Kr*) が説かれるのであって、仏の随念 (**anu-Smr*) は説かれない。したがって、般舟三昧の系譜を辿る上では随念よりも作意の語に注目した方がよいだろう。

またここまで「作意」と訳してきた *manas(i)-Kr* の意味について、この語は一般的に注意や思惟を意味する。例えば前者は經典にみる *sādhū ca suṣṭhū ca manasikuru* という定型句に、後者は如理作意 (*yoniso(so)-manasikāra*) という用語に代表される。特に阿毘達磨は前者の意味で理解することが知られる。阿毘達磨における作意の定義を見ると「心を曲げること」*cetasa ābhogaḥ* (AKBh 54, 23) とあるが、これは所縁に対して心に向けることを言い、十大地法の中に含まれるから、この語が日常的にはたらく注意作用として理解されていることがわかる。しかし Deleanu (2006, 468–470. fn. 6) が指摘するように、*manas(i)-Kr* は多義的 (polysemic) な語であり、注意や思惟という一般的な訳語が当てはまらない場合がある。般舟三昧の場合に用いられる *manas(i)-Kr* の意味については、第三章において譬えの考察と共に言及することになるが、それまでの間は単に原語が *manas(i)-Kr* であることを示す訳語として「作意」を用いることとする。

⁹ see also 3H and 3J.

2.1.3 他文献との比較

再検討の最後として般舟三昧と作意の関連を他の文献を通して確認しておく。最初に参照するのは《七百頌》である。この経典が般舟三昧を説くわけではないが、所説の一行三昧 (*ekavyūha-samādhi*)¹⁰の内容は般舟三昧と類似することが知られる¹¹。そしてその説明には共通する用語が用いられており、原語を確認することができる。

一行三昧に入門しようと思う善男子あるいは善女人は、寝所や座所を別々にしなければならない。そして〔その者は、人との〕交流を喜ばないようにしなければならない。あらゆる相を作意せずに結跏趺坐しなければならない。そこで〔その者は〕如来を作意し、そして一切法を作意しなければならない。そしてその者は認識しないという方法でもって如来を作意しなければならない。そして〔その者は〕かの〔如来の〕名前を把握しなければならない。その名前を聞いて認識した後、その如来がおられるその方向を向いて座り、その如来を作意しなければならない (*tathāgataṃ manasi-Kṛ*)。

ekavyūhaṃ samādhim avatartukāmena kulaputrena kuladuhitrā vā viviktāni śayanāsanāni kartavyāni asaṃsargārāmena ca bhavitavyam, sarvanimittāmanasikāreṇa paryāṅkam baddhvā niṣīditavyam. tatra tathāgato manasikartavyaḥ sarvadharmāś ca manasikartavyā, anupalaṃbhayogenāyaṃ ca tathāgataṃ manasikuryāt, tasya nāmadheyam grhītavyam tac ca nāmadheyam śrutvopalabhya yasyāṃ diśi sa tathāgatas tām diśā āmukhikṛtya niṣīditavyam, tam eva tathāgataṃ manasikurutām**.*

*em. SSP: *manasikuryat*. **em. SSP: *manasikurvātām*.

SSP 134, 33–39.

用語からして一行三昧の説明が般舟三昧と類似していることがわかる。比較する上で重要なのは、この三昧が同じく見仏と関わっており、尚且つ、その記述に作意の語が確認できる点である。ここまで還梵扱いとしてきたチベット訳 *yid la byed pa* の原語も *manasi-Kṛ* であると認めてよいだろう。続いては《修習次第》を参照する。カマラシーラ (*Kamalaśīla*) は止観を説明する中で般舟三昧に言及している。

¹⁰ 「一行三昧」 (*ekavyūha-samādhi*) という名称は曼陀羅仙訳 (T 232) による。*ekavyūhasamādhi* について『十万頌』 (SSP, 1423, 3–5) では以下のように解説されている。

そのうち一行という三昧は何か。その三昧の中にとどまれば、いかなる法にも対〔なるもの〕を見出さない。これが一行〔三昧〕と呼ばれる。

tatra katama ekavyūho nāma samādhir yatra samādhau sthitvā na kasyacid dharmasya dvayaṃ samanupaśyaty ayam ucyate ekavyūhaḥ.*

*SSP: *dvayatam*. em. acc. Bidyabinod (1927, 15) .

¹¹ cf. 林 (2004, 177) .

そこでまず最初に瑜伽行者 (yogin) は見て聞いた通りの (yathādr̥ṣṭāśruta) 如来の姿 (vigraha) に対する心を確立させて、止 (śamatha) に没入する。そして熱せられた金の如く清らかで、〔三十二〕相〔八十〕種好によって飾られ、衆会の中心にあり、様々な種類の方便でもって衆生の為に行動している、その如来の姿を絶え間なく作意すること (manasikāra) でもって、その〔如来の〕徳に対する熱望を引き起こし、昏沈や掉挙などを鎮めさせ、面前に立っているかのように明瞭にそれが見えるまで、それまで瞑想しなければならない。……そしてこの三昧は般舟三昧として〔経に〕解説されている。

tatra prathamam tāvad yogī yathādr̥ṣṭāśrute tathāgatavigrahe cittam sthāpayitā śamatham niṣpādayet. tañ ca tathāgatavigraham uttaptakanakāvadātam lakṣaṇānūvyañjanālamkṛtam parśanmaṇḍalamadhyagatam nānāvidhair upāyaiḥ sattvārtham kurvantaṁ prābandhikena manasikāreṇa, tadguṇābhilāṣaṁ samupādāya layauddhatyādīn vyupaśamayya tāvad dhyāyed yāvat sphuṭataram puro 'vasthitam iva tam paśyet. [...] ayaṁ ca samādhiḥ pratyutpannabuddhasaṁmukhāvasthitasamādhir nirdiṣṭaḥ.

BhK III 4, 5–5, 9.

ここでは止観の方法として般舟三昧が説明される。引用したのが止 (śamatha) の説明部分となっているため、本経には見られなかった昏沈や掉挙などを鎮めるくだりがあるが、基本的な内容は同じであり、ここにもやはり作意が説かれている。省略した部分は観 (vipaśyanā) の説明となっており、そこでは行者が見ている仏が不来不去であり、自性が空であるのと同様に一切法もまた空であると観察するよう説かれている。また本経との違いに関して注目したいのは、本経では単に「聞いた通り」 (*yathāśruta) となっていたのに対し、《修習次第》では「見て聞いた通り」 (yathādr̥ṣṭāśruta) となっており、Harrison (1978b, 44–45) が指摘したような口伝あるいは書写での伝承を聞く視覚化の環境から、仏像のような媒体を見る環境への展開を予想させる。

以上このように般舟三昧と共通点の多い一行三昧にも、カマラシーラの言う般舟三昧にもやはり作意が説かれている。

2.1.4 赤沼・ハリソン説再考の必要性

ここまで赤沼・ハリソン説の再検討を行った。般舟三昧を語る上で重要視されてきた仏随念の用例 (3F) は定中の菩薩が阿弥陀仏から告げられた内容であり、状況からして般舟三昧を説明したものではない。一方、般舟三昧の説明であることが明白な用例 (3A, 8A) では決まって仏の作意が説かれている。この他にも行品には仏を作意する用例が散見される

ばかりでなく、《修習次第》に見る般舟三昧の説明でも同じく作意が説かれる一方、随念などはまったく説かれていない。よって、般舟三昧を仏随念の発展形とみる見解は資料の分析からは支持されない。ここに赤沼・ハリソン説再考の余地が生じることになる。

2.2 臨終見仏

今や般舟三昧の系譜は作意の語を手掛かりに辿っていくのがよいだろう。この語に注目することにより、浄土經典に見る見仏形態との近似性が明らかになる。かつて藤田(1985, 122-133)は見仏形態を四つ(往生による見仏・仏力による見仏・三昧による見仏・臨終見仏)に分類した。この分類は『観無量寿經』に基づくため夢中見仏が含まれていないが、これを含めると見仏形態は全部で五種類あることになる。

五種類のうち、三昧による見仏に関しては今の考察の対象であるから言及は控えるとして、まず往生による見仏というのは直接その仏国土に生まれるという方法を取る。方法からすれば最も原始的な見仏形態というべきであり、先にも触れたように、否定的にはあれ本經においても言及されている。

仏力による見仏というのは、藤田の説明によれば『観無量寿經』において仏陀が韋提希に阿弥陀仏やその仏国土を見せるが如き、《無量寿經》で世自在王仏が法蔵比丘に諸の仏国土を見せるが如きものをいう(藤田 1985, 125-127)。また本經(3J)においても「この三昧にとどまった菩薩は、仏の威力(**anubhāva*)と、自らが生じさせた善根の力と、三昧の会得による恩恵とのこれら三つが集まり、合わさったことで、この〔菩薩は〕如来たちを見るのであり、〔如来たちは〕現れるのである¹²」と説かれており、般舟三昧は仏力による見仏を三昧による見仏に取り込んだものとみることができる。

夢中見仏は文字通り夢の中で仏に見えるというものである。本經(3B)において「その〔菩薩が〕もし昼間にかの世尊を見なくとも、眠ったその〔菩薩の〕夢のなかでかの世尊、阿弥陀如来はその顔を現す¹³」と説かれているように、二次的な場合に会得される見仏として扱われることが多い。

残るは臨終見仏である。この見仏形態は臨終時とはいえ、般舟三昧と同じ現世での見仏

¹² *ting nge 'dzin 'di la gnas pa'i byang chub sems dpa' ni sangs rgyas kyi mthu dang/ rangs gis dge ba'i rtsa ba'i stobs bskyed pa dang/ ting nge 'dzin thob pa'i byin dang/ 'di dag gsum tshogs shing 'dus pas des de bzhin gshegs pa rnams mthong zhing snang bar 'gyur ro//*

¹³ *de gal te nyin mo bcom ldan 'das de ma mthong na/ de nyal ba'i rmi lam du bcom ldan 'das de bzhin gshegs pa tshe dpag med de'i zhal ston to//*

となっており、《無量寿経》ならびに《阿弥陀経》が提唱する主要な見仏となっている。これ以外の見仏形態は言及されているが、本経が臨終見仏に言及することはなく、また《無量寿経》などが般舟三昧に言及するというものもない。しかしこれら二つに関連性がまったく無いのかというとそうではない。なぜなら、両見仏形態は作意によって会得されるという共通点をもっているからである。これら二つが同じ系譜に属しており、般舟三昧が臨終見仏から発展した可能性は十分考えられる。以降ではこの可能性について論じていく。

2.2.1 《無量寿経》

まずは臨終見仏においても般舟三昧と同様に作意が説かれる点を確認する。最初に《無量寿経》における臨終見仏を見る。

そしてアーナンダよ、いかなる衆生であっても、あり様に従って (*ākārataḥ*) 何度もかの如来を作意し、多く無量の善根を植え、菩提に心を振り向けて、その世界に生まれることを願うであろう者たちには、阿羅漢にして正等覚なる阿弥陀如来が、臨終の時がやって来た時に無数の比丘の僧団に囲まれて、仕えられて〔面前に〕立つだろう。

ye cānanda kecit sattvās taṃ tathāgataṃ punaḥ punar ākāraṭo manasikariṣyanti, bahuparimitaṃ ca kuśalamūlaṃ avaropayiṣyanti, bodhāya cittaṃ pariṇāmya tatra ca lokadhātāv upapattaye praṇidhāsyanti, teṣāṃ so 'mitābhaṣaḥ tathāgato 'rhaṇaḥ samyaksaṃbuddho maraṇakālasamaye pratyupasthite 'nekabhiḥṣuḡaṇaparivṛtaḥ puraskṛtaḥ sthāsyati.

L.Sukh, 48, 8–13.¹⁴

この記述は三輩往生説の第一輩に相当し、その内容は年代の経過と共に変容することが知られている。参照したサンスクリット本は後期の資料となり、作意以外に無量の善根などの項目が並列で説かれているが、これらは初期の資料には見出せず、作意と願生彼国の二項目だけが諸本に共通する¹⁵。しかし臨終見仏としては作意が重要となることが次項で参照する《阿弥陀経》によって確かめられる。

¹⁴ cf. 『大阿弥陀経』(T 12, 309c24–310a06), 『平等覚経』(T 12, 291c17–c25), 『無量寿経』(T 12, 272b15–b19), 『無量寿如来会』(T 11, 97c26–c29), 『無量寿莊嚴経』(T 12, 323b14–b16)。

¹⁵ 但し『無量寿莊嚴経』を除く。cf. 『大阿弥陀経』至誠願欲往生阿彌陀佛國。常念至心不斷絶者(T 12, 310a02–a03), 『無量寿経』一向専念無量壽佛。修諸功德願生彼國(T 12, 272b18–b18). see also 『平等覚経』(T 12, 291c21–c22), 『無量寿如来会』(T 11, 97c26–c28)。

2.2.2 《阿弥陀経》

《阿弥陀経》における臨終見仏は次のように説明され、その内容は般舟三昧と酷似していることが知られる。そこで以下では順次にそれら二つを参照する。

シャーリプトラよ、かの世尊、阿弥陀如来の名号を聞くであろう、そして聞き終えて作意するであろう善男子あるいは善女人は誰であれ、一夜、あるいは二夜、あるいは三夜、あるいは四夜、あるいは五夜、あるいは六夜、あるいは七夜、散乱しない心を持って作意するならば、その善男子あるいは善女人が臨終する時に、声聞たちの集団に囲まれ、菩薩たちの群衆に仕えられたかの阿弥陀如来が、臨終していくその者の面前に立つだろう。

yah kaścic chāriputra kulaputro vā kuladuhitā vā tasya bhagavato 'mitāyusas tathāgatasya nāmadheyam śroṣyati, śrutvā ca manasikariṣyati. ekarātram vā dvirātram vā trirātram vā catūrātram vā pañcarātram vā ṣaḍrātram vā saptarātram vāvikṣiptacitto manasikariṣyati. yadā sa kulaputro vā kuladuhitā vā kālam kariṣyati, tasya kālam kurvataḥ so 'mitāyus tathāgataḥ śrāvakaṣaṅghaparivṛto bodhisattvagaṇapuraskṛtaḥ purataḥ sthāsyati.

S.Sukh, 89, 4–11.¹⁶

バドラパーラよ、菩薩は在家者であっても、あるいは出家者であっても、ひとり閑かな場所に向かい、座ってから、如来、阿羅漢にして正等覚者なる阿弥陀仏を聞いた通りのあり様に従って作意する。そして戒蘊に過失なく、注意力を乱すことなく、一昼夜、あるいは二〔昼夜〕、あるいは三〔昼夜〕、あるいは四〔昼夜〕、あるいは五〔昼夜〕、あるいは六〔昼夜〕、あるいは七昼夜のあいだ作意する。その〔菩薩が〕もし七昼夜のあいだ心を乱すことなく阿弥陀如来を作意するならば、まさしくその〔菩薩は〕七昼夜が満ちてから世尊、阿弥陀如来を見る。

bzang skyong/ byang chub sems dpa' khyim pa 'am rab tu byung ba yang rung gcig pu dben par song ste 'dug la/ de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas tshe dpag med ji skad du thos pa'i nram pas yid la byas te/ tshul khriṃs kyi phung po la skyon med cing dran pa g-yeng ba med par nyin zhag gcig gam/ gnyis sam/ gsum mam/ bzhi 'am/ lnga 'am/ drug gam/ nyin zhag bdun du yid la bya'o// de gal te nyin zhag bdun du sems mi g-yeng bar de bzhin gshegs pa tshe dpag med yid la byed na/ de nyin zhag bdun yongs su tshang ste 'das nas/ bcom ldan 'das de bzhin gshegs pa tshe dpag med mthong ngo//

PSS 3B.

¹⁶ cf. 『阿弥陀経』(T 12, 347b10–b14), 『称讃浄土経』(T 12, 350a7–a13).

これら二つは心の不散乱や七日の期間を説く点で酷似することが知られているが¹⁷、作意の点でも共通しており¹⁸、先の《無量寿經》を含め一貫して作意が共通項となっているのが確認できる。つまり臨終見仏というのは臨終という特殊な時間帯を除けば、基本的な構造は般舟三昧と同じということになる。

2.3 臨終見仏と般舟三昧

ここまで臨終見仏と般舟三昧が同じ見仏の構造で説かれていることを明らかにした。次なる論点は先後関係である。すなわち、果たしてどちらの見仏形態が先行し、また後に取り入れられることになったのかということである。臨終見仏は、例えば《法華經》に「散乱することのない作意をもって書写するであろうものには、千もの仏が手をさしのべるだろうし、臨終時には千もの仏がかれの面前に現れるだろう」*yaś ca avikṣiptena manasikāreṇa likhīsyati tasya buddhasahasraṃ hastam upanāmayīsyati maraṇakāle cāsyā buddhasahasraṃ saṃmukham upadarśanaṃ kariṣyati* (SP 478, 9–10) とあり、他の經典にも説かれている。しかしそれらが浄土經典に先駆けて説いた可能性は認められていない¹⁹。そして臨終見仏は浄土思想の中でも原始的な教説だったとみられており²⁰、阿弥陀信仰の中でもかなり古くから提唱されていたことが推測される。

しかしながら、先行研究が臨終見仏と般舟三昧の先後関係に関して言及する際には、般舟三昧を先とするものが目立つ。例えば望月（1946）は次のように述べる（以下、ibid., 196–197 から引用²¹。旧字は新字に改めた。□ は筆者による補い）。

¹⁷ cf. 赤沼（1927b, 59）, 望月（1930, 311–312）, 色井（1978, 361–363）, 眞野（1966）。

¹⁸ *manasi-Kṛ* について『称讃浄土經』では「（聞已）思惟」（T 12, 350a09）、『阿弥陀經』では「執持名号」（T 12, 347b11）と訳されている。玄奘訳の思惟の原語が *manasi-Kṛ* の場合があることは確認できる（cf. 『平川索引Ⅱ』174–175 頁）。一方で羅什訳の執持名号は難解であるが、これは仏の名を聞き、それを作意することを取意して訳したものとみられている。cf. 望月（1930, 783–784）, 色井（1978, 359–360）。

¹⁹ 臨終見仏と不可分な来迎思想の点からみても、「臨終来迎の思想が、最も早く、最も顕著な形で説かれるに至ったのは、やはり阿弥陀仏のそれである」（藤田 1964, 14）と言われている。また臨終来迎は阿弥陀信仰初期の段階で成立した思想とみられている。例えば松岡（2013, 87–94）は阿弥陀仏に関する伝承の核心を調査し、經典に散在する伝承には共通して来迎が説かれていることから、臨終来迎が阿弥陀仏に関する原伝承であったと指摘する。

²⁰ cf. 藤田（1970, 538–544）。

²¹ see also 望月（1930, 310–311, 777–778）。

恐らくこれ〔(i.e. 本経)〕は現存阿弥陀関係の文献中、最古のものであらうと思はれる。阿弥陀経に一日乃至七日執持名号一心不乱の説を掲げ、大阿弥陀経等に齋戒清浄常念至心の説をなし、観無量寿経に観仏三昧を説いているのは皆此経に基づいたものと見なければならぬ。……般舟〔三昧〕経には見仏を以て平生に約し、阿弥陀経には之を臨終に約しているのも、その点は聊か相違するやうであるけれど、既に平生見仏が可能であるとすれば、臨終見仏も亦可能でなくてはならぬのであるから、阿弥陀経は彼の般舟三昧見仏の趣旨を臨終にまで押及ぼしたものとすべきである。

この他、藤原(1940, 32-33)は「臨終現前の説も亦同経〔(i.e. 般舟三昧経)〕の定中見跡(sic.)の説からの発展であらうと思はれる」といい、望月と同じく般舟三昧から臨終見仏に発展したとみる²²。そして管見の限り、このような見解に対する反論が具体的な考察と共に提出されたことはない。発展という点からすれば、臨終見仏から般舟三昧へと発展した可能性も検討されるべきであるが、そういった検討もなく般舟三昧を先とみる要因は、上記望月(1946)の冒頭において本経が「現存阿弥陀関係の文献中、最古のもの」言われているように、訳経史的な観点が前提にあり、本経が《阿弥陀経》《無量寿経》に先立つとみなしていることにある。しかしこれに関しては、藤田(1970, 574)が警鐘を鳴らすように「『般舟三昧経』が浄土経典に先行すると見ることに確証がない」のであって²³、訳経史的な観点に基づいて般舟三昧から臨終見仏へ発展したと主張するのは論拠に乏しい。臨終見仏と般舟三昧の先後関係を論じるのであれば、この二つの見仏形態を虚心に比較した上で、どちらがどの点で発展しているのかが検討されなければならない。

2.3.1 臨終見仏の特質

まずは臨終見仏の特質から見ていく。特に臨終という時間の制約について、臨終来迎願との関係から眺めてみる。最初に注目するのは《無量寿経》(サンスクリット本)に見る次のような一節である。

アーナンダよ、善男子あるいは善女人であっても、「どのようにすれば、私は現世で阿弥陀如来を見られるのだろうか」と熱望する者は、無上の正等覚に対する心を起こして、強い意志の

²² この他に般舟三昧(経)の先行性を説いた研究として香川(1958)がある。

²³ cf. 藤田(1970, 223-224)。

相続によってその仏国土に心を向けて、〔仏国土に〕生まれるために善根を振り向けなければならない。

ya ānandākāṃkṣata kulaputro vā kuladuhitā vā kim ity ahaṃ dṛṣṭa eva dharme tam amitābhaṃ tathāgataṃ paśyeyam iti tenānuttarāyāṃ samyaksaṃbodhau cittam utpādyādhyāśayapatitayā saṃtatyā tasmīn buddhakṣetre cittam saṃpreṣyopapattaye kuśalamūlāni ca pariṇāmayitavyāni.

L.Sukh. 48, 15–19.

この一節で仏陀は現世で阿弥陀仏を見たいと望むのであれば、往生に向けて行動しなければならないと言っている。現世での見仏を望む者に往生を勧めるというのは不可解かもしれないが、実にこの部分に臨終見仏の特質を見て取ることができる。臨終見仏は確かに現世で行われるが、留意しなければならないのは、この見仏が阿弥陀仏が立てた誓いに依拠して展開するため往生と不可分になっているということである。その誓いというのが臨終来迎願であり、それを以下に参照する。

世尊よ、もし私が覚りを得た時に、他の世界の衆生たちが無上なる正等覺に心を起こし、私の名前を聞いてから、清浄な心をもって私を随念する²⁴ならば、私はかれらの臨終に際して、〔か

²⁴ 臨終来迎願は臨終見仏の記述 (L.Sukh, 48, 8–13) とよく似た内容になっているが、臨終見仏の記述で作意とあった所がここでは随念になっている。そしてこれら二語は同義語として理解される傾向にある。例えば藤田 (1970, 561. fn. 4) を参照すると、

もっとも、「念」と「作意」の、心所としての解釈を離れて、その実際の用法をみると、かなり違った面も認められる。すなわち、*anusmṛti* についていえば、主として過去の事柄の記憶という意味が強い。これは、原始・部派・大乘を通じて、「宿命通」を説明する場合に、この語を用いていることによく表れている。これに対して、*manasikāra* のほうは、*yoniso*-(or *yoniso*)*manasikāra* (如理作意) という言葉が、やはり原始・部派・大乘を通じて、しばしば用いられているように、むしろ知的な注意作用をあらわすことに重点が置かれる。それゆえ、大乘の念仏説に、この語を用いるのは、かかる点を強調するものとも考えられるが、しかし全体としては *anusmṛti* とほとんど同義的に併用されているのであるから、このように〔念仏という場合の「念」を「作意」で表すことがあるのは、そこに特別な意味を含めている (ibid., 558) 、と〕言い切ることは、やはり困難というべきであろう。

この他に藤原 (1940, 45–46) 、宇治谷 (1955) 、色井 (1978, 152–153) 、櫻部 (1983) も同義語として理解している。しかし般舟三昧ならびに臨終見仏では決まって作意が用いられ、随念が説かれることはない。随念が見仏と無関係であると主張するわけではないが、本經 (3F) で阿弥陀仏が説いているように、随念は主に阿弥陀仏国へ往生する関係で示される。臨終来迎願も往生者を迎えに行くという趣旨を説くものであり、ここには随念が用いられるのであって、作意が説か

れらの〕心が散乱しないように、私が比丘の集団に囲まれて、仕えられ、面前に立たないならば、そのあいだ私は無上なる正等覚を現等覚しない。

sacen me bhagavan bodhiprāptasya, ye sattvā anyeṣu lokadhātusv anuttarāyāḥ samyaksambodheś cittam utpādyā, mama nāmadheyaṁ śrutvā, prasannacittā mām anusmareyus, teṣāṁ ced ahaṁ maraṇakālasamaye pratyupasthite bhikṣusaṁghaparivṛtaḥ puraskṛto na puratas tiṣṭheyam, yad idaṁ cittāvikṣepatāyai mā tāvad aham anuttarāṁ samyaksambodhim abhisambuddheyam.

L.Sukh. 17, 21–18, 3.²⁵

このように阿弥陀仏（法蔵菩薩）は、無上正等覚を得るべく阿弥陀仏国を選んだ者が、臨終する際に迎えに行くことを誓っている。ここで重要なのは、願文が一人称で語られている通り、阿弥陀仏が迎えに行くという自身の行為を誓ったものであり、臨終時に衆生が見仏することを誓ったものではないということである。

しかし衆生側からこの願文を見た場合、臨終時とはいえ阿弥陀仏が今いる世界にやってくるというのだから、この願文には現世で阿弥陀仏に見える可能性が示されていることになる。このように臨終見仏というのは臨終来迎願に依拠することによって現世で見仏できる可能性を見出したものなのである。願文の内容からして往生の過程から外れた来迎はあり得ないから、阿弥陀仏の来迎は往生と不可分である。そして来迎がなければ見仏もあり得ないのだから、見仏の時間帯は必然的に臨終時に制限されることになる。このように臨終見仏は阿弥陀仏の来迎に依存する受動的な見仏形態であり、般舟三昧と同じく現世で行われるとしても来迎がある臨終時に制限されているのが特質である。

れることはない。この点に鑑みると、たとえ後代に同義語的な扱いになったとしても、その根底には何かしらの区別があったとみる方がよい。

- ²⁵ 引用したサンスクリット本では第十八願、最も初期の資料では第七願となる。以下に『大阿弥陀経』（T 12, 301b27–c03）から対応部分を参照しておく。

第七願。使某作佛時。令八方上下無央數佛國諸天人民。若善男子善女人。有作菩薩道。奉行六波羅蜜經。若作沙門。不毀經戒。斷愛欲。齋戒清淨。一心念。欲生我國。晝夜不斷絕。若其人壽欲終時。我即與諸菩薩阿羅漢共飛行迎之。即來生我國。則作阿惟越致菩薩。智慧勇猛。得是願乃作佛。不得是願終不作佛。

尚、下線部では「一心念。欲生我國」と切り離して読んでいるが、これを「一心念欲生我國」と読んで、欲生我國を念の対象とみる解釈もある（cf. 色井 1978, 294–295）。しかし直前の第六願では「一心念我^{三本}、晝夜一日不斷絕^{三本}、皆令來生我國」（T 12, 301b25）となっていることや、『平等覺經』の対応箇所「常念我淨潔心」（T 12, 281c03）とあるのに鑑みると、念の対象として我（i.e. 阿弥陀仏）が省略されているとみる方がよい。cf. 藤田（1990, 132）、大田（1983, 153）。

2.3.2 般舟三昧の特質

では以上で見た臨終見仏の特質と比較しながら般舟三昧の特質を見ていこう。以下に引用するのは既に参照した 3C の用例であるが、そこで本経は般舟三昧が次のような見仏であると主張していた。

その菩薩は天眼の取得でもって如来を見るのでもない。天耳の要素の取得でもって正法 (*saddharma) を聞くのでもない。神通力の取得でもってその世界へ一瞬で赴くのもないが、しかしバドラパーラよ、その菩薩はまさにこの世界にいながらにしてかの世尊、阿弥陀如来を見て「私はその世界で過ごしている」と理解して教えを聞く。

byang chub sems dpa' de lha'i mig thob pas de bzhin gshegs pa mthong ba yang ma yin/ lha'i rna ba'i khamis thob pas dam pa'i chos nyan pa yang ma yin/ rdzu 'phrul gyi stobs thob pas 'jig rten gyi khamis der skad cig tu 'gro ba yang ma yin gyi/ bzang skyong/ byang chub sems dpa' de 'jig rten gyi khamis 'di nyid na gnas bzhin du/ bcom ldan 'das de bzhin gshegs pa tshe dpag med de mthong zhing bdag nyid 'jig rten gyi khamis de na 'dug pa snyam du shes la/ chos kyang nyan to//

PSS 3C.

また漢訳を参照すると、ここに説かれる神通力による見仏に加えて「〔今いる〕ここでの〔生涯を〕終えて、あそこ〔にある〕仏国土に生まれて、やっと見るのでもない」（不於是間終。生彼間佛刹乃見）と²⁶、往生による見仏が否定的に説かれていることも既に述べた通りである。つまり神通力や往生という手段を否定する見仏形態が般舟三昧であって、その特質は現世でいながらに見仏ができる点にある。

他方仏に見える手段として神通力や往生が言われることから、当時の見仏の課題が仏国土との空間的隔たりにあったことがわかる。そしてその場所に直接赴く手段を取る神通力や往生という方法は最も原始的な見仏形態といえるだろう。臨終見仏の場合は阿弥陀仏がこちらの世界にやってくることになるが、この見仏は臨終来迎の中に現世で見仏する可能性を見出したとみるべきで、先行研究が言うような般舟三昧を臨終時にまで発展させたものとみるべきではない。臨終見仏は阿弥陀仏の来迎という限られた機会の上に存在するからこそ臨終時に制限されているのであり、来迎を待たなければならない受動的な見仏形態となっているのである。一方、般舟三昧の場合は「この世界にいながらにしてかの世尊、阿弥陀如来を見て」と説くように、現世にいながら見仏できることを特質としている。したがって臨終時という制限も存在せず、自らで三昧に入ってあらゆる時間帯で仏に見える

²⁶ cf. fn. 7.

ことができる。このように二つの見仏形態に見る特質を比較すれば、臨終見仏よりも般舟三昧の方が発展しているとみななければならない。

2.4 《八千頌》に見る批判

本章の最後に《八千頌》における作意に関する記述を参照しておきたい。この章では臨終見仏と般舟三昧に関する記述を確認したが、共に「あり様に従って」(*ākāratas*)や「聞いた通りのあり様」(**yathāśruta ākāra*)で作意することが説かれ、阿弥陀仏を対象とする際には有相的な態度で説かれている。しかしこのような態度は《八千頌》では否定的に説かれる。

その時、世尊は具寿スプーティを称讃した。「すばらしい、すばらしい、スプーティよ、汝が菩薩摩訶薩たちにこれら執着のうちの究極なるもの (*saṅgakoṭī*) を覚らせるとは。スプーティよ、それとはまた別の、より微妙な執着と呼ばれるものを私が説いてやろう。それを聞きなさい。よくよく集中しなさい。汝のために話してやろう」。「世尊よ、わかりました」と言って、具寿スプーティは世尊の〔話に〕耳を傾けた。世尊は次のように言った。この〔世間〕で善男子であれ、善女人であれ、信ある者は、如来にして阿羅漢なる正等覚者を特徴に従って作意する (*nimittato manasi-Kṛ*) のだが、実にスプーティよ、特徴がある限り執着がある。それはなぜかという、スプーティよ、執着というのは特徴から〔生じる〕からである。

atha khalu bhagavān āyusmate subhūṭaye sādhu kārāṃ adāt. sādhu sādhu subhūte, yas tvaṃ bodhisattvān mahāsattvān imāḥ saṅgakoṭī bodhayasi. tena hi subhūte anyān api sūkṣmatarān saṅgān ākhyāsyāmi. tān śṛṇu sādhu ca suṣṭhu ca manasikuru bhāṣiṣye 'haṃ te. sādhu bhagavan ity āyusmān subhūtirbhagavataḥ pratyaśrauṣīt. bhagavān etad avocat. iha subhūte śrāddhaḥ kulaputro vā kuladuhitā vā tathāgatam arhantaṃ samyaksaṃbuddhaṃ nimittato manasi karoti. yāvanti khalu punaḥ subhūte nimittāni tāvantaḥ saṅgāḥ. tat kasya hetoḥ, nimittato hi subhūte saṅgaḥ.

ASP 417, 16–418, 20.

ここで否定的にみられている信ある者が作意する態度というのは、臨終見仏や般舟三昧で阿弥陀仏を作意する場合と合致する。般若教徒からすれば有相的な態度は執着があることになり、阿弥陀信仰との間で仏を作意する態度に違いが生じることになる。臨終見仏の場合は有相で一貫しているから問題とはならないが、般舟三昧の場合は有相と無相の態度

が両立する²⁷。すなわち、阿弥陀仏を対象とする場合には有相的、それ以外は無相的な態度で説いている。定説のように本經の基調が般若空思想にあり、その編纂動機が阿弥陀信仰との融合にあったとみるならば、なぜ最初から無相的な態度で一貫しなかったのか。このような思想的統一性の欠落には疑問が残る。この点は本經の思想的立場を考察する際に考慮すべき点となるだろう。

2.5 小結

本章ではまず般舟三昧を仏随念の発展形とみる先行研究の再検討を行った。これを支持するとみられていた仏随念の用例(3F)は、阿弥陀仏が般舟三昧に入った菩薩に対して往生の方法を説明したものであって般舟三昧の説明にはあたらない。一方その説明であることが明白な3Aの用例を筆頭に、般舟三昧としては決まって仏の作意が説かれるのであって、仏の随念は説かれていない。それゆえ系譜を辿る上では随念よりも作意の語に注目して再考する必要がある。再考の際に取り上げた臨終見仏は浄土經典における主要な見仏形態であり、般舟三昧と同じ現世での見仏であり、作意の点でも共通する。つまり臨終見仏と般舟三昧は同じ構造で説かれていることになるが、問題はこれら二つの先後関係である。先行研究では般舟三昧を臨終時にまで発展させたものが臨終見仏であるとみて般舟三昧の先行性を説いているが、これは訳経史的な観点に傾倒した見解であり論拠としては乏しい。二つの見仏形態に見る特質を虚心に比較すると、阿弥陀仏の来迎に依拠して現世での見仏を可能にした臨終見仏よりも、現世でいながらに見仏できる般舟三昧の方が発展しているとみるべきことを論じた。以上の再考の結果、般舟三昧は臨終見仏の発展形であるとみる。

²⁷ 対照的な例として本經(15M–15N)には次のような一節が見られる。

無相の入口(**animitta-praveśa*)に入らなければならない。バドラパーラよ、それはなぜか
 というと、実体の想(**saṃjñā*)を具えた者は仏を見ることがないからである。

*mtshan ma med pa'i 'jug pa la 'jug par bya'o// bzang skyong/ de ci'i phyir zhe na/ 'di ltar dngos po'i
 'du shes can gyis ni sangs rgyas mthong bar mi 'gyur ro//*

3 般舟三昧の役割

本章では般舟三昧が担っていた本来の役割を考察する。まずは問題提起のために禅観経典を参照し、特に今回は念仏観に見る規定を取り上げる。禅観経典は中国や中央アジアで成立した可能性が指摘されているが、念仏観に規定される視覚化の基本となる手順は伝統的な不浄観にも共通することが知られている。禅観経典を参照することによって提起される問題は、仏像という目で見える媒体を前提とする念仏観の規定から、仏像が未だ存在しない環境を想定した場合に、未だ見ぬ他方仏をどのように視覚化しようと試みたのかということである。本章ではこの点に焦点を当てながら般舟三昧の役割を明らかにする。

3.1 視覚化の手順

視覚化 (visualization) というのはどのような手順で行われるのだろうか。大乘経典から明確な規定を抜き出すことは容易ではない。しかし五世紀頃に訳出あるいは編纂された禅観経典¹にはその手順が規定されている。これらには五門禅（不浄観、慈心観、因縁観、数息観、

¹ 禅観経典とは禅経と観仏経典を合わせた総称である。この範囲に含まれる経典を示しておく。

禅 経: 『達摩多羅禅経』(佛陀跋陀羅訳)、『坐禅三昧経』(鳩摩羅什訳)、『禅法要解』(鳩摩羅什訳)、『思惟略要法』(不明*)、『五門禅経要法』(曇摩蜜多訳)、『禅秘要法経』(鳩摩羅什/曇摩蜜多訳**), 『治禅病秘要法』(沮渠京聲訳)、『梵文瑜伽書』(Yogalehrbuch***)。

観仏経典: 『観仏三昧海経』(仏陀跋陀羅訳)、『観弥勒菩薩上生兜率天経』(沮渠京聲訳)、『観普賢菩薩行法経』(曇摩蜜多訳)、『観虚空蔵菩薩経』(曇摩蜜多訳)、『観薬王薬上二菩薩経』(重良耶舎訳)、『観無量寿経』(重良耶舎訳)。

* cf. fn. 7. ** cf. 境野 (1935, 862–863) . *** cf. 井ノ口 (1966) , Yamabe (1999b) , 山部 (2011, 112–115) .

ここに挙げられた文献は、『梵文瑜伽書』を除いて、サンスクリット原典あるいはその存在を裏付ける資料が発見されていない。『観弥勒菩薩上生兜率天経』『観無量寿経』『観仏三昧海経』の三つには、それぞれチベット訳 (Derge No. 199, Lhasa No. 200) 、ウイグル語訳 (橘 1912, 22–41. see also 羽田 1958, 546–553) 、ソグド語訳 (Reichelt 1928. see also Weller 1936–1937, 1938) が発見されているが、いずれも漢語からの訳出とされている。禅観経典は漢語資料が原典的存在となるものが大半であり、所説の念仏観などが中国や中央アジア成立とみなされる大きな要因となっている。cf. 藤田 (1970, 121–136) , 末木 (1986, 165–179) , 春日井 (1953) , Fujita (1990) , 月輪 (1971, 43–58) , 藤田 (1985) .

念仏観」という実践体系を組むものがあるが、今回はそのうちの念仏観を取り上げる。『坐禅三昧経』（T 15, 276a08–a13）は念仏観を次のように規定する。

念仏三昧²〔の行者〕には三種類ある。初めて実践を行う人、既に実践を行っている者、長い間実践を行っている人〔の三種〕である。初めて実践を行う人の場合、〔その行者を〕連れて仏像のある場所へ行く、あるいは〔その場所を〕教えて〔行者〕自ら行かせる。〔その場所で〕仏像の相好を諦観して、それぞれの特徴を完全に把握し、ひとえに〔記憶に〕保つ。〔その場所から〕戻って静かな場所に行き、心の眼で仏像を観る。心を落ち着けて、思考を像に向けて他の思考を起こさせない。他の思考は抑制して常に像にとどめさせる。

念佛三昧有三種人。或初習行。或已習行。或久習行。若初習行人、將至佛像所。或教令自往。諦觀佛像相好相相明了。一心取持。還至靜處。心眼觀佛像。令意不轉繫念在像。不令他念。他念攝之令常在像。

ここでは第一種（初習行）に対する内容となっているが、残りの二種（已習行、久習行）に関しても基本的に同じ手順で実践するものと考えられる。この規定から手順となるものを抜き出すと、まず仏像が安置されている場所へやっていき（至佛像所）、その相好を観察して、特徴を完全に把握できるまでになる（諦觀佛像相好相相明了）。その後、その場所から静かな場所に戻ってきて（還至靜處）、仏像を心の眼で観る（心眼觀佛像）というものである。

『坐禅三昧経』について僧叡の伝えるところによれば、インド諸師の禅要から抄出して編纂されたものと言われている。すなわち『出三蔵記集』「関中出禅経序」（T 55, 65a22–b02）には、

究摩羅（*Kumārajīva*）法師、辛丑の年（401 年）の十二月二十日に姑臧から長安に到着。私（僧叡）は、その月の二十六日から付き随って禅法を受けた。……その中の五門は婆須蜜（**Vasumitra*）、

² ここで言う念仏三昧というのは五門禅のうちの念仏観として規定されたものを指す。念仏三昧の原語に関して、櫻部（1983, 19）が *buddhānusmṛti-samādhi* なる単語がサンスクリット語の資料に見当たらないことを報告していたが、その後 Yamabe（1999a, 157–158）によって《十万頌》の一節に見出されている。念仏三昧も般舟三昧も三昧の中で見仏を行う点では同じであるが、前者は主に除罪法として説かれ、説一切有部や瑜伽行派といった部派の教理が介在している事が指摘されており、両者を直線的に結びつけることはできない。両者が教義上においても、発生上においても異なる概念とみるか（cf. 明神 1993）、展開した結果とみるか（cf. 末木 1992, 116–147）については意見が分かれる。

僧伽羅叉 (**Samgharakṣa*)、漚波崛 (**Upagupta*)、僧伽斯那 (**Samghasena*)、勒比丘³、馬鳴 (**Aśvaghoṣa*)、究摩羅羅陀⁴ (**Kumāralāta*) の禪要の中から抄出したものである⁵。

究摩羅法師。以辛丑之年十二月二十日。自姑臧至常(←長)安。予即以其月二十六日。從受禪法。... 其中五門。是婆須蜜。僧伽羅叉。漚波崛。僧伽斯那。勒比丘。馬鳴。羅陀禪要之中抄集之所出也。

と記されている。しかしこの序文からでは念仏観がどの禪要から抜き出されたのかまでを知ることはできない。また僧叡が羅什から禪法を受けたと言っていることから、必ずしも原典を訳したのではなく、羅什が記憶のままに口誦したのではないかとみられている⁶。羅什の記憶にインド由来の情報が含まれていたことは疑いないだろうが、『坐禪三昧経』の説く五門すべてがインド原典に基づくとは難しい。しかし念仏観に関して言うと、羅什が独自に編み出したものではない。というのも、他の禪観經典からも同じ手順が抜き出せるだけでなく、基本的な部分は伝統的な不浄観とも何ら変わることがないからである。

3.1.1 念仏観

『坐禪三昧経』に見た念仏観と同じ手順を説く禪観經典は既に藤堂(1960)と Yamabe(1999a)によって指摘されており、それらを確認する。まずは『思惟略要法』(T 15, 299a09–a13)を見る。

美しい〔仏〕像を本物の仏のように観察する。まず肉髻、眉間、白毫から下は足に至るまで〔を観察し〕、再び足から肉髻に至るまで〔を観察する〕。このような諸々の特徴をはっきりと把握してから静かな場所に戻る。〔そして〕目を閉じて思惟し、心を〔仏〕像にとどめ、他の思考を起こさせない。もし他の対象を念じることがあれば、それをおさめて〔元〕に還させる。心の目で観察して思うままに〔仏像を〕見るようになれば、それを観像定を得たという。

³ 勒比丘に関して Yamabe (1999a, 79. fn. 62) は *Pārśva* の可能性を指摘する。

⁴ 原文には「羅陀」とのみ記されているが、その直前に「究摩羅羅陀」(T 55, 65a27–a28)とある。

⁵ この序文に登場する諸師のうち、僧伽羅叉に関しては『修行道地経』『分別相品』に示される十九輩の始めの三輩との対応が指摘されており (cf. 『国訳一切経』経集部四 271 頁)、馬鳴に関しては松濤 (1981, 158–181) によって *Saundarananda* との対応箇所が指摘されている。

⁶ cf. 『新国訳大蔵経』禪経經典部 2 (23–25 頁)、山部 (2011, 104–107)。

當觀好像便如眞佛。先從肉髻眉間白毫下至於足。從足復至肉髻。如是相相諦取還於靜處。閉目思惟繫心在像。不令他念。若念餘緣攝之令還。心目觀察如意得見。是爲得觀像定。

『思惟略要法』は羅什の撰という伝承があるが、これは『三宝記』を起点とする情報であって『出三蔵記集』には記載されておらず、その信憑性は低いとされている⁷。そして問題の規定であるが、『坐禪三昧經』に見たのと同じ様な手順で説かれているのが確認できる。Yamabe (1999a, 11–14) はこれと同じ手順が『五門禪經要法』(T 15, 325c18–c24) や『觀仏三昧海經』(T 15, 689a23–b03) でも説かれることを指摘する。以下で順次に参照する。

まだ念仏三昧を〔会得〕していない者には一心に觀仏をさせる。觀仏する際に、ひとえに仏の相好を觀察して、〔像を〕はっきりと〔把握し〕終ったならば、それから目を閉じて記憶したものを心の中に留め置く。もしはっきりと〔把握〕できていないならば、戻って目を開いて〔像を〕視て、極めて心の中に〔像を〕はっきりとさせる。それから〔自分の座に〕戻って座り、身体を正し心を正して、面前の注意力を近くにとどめおく（繫念在前⁸）。〔すると〕本物の仏に相對しているかのように明瞭で何の相違もない〔像と相對する〕。

未念佛三昧者。教令一心觀佛。若觀佛時當至心觀佛相好。了了分明諦了已。然後閉目憶念在心。若不明白者。還開目視極心明了。然後還坐正身正意繫念在前。如對眞佛明了無異。

金幢と呼ばれるある王子がいた。〔かれは〕驕り高ぶり、〔自身のもつ〕見解も誤っていて、正法を信じていなかった。友人に定自在という名の比丘がいた。〔比丘は〕王子に〔次のように〕告げていった。「世の中には多くの宝石で見事に飾りつけられた、たいへんすばらしい仏像がある。ちょっと塔に入って仏の姿形というのを觀察してきてはどうか」と。すると、その王子は善き友人の言葉にしたがい、塔に入って〔仏〕像を觀察した。〔仏〕像の相好を見てから比丘に〔次のように〕言う。「仏像ですらこのように莊嚴なのだから、仏の本物の身体は言うまでもないだろう」と。〔王子が〕このように言い終わると、比丘は〔王子に、次のように〕告げていった。「あなたは今像を見ましたが、もし礼拝することができなかつたのであれば、『南無仏』と称えてください」。すると王子は合掌をもって恭敬し、『南無仏』と称えた。〔王

⁷ したがって『思惟略要法』が誰の撰かは不明ということになるが、その内容には『五門禪經要法』(曇摩蜜多訳)と一致する部分が広範囲に渡って確認されており、『五門禪經要法』からの抄出である可能性が指摘されている (cf. 藤堂 1960, 399, 同 1960b, 478–480, 月輪 1971, 55–56. see also 池田 (1937, 103–106), 安藤 (1962, 204), 境野 (1935, 460–463), Yamabe (1999a, 98–100)。尚、本文で引用した箇所は『五門禪經要法』(T 15, 327a13–a17) に対応が見られる。

⁸ この表現はサンスクリット語の定型句 *pratimukhīm smṛtim upa-Sthā* に対応するとみられており (cf. Yamabe 1999a, 129. fn. 12, 155. fn. 64)、訳出はこの定型句に合わせて行った。

子は〕宮殿に戻ってから集中して塔の中の像を思い返す。すると後夜になって、夢で仏の姿を見た。仏の姿を見たので〔王子は〕おおいに喜んだ。

有一王子名曰金幢。憍慢邪見不信正法。知識比丘名定自在。告王子言。世有佛像衆寶嚴飾極爲可愛。可暫入塔觀佛形像。時彼王子。隨善友語入塔觀像。見像相好白言比丘。佛像端嚴猶尚如此。況佛眞身。作是語已比丘告言。汝今見像若不能禮者。當稱南無佛。是時王子合掌恭敬稱南無佛。還宮係念念塔中像。即於後夜夢見佛像。見佛像故心大歡喜。

先の『思惟略要法』に関しては誰の撰か不明であったが、『五門禪經要法』と『観仏三昧海經』はそれぞれ曇摩蜜多と仏陀跋陀羅の撰となっている。『五門禪經要法』に見る手順が先の二禪經と同じであることは言うまでもないだろう。また『観仏三昧海經』は淡々と規定を説く禪經とは異なり、物語形式で話が進められるが、金幢王子が夢で仏の姿を見るに至るまでの手順は禪經が説くものと何ら変わるところがない。

次項に進む前にここまで参照した念仏観の手順をまとめておく。確認した諸禪經の規定を踏まえると大前提として仏像が必要になる。まず行者は仏像が安置されている場所に赴かなければならない。そして像から直接仏の特徴を把握する。その際、像を見ない状態でも思い描けるようにしっかりと記憶することが求められる。続いて場所を変えて心の眼で見ることなどが言われる。文献によって表現は異なるものの、先の手順で記憶した像を想起することが言われている。このように念仏観というのは対象を記憶してそれを想起するという手順になっており、この手順は次に参照する不浄観にも共通する。

3.1.2 不浄観

禪観經典の中国あるいは中央アジア成立が疑われる中、Yamabe (1999a, 5-17) は禪經に見るインド的背景の有無に検討を加えている。そしてその成果として報告されたのが不浄観との共通点である。不浄観は『清浄道論』や《声聞地》では次のように規定される。

その瑜伽者 (yogin) は、その死体について、既に述べた通りの特徴を取る〔方法〕によって〔死体の〕特徴をよく把握しなければならない。注意力を確かなものにして〔対象を〕取り込まなければならない。同じ様に繰り返しながら、よく心にとどめ、明確にしなければならない。死体から遠すぎず、近すぎない場所に立つあるいは坐って、目を開いて観察し特徴を把握しなければならない。膨張した不愉快な〔死体〕、膨張した不愉快な〔死体〕、と百回千回と〔目を〕開いて観察し、〔目を〕閉じて〔対象を〕取り込まなければならない。このように繰り返していると、取る〔べき〕特徴は十分に把握されたものとなる。十分に把握されたものとなるのは

どのような時かという、〔目を〕開いて観察している時も、〔目を〕閉じて〔対象を〕取り込んでいる時も同じようになって見えてくるその時、十分に把握されたと言うのである。

tena yoginā tasmim sarīre yathāvuttanimittaggāhasena suṭṭhu nimittam gaṇhitabbaṃ, satim supaṭṭhitam katvā āvajjitabbaṃ, evaṃ punappunam karontena sādhuḥkaṃ upadhāretabbañ ceva vavatthapetabbañ ca. sarīrato nātidūre nāccāsanne padese ʔhitena vā nisinnena vā cakkhum ummīletvā oloketvā nimittam gaṇhitabbaṃ uddhumātakapaṭikkūlam uddhumātakapaṭikkūlan ti satakkhattum sahasakkhattum pi ummīletvā oloketabbaṃ, nimmīletvā āvajjitabbaṃ. evaṃ punappunam karontassa uggahanimittam suggahitaṃ hoti. kadā suggahitaṃ hoti. yadā ummīletvā oloketassa nimmīletvā āvajjentassa ca ekasadisam hutvā āpātham āgacchati, tadā suggahitaṃ nāma hoti.

Vism 185, 30–186, 7.⁹

墓場などに赴き、青黒い〔死体〕から特徴を把握せよ。乃至、骨あるいは骸骨の〔特徴を把握せよ〕。もし墓地〔の死体〕からでなくとも、絵に描かれた〔死体〕、木や石や泥で造られた〔死体から〕特徴を把握しなければならない。〔特徴を〕把握したら住处に戻れ。〔住处に〕戻って阿蘭若に行き、あるいは樹の根元に行き、あるいは空き屋に行つて、寝台、あるいは腰掛け、あるいは草座に坐れ。両足を洗つて、両足を組んで（結跏趺坐）身体をまっすぐ伸ばし、面前の注意力を近くにとどめおいて坐り、まず最初に〔心〕一境性、心の不散乱に注意力を結びつけよ。

śmaśānādy upasaṃkramaṃ vinīlakād vā nimittam udgrhāṇa, yāvad asthīnāṃ vā asthiśaṃkalikānāṃ vā, no cec chmaśānād api tu citrakṛtād vā kāṣṭhāśmaśādakṛtād vā nimittam udgrhāṇa, udgrhya śayanāsanam upasaṃkrama, upasaṃkramyāraṇyagato vā vṛkṣamūlagato vā śūnyāgāragato vā, mañce vā pīṭhe vā tṛṇasaṃstarake vā nisīda, paryaṇkam ābhujya pādaṃ prakṣālyā rjuṃ kāyaṃ praṇidhāya pratimukhāṃ smṛtim upasthāpya niśadya, tatprathamata ekāgratāyāṃ cittāvikṣepe smṛtyupanībandham kuru.

ŚrBh III 126, 11–128, 2.

『清浄道論』や《声聞地》に見る不浄観の規定では、まず死体を目前にして「特徴を把握」（*nimittam gaṇhitabbaṃ/udgrhāṇa*）することが言われる。『清浄道論』にある「〔目を〕閉じて」（*nimmīletvā*）云々という句は、『五門禅経要法』に「閉目（憶念）」とあったように禅経にも見出すことができる。そして特徴が「十分に把握された」（*suggahita*）というのは開目と閉目を何度も繰り返すことにより、死体の特徴を完全に記憶してしまうことを言うのであって、手順としては仏像の特徴を記憶する段階と同じである。

⁹ cf. Vism(W), 151, 31–152, 4.

さらに《声聞地》では、特徴を把握し終えた後、場所を変えて想起することが求められている。規定には「身体をまっすぐ伸ばし、面前の注意力を近くにとどめおく」*rjuṃ kāyaṃ praṇidhāya pratimukhāṃ smṛtim upasthāpya* 云々とあるが、これに相当する句は同じく『五門禪經要法』に「正身正意繫念在前」とあるようにやはり禪經にも見出すことができる。念仏觀の規定に従えばこの句の後に本物と遜色ない仏像が想起されることになっていたが、不淨觀でもあらかじめ記憶した死体の特徴に基づいて、それと同じものを想起することが言われるのであって、念仏觀も不淨觀も基本的には同じ手順で説かれている。

3.2 仏像がない環境の想定

念仏觀に規定される仏を視覚化する手順というのは仏像を直接に見て記憶し、それと同じものを想起するというものであった。そしてこの手順は対象が死体になるという点を除いて不淨觀でも同じであった。しかしながら手順が同じなのは仏や死体の觀想だけにとどまらない。人や物を思い浮かべるような一般的なレベルの話でも同じである。しかし会ったことがない、見たことがない人や物を思い浮かべることができないように、必ず一度は目にして記憶しておく必要がある。觀想を行う前に仏像や死体の前に赴くよう規定されるのはそのためであり、この段階はそれぞれの対象を想起するための加行のようになっているのである。

以上のような手順の確認に紙面を費やしたのは、般舟三昧が提唱された当初の環境を想定した場合、この手順を踏む上で生じてくる問題点を明確にするためである。禪觀經典が前提とする仏像が存在していたならば、それを直接見るだけでよい。しかし次項より確認するように、般舟三昧の成立当時に仏像は存在していなかったとみられる。

3.2.1 外的証拠

当時仏像が存在していないとみることにについて、まずは仏像の成立年代について触れておく。仏像の起源に関して提出されている見解は一致を見ない。先行研究では成立地の問題や像の様式の比較など複雑な考察がなされ、提示される見解も多岐にわたっているが、当面の問題となる年代に関して提示されているのは、紀元前一世紀から紀元二世紀までの

間である¹⁰。そして注意しなければならないのは、この年代が他方仏の像に関するものではないということである。したがって般舟三昧が対象とする他方仏の像となると、この年代をそのまま当てはめて考えることはできない。

他方仏の像が発掘されるのは釈迦牟尼仏などに比べればずいぶんと稀である。現在発見されている最古の像としては 1977 年にマトゥラーで発見された阿弥陀仏立像の台座がある¹¹。肝心の像の部分はほとんど現存しておらず、台座に残された両足だけとなっているが、その台座にある銘文には、

- 1 大王フヴェーシュカの第二十六年、第二月、第二十六日
 - 2 この時機に、隊商主サ〔?〕チャカの〔父〕であり、商主バラカッタの孫であり、
 - 3 ブッダ〔ピラ〕の子であるナーガラクシタによって、世尊アミターバ仏の像が造立された。
 - 4 一切諸仏の供養のために。この善根によって、一切衆生が無上の仏智を獲得するように。
- 1 *mah(ā)rajasya huveṣkas[y]a (saṃ)20 6 va 2 di 20 6*
- 2 *(etaye pu[r]vaye) sax-cakasya satthavahasya p[i]t[-x](n)[-x] balakattasya śreṣṭhasya nāttikena*
- 3 *buddha(pi)la(na) putra(n)a nāgarakṣitena bhagavato buddhasya amitābhasya pratimā
pratiṣṭh(a)pi[tā](...)*
- 4 *[sa](rva)buddhapujāye im(e)na k(u)śalam(ū)lena sar(va)(sat)[v]ā anut(t)ara(m) bud(dh)ajñānam
prā(ptnva)m(tu)(...)*

¹⁰ 仏像の起源に関しては研究の積み重ねにより様々な見解が提出されている。主な論点としては成立地をガンダーラとみるか、あるいはマトゥラーとみるかという点や、成立時期をクシャーナ朝以前とみるか、以後とみるかという点が挙げられる。この他にもギリシアの影響やローマの影響など様々な観点から論じられているが、詳細については宮治（2010, 30–53）にまとめられている。現在でもこの問題に決着はついておらず、仏像の制作はクシャーナ朝のカニシカ王の即位（127 年）までにガンダーラとマトゥラーにおいて始まったとみるのが穏当とされている（cf. 島田 2011, 136）。

¹¹ この他に阿弥陀仏の可能性のある像としては、Brough（1982）が指摘したガンダーラの三尊像がある。しかしこれに関しては Salomon（2002）による反論が提出されており、この像を阿弥陀仏とみるか否かについては意見が分かれる。Salomon（2002）以降の研究については宮治（2010, 156–157. 補注 1）を参照。尚、その像の年代は三世紀から四世紀と推定されている（cf. Salomon 2002, 4）。

と刻まれている¹²。この像の成立年代を知る上で重要な「フヴェーシュカの第二十六年」という年号が西暦何年に当たるのが争点となるが、見解は一致を見ておらず、今までに提示された年代の幅は 104 年から 171 年までである¹³。しかしどの見解によっても二世紀より遡るような年代は提示されていない。また上限となっている 104 年の根拠はカニシカ王紀元 78 年説に基づいて算出されたものであるが、近年では 127 年説が有力視されることに鑑みると¹⁴、104 年という上限は 153 年 (127+26) にまで下る可能性があることになる。支婁迦讖による本經の訳出が 179 年であるから、本經が翻訳された年代ともかなり近いことになるが、この年代も翻訳された時点を示すものであり、般舟三昧の成立時となるとさらに遡って考えなければならないのだから、当時における他方仏の像の存在を示す外的な証拠は今のところ存在しないとみてよい。

3.2.2 内的証拠

続いて本經の分析から検討する。まず第一に仏像への言及は行品には見られない。仏像は四事品 (Chapter 4) になって初めて登場する。

バドラパーラよ、さらに四つの法を具えと、菩薩摩訶薩はこの三昧を会得する。四つとは何かというと、すなわち、(1) この三昧への熱望を通じて、如来の像 (*tathāgata-pratimā) を造らせ、または絵像だけでも描かせること、(2) この三昧への熱望を通じて、この三昧が〔世に〕長くとどまるため、何としてもこの三昧が保たれる〔ために〕、よく書写して本として提供すること、(3) 増上慢な人々を増上慢を離れた法、すなわち無上正等覚に入らせること、(4) 如来の教説を保護し、保存し、維持するべく過ごすことである。バドラパーラよ、これら四つの法を具えと、菩薩摩訶薩はこの三昧を会得する。

¹² 引用の和訳は藤田 (2007, 276) からの借用である。またこれは Schopen (1987, 101) の読みに基づいている。この銘文の翻刻は多くの研究者が手掛けており、他の研究者のテキストと読みの違いに関しては杉本 (1999, 83–86) を参照。

¹³ 104 年説: Schopen (1987, 99) .
156 年説: 中村 (1980, 493–495) .
171 年説: 肥塚 (1985, 272–273) .
cf. 杉本 (1999, 85) , 藤田 (2007, 276–277) .

¹⁴ 127 年説は Falk (2001, 2004) による。カニシカ紀元に関しては諸説あるが、近年ではこの 127 年説が有力視されている (cf. 宮治 2010, 53. 補注 2)。これ以前の諸説については山崎 (1998) 、Charoensriset (2007) にまとめられている。

bzang skyong/ gzhan yang chos bzhi dang ldan na/ byang chub sems dpa' sems dpa' chen po ting nge 'dzin 'di 'thob bo// bzhi gang zhe na/ 'di lta ste/ ting nge 'dzin 'di 'dod pas de bzhin gshegs pa'i sku gzugs byed du gzhug ste/ tha na ri mor yang 'brir 'jug pa dang/ ting nge 'dzin 'di 'dod pas ting nge 'dzin 'di yun ring du gnas par bya ba'i phyir ci nas kyang ting nge 'dzin 'di 'dzin par legs par bris shing glegs bam sbyin pa dang/ mngon pa'i nga rgyal can gyi gang zag rnams mngon pa'i nga rgyal med pa'i chos 'di lta ste bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub la 'jog pa dang/ de bzhin gshegs pa'i bstan pa bsrung ba dang/ sba ba dang/ yang dag par gzung ba'i phyir gnas pa ste/ bzang skyong/ chos bzhi po de dag dang ldan na/ byang chub sems dpa' sems dpa' chen po ting nge 'dzin 'di 'thob bo//

PSS 4D.

仏像への言及といっても、禪観經典に見たような明確な規定の中で登場するわけではない。上記引用は般舟三昧の会得について述べたものとなっているが、例えば《迦葉品》(KP 2,2 etc.)に見るような「カーシャパよ、菩薩にこれら四つの法があると...」*catvāra ime kāśyapa dharmā bodhisatvasya...*と同じ形式で説かれ、実質的な実践の内容を示すというよりもむしろ般舟三昧の会得を引き合いに作仏などの行為を奨励しているような印象を受ける。尚、ここには經典の書写も記されているが、これに関しても仏像と同様に四事品が初出となっており行品には見られない。

さらに般舟三昧の説明においても仏像は前提とされていなかった。その記述に見た「聞いた通り」(**yathāśruta*)という表現に再び注目する。

その者は聞いた通りのあり様に従って、この仏国土より西の方角に百千コーティの仏国土を過ぎた〔ところにある〕スカーヴァティー世界に、かの世尊、如来、阿羅漢にして正等覚者なる阿弥陀仏が、今現在、菩薩衆に囲まれ、付き随われて、とどまっておられる。〔身を〕保っておられる。時を過ごしておられる。教えを説いておられると作意する。

des ji skad du thos pa'i rnam pas sangs rgyas kyi zhing 'di nas nub phyogs logs su sangs rgyas kyi zhing bye ba phrag 'bum 'das pa na 'jig rten gyi khams bde ba can na bcom ldan 'das de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas tshe dpag med de da ltar byang chub sems dpa'i tshogs kyi yongs su bskor cing mdun du bdar te bzhugs so// 'tsho'o// gzhes so// chos kyang ston to/ snyam du yid la byed de/

PSS 3A.

バドラパーラよ、菩薩は在家者であっても、あるいは出家者であっても、ひとり閑かな場所に行き、座ってから、如来、阿羅漢にして正等覚者なる阿弥陀仏を聞いた通りのあり様に従って作意する。

*bzang skyong/ byang chub sems dpa' khyim pa 'am rab tu byung ba yang rung gcig pu dben par song ste
'dug la/ de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas tshe dpag med ji skad du
thos pa'i rnam pas yid la byas te/*

PSS 3B.

このように般舟三昧の説明では「聞いた通り」に作意することが求められる。この表現は既に取り上げたように¹⁵、当時の環境を想定する上で重要である。もし般舟三昧の成立時に仏像のように直接に見て記憶できる媒体が存在していたならば、ここで「見たとおり」(*yathādr̥ṣṭa*) とすべきであって、わざわざ「聞いた通り」としているのはおかしい。この表現は目で見える媒体が存在せず、他方仏のあり様を耳で聞いていた環境を示唆している。

以上のように般舟三昧が成立した当時の環境となると、仏像の存在を前提に考えることはできない。般舟三昧の本来的な役割を考察する上では、当時の行者が、仏像が存在しない環境で、いかにして未だ見ぬ他方仏を想起しようと試みたのかを問うことが重要になる。

3.3 般舟三昧から仏随念へ

第二章における再検討の際に指摘したように、般舟三昧と仏随念は別な概念として考えなければならない¹⁶。というのも、般舟三昧の役割は仏随念の実践に至る過程にあるからである。そしてその役割を知る上で手掛かりとなる記述が譬えの中にある。般舟三昧に関する譬えは行品に七箇所も存在する。すなわち、夢中見仏の譬え (3B)、無碍の譬え (3C)、娼婦の譬え (3D)、空沢の譬え (3H)、夢中帰郷の譬え (3I)、不浄観の譬え (3J)、影像の譬え (3K-3L) の七つである¹⁷。そしてこれらのうちの娼婦の譬えにだけ、本経が想定していた視覚化の手順が示唆されている。以下にその譬えを引用するが、特に男たちが娼婦を一度も見ないままに想起できるようになっている点に注目する。

バドラパーラよ、例えばある男がラージャグリハの大都市に住んでいるとしよう。そしてヴァイシャーリーの町に、スマナー (**Sumanā*) と呼ばれるある娼婦がいると聞いた。二人目の男はアームラパーリー (**Āmrāpālī*) と呼ばれるある娼婦がいると聞いた。三人目の男はウトパラヴァルナー (**Utpalavarṇā*) と呼ばれるかつて娼婦〔だった女〕がいると聞いた。かれらは彼女たちのことを聞いて、それぞれがそれぞれ〔の女〕を恋慕したのだが、その男たちはその娼婦

¹⁵ cf. pp. 28–30.

¹⁶ cf. pp. 32–33.

¹⁷ それぞれの譬えの名称は梶山 (1992, 302–308) より借用した。see also 赤松 (2011, 209–217) .

たちを見たことがなく、ただ名前と容姿と肌の色を聞いただけで愛欲の心を生じたのである。かれらが何度もその〔娼婦を〕作意しているあいだに眠りに落ちると、夢のなかで「我々はその娼婦たちのところに来ているのだ」と知る。その男たちはラージャグリハの大都市にいて、以前眠りに落ちていなかった時、それぞれ愛欲を伴った心を生じていたが、同じようにその男たちは眠ってからも夢のなかで〔愛欲を伴った心を生じ〕、その娼婦たちを見て、それぞれの相手と一緒になって色欲（*maithuna-dharma）にふけてから、性交に対するその欲望から解放されたのを夢にみたのである。……かれらは目覚めてから、見、聞き、知り、理解したとおりに、夢での経験を想起する（*anu-Smr）。

zang skyong/ 'di lta ste dper na skyes bu zhig rgyal po'i khab kyi gron khyer chen po na 'dug pa las yangs pa can gyi grong khyer na smad 'tshong ma yid bzang zhes bya ba zhig yod par thos so// skyes bu gnyis pas ni smad 'tshong ma a mra skyong zhes bya ba zhig yod par thos so// skyes bu gsum pas ni sngon gyi smad 'tshong ma u tpa la'i mdog ces bya ba yod par thos so// de rnams kyis de dag thos nas so sor so so la sems chags par gyur mod kyi/ skyes bu de rnams kyis smad 'tshong ma de rnams mthong ba ni ma yin te/ ming dang gzugs dang kha dog tsam zhig thos pas 'dod chags kyi sems skyed par gyur to// de dag phyi phyir zhing de yid la byed bzhin du nyal ba dang/ rmi lam du yang smad 'tshong ma de dag gi drung du bdag cag dong ba snyam du shes te/ ji ltar skyes bu de dag rgyal po'i khab kyi grong khyer chen po na 'khod cing sngon ma nyal bar de lta de ltar 'dod chags dang ldan pa'i sems bskyed pa de bzhin du skyes bu de dag nyal nas kyang rmi lam na smad 'tshong ma de dag mthong zhing phan tshun sprad de/ 'khrig pa'i chos la bsten nas/ 'khrig pa la dad pa de dang yang bral bar gyur pa yang rims so// [...] de dag sad nas ji ltar mthong ba dang/ thos pa dang/ shes pa dang/ rtogs pa'i rmi lam na myong ba rjes su dran nas/

PSS 3D.

譬えに登場するラージャグリハに住む男たちと、ヴァイシャーリーにいる娼婦たちは、それぞれこの世界に住む衆生と、別の世界にいる他方仏を表しており、仏に見えんとする衆生の渴望が世俗の異性間の感情に譬えられていると理解する¹⁸。この譬えにおいて男た

¹⁸ 娼婦の譬えは空を説くものと理解される場合があり、特に『大智度論』（T 25, 110b09–b19）がそのような観点で引用している。

如佛在時三人爲伯仲。聞毘耶離國姪女人名菴羅婆利。舍婆提有姪女人名須曼那。王舍城姪女人名優鉢羅槃那。有三人各各聞人讚三女人端正無比。晝夜專念心著不捨。便於夢中夢與從事。覺已心念。彼女不來我亦不往而姪事得辦。因是而悟一切諸法皆是耶。於是往到毘陀婆羅菩薩。所問是事。毘陀婆羅答言。諸法實爾。皆從念生。如是種種。爲此三人方便巧說諸法空。

ちは実際の場所に訪れることなく、ましてや一度も娼婦に会うことなく想起するまでに至っている。その過程に注目してみると、

- (1) 娼婦の名前や容姿を聞く
- ↓
- (2) 娼婦を何度も作意する (**manasi-Kṛ*)
- ↓
- (3) 夢の中で娼婦と会う
- ↓
- (4) 夢から覚めて想起する (**anu-Smṛ*)

となっている。この過程のうち、名前や容姿を聞いて作意するまでが般舟三昧の実践、夢の中が般舟三昧の中、夢から覚めて想起する段階が仏随念として、般舟三昧から仏随念へと至る過程に置き換えて考えてみる。

(1) から (2) の過程は般舟三昧の実践と一致し、譬えの男たちもやはり聞いた情報に基づいて娼婦を作意している。そしてこの男たちの行為から、今まで「作意」と訳してきた *manasi-Kṛ* の意味にも見当がつく。つまり譬えの男たちは、娼婦の容姿などに関して、聞いた情報に基づいてその像を心の中に作っている (*manasi-Kṛ*) ののである¹⁹。譬えの場合は単なる妄想に過ぎないが、般舟三昧の場合は完全な仏の像を心の中に作ることを意味する

しかし下線で示した部分は本経には見当たらず、別の譬えから先取りしたとみられている (cf. 梶山 1992, 304–306)。つまり男たちが夢から覚めて以降は空沢の譬え (3H) と影像の譬え (3K–3L) を編纂して合併したようになっており、最終的にバドラパーラが男たちに諸法の空たることを説くという内容も本経には説かれていない。

¹⁹ 語義解釈としては *manasi-Kṛ* の *manasi* を場所を示す於格とみる。この解釈の可能性を支持する用例として、チャンドラキールティ (*Candrakīrti*) の《中観五蘊論》を挙げることができる。作意の項目 (D 246a4–7, P 281b6–282a3, cf. BK-IV 103–104) を参照すると「意を作るから作意であり、ある対象に心を留めさせるという意味である。あるいは対象を意の中に作るから作意であり...」 *yid la byed pas na yid la byed pa ste/ yul 'ga' zhig la sems gnas par byed pa zhes bya ba'i don nam/ yul yid la byed pa na yid la byed pa ste/* とある。まず最初に「意を作るから...」と解釈しているのは、例えば *kumbhakāra* (壺を作る人) と同様に、複合語の前文を目的語として解釈したものである。その次に「対象を意の中に...」と解釈しているのは、複合語の前文を対象を作る場所として解釈したものと考えられる。*manasi-Kṛ* は多義的な語であって、一般的な訳語では訳せない場合がある (cf. Deleanu 2006, 468–470. fn. 6)。この語は一般に注意作用や思惟作用を意味することが知られているが、この他に対象を具象化する作用を意味する場合があるのではないかと推測する。

ことになる。その像が行者のなかで確立した瞬間が(3)であり、般舟三昧の中での仏との対面となる。この時点で行者は自らの心に作り上げた仏の像を見て記憶しているのだから、続く(4)が夢から覚めて想起する(*anu-Smr*)となっているように、般舟三昧から出て定中で見たのと同じ仏を想起する、すなわち仏随念(*buddhānusmṛti*)が可能になるのである²⁰。

このように未だ見ぬ他方仏であっても、聞いた情報に基づいて像を心の中に作ることによって般舟三昧の中で対面する。そしてその記憶に基づいて、他方仏を対象とした仏随念が可能となるのである。般舟三昧も仏随念も互いに見仏と関わるため、像を心の中に作るという行為そのものに違いが生じるわけではない。それゆえ一見すると、般舟三昧と仏随念は同一概念かのように思われる。しかし見たことのあるものに関してしか想起するとは言わないように、般舟三昧として最初に仏が具象化されて以降、その記憶に基づいた時点から仏随念と呼べるのであって、両者は先立つ記憶の有無によって厳密に区別されなければならない。

以上の考察で般舟三昧の役割が明らかになりつつある。つまり当時の般舟三昧は口伝などの伝承による仏の具象化を担っており、他方仏を随念する加行となっていたのである。当時に他方仏の像が存在したならば、念仏観の規定にあるように、それを見に行けばよいのであり、聞いた情報に基づいて仏を具象化する必要性などは生じなかつただろう。実践する環境の展開からすれば、心の中で一から像を作り上げる必要がある時代から、一般化された像を見るだけで済む時代へと移行していったとみることができる。

²⁰ 本経における仏随念(*buddhānusmṛti*)が仏を想起するという意味であることは、譬えによっても裏付けられる。*anu-Smr*の語は娼婦の譬え(3D)の他に夢中見仏の譬え(3B)と夢中帰郷の譬え(3I)に見られるが、決まって想起を意味する文脈で用いられている。

バドラパーラよ、例えば、男女誰であれ、眠っている者が夢のなかで物(**rūpa*)のあり様を見る。.....その者は夢での様子(**nimitta*)を想起する(**anu-Smr*)ことで涙を流すように、

bzang skyong/ di lta ste dper na skyes pa 'am bud med gang la la zhig nyal ba'i rmi lam du gzugs kyi rnam pa mthong ste/ [...] de rmi lam gyi mtshan ma rjes su dran pas mchi ma klog par byed pa de bzhin du/

バドラパーラよ、例えばある男が、生まれ故郷からどこか他方にある地域へ向かい、到着すると、その生まれ故郷を想起して(**anu-Smr*)、見たとおり...

bzang skyong/ 'di lta ste dper na skyes bu la la zhig rangs skyes pa'i yul nas ljongs kyi phyogs gzhan zhig tu song ste phyng pa dang/ rang skyes pa'i yul de rjes su dran nas/ ji ltar mthong ba dang/

3.4 修道論上の位置づけ

前節で般舟三昧が他方仏を随念する加行となっている旨を述べたが、そもそもなぜ他方仏を随念する必要性があったのかについて言及する。それは阿弥陀仏の随念が往生の本行とされていたからである。前節で参照した娼婦の譬え（3D）に引き続き、話は次のように展開する（3E-3F）。

その〔菩薩は〕何度も心の中に作る（*manasi-Kṛ*）ことによってかの〔阿弥陀〕如来を見る。この般舟〔三昧と呼ばれる〕菩薩の三昧にとどまって、その〔菩薩は〕かの〔阿弥陀〕如来を見てから「世尊よ、いかなる徳目（**dharma*）を具えれば、菩薩摩訶薩はこの世界に生まれることができるのでしょうか」と質問する。このようにしてどのような仏国土であれ、〔そこに〕生まれたいと思う者は、その時、如来に〔このように〕質問する。

このように質問されて、かの世尊、如来なる阿弥陀〔仏〕はその菩薩に次のように言った。「善男子よ、仏随念（**buddhānusmṛti*）を実践し（**āsevita*）、実習し（**niṣevita*）、修習（**bhāvanā*）し、多く行う（**bahulikāra*）と、この〔スカーヴァティー〕世界に生まれることができる」

de phyi phyir zhing yid la byed pas de bzhin gshegs pa de mthong ngo// da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa'i byang chub sems dpa'i ting nge 'dzin de la gnas te/ des de bzhin gshegs pa de mthong nas/ bcom ldan 'das/ chos gang dang ldan na/ byang chub sems dpa' sems dpa' chen po 'jig rten gyi kham 'dir skye bar 'gyur/ zhes zhu ba zhu'o// de bzhin du sangs rgyas kyi zhing gang dang gang du skye bar 'dod pa de'i tshe de bzhin gshegs pa la zhu'o// de skad zhus nas bcom ldan 'das de bzhin gshegs pa tshe dpag med des byang chub sems dpa' de la 'di skad ces bka' stsal to// rigs kyi bu/ sangs rgyas rjes su dran pa kun tu bsten/ nges par bsten cing bsgoms la mang du byas na/ 'jig rten gyi kham 'dir skye bar byed do//

PSS 3E-3F.

上記引用では菩薩が般舟三昧の中で阿弥陀仏国に生まれる方法を質問している。そして阿弥陀仏がその答えとして仏随念の必要性を説く。既に述べたように、過去の研究では本経における阿弥陀仏が諸仏の一例に過ぎないと消極的にみられていたため、この菩薩との対話に示唆される修道論についても注目されることはなかった。しかし今や原初形態にしか登場しない阿弥陀仏と、この仏が示す修道論の価値が見直されなければならない。

質問の内容に再び注目すると、この菩薩は仏と対面して誓願を立てているわけでもなく、授記を請うているわけでもない。かれは仏を面前にして迷うことなく阿弥陀仏国へ生まれる方法を質問している。この菩薩が無上正等覚に至る道程を考えた場合、その到達に阿弥陀仏国に生まれるという方法を取ろうとしていることになる。その道程を先に考察した仏

随念までの過程と合わせると、「般舟三昧（加行）→仏随念（本行）→往生→無上正等覺」という次第になる。これはつまり無上正等覺から遡って、往生、仏随念、そして仏随念から般舟三昧が要請された結果である。般舟三昧という修行徳目がいかなる修道論上の要請に応えるものだったかを問いかけた時、本經の分析から提示できる可能性はわずかにこれだけであり、ましてやこの經典の原初形態にのみ説かれている。つまりこの修道論の中に位置づけられ、阿弥陀仏を随念する加行となっていたのが般舟三昧の本来的な役割であるといえるのである。この修道論が行品以降で見られなくなることに關しては、梶山（1992, 293-297）の言うように、般舟三昧が発展して阿弥陀仏から諸仏へと対象が一般化していくうちに、本来的な修道論上の位置づけをも失っていったとみることができる。この特徴ある修道論が阿弥陀仏と共に見られなくなることに何の矛盾も生じない。

3.5 小結

本章では般舟三昧の役割について考察した。まずは視覚化の手順を知るべく禪觀經典に見る念仏觀の規定を参照した。その規定は仏像に見る仏の特徴を記憶し、それと同じものを想起するという手順で説かれる。この手順は念仏觀だけでなく不淨觀にも共通であり、ひいては人や物を思い浮かべるような一般的なレベルの話にも当てはまる。実に視覚化には先立つ記憶がなければならない。それゆえに念仏觀では仏像を、不淨觀では死体を見に行くところから手順が始められるのである。この手順を前提として般舟三昧の役割を考察すると、仏像という目で記憶できる媒体がない環境でどのように他方仏を想起するのが問題となる。そしてそれを知る上で参照したのが娼婦の譬え（3D）である。この譬えにおいて男たちは夢で娼婦を見ることによって、一度も会うことなく、ヴァイシャーリーという遠方に住む娼婦を想起できるようになっている。これは行者が般舟三昧で仏を見ることによって、他方世界に住む仏を随念できるようになる過程を譬えたものに他ならない。未だ見ぬ他方仏であっても、聞いた情報に基づいて仏の像を心の中に作る（*manasi-Kṛ*）ことにより、般舟三昧の中で対面する。夢で見た娼婦を想起できるように、般舟三昧で見た仏も随念できるということである。このように般舟三昧は仏随念との関連において、最初に仏を具象化する段階を担っており、随念に先立つ記憶を得るための加行となっている。そしてこれら二つは「般舟三昧（加行）→仏随念（本行）→往生→無上正等覺」という過程の中に位置づけられている。本經の中から修道論として提示できる候補は他に見出せず、ましてや本經の原初形態とされる行品にのみ見られることから、この修道論の中に位置づけられ、阿弥陀仏を随念する加行となっていたのが般舟三昧の本来的な役割であったとみる。

4 不可解な三昧の説明

本章で取り扱う般舟三昧の説明は項目を列挙するという形式を取り、関連のない内容で般舟三昧を定義するために不可解となっている。そして本經に見るこの不可解な三昧の説明は他の大乘經典にも共通する問題となっている。まずは本經の分析から定義の成り立ちや説明の目的について検討を加える。次に同じ形式で三昧を説明する經典として《首楞嚴三昧經》を取り上げる。この經典は三昧の名を冠していながら、実質的な三昧の説明を行おうとせず、同じく三昧を説く本經とはこの点で顕著な違いが生じている。本經との対比を念頭に置きながら、実践を説かない三昧經典が何を目的に編纂されたのかを考察する。

4.1 項目列挙型の説明

まずは問題の説明がどのようなものを概観する。煩瑣になるのを避けて、一部省略して以下に引用する。

バドラパーラよ、そこでその般舟三昧とは何か。すなわち、(1) 仏を所縁とする心を集中させること、(2) 心を乱さないこと、(3) 注意力(**smṛti*)を維持すること、(4) 智慧を獲得すること、(5) 精進を放棄しないこと、(6) 善知識たちに仕えること(**paryupāsana*)、(7) 空性を実践し(**āsevita*)、修習し(**bhāvita*)、多く行うこと(**bahulīkāra*)、(8) 諸々の妨げ(**āvaraṇa*)を除くこと、(9) 昏沈と睡眠を払うこと、(10) 談話を断つこと、(11) 悪友たちを捨てること、(12) 善知識たちと親しくすること、(13) 諸根を動揺させないこと、(14) 食事の量を知ること、(15) 初夜と後〔夜〕に眠らない努力をもつこと、(16) 衣と食事と臥具と病を治す薬と資具に執着しないこと、(17) 林住を放棄しないこと、(18) からだを重視しないこと、(19) いのちを顧みないこと、(20) からだを〔他者のために〕放棄すること、(21) 衆生を利益すること、..... (128) 法界に入ること、(129) 虚空界をよく知ること、(130) 衆生界に執着しないこと、〔それを〕生じないもの、滅しないもの、とどまらないもの〔とみること〕、(131) 涅槃界を目の当たりにすること、(132) 智慧の眼を清めること、(133) あらゆるものを不二〔とみること〕、(134) 菩提心に始まりも終わりもその中間もないこと、(135) 心の相続が同一である(**cetasa ekotībhāva*) こと、(136) すべての仏と抵触のない智慧に入ること、(137) 智慧に妨げのないこと、(138) 菩提に向かう心が成熟していること、(139) 他に依らない仏の智慧、(140) 善知識たちを師と思うこと、(141) 菩薩たちを分断させないこと、(142) 諸々の魔の行為を排除すること、(143) すべての〔生存の〕状態(**gati*)を幻(**nirmita*)

と等しい〔とみること〕、(144) 如来を見ることを幻影 (**pratibhāsa*) と等しい〔とみること〕、(145) 菩提心を探求すること、(146) 諸波羅蜜に対する等しい心、(147) 如来たちを見ることを究極の真実 (**bhūtakoti*) と等しい〔とみること〕、(148) すべての仏をあらゆる功德の法と等しいと〔みること〕、バドラーパーラよ、以上が般舟三昧と呼ばれる。

bzang skyong/ de la da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa zhes bya ba'i ting nge 'dzin de gang zhe na/ 'di lta ste/ sangs rgyas la dmigs pa'i sems yid la byed pa/ sems mi g-yeng ba/ dran pa nye bar gnas pa/ shes rab thob pa/ brton 'grus mi gtong ba/ dge ba'i bshes gnyen rnams la bsnyen bkur byed pa/ stong pa nyid kun tu sten pa/ sgom pa/ mang du byed pa/ sgrib pa rnams spong ba/ rmugs pa dang gnyid rnam par spong ba/ gtam yongs su spong ba/ sdig pa'i grogs po rnams rnam par spong ba/ dge ba'i bshes gnyen rnams la nges par sten pa/ dbang po rnams mi g-yeng ba/ zas kyi tshad shes pa/ nam gyi cha stod dang/ cha smad la mi nyal ba'i brtson 'grus dang ldan pa/ gos dang/ zas dang/ mal stan dang/ na ba'i gsos sman dang/ yo byad rnams la mi chags pa/ dgon pa la gnas pa mi gtong ba/ lus la ched che bar mi byed pa/ srog la mi lta ba/ lus gtong pa/ sems can la phan 'dogs pa/ [...] chos kyi dbyings la 'jug pa/ nam mkha'i kham yongs su shes pa/ sems can gyi kham la mngon par mi chags pa/ mi skye ba/ mi 'gag pa/ gnas pa med pa/ mya ngan las 'das pa'i dbyings mngon sum du gyur pa/ shes rab kyi mig rnam par sbyong ba/ chos thams cad la gnyis su med pa/ byang chub kyi sems la mtha' dang dbus med pa/ sems kyi rgyud gcig tu gyur pa/ sangs rgyas thams cad dang thogs pa med pa'i ye shes la 'jug pa/ ye shes la sgrib pa med pa/ byang chub kyi phyir sems yongs su smin pa/ sangs rgyas kyi ye shes gzan la rag ma lus pa/ dge ba'i bshes gnyen rnams la ston par 'du shes pa/ byang chub sems dpa' rnams la mi 'byed pa/ bdud kyi las rnams rnam par spong ba/ 'gro ba thams cad sprul pa dang mtshungs pa/ de bzhin gshegs pa blta ba la mig yor dang mtshungs pa/ byang chub kyi sems yongs su tshol ba/ pha rol tu phyin pa rnams la sems mnyam pa/ de bzhin gshegs pa rnams blta ba la yang dag pa'i mtha' dang mnyam pa/ sangs rgyas thams cad la yon tan gyi chos thams cad mnyam pa 'di ni/ bzang skyong/ da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa zhes bya ba'i ting nge 'dzin ces bya'o//

PSS 2D–2J.

この説明では多くの項目を列挙して般舟三昧とは何かを定義する。下線で示した「○○三昧とは何か」(**katamaś ca sa... nāma samādhiḥ*)、「以上が○○三昧と呼ばれる」(**ayaṃ sa ucyaṭe... nāma samādhiḥ*) という二句と共に項目を列挙するのが定型となっており¹、このような項目

¹ 定型句の原語は《三昧王経》(SRS I 15, 9–23, 5) から回収することができる。

katamaś ca sa kumāra sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcito nāma samādhiḥ. yaduta kāyaśaṃvaraḥ, vākaśaṃvaraḥ, manāśaṃvaraḥ, karmapariśuddhiḥ, ālambanasamatikramaḥ [...] ekanirdeśaḥ

列挙型の説明は第五節で参照する《首楞嚴三昧經》のように、他の大乘經典にも見ることができる。上記引用に関して漢訳資料を参照しておく、T 418 は「何等爲定意」(T 13, 904b24–905a05)として冒頭の句を訳している。T 417 における該当箇所は一句三字の偈頌へと改変されてしまっているが(T 13, 898b10–899a08)、特に T 419 を参照すると、冒頭のみならず末尾の句に関しても「是爲現在佛面住定意」(T 13, 921b17–921c29)と訳出していることがわかる。残る T 416 のみが「若有菩薩具足成就此三昧者。即獲如前諸功德事。亦得其餘殊異功德」(T 13, 875a03–a04)という他には見当たらない趣旨を説き、般舟三昧が何かではなく、般舟三昧の功德が何かを説明する文脈になっているが、これは原典ではなく訳者独自の理解を反映したものとみるべきだろう。

4.1.1 項目の内容

先に不可解な説明の全体像を概観し、諸項目によって般舟三昧とは何かが定義されているのを確認した。三昧の説明に際して項目を列挙するという形式もさることながら、この説明を不可解ならしめているのは、ほとんどの項目に般舟三昧との関連性が見出だせないことである。他の項目を参照すると、

- (22) 親族たちを捨てること
- (23) 故郷を遠ざけること
- (34) 我慢を絶やすこと
- (35) 他人が得たものを嫉まないこと
- (36) 衆生を利益する依り処(**sattvahiṭādhīṣṭhāna*) となること
- (37) すべての衆生に対する心の等しいこと
- (41) すべての衆生を母であると思うこと、父と思うこと、息子と思うこと、親類と思うこと
- (42) すべての衆生を煩惱なきものと思うこと
- (50) 仏と調和すること
- (51) 教えを棄てないこと
- (52) 僧団を分裂させないこと
- (59) 快い〔言葉〕を話すこと

sarvabhavagatyupapattyāyatanānām, ayam sa kumāra ucyate sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcito nāma samādhiḥ.

- (60) 五蓋を除くこと
- (63) 十不善業道を放棄すること
- (64) 十善業道を修習すること
- (73) 八支聖道に従うこと
- (74) 禪定に執着しないこと
- (86) 有情 (**sattva*) に対する想を棄てること
- (87) 命 (**jīva*) に対する想を対象としないこと
- (88) 人 (**pudgala*) に対する想を完全に取り除くこと
- (95) 〔十八〕 界を毒蛇 (**āśviṣa*) と思うこと
- (96) 〔十二〕 処を空虚な村 (**sūnyagrāma*) と思うこと
- (97) 三界を不幸と思うこと
- (98) 涅槃を至福であるとみること
- (112) 優れた意志が高潔であること
- (113) 心がかろやか (**karmaṇyatā*) であること
- (123) すべてのことがらを等しい〔とみる〕こと
- (124) 世間と争わないこと²

などが挙げられているが、般舟三昧の定義としては疑問を生じるような内容しか挙げられていない³。どちらかといえば「十善業道を修習すること」や「八支聖道に従うこと」など、仏教に普遍的な内容が多く見られるのが特徴といえる。

² (22)*gnyen rnams yongs su spong ba*/(23)*skyes pa'i sa ring du byed pa*/ [...] (34)*nga rgyal tsar gcod pa*/(35)*gzhan gvis rnyed pa la phrag dog med pa*/(36)*sems can la phan pa'i gzhi gyur pa*/(37)*sems can thams cad la sems mnyam pa*/ [...] (41)*sems can thams cad la mar 'du shes pa/ phar 'du shes pa/ bur 'du shes pa/ gnyen du 'du shes pa*/(42)*sems can thams cad la nyon mongs pa med par 'du shes pa*/ [...] (50)*sangs rgyas dang mthun pa*/(51)*chos mi spong ba*/(52)*dge 'dun mi 'byed pa*/ [...] (59)*snyen pa rnams smra ba*/(60)*sgrib pa lnga spong ba*/ [...] (63)*mi dge ba bcu'i las kyi lam rnam par spong ba*/(64)*dge ba bcu'i las kyi lam sgom pa*/ [...] (73)*'phags pa'i lam yan lag brgyad pa dang mthun pa*/(74)*bsam gtan la mi chags pa*/ [...] (86)*sems can du 'du shes pa spong ba*/(87)*srog tu 'du shes pa mi dmigs pa*/(88)*gang zag tu 'du shes pa yongs su spong ba*/ [...] (95)*kham rnams la sprul gdug par 'du shes pa*/(96)*skye mched rnams la grong stong bar 'du shes pa*/(97)*kham gsum la mi bde bar 'du shes pa*/(98)*mya ngan las 'das pa la phan yon du lta ba*/ [...] (112)*lhag pa'i bsam pas dge ba*/(113)*sems las su rung ba*/ [...] (123)*chos thams cad la mnyam pa*/(124)*'jig rten dang mi rtzod pa*/... PSS 2E–2J.

³ Skilton (2002) は三昧經典に共通するこの不可解な説明を調査する中で、いずれの經典でも三昧と関連のない項目が列挙されると指摘しており (cf. *ibid.*, 58–69)、その際に本經の項目にも言及している。

さて以下ではこの定義の成り立ちに関して検討する。そして今回は考察の手掛かりを阿毘達磨に求めてみたい。特に論師の主張する定義の成立論などを参照すると、それと同じ理屈がこの不可解な説明にも当てはまっているのが見えてくる。

4.1.2 般舟三昧との関連性

項目の内容が般舟三昧と直接関連するようには思えないが、しかし仏陀は項目の列挙に引き続いて次のように説いている。

バドラパーラよ、これらの諸法（**dharma*⁴）がこの三昧を生じる。そこでバドラパーラよ、これらの諸法によって生じる三昧は何かというと、つまり般舟三昧である。

bzang skyong/ chos de rnams ni ting nge 'dzin de yongs su skyed par 'gyur te/ bzang skyong/ de la ting nge 'dzin gang chos de rnams kyis yongs su skyed par 'gyur ba'i ting nge 'dzin de gang zhe na/ 'di lta ste/ da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa zhes bya ba'i ting nge 'dzin to//

PSS 3A.

この一節は不可解な説明と一連のものであり⁵、ここで言う「諸法」とは諸項目を指す。したがって、仏陀はこの一節で諸項目が般舟三昧を生じる云々と述べてお互いの因果関係に言及していることになる。本経ではこのように仏陀が諸項目と般舟三昧の因果関係を述べた所で説明が終わる。

例えば「(6) 善知識に仕えること」という項目を一例に考えてみても、この説明において仏陀は「善知識に仕えることは般舟三昧である」という理解し難い定義を説いていることになる。しかしこれに先の因果関係を当てはめると、この定義は「善知識に仕えること（原因）は般舟三昧（結果）である」という構造で説かれていることがわかる。そしてこの構造こそが定義を成立させる上で重要なのである。

尚、この一節の存在が要点となるから、次節に進む前に他の資料を参照しておく。まず

⁴ この *dharma*（複数）は難解であるが、ここでは「あり方」あるいは「徳目」といった意味で理解する。先行訳を参照すると、梶山（1992, 269）は「諸徳」とし、T 416 に近い意味（功德法: T 13, 875b22）で訳している。林（1994, 19）は「諸法」としており、訳に理解は反映していない。Harrison（1990, 31）は、英訳では“those *dharma*s”とするのみであるが、その解説（Harrison 1990, xxviii）では特質（attributes）といった意味で理解している。

⁵ この一節はチベット訳では Chapter 3 の冒頭（3A）に位置しているが、内容からすれば Chapter 2 の終わり（2J）に相当する。

T 416 の対応箇所には「賢護。當知更有無量功德。然亦緣此三昧而生」とあり、さらなる無量の功德が般舟三昧によって生じる旨を説いているが、先と同様に訳者独自の理解を反映しているとみるべきであって、残りの資料では諸法が般舟三昧を生じるという趣旨が説かれている。当該箇所に改変のある T 417 を除いて、T 418 では「持是行法故致三昧。便得三昧現在諸佛悉在前立」（T 13, 905a04–a05）、T 419 では「亦用是法定意爲具來。何等定意具將是法來。所謂現在佛面住定意⁶」（T 13, 921c29–922a02）とあり、チベット訳とほぼ同じ趣旨の一節を訳出している。したがってこの一節は支婁迦讖訳（T 418）の時点から原典に説かれていたものであり、チベット訳などの比較的新しい資料にのみ見られるようなものではない。

次節からは前述の構造を念頭に置きながら、阿毘達磨における定義の成立論を参照する。同じ構造で主張される定義が阿毘達磨にも存在し、その理由を論師が解説している。その解説を参照することによって、なぜ「A（原因）はB（結果）である」という構造が重要となるのか、ひいてはなぜ仏陀が本経で因果関係に言及したのかが明らかになる。

4.2 経典解釈論

論師の解説を参照する前に、まずは経典解釈論について見ておく必要がある。今回取り上げるのは「果立因名」や「因立果名」と呼ばれる解釈である。実際にどのような場合に用いられるのかを知るために、以下に経典の一節を引用する。

「比丘たちよ、これはあなたたちの身体なのではなく、他人の〔身体〕でもないのである。これは以前に発動され仕組まれた六触処なのであって、過去の業であると知らなければならない」と私は言う。

nāyaṃ bhikṣavaḥ kāyo yuṣmākaṃ nāpy anyeṣāṃ. ṣaḍ imāni sparśāyatanāni pūrvam abhisamskṛtāny abhisamcetitāni paurāṇaṃ karma veditavyam iti vadāmi.

NidSa 13.1.⁷

⁶ T 419 の原文は「亦用是法定意爲具來。何等定意具將是法來。所謂現在。現在佛面住定意爲何等…」となっているが、下線部は「所謂現在（+佛面住定意）。現在佛面住定意爲何等…」と校訂して読む。このようであればチベット訳対応箇所（3A）にある 'di lta ste/ da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa zhes bya ba'i ting nge 'dzin to// bzang skyong/ da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa zhes bya ba'i ting nge 'dzin de yang gang zhe na/ と対応する。

⁷ cf. SN 12.37, 『雜阿含』（T 2, 84a23–a26）。

この一節のうち、六触処は過去の業であるという点に対して解釈が必要になる⁸。そして《婆沙論》に「六触処は過去の業と説くように、結果に対して原因の名を立てる」（如六觸處説名故業。果立因名⁹）とあるように、結果（六触処）に対して原因（過去の業）の名前で呼んでいると解釈する¹⁰。これが果立因名である。因立果名はこの逆であり、原因に対して結果の名前で呼んでいると解釈する。要するに原因と結果は物事の二つの側面を指す名称に過ぎず、結果に対して原因、または原因に対して結果で言い換えることができるという理屈であり、それは經典解釈のレベルで認められている。

4.3 阿毘達磨論師の解説

ではなぜ「A（原因）はB（結果）である」という構造が定義を成り立たせる上で重要なのか。それは論師による解説を参照することで明らかになる。引き続き《婆沙論》から二つの用例を参照する。

断は擇滅であって遍知ではないといっても、この〔断〕は遍知の結果であるから遍知と称す。六触処を過去の業と称すように結果に対して原因の名前を立てるのである。遍知の場合もそれと同様である。

断是擇滅雖非遍知。是遍知果故名遍知。如六觸處説名故業。果立因名。遍知亦爾¹¹。

⁸ cf. 舟橋（1972, 1–11）, 舟橋（1974, 45–65）, 藤田（1979, 131–144）。

⁹ T 27, 465a22. cf. 『旧婆沙』如六入是業果。以業名説如此。六入是本業（T 28, 132c28）。尚、この解釈は《俱舍論》において“*phale hetūpacārah*”（AKBh 25,13）と解説されることが知られる。

¹⁰ この經典解釈例は《婆沙論》では常に例証として出る*。したがって《婆沙論》の編纂年代（二世紀頃**）には周知されていたと考えてよいだろう。また北伝のみならず南伝でも用いられることが知られており***、經典解釈例として広く知られていたとみられる。

*cf. 『旧婆沙』如經中説。六入是業。六入是業果。以業名説。（T 28, 123b18–b19）, 如六入是業果。以業名説。如此六入是本業。（T 28, 132c28–c29）, 如説六入是舊業。（T 28, 242a5–a06）, 『新婆沙』如六觸處是業果故亦名舊業。（T 27, 321a6–a07）, 如六觸處説名故業果立因名。（T 28, 465a22–a23）。**二世紀頃というのは、『新婆沙』におけるカニシカ王の記述（T 27, 593a15, 1004a05）から想定された年代である。cf. 木村（1968, 206–211）, Cox（1995, 33–34）, Dessein（2009, 44）, Bronkhorst（2012, 493）。***ブッダゴーサによる SN 12. 37 の注釈箇所に見られる。cf. 舟橋（1972, 2）。

¹¹ T 27, 465a21–23. cf. 『新婆沙』云何断遍知。答諸貪永断。瞋癡永断。一切煩惱永断。是謂断遍知。問於所縁境能遍知故立遍知名断無所縁及遍知用何故名遍知。答断是智果故亦名遍知如阿羅漢。

ここでは『発智論』で「断は遍知である¹²」と定義されることについて論師が解説しているが、断が「遍知の結果である」と言及している点に注目する。実にこの定義は「断（結果）は遍知（原因）である」という構造で説かれている。そして論師は前節で確認したのと同じ經典解釈例を持ち出してくる。つまり「六触処（結果）は過去の業（原因）である」と經典解釈する例を引き合いに出し、この定義にも果立因名が当てはまると主張するのである。この用例では「A（結果）はB（原因）である」という構造になっているが、次に参照する用例は本經と同じ「A（原因）はB（結果）である」という構造で説かれる。

また次にこの内の諸々の忍は智の名を立てる。智を引き起こすことができるからである。原因に対して結果の名前を立てる。飢渴をその原因となる〔所〕触に因んで〔名を立てるのと〕同様である。

復次此中諸忍以智名説。能引智故。因立果名。如飢渴名因彼因觸¹³。

今回は「忍は智である」という定義について論師が解説する。先の構造と逆になるだけで内容は同じであるが、まず忍が「智を引き起こすことができる」といってお互いの因果関係に言及する。その結果、この定義は「忍（原因）は智（結果）である」という構造で説かれていることになり、因立果名が当てはまると主張する¹⁴。つまり話題の構造は經典解釋論と同じ理屈で解釈できる構造ということになる。

以上に見た論師の解説と対照すると、本經においても仏陀は同じように因果関係に言及して、「A（原因）はB（結果）である」という構造で定義を説いている。阿毘達磨の言う因立果名に鑑みると、本經の仏陀が無作為に因果関係に言及したとは考えられず、ひいてはこの不可解な説明にも經典解釋論と同じ理屈が当てはまることになる。本經のような初

是解果故亦説名解。天眼天耳是通果故亦説名通。内六處等是業果故説名故業。（T 27, 175b8–b14）、
『旧婆沙』云何斷智。答曰。若一切愛恚癡斷。一切煩惱斷名爲斷智。問曰。如斷無所緣智有所緣。何以説斷名智耶。答曰。或有說者。以斷是智果故。斷名爲智。如阿羅漢。是智果以智名説。如天眼天耳是通果。以通名説。如六入是業果。以業名説如此。六入是本業。如是斷是智果。故説名斷智。（T 28, 132c23–c29）。

¹² 『発智論』云何斷遍知。答諸貪永斷。瞋癡永斷。一切煩惱永斷。是謂斷遍知。（T 26, 924c02–c03）、
『八犍度論』云何盡智。答曰。姪怒癡盡無餘。一切結盡無餘。是謂盡智。（T 26, 778c28–779a01）。

¹³ T 27, 334a20–21. 『旧婆沙』対応無し。cf. 『発智論』（T 26, 940c12–c13）。

¹⁴ 引用の最後にある「如飢渴名因彼因觸」というのは所触のうちの一つ（原因）を飢渴（結果）の名前で呼ぶ例があることを述べたものであるが、この例証として、經典（Dhp 194）に「諸仏の出現は楽である」*buddhānāṃ sukha utpādaḥ* とあるのを「諸仏の出現（原因）は楽（結果）である」と解釈する例が引かれる。cf. AKBh 7, 11–13, Up 1012.

期大乘經典の編纂者たちが、果たしてこの經典解釈論を知っていたのかどうか、実に興味深い。因立果名の理屈自体がインド一般の言い回しに由来する可能性もあり¹⁵、残念ながら現時点で經典解釈論と直線的に結びつけることはできない。いずれにせよ、阿毘達磨を参照することによって、不可解な説明による般舟三昧の定義が「A（原因）はB（結果）である」という構造で説かれており、原因と結果の言い換えとして成り立っているということが明らかになった。

4.4 不可解な説明の目的

この不可解な説明の目的について考えられる範囲で言及しておきたい。まずこの説明に三昧を解説する機能があるかどうかが問題である。さらに本經は第二章と第三章で分析したように、行品後半（3A-3O）で実質的な説明を行っており、前半（2D-2J）で説明を行う意義までもが問われることになる。この三昧の実質的な説明に関しては既に確認しているが、比較のために再び参照する。

バドラパーラよ、その般舟三昧とは何か。……戒を完全に保った上で、その〔行者は〕一人で閑かな場所へ向かい、座ってから、……その〔行者は〕乱れない心で如来を心の中に作る。……一昼夜、あるいは二〔昼夜〕、あるいは三〔昼夜〕、あるいは四〔昼夜〕、あるいは五〔昼夜〕、あるいは六〔昼夜〕、あるいは七昼夜のあいだ心の中に作るべきである。

bzang skyong / da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa zhes bya ba'i ting nge 'dzin de yang gang zhe na/ [...] tshul khriṃs yongs su rdzogs par spyod par 'gyur la/ des gcig pu bden par song ste 'dug nas/ [...] des kyang sems ma g-yengs pas de bzhin gshegs pa yid la byed do// [...] nyin zhag gcig gam/ gnyis sam/ gsum mam/ bzhi 'am/ lnga 'am/ drug gam/ nyin zhag bdun du yid la bya'o//

PSS 3A-3B.

¹⁵ 『成実論』（T 36, 248a14-249a11）には今回取り上げた經典解釈論に関する解説がある。それを参照すると「食錢」という言い回しを經典解釈論の例証として引き合いに出している。食錢は食べ物を食べるという意味であるが、お金によって食べ物を得るのだから、食べ物（結果）の意味でお金（原因）の語を用いるのであり、結果と原因の言い換えが世間一般のレベルで認められていたことを示唆する。『成実論』が例証に用いた食錢がインド由来のものかどうか定かでないが、同じ理屈の言い回しがインドにあったことは疑いないだろう。これは今回の經典解釈論の理屈が世間一般の知識に由来する可能性を示している。尚、この『成実論』の解説は田中裕成氏のご教示によって知り得た。ここに感謝申し上げる。

前半も後半も同じ様に「般舟三昧とは何か」*da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa zhes bya ba'i ting nge 'dzin de yang gang zhe na/* を説明しているが、こちらは実践に必要な事項を解説している。後半ではこの他に定中での阿弥陀仏との対面や (3A-3C)、対面して仏に何を質問すべきか (3E) などが解説されており、般舟三昧の説明は後半だけでも十分完結する。したがって前半の不可解な説明に意義を見出すことは難しい。むしろ説明自体は形式的なものに過ぎず、別の目的のために仏陀が説明するという体裁を取ったとみる方がよい。

再び内容に注目すると、列挙された項目は般舟三昧と本来的な関連がなく、それが説明としての不可解さを生じる要因ともなっていた。しかし見方を変えれば、項目を列挙することで「般舟三昧とは何か。項目1、項目2、項目3、.....以上が般舟三昧と呼ばれる」と仏陀が説いたことになり、その結果、関連のないものであってもこの三昧と関連づけられることになる。その動機が問題となるが、まったく新たな大乘の三昧を提唱する際に仏教的な裏付けを示す必要がある。例えば《首楞嚴三昧經》には仏陀が首楞嚴三昧を説明したところ、その場に居合わせた全員が次のように考えたとある。

私たちは首楞嚴三昧という名前すらもこれまでに聞いたことがない。広く詳らかにされ、説明されたことがないのは言うまでもない。

bdag cag gis dpa' bar 'gro ba'i ting nge 'dzin gyi ming tsam yang sngon ma thos na/ rgya cher rnam par phyé zhing bshad pa lta ci smos te/

Śgs P 280b6-7, D 257a7-257b1.

これと同じ反応は現実でも起こるに違いない。般舟三昧の場合も例外ではなく、革新的な運動の中で新たな三昧を提唱するとしても、それ自体に仏教的な裏付けがなければ受け入れられないのは言うまでもない。項目には「十善業道を修習すること」や「八支聖道に従うこと」など仏教に普遍的な内容が多く見られることは既に指摘した。それらの項目は三昧を説明する分には不相応であるが、仏教的な裏付けを示すには相応しいといえる。そのような内容の項目と般舟三昧の関連性が仏陀の口から語られることにより、般舟三昧に仏教的な裏付けがあることが保証されるのであり、この点に説明の目的があったのではない。

4.5 《首楞嚴三昧經》

本節で取り上げる《首楞嚴三昧經》は前節までで検討したのと同じ項目列举型で三昧を説明する。他にも同じ形式で説明する三昧經典¹⁶は存在するが¹⁷、これらに共通する問題は項目を列举する以外に説明を行わないことである。つまりそれらの經典では三昧の実践

¹⁶ 三昧經典という分類に関する詳細は『大乘經典辞典』（235–256 頁）を参照。有名な經典としては《般舟三昧經》《集一切福德三昧經》《三昧王經》《首楞嚴三昧經》を挙げることができる。これら四つは《攝大乘論》第七章（ラモット刊本による区分）の増上心学の解説に登場する三昧であるとみられている（cf. Skilton 1999）。しかし以下に示す箇所（MSg P 37b4, D 32b1）をどのように解釈して読むかということは、諸本や諸注釈においても相違があり、解釈によっては《三昧王經》は説かれていないことになる。

大乘光明（*Mahāyāna-āloka）、集一切福德（*Sarvapūṇyasamuccaya）、三昧王賢護（*Samādhirāja-bhadrāpāla）、首楞嚴（*Śūraṅgama）などの種々なる三昧が計り知れないものだからである。

theg pa chen po snang ba dang/ bsod nams thams cad yang dag par bsags pa dang, ting nge 'dzin gyi rgyal po bzang skyong dang/ dpa' bar 'gro ba la sogs pa'i ting nge 'dzin sna tshogs nyid tshad med pa'i phyir ro//

ここで示した拙訳はチベット訳者の理解に従ってそのまま翻訳したものであるが、原典では經典の名前を説く部分が並列複合語で記されており、複合語であったがゆえに解釈に混乱が生じてしまったのではないと思われる。諸注釈によれば四つの三昧が説かれていることになる。そのうち「集一切福德」と「首楞嚴」とは、それぞれ《集一切福德三昧經》《首楞嚴三昧經》として明白であるから問題とはならない。ところが続く「三昧王賢護」に関しては解釈に違いが見られる。真谛訳は世親訳と共に「福德王」と「賢護」とみており、上記チベット訳の「三昧王」に相当する部分は、直前の「集一切福德」と結びつけて理解されている。そしてチベット訳では「三昧王」(*Samādhirāja)は「賢護」(*Bhadrāpāla)と結びつけて理解されており、無性(*Asvabhāva)の注釈（チベット訳）でもこれが支持されている。長尾（1982）は無性にしたがって「三昧の王である賢善にして守る〔という三昧〕」と訳しているが、この經典が何を指すかは明らかにしていない（cf. ibid., 208–210）。また能仁（2018）はこの「三昧王賢護」の部分が《賢護經》、すなわち賢護（*Bhadrāpāla）をその対告者とする《般舟三昧經》を指すとみる（ibid., 3–4）。一方、Skilton（1999）は「三昧王」と「賢護」は本来切り離して読むべき箇所だったのであり、それぞれ《三昧王經》と《般舟三昧經》を意味していたとみる。そして冒頭にある「大乘光明」というのがそもそも經典の名前ではなく、これ以降の經典名に係るべき語だったとみる（Skilton 1999, 643–645）。その理解に基づいて今一度拙訳を示すとすれば以下のようなになる。

大乘の光明なる、集一切福德（*Sarvapūṇyasamuccaya）、三昧王（*Samādhirāja）、賢護（*Bhadrāpāla）、首楞嚴（*Śūraṅgama）などの種々なる三昧（＝經典）が計り知れないものだからである。

に関する場所、期間、取るべき所縁といった詳細がまったく示されないということであり¹⁸、そのような三昧経典が実践を目的に編纂されたとは考え難い。今回は《首楞嚴三昧經》を対象にしながら、実践を説かない三昧経典が何を目的に編纂されたのかを考察する。まずはこの経典における首楞嚴三昧の説明を概観する。

ドリダマティ (**Dṛdhamati*) よ、その首楞嚴三昧 (**Śūraṅgama-samādhi*) とは何か。すなわち、
 (1) 生起した心が、虚空界と同じ様に、清浄になっていること、(2) あらゆる衆生の心に対する理解を現実のものにすること、(3) あらゆる衆生の能力の優劣を知ること、(4) 機会と機会でないものの察知を現実のものにすること、..... (103) 菩薩たちが胎内に入り、誕生し、出家し、苦行 (**tapas*) を修し、菩提の座 (**bodhimāṇḍa*) に赴き、魔を調伏し、菩提を現等覺 (**abhisambodhi*) し、法輪を転じ、偉大な涅槃にはいり、身体の滅尽を示したりもするが、この菩薩の法性 (**dharmatā*) を放棄するのではなく、無余依涅槃にはいるのでもない。ドリダマティよ、以上が首楞嚴三昧と呼ばれる。

blo gros brtan pa/ de la dpa' bar 'gro ba'i ting nge 'dzin de gang zhe na/ 'di lta ste nam mkha'i kham bzhin du sems bskyed pa shin tu yongs su sbyang ba byas pa dang/ sems can thams cad kyi sems la rtog pa mngon sum du gyur pa dang/ sems can thams cad kyi dbang po mchog dang/ mchog ma yin pa shes pa dang gnas dang gnas ma yin pa la rnam par lta ba mngon sum du gyur pa dang/ [...] byang chub sems dpa' dag mngal du 'jug pa dang/ btsas pa dang/ mngon par 'byung ba dang/ dka' ba spyod pa dang/ byang chub kyi snying por 'gro ba dang/ bdud 'dul ba dang/ byang chub mngon par rdzogs par 'tshang rgya ba dang/ chos kyi 'khor lo bskor ba dang/ mya ngan las 'da' ba chen po dang/ lus 'jig pa 'ang ston la/ byang chub sems dpa'i chos nyid de 'ang mi gtong zhing shin tu phung po med par yang mya ngan las mi 'da' ba/ 'di ni blo gros brtan pa/ dpa' bar 'gor ba'i ting nge 'dzin ces bya ste/

Śgs P 284a4–286b4, D 260b1–262b4.

この経典も本経と同様に項目を列挙して首楞嚴三昧を説明しているが、本経が項目を挙げる以外に実践に必要な事項を説明するのに対し、この経典はこれ以外の説明をまったく行わない。つまり《首楞嚴三昧經》は関連のない項目を並べるだけで首楞嚴三昧の説明を終えていることになる。この点について大いに疑問があるが、この経典の場合は引用した

¹⁷ この他に村上 (1970) によって『觀察諸法行經』 (T 649) と『賢劫經』 (T 425) が指摘されている。また項目列挙型の説明に関しても「*samādhi* の説明として多くの善法や観法を列挙するのは...*samādhi* を冠する経典等に共通」と指摘する (ibid., 868)。

¹⁸ これまでにも実践などの詳細を示さない三昧経典の存在が指摘され問題視されている。cf. Deleanu (2000, 73–74), Skilton (2002)。

限りで説明が完結しているため他に検討のしようがない。仏陀によって上記 103 項目が「首楞嚴三昧と呼ばれる」と明言されている以上、現状では言葉通りに理解するより他ない¹⁹。

4.5.1 実態のない三昧

首楞嚴三昧は列挙された 103 項目以上の内容をもたない。このことを明確にするために、以下では三昧の実態を示す記述が經典内に存在しないことを確認する。実態を示す記述というのは、第四節で確認したような三昧を実践する場所、期間、取るべき所縁などの詳細を記述したものを指す。まずは疑わしい記述を二つほど取り上げて検討する。それらは確かに実践に関して記しているが、首楞嚴三昧の実践にはあたらない。

すべての目的を実現しようと求める善男子と善女人は、まさにこの首楞嚴三昧を聞くべきであり、受け入れるべきであり、記憶すべきであり、暗唱すべきであり、〔他に〕解説すべきであり、修習すべきである。

don thams cad rtogs par 'tshal ba'i rigs kyi bu dang/ rigs kyi bu mo dpa' bar 'gro ba'i ting nge 'dzin 'di nyid mnyan par bgyi/ blang bar bgyi/ gzung bar bgyi/ bklag bar bgyi/ bshad par bgyi/ bsgom par bgyi'o//

Śgs P 331a8–331b1, D 304b3–b4.

この記述には首楞嚴三昧の記憶や暗唱が説かれているが、これは首楞嚴三昧 (= 經典) の記憶や暗唱を説いたものと理解すべきであって²⁰、般若經典などに見られる定型句 *imāṃ prajñāpāramitāṃ śroṣyanty udgrahīṣyanti dhārayiṣyanti vācayiṣyanti...* (ASP 485, 12–13 etc.) と同

¹⁹ 《首楞嚴三昧經》と同じ状態にある三昧經典として《三昧王經》があり、Skilton (2002) はこの經典の研究において項目列挙型の説明に関する検討を行っている。そして本節の考察もこの研究に負う所が大きい。この研究では主に《三昧王經》における三昧 (*samādhi*) の概念が、列挙された項目、すなわちテキスト自体を指し示すものへと変容していることが論じられており、三昧の説明に項目を列挙するという不可解さを解明する上で重要な手掛かりを示している。また考察の過程で《寂照神變三摩地經》を取り上げ、この經典が列挙する項目の大半は《三昧王經》と《首楞嚴三昧經》から持ち来たったものであり、項目を列挙して別な三昧の名前を付けるだけで新たな三昧を生み出すことができるという大変興味深い指摘をおこなっている (ibid. 73–75)。しかし項目列挙型の起源や役割などに関しては立ち入っておらず、残念ながら本研究でもこれらを論じるだけの準備がない。ただ項目列挙型の説明に関して明らかなのは、これが大乘仏教に固有な三昧の説明であるということくらいである。この形式の起源や役割の解明は今後の課題となる。

²⁰ Gómez & Silk (1989, 16), Skilton (1999) .

類である。冒頭にも「すべての目的を実現」するとあり、すべてとは直前に挙げられる十八の目的（福德、智慧、天界、財宝など²¹）を含む一切の功德を指す。つまりこの記述は大乗經典の記憶や暗唱とその功德を説いたものに他ならない。

続いては次のような記述がある。かつて Deleanu (2000, 73) が同様の記述を取り上げ、これが首楞嚴三昧の実践を明示する唯一の記述でありながら、その内容の曖昧さに疑問を呈している。

「また世尊よ、この首楞嚴三昧をどのように実践 (**pratipatti*) したらよいでしょうか」〔と問われて〕、世尊は次のように答えた。「ジナマティ (**Jinamati*²²) よ、菩薩が一切法を生じない (**apravṛtta*) ものとみるとき、そのとき〔その菩薩は〕この首楞嚴三昧を実践したことになる (**pratipanno bhavati*) 。

yang bcom ldan 'das dpa' bar 'gro ba'i ting nge 'dzin 'di la ji ltar nan tan bgyi/ bcom ldan 'das kyis bka' stsal pa/ rgyal ba'i blo gros gang gi tshe na byang chub sems dpa' chos thams cad ma zhugs par mthong ba de'i tshe/ dpa' bar 'gro ba'i ting nge 'dzin 'di la zhugs pa yin no//

Śgs P 331b1–b2, D 304b4–b5.

この記述では首楞嚴三昧の実践が「一切法を生じないもの」とみることだと言う。しかしこの後の話の内容は「実践は一つだけではない」*dpa' bar 'gro ba'i ting nge 'dzin 'di la ni nan tan gcig tu ma zad* (Śgs P 331b4, D 304b6) という方向に展開する。なぜなら、ここでの仏陀の意図が「この首楞嚴三昧を実践するということが甚だ行い難いこと」*dpa' bar 'gro ba'i ting nge 'dzin 'si la nan tan bgyi ba de ni shin tu bsgrub bka' ba* (Śgs 332a2–a3, D 305a4) を示すことにあるからであり、上記の実践はそれを示すきっかけとして説かれたものに過ぎない。このように実践に関する記述は經典内に見出せるが、首楞嚴三昧の実践にはあたらない。

三昧の実態を把握する上では定中の内容も重要となる。しかしそういった内容を示す記述もこの經典には存在しない。ではどういった記述が確認されるべきなのか、それを本經から参照する。

その〔菩薩は〕何度も心の中に作ることによってかの〔阿弥陀〕如来を見る。この般舟〔三昧と呼ばれる〕菩薩の三昧にとどまって (**sthita*)、その〔菩薩は〕かの〔阿弥陀〕如来を見てから「世尊よ、いかなる徳目を具えれば、菩薩摩訶薩はこの世界に生まれることができるのでし

²¹ cf. Śgs P 331a6–a8, D 304b1–304b3.

²² チベット訳 *rgyal ba'i blo gros* からの還梵。ラモットは **Rājamati* を想定し (Lamotte 1965/1998, 225. fn. 312)、丹治 (1974, 412. fn. 220) はそれを訂正して **Jinamati* とする。

ようか」と質問する。このようにしてどのような仏国土であれ、〔そこに〕生まれたいと思う場合には如来に〔このように〕質問する。……その菩薩はその三昧を修習して、その三昧に入る (**samāhita*)。それからその三昧から出て (**vyutthāya*)、バドラパーラよ、汝のいるところへ向かい、やって来ると、その三昧〔の内容〕を説く。

de phyi phyir zhing yid la byed pas de bzhin gshegs pa de mthong ngo// da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa'i byang chub sems dpa'i ting nge 'dzin la gnas te/ des de bzhin gshegs pa de mthong nas/ bcom ldan 'das/ chos gang dang ldan na/ byang chub sems dpa' sems dpa chen po 'jig rten gyi kham 'dir skye bar 'gyur/ zhes zhu ba zhu'o// [...] byang chub sems dpa' de ting nge 'dzin de bsgoms shing ting nge 'dzin de la mnyam par bzhag nas/ ting nge 'dzin langs te/ bzang skyong/ khyod gang na ba der song nas phyin pa dang ting nge 'dzin de brjod do//

PSS 3E-3G.

ここに見るような入定から出定に至るまでの記述、それによって定中の内容を把握することができると同時に三昧に入った状態で何を実践すべきかを知ることができる。しかしこの経典にはそういった内容も記述されていない。以上、首楞嚴三昧の実態を示す記述はこの経典には存在しない。この三昧の内容は列挙された 103 項目以外に把握しようがなく、三昧としての実態は無いに等しい。つまりこの経典が三昧の実践を目的に編纂されたとは考えがたい。

4.5.2 首楞嚴三昧の力

ではこの三昧経典は何のために編纂されたのか。その目的を知るために、この経典がどのような観点から三昧を説いているのかを検討する。そしてこの経典の場合は三昧にとどまる (*sthita*) 者を描写した内容に注目するとよい。まずは以下のような一節に注目する。

その時、ドリダマティ菩薩は世尊に次のように言った。「世尊よ、如来が過去に菩薩であった時に、この首楞嚴三昧にとどまってから、どのようなすばらしい神変の莊嚴を示されたのか。世尊による行いの一端だけでも話していただけますか」

de nas bcom ldan 'das la byang chub sems dpa' blo gros brtan pas 'di skad ces gsol to// bcom ldan 'das/ de bzhin gshegs pa ni sngon byang chub sems dpa' gyur pa'i tshe/ dpa' bar 'gro ba'i ting nge 'dzin 'di la gnas rnam par 'phul ba'i bkod pa ji lta bu bstan pa/ bcom ldan 'das kyis spyod pa di'i phyogs tsam zhig bka' stsal

na legs so//

Śgs P 320b1–2, D 294a5–7.

ドリダマティは首楞嚴三昧にとどまった者が起こす神変の内容を仏陀に尋ねている。この質問に反映されているように、この經典の興味は首楞嚴三昧の会得によって得られる徳や神変といった神秘的な力の内容を示すことにある。具体例として以下のような例を挙げることができる。

ドリダマティよ、この首楞嚴三昧にとどまった菩薩は衆生たちを見るやいなや教化してしまう。聞くことによって、立ち振舞いによって、語ることによって、黙って座っていることによってすら衆生たちを教化する。

blo gros brtan pa/ dpa' bar 'gro ba'i ting nge 'dzin 'di la gnas pa'i byang chub sems dpa' ni mthong ma thag tu 'ng sems can rnam 'dul bar byed do// thos pa dang/ spyod lam dang/ bshad pa dang/ mi smra bar 'dug pas kyang sems can dag 'dul bar byed do//

Śgs P 294b6–7, D 268b5–6.

ドリダマティよ、首楞嚴三昧にとどまったその菩薩には〔他から〕教わらなくとも、あらゆる生涯で常にこれら六波羅蜜が起こる。歩を進めるたびに六波羅蜜が起こる。息を吸ったり吐いたりするたびに六波羅蜜が起こる。

blo gros brtan pa/ dpa' bar 'gro ba'i ting nge 'dzin la gnas pa'i byang chub sems dpa' de la ni pha rol tu phin pa drug po 'di dag ma bstan par tshe rabs thams cad tu rtag tu 'jug par 'gyur ro// gom pa 'dor ba thams cad la'ng pha rol tu phyin pa drug po 'di dag 'jug par 'gyur ro// dbug rngub pa dang/ 'byung ba thams cad la'ng pha rol tu phin pa drug po 'di dag 'jug par 'gyur ro//

Śgs P 295a6–a8, D 270b1–b2.

前項で参照した本經の記述では「三昧にとどまって、その〔菩薩は〕かの〔阿弥陀〕如来を見てから…」云々と定中の内容を描写していたのに対して、この經典では「衆生たちを教化する」あるいは「六波羅蜜が起こる」といったような、結果として具わる力を描写する。その種類も様々であり²³、この經典に挿入されている説話の多くでは、仏陀のみならず上位の菩薩が首楞嚴三昧による奇蹟を起こすことにより、その力も様々に描写されて

²³ see also Śgs P 280a6–280b5, D 257a1–257a7; P 329a7–329b5, D 302b4–303a2.

いる²⁴。要するにこの経典は首楞嚴三昧によって得られる力の観点から三昧を説いているのである。

4.5.3 三昧の力と発菩提心

観点が明らかになったところで、この経典が編纂された目的を考察する。そのためには、なぜ三昧の力を示そうとするのか、その目的を明らかにする必要がある。それを知る手掛かりとして、経典に登場するゴーパカ天子が菩提心を起こす説話に注目する。ゴーパカ天子は、まだ父の王宮で暮らしていた頃の若き仏陀が、他の世界で既に法輪を転じながらこの世界では菩薩として姿を現すという奇蹟を起こしていたと聞かされる（Śgs P 301b1–b8, D 276a4–b2）。そしてそれが首楞嚴三昧の力であると知った天子は、その力に驚愕して菩提心を起こす。

善男子よ、その時、私に次のような思いが生じました。善男子よ、〔釈迦牟尼仏が〕このように愛欲を享受し、王族の權威を手にして三昧をも会得しているというのは、菩薩たちの三昧の力は驚愕すべきもの（*āścarya）であると考えたのです。善男子よ、私はこれを聞いてから、菩薩というものを完全に師であると思うに至り、そして私は信（*śraddhā）を得てから、深い決意（*adhyāśaya）でもって無上なる正等覚に向かう心を起こし、私もこのような智慧と徳を具えた者となろうと〔考えたのです〕。

*rigs kyi bu/ de'i tshe bdag 'di snyam du sems te/ rigs kyi bu/ 'di ltar 'dod pa la yongs su spyod cing rgyal
srid kyang yongs su sdud la ting nge 'dzin kyang thob pa ni byang chub sems dpa' rnam kyī ting nge 'dzin
gyi rtsal ngo mtshar to snyam mo// rigs kyi bu/ bdag gis de thos nas byang chub sems dpa' la shin tu ston
par 'du shes mngon par bzhag go// bdag gis dad pa'ng rnyed nas bdag gis lhag pa'i bsam pas bla na med
pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub tu sems bskyed de/ bdag kyang ye shes dang/ yon tan gyi chos 'di
lta bu dang ldan par gyur cig ces bgyis so//*

Śgs P 301b8–302a2, D 276b2–b4.

この他に独覚乗に退転しつつある菩薩たちの説話にも触れておく²⁵。この説話は、仏果を得るまでの長い道のりに心臆した菩薩たちが独覚乗に戻ろうとするのを、文殊師利が止

²⁴ see also 持須弥頂の説話（Śgs P 299a4–300b1, D 274a2–275a4）、魔界菩薩の説話（Śgs P 319a5–310a8, D 293a3–294a5）、弥勒菩薩の説話（Śgs P 332a4–333a1, D 305a5–306a1）。

²⁵ see also 獅子座の説話（Śgs P 280b52–282b5, D 257a7–258a4）。

めるという内容になっている（Śgs P 327a4-330a8, D 300b6-303b4）。その菩薩たちは文殊師利のもつ不可思議な徳が首楞嚴三昧に起因すること、そしてその場に居合わせた天子たちからこの三昧のさらなる力を聞かされて菩提心を取り戻す。

その後、二百人の心臆した菩薩たち、〔今や〕自らの〔菩薩としての〕本質に立ち戻ろうと願うようになったかれら二百人は、天子たちのこの話と文殊師利の不可思議な福德を聞いて、強い決意でもって無上なる正等覚に向かう心を起こした。

*de nas byang chub sems dpa' sems zhum pa rang gi rang bzhin la slar 'jug 'dod par gyur pa nyis brgya po
de dag gis lha'i bu dag gi bshad pa 'di dang/ 'jam dpa' l gzhon nur gyur pa'i bsod nams bsam gyis mi khyab
pa thos nas/ lhag pa'i bsam pas bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub tu sems bskyed de/*

Śgs P 330a7-a8, D 300b6-303b3.

これらの説話では仏菩薩が様々な奇蹟を起こしているが、例えば「文殊師利は首楞嚴三昧にとどまって、このような不可思議な本質を示している」*'jam dpa' l gzhon nur gyur pa dpa' bar 'gro ba'i ting nge 'dzin la gnas nas/ bsam gyis mi khyab pa'i chos nyid 'di lta bu 'di ston te/*（Śgs P 329a6, D302b4）というように、それが首楞嚴三昧の力という体裁になっている。つまりこの經典で仏菩薩が見せる様々な奇蹟は、首楞嚴三昧の力の描写に他ならないのであり、それを聞いたり目の当たりにした衆生が感銘を受けて菩提心を発すという構図になっている。首楞嚴三昧は大乘仏教に特有の三昧であるから、その力への憧れは必然的に大乘への傾倒を生じることになるのである。以上のような説話の構図に鑑みると、この經典が編纂された目的は大乘への傾倒を生じさせることにありとみることができ、それゆえにこの經典は首楞嚴三昧の力を示そうとしているのである。

4.6 小結

本章で分析した行品前半では般舟三昧とは何かを説いて多くの項目で定義する。ここに挙げられた項目は「善知識に仕えること」などといった、般舟三昧と関連しない内容のものが大半となっているが、仏陀がそれらと因果関係にあると言及することによって、項目（原因）に対して般舟三昧（結果）の名前で呼ぶという、経典解釈論（因立果名）と同じ理屈で定義が成り立つということを、阿毘達磨に見る定義の成立論などを手掛かりに考察した。そしてこの不可解な説明には「十善業道を修習すること」などの仏教に普遍的な内容と関連づけることで、般舟三昧が仏教的な裏付けをもつことを示す目的があるのではないかと推論した。

続いて《首楞嚴三昧經》を取り上げた。この経典は本経と同じ項目列举型で首楞嚴三昧を説明する。しかし本経とは異なり、単に項目を列举するだけで説明を終え、実践に必要な事項を示すことがない。したがって首楞嚴三昧の実践を目的に編纂されたとは考えられない。そこでその編纂目的について検討を加えると、この経典が三昧を説く際には結果する力に観点を置いていることがわかる。そして挿入されている説話に目を向けると、そこでは仏菩薩が首楞嚴三昧の力を様々に示し、それに感動した衆生が大乘に傾倒していく様子が描かれている。この構図に反映されているように、この経典は大乘の三昧の力を示すことによって、衆生を大乘仏教に傾倒させる目的で編纂されたとみる。

本章で《首楞嚴三昧經》を考察したのは本経と対比するためである。これらは同じ大乘の三昧を説く経典でありながら、それを説く観点には顕著な違いが見られる。第二章から第三章にかけて確認したように、本経が行品後半で三昧の実践を説こうとするのに対し、《首楞嚴三昧經》は三昧のもつ力といった神秘的側面だけを説こうとする。したがって、三昧経典には少なくとも実践を説くものと、神秘的側面を説くものの二系統あることになる。本経も神秘的側面をまったく説かない訳ではないが、後者の系統に属する経典は《首楞嚴三昧經》のように三昧の実践を説かないという特徴が見られる。この二系統の存在に関しては第五章の結論では取り上げないため、ここで少し言及しておきたい。注目すべき問題は神秘的側面を説く三昧経典が《首楞嚴三昧經》の他、《三昧王經》を筆頭に複数挙げることができる一方、実践を説く三昧経典は、管見の限り、本経の他に見当たらないという点である。これはつまり実践を目的に編纂された三昧経典が稀であるということの意味している。また本経においても、原形部分とされる行品では素朴に実践を説いているのに対し、これ以降の章になると神秘的側面を強調する記述が現れるようになる。このような点から、現時点ではこの二系統の差を、大乘仏教における三昧思想の変遷を示すものと捉えている。特に後者の系統は、大乘仏教の展開が勢力圏を拡大する段階に至った時点で、

第四章

三昧思想のもつ神秘性を教義の宣揚に用いようとした背景を反映するものであり、この宣揚活動の高まりが実践を説く三昧経典と一線を画す要因になったのではないかと推測する。

5 結論

結論では本論の考察結果を般舟三昧の原初的な様相としてまとめ、その成果に基づいて本経の思想的立場に関する仮説を提出する。そして最後に本経に見る大乘仏教の展開度合いを測る。

本論ではまず般舟三昧を仏随念の発展形とみる先行研究の再検討を行った。この見解を支持するとみられていた 3F の用例は、阿弥陀仏が自らの仏国土に往生する方法を説明したものであり、般舟三昧の説明にはあたらない。またこの三昧の説明では決まって仏の作意 (*manasi-Kṛ*) が説かれ、仏の随念 (*anu-Smṛ*) を説いた用例も見出せない。このように仏随念の発展形とみる見解は資料の分析からは支持されず再考の余地がある。そこで浄土經典の説く臨終見仏との近似性に着目して見解を新たに再考した。般舟三昧と臨終見仏は同じ現世での見仏であり、作意を説く点でも共通する。見仏する時間帯を別にすれば、両者は同じ構造で説かれており同じ系譜に属していると考えられる。先後関係に関しては、二つの見仏形態の特質を比較すると、臨終来迎願に依拠して僅かに現世で見仏する可能性を見出した臨終見仏よりも、現世でいながらに行える般舟三昧の方が発展していると思われることから、般舟三昧は臨終見仏の発展形であると論じた。

続いて般舟三昧の役割について考察した。考察の足掛かりとして参照した念仏観や不浄観の規定では、対象を記憶してそれを想起するという手順で説かれている。そしてこれは仏や死体の観想にのみ特別な手順というわけではなく、人や物を思い浮かべるような一般的な場合にも当てはまる。この手順を前提として、仏像が成立していない環境を想定した場合、どのように未だ見ぬ他方仏を視覚化するのが考察の要点となる。そこで娼婦の譬え (3D) に注目すると、男たちは一度も会ったことのない娼婦を夢で見て、夢から覚めて想起できるようになっており、未だ見ぬ阿弥陀仏を般舟三昧の中で見て、三昧から出て随念するという手順がこの譬えに示唆されていることを指摘した。つまり本経は阿弥陀仏の像を心の中に作って具象化することにより、それ以降でこの仏の随念が可能となるという過程を説いている。この過程の中で具象化を担う般舟三昧は仏随念の加行となり、仏随念は阿弥陀仏国に往生するための本行となっている。このような阿弥陀信仰に特徴づけられる修道論の中に位置し、阿弥陀仏を随念する加行となっていたのが般舟三昧の本来的な役割であったと論じた。

以上、般舟三昧は臨終見仏の発展形であり、阿弥陀仏を対象として、仏随念を実践するための加行となっていた。実に他方仏の像が成立していない当時の環境で、未だ見ぬ阿弥

陀仏を想起するために、先立つ記憶を手に入れるための修行徳目であったというのが、本研究の想定する般舟三昧の原初的な様相である。

続いて上記でまとめた般舟三昧の様相を編纂者的な観点から見直し、本經の思想的立場に関する仮説を立てる。その立場を最もよく示していると考えられるのが、般舟三昧が位置づけられていた修道論の枠組みである。それは「般舟三昧（加行）→仏随念（本行）→往生→無上正等覺」となっており、本經の本来的な立場が、この特徴的な修道論を説く者たち、つまり阿弥陀信仰者たちであったということを示している。定説によれば、本經の基調は般若空思想にあり、所説の般舟三昧は仏随念が空思想によって展開したものとされている¹。しかし今回再検討したように、仏随念が空思想によって展開したとみることはできない。般舟三昧（加行）は仏随念（本行）とは別の概念であり、浄土經典の説く臨終見仏から展開したものだからである。空思想を本經の基調とみることについても、《八千頌》に確認した有相的な態度への批判は考慮されなければならない。《八千頌》は有相的な態度で仏を作意することは執着があると否定的に説いていたが、この態度は阿弥陀仏を対象とする般舟三昧の場合と合致する。しかしその一方で、諸仏を対象とする場合には無相的な態度を説いており、本經では般舟三昧に関して有相無相の態度が両立していることになる。もし本經の基調が空思想であったならば、執着とみる有相的な態度などはそもそも説かず、無相的な態度で一貫すればよい。本經にあらわれている態度の両立は有相から無相へと思想的な変遷があったことを示しているとみるべきであり、空思想が基調であるというより、むしろ後に加わったという成立史的な段階をあらわしているのではないかと考える。

そこで再び注目することになるのが、色井（1963）の提示した見解である。これは櫻部（1991）によって過去にも注目され、訂正すべき点なども指摘されているが、考慮に値するとみられているのは、この見解が般舟三昧と空思想との本来的な関わりを否定している点にある。本經は現存する資料から眺めると、原初形態である行品ですら空思想と不可分に見える。しかし色井（1963）は本經に般若空思想との本来的な関わりはなく、大乘仏教の中で空思想が発展するにつれて次第に結びつきを強めたという見方をする²。本研究もそれと同じ見方をもって見直してみたい。そして空思想が本經と結びつきをもった要因とみられるものは、既に先行研究によって示されているように思われる。原形論が更新されて以降、般舟三昧は当初から諸仏を対象としていたのではなく、阿弥陀仏から諸仏へと次第に一般化していったとみられており³、本研究もこの説に賛同する。しかし当初から空思想が前提

¹ cf. 赤沼（1927ab）, Harrison（1978ab）, 末木（1989）, 末木（1992, 131）.

² cf. 櫻部（1991, 50）.

³ cf. 末木（1989, 327）, 梶山（1992, 296–297）.

であったかについては疑問がある。浄土経典は本来的に空思想との関連をもたないが、それでも従来より見仏を説いてきた。したがって、阿弥陀仏を見ようとする限りで空思想は必要なかったのである。ところが、その対象が諸仏へと一般化する際には何かしらの理論が裏付けとして必要となる。それこそが空思想であったのではないか。つまり、本経の基調とみるべき立場はもともと阿弥陀信仰にあり、後に空思想と融合して諸仏を見る三昧へと展開していったとみることができるのではないか。

さて本研究の興味は般舟三昧もさることながら大乘仏教の起源にある。そこで最後に本経に見る大乘仏教の展開度合いを測ってみたい。起源に興味がありながら、展開度合いを測ろうとすることについて、まずは起源の特殊さとの関連において説明しておきたい。大乘仏教の起源に関する捉え方については70年代後半より一変している。つまり、Schopen (1975)の研究以来、碑文の分析によっても、大乘仏教なる単一の教団は紀元五世紀以前に確認されておらず⁴、その起源というのは一つに集約できない多元的な運動と捉えられるようになっていく⁵。本来別々に活動していた複数の運動を起源と捉えれば、その解明には単一の起源に直線的に遡るよりも遥かに漠然としたかたちを想定してかからねばならない。そして各々に編纂された経典の分析から得られる情報も、複数ある内の一つの運動を反映するに過ぎないものとなる。また資料の分析から遡れる年代にも上限がある。大乘仏教を知る上で最も古い資料となる支婁迦讖訳で考えても二世紀後半が上限であり、ここから先は“off camera” (Nattier 2003, 13)の間となる。実際の運動はその間に起こったのであり、資料から遡れる上限よりもさらに遡って考えなければならない。しかし我々はどれほど遡った時点を想定すればよいのかすら知らない。つまるところ、大乘仏教の起源は本経のような初期大乘経典の分析からでも直接には論じられないということになる。しかし、本経の時点で大乘仏教がどれほどの展開を見せていたのかを知ることは可能であり、起源へと遡る道程としても意義のあることと思われる。そこで今回は大乘仏教の展開度合いを測るという方法を取ることにした。

本経本来の思想的立場が阿弥陀信仰にあったとみられることから、今回は阿弥陀仏を中心とした運動の展開度合いを見ることになる。その度合を測る指標となるものを挙げてみ

⁴ cf. Schopen (1979) .

⁵ Schopen (1975) 以降に大乘仏教の起源を論じた研究として、Schopen (1979) , Harrison (1993, 1995) , Nattier (2003) , Aramaki (2003) , Ruegg (2004) , Boucher (2008, 2013) , Allon&Salomon (2010) , 渡辺 (2010) , 岡田 (2001) , 下田 (1997, 2011, 2020) , Sasaki (1997) , 佐々木 (2011) , Bronkhorst (2012) などがある。尚、80年以前の学説、すなわち大衆部起源説 (前田 1903) に始まり、在家仏教起源説 (平川 1968) に至るまでの流れと、それ以降の学説の変遷に関しては渡辺 (2010, 184–198) にまとめられている。

ると、まず般舟三昧が臨終見仏の発展形という点である。つまり臨終見仏は本經の成立以前に既に存在していたということになる。また行品には 3C の用例の様に、往生による見仏の存在を前提とした記述が見られる。したがって本經に先行して編纂された浄土經典が既に存在したことは疑いない。望月（1930, 305–311）に代表されるように、本經を浄土經典最古とみる説もあるが、本研究では少なくとも《無量寿經》は本經に先駆けていたとみる。それは《無量寿經》と対比した場合に、この經典を差し置いて本經が阿弥陀信仰を生み出す母体となったとは考えられないからである。本經における阿弥陀仏の描写は定中で菩薩と対話する一度きりに過ぎない。つまり法蔵菩薩の誓いの内容や阿弥陀仏国の情景など、およそ信仰を形成する上での土壌ともなるべき物語というものが本經にはまったく説かれていない。本經に見る阿弥陀仏と菩薩の対話をきっかけに阿弥陀信仰が興り、後に《無量寿經》に見るような細かな設定が付けられたと見るよりも、《無量寿經》のような經典が母体となって阿弥陀信仰が形成され、その上に本經が成り立っていると見る方が理に適っている。

今回の考察結果が本經の原初形態の分析結果であることに鑑みると、理論上は支婁迦讖訳の二世紀（179 年）よりも更に遡った時点を論じていることになる。その年代が支婁迦讖の訳出年からどれほど遡るのかについては、半世紀から数世紀までが想定されており一致しない⁶。そしてこの問いに対して明確な答えが与えられることもないだろう。いずれにせよ重要なのは、二世紀よりいくらか遡って考えても、阿弥陀信仰の中では基本的な思想の形成どころではなく、既存の臨終見仏に代わる見仏形態を提唱するまでの展開を見せていたということである。

⁶ 150 年: 藤田（1970, 222–223）。

179 年からあまり遠く遡らない時期: 高田（1967, 427–428）。

二世紀前半から一世紀: 平川（1969, 114–115）。

数世紀: Harrison（1995, 55–56）。

付録 A

付録 A は『般舟三昧経』(T 418) の和訳と訳注である。訳出する範囲は本研究が対象とした行品である。和訳に際しては他の資料 (Tib., T 416, T 417, T 419) と比較し、異同などの問題が見られる場合は必要に応じて詳細を注記した。さらに同じく支婁迦讖が訳したとされる『道行経』に同一の訳語が認められる場合、『道行般若経詞典』(Karashima 2010) からの引用を注記した。底本に関しては、Harrison (1990, 221–249) によって高麗本が原形を留めていると指摘されていることを踏まえ、『高麗大蔵経』¹ の読みに従って翻訳し、他に『宋版磧砂大蔵経』第七卷 (No. 69) などを参照した。尚、これまでに刊行された本経の翻訳研究としては次のようなものがある。まず T 418 の翻訳として Harrison (1998: 英訳/完訳) がある。そして T 417 の翻訳には櫻部 (1974, 557–578: 抄訳)、Inagaki (1989: 英訳/完訳)、能仁 (2018: 完訳) がある。またチベット訳からの翻訳として Harrison (1990: 英訳/完訳)、林 (1994: 完訳)、梶山 (1992: 抄訳) がある。さらに漢訳諸本に共通する部分を抽出して訳したものとして西 (1972: 抄訳) がある。T 416 と T 419 の翻訳研究は未だ存在していない。

¹ 高麗本に関しては『高麗大蔵経』第七卷と『高麗大蔵経初刻本輯刊』巻五卷所収の『般舟三昧経』を参照した。

(2D: 904b24-b29) 仏陀は毘陀和 (**Bhadrāpāla*²) 菩薩に〔次のように〕告げた。

「もしある菩薩がおり、かれの思う対象 (仏) が現在するならば、十方の仏に集中力を向けよ。〔このようにして〕三昧に入るならば、あらゆる菩薩行 (**bodhisattva-caryā*³) を会得する。〔般舟〕三昧とは何かというと⁴、(1) 仏を対象とする作意 (**manasikāra*⁵) でもって仏に向かうことである。(2) 心 (**citta*) と注意力 (**smṛti*) とに乱れないことである⁶。(3) 智慧 (**prajñā*⁷) を得てから精進を捨てないことである。(4) 善知識たちと共に空〔性〕

² チベット訳 *bzang skyong* からの還梵。この *Bhadrāpāla* が本経における対告者である。この人物の詳細については Harrison (1990, 6. fn. 7) を参照。T 419 では「拔陂」と音写され、T 416 では「賢護」と訳される。

³ 原文は「一切得菩薩高行」。「菩薩高行」の語は法護訳『正法華経』に出ており、*bodhisattvacaryā* との対応が見られる。

普當學菩薩高行。得至如來至眞等正覺。(T 9, 122c29–123a01)

sarvā yūyam bodhisattvacaryām caradhvaṃ bhaviṣyatha yūyam tathāgatā arhantaḥ samyakṣambuddhāḥ.
(SP 378, 7)

⁴ 原文は「何等爲定意」。T 419 は「何等爲一法。見在佛定意名爲止定住者」、T 416 には「云何名爲菩薩思惟一切諸佛現前三昧」とある。またチベット訳には *de la da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa zhes bya ba'i ting nge 'dzin de gang zhe na/* とある。

⁵ 原文は「從念佛因緣向佛」。チベット訳対応箇所には *sangs rgyas la dmigs pa'i sems yid la byed pa/* とある。「念」の語は『道行経』に *manasi-Kṛ* の訳語として出る。

cf. Karashima 2010, 340: 念(niàn)(3) “mental concentration, mental application”#

HD. 7.421.*

Lk. 456b24. 若復有菩薩壽如恒中沙劫布施如前，持戒具足。若復有菩薩求深般若波羅蜜，從念起說經，其功德出彼上。(p)

AS. 171.23 = R. 344.18 = AAA. 703.15. *manasikāra*~ (“mental concentration”); ZQ. 496a15. 念; Zfn. 529a23. 念{般若波羅蜜}起; not found at Kj. 566b16.; not found at Xz(I). 829c7.; not found at Xz(II). 903c6.; Sh. 644c15. 如理作意思惟; Tib.Pk. 204a7 = D. 189b7. *yid la byed pa*.

Lk. 457a12. 是本無不增不減。常隨是念，不遠離，是即爲近阿耨多羅三耶三菩坐。(p)

AS. 174.26 = R. 351.3 = AAA. 715.8. *manasikāra*~; ZQ. 496b15. 念; Zfn. 529c23. 念; Kj. 567a18. 念; Xz(I). 830c25. 作意; Xz(II). 904b28. 作意; Sh. 646a16. 作意; Tib.Pk. 208a6 = D. 193a7. *yid la byed pa*.

⁶ 原文は「念意不亂」。「念意」はチベット訳相当箇所 *sems mi g-yeng ba/ dran pa nye bar gnas pa/* とあるのを鑑み、念 (**citta*) と意 (**smṛti*) の二つとして理解する。T 419 は「念意不邪冥不亂」となっている。

⁷ 原文は「從得黠不捨精進」。チベット訳対応箇所には *shes rab thob pa/ brtson 'grus mi gtong ba/* とある。「黠」の語は『道行経』にも出る。

cf. Karashima 2010, 528–529: 黠(xiá) “wise, clever; wisdom”

を修習することである。(5) 睡眠を除くことである。(6) 群がらないことである。(7) 悪友たちを避けることである。(8) 善知識たちに近づくことである。(9) 乱れることなく精進することである。(10) 食事に満足を知ることである。(11) 衣服を貪らないことである。(12) 寿命を惜しまないことである。

(2E: 904b29-c04) (13) 孤独にして親族を避けることである。(14) 故郷を離れることである。(15) 慈しみ (**maitrī*) を修習し、哀れみ (**karuṇā*) と喜び (**muditā*) とを修得して、平等性 (**upekṣā*) をもって行うことである⁸。(16) 煩悩を棄てることである。(17) 禪定を修習することである。(18) 容色に付き随わないことである。(19) 〔五〕蘊に固執し

HD. 12.1363a(1)(抱樸子, 後漢書 etc.); ZY 251(1996, No.2): 141(安世高譯, 支婁迦讖譯), Fang Yixin 1997: 145f.(安世高譯, 支婁迦讖譯 etc.), Zhou/Wang 1998 : 32(顏氏家訓)

Lk. 447a16. 譬若男子得象, 觀其脚。於須菩提意云何? 是男子爲黠不?”須菩提言: “爲不黠。”(p)

AS. 116.17 = R. 235.8 = AAA. 504.6. *pañḍita-jātīya*~ (“intelligent” [cf. AsP.tr.II 163 = AsP.tr. 84]); ZQ. 490c2. 黠(←點: a misprint of the Taisho Edition); not found at Zfn.; Kj. 556a19. 智; Xz(I). 810c16. 黠; not found at Xz(II). 891a28.; Sh. 625a22. 智; Tib.Pk. 139b5 = D. 129b7. *mkhas pa'i rang bzhin can*.

Lk. 456a2. (An irreversible bodhisattva) ...心大無有極, 安隱堅住其地, 無有能降之者。作是住, 無有能過是黠者。(p)

AS. 168.9 = R. 337.13 = AAA. 689.19. (*asamhārya*~) *jñāna*~ (“his cognition [becomes insuperable]” [AsP.tr.II 206 = AsP.tr. 128]); not found at ZQ. 495c13. (無能過者); not found at Zfn. 528b17. (無有能過); Kj. 565c1. (不可壞)智慧; Xz(I). 828b12. (無動無退轉)智; Xz(II). 902c9 = Xz(I); Sh. 643b24. (不壞)智; Tib.Pk. 200b2 = D. 186b2. (*mi 'phrogs pa'i*) *ye shes*.

⁸ 原文は「習等意得悲喜心護行」。チベット訳対応箇所には *byams pa la kun tu sten pa/ snyin rje thob pa/ dga' ba la gnas pa/ btang snyoms sgom pa/* とあり、四無量心を説く部分となっている。また T 419 が *upekṣā* にあたる部分を「已行護心」と訳すことから、原文の「護」が *upekṣā* とみるべきであろう。しかし『道行經』で「護」の語は *muditā* の訳語として出るようである。

cf. Karashima 2010, 218–219: 護(hù)(1) “care, protection; takes care of, protects” (a translation of BHS. *muditā* “joy, sympathetic joy”)

HD. 11.436b(2)(史記 etc.);

Lk. 439b8. 三千大千國土人悉念慈、哀、護、等心, 無過菩薩、摩訶薩上頭所施, 是即爲極尊。(p)

AS. 79.9 = R. 155.16 = AAA. 361.5. *catur~ apramāṇa*~ (“the four Unlimited” [AsP.tr.II 131 = AsP.tr. 50]); ZQ. 487a8. 四等心; Zfn. 521a10. 慈、哀、等、護心; Kj. 549a7. 慈、悲、喜、捨心; Xz(I). 795b24. 四無量; Xz(II). 882b11. 四無量; Sh. 611a16. 四無量行; Tib.Pk. 94a3 = D. 87b7. *tshad med pa bzhi*.

Lk. 461c19. (The true bodhisattva-mahāsattvas) 是彼壞菩薩輩所在彼處, 常當持慈心向, 常當哀之, 令安隱, 愍傷之, 慈念之。常當自護, 自念: “使我無得生是惡心。……”(p)

≠AS. 196.10 = R. 395.14 = AAA. 784.4. *mudita-citta*~ (“a thought of joy in sympathy” [AsP.tr.II 235 = AsP.tr. 157]); ZQ. 499b4 = Lk; Zfn. 534c17. 護之; Kj. 571b12. 喜; Xz(I). 839b10. 喜; Xz(II). 910a17. 喜; Sh. 653c18. 大喜心; Tib.Pk. 232b3 = D. 216a4. *dga' ba'i sems*.

ないことである⁹。(20)〔十二〕処に執着しないことである¹⁰。(21)四大に固執しないことである¹¹。(22)注意力(**smṛti*¹²)を失わないことである。(23)〔高貴な〕生まれを

⁹ 原文は「不受陰」。チベット訳相当箇所には *nam par 'jig pa* とある。「受」の語は『道行經』に *pari-Grah* の訳語として出る。

cf. Karashima 2010, 454–456: 受(*shòu*)(1) “embraces, holds, grasps; perceives”

HD. 2.880b(2)(詩經 etc. “receives”)

Lk. 426a26–29. 色不受；痛痒、思想、生死、識不受。不受色者，爲無色。不受痛痒、思想、生死、識者，爲無識。般若波羅蜜不受。何以故不受？如影無所取。無所得故，不受。(p)

AS. 5.1f. = R. 8.13f. = AAA. 49.2f. *a-parigrhīta*~ ... *a-parigrhīta* ... *a-parigrhīta* ... *a-parigrhīta* ... *a-parigrhīta* (“is not appropriated” [AsP.tr.II 85 = AsP.tr. 3]); ps-ZQ. 479b1. 以不取(色)。不取(痛想行識)。...(色)無彼受。(痛想行識)無有彼受。.....(明度之道)無有彼受。...(吾[s.e. for 不?])受; Zfn. 509a13f. 不受...不受...不受; Kj. 537c9f. 無受...無受...無受; Xz(I). 764b11f. 不可攝受...不可攝受...不可攝受; Xz(II). 866b21f. 不應攝受...不應攝受...不應攝受...不可攝受; Sh. 588a6f. 不受...

不受...不受; Tib.Pk. 5a5f. = D. 4b6f. *yongs su gzung ba ma mchis so* ... *yongs su gzung ba ma mchis so*. Lk. 426b3. 復次，舍利弗！薩芸若不受。何以故？菩薩不當持想視薩芸若。設想視者，爲不了，爲如餘道人，不信薩芸若。(p)

AS. 5.6 = R. 8.20 = AAA. 50.6. *a-parigrhīta*~; ps-ZQ. 479b9. 無彼受; Zfn. 509a18. 不受; not found at Kj. 537c13.; Xz(I). 764b18. 不攝受; Xz(II). 866b29. 不攝受; Sh. 588a12. 無所取; Tib.Pk. 5b2 = D. 5a2. *yongs su gzung ba ma mchis te*.

Lk. 426b7. 正使餘道人信佛，信佛已，反持小道入佛道中。入佛道中已，不受色。痛痒、思想、生死、識不受。(p)

AS. 5.9 = R. 9.1 = AAA. 50.18. *parigrhīte* (“takes hold of [form, etc.]” [cf. AsP.tr.II 85 = AsP.tr. 3]); ps-ZQ. 479b12. 取; Zfn. 509a20. 受; Kj. 537c16. 受; Xz(I). 764b24. 取; Xz(II). 866c6. 取; Sh. 588a15. 受; Tib.Pk. 5b3 = D. 5a3. *yongs su (mi) 'dzin*.

¹⁰ 原文は「不入衰」。チベット訳対応箇所には *mngon par mi chags* とある。「入」の語は『道行經』に *abhi-ni-Viś* の訳語として出る。しかし「衰」の語は『道行經』において *indriya* の訳語として出るようである。

cf. Karashima 2010, 389: 入(*rù*)(3) “absorbs”(?) Lokakṣema rendered abhiniveśa (“strong attachment” [BHSD, s.v.]), which is a derivative of the verb *√viś* (“to enter”), literally as 入(“enters”).

Lk. 451a23. 色、痛痒、思想、生死、識，不受不入；須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、薩芸若道，不受不入。(p)

AS. 140.10 = R. 281.15 = AAA. 576.24. *-abhiniveśa*~ ... *-abhiniveśa* (“strong attachment” [BHSD, s.v.]); ZQ. 492b-3. 入.....入; not found at Zfn.; Kj. 559c10. 著; Xz(I). 819a1. 執著.....執著; Xz(II). 896a29 = Xz(I); Sh. 633b8. 著; Tib.Pk. 168b8 = D. 156b3. *mngon par (ma) zhen bar bya ba* ... *mngon par (ma) zhen bar bya ba*.

Lk. 451a26. 佛言：“云何，須菩提！若見(←見若)羅漢所入處不？”(p)

AS. 140.16 = R. 282.2 = AAA. 577.17. *yatra parigrahaṃ vā 'bhiniveśaṃ vā kuryāḥ* (“[Do you view Arhatship as a real dharma which] you could take hold of, or settle down in?” [cf. AsP.tr.II 182 = AsP.tr. 103]); ZQ. 492c1. 所入; not found at Zfn.; Kj. 559c15. 可受可著; Xz(I). 819a9. 可攝受執著; Xz(II). 896b5 = Xz(I); Sh. 633b13 = Kj; Tib.Pk. 169a5 = D. 156b6. *gang la yongs su 'dzin pa'am mngon par zhen par byed pa.*

Lk. 451a27. 須菩提言：“不見。天中天！不見是法我所入處。” (p)

AS. 140.18 = R. 282.4 = AAA. 577.23. *yaṃ parigrhṇīyāṃ abhiniveśyaṃ vā 'rhattvam* (“[I do not view Arhatship as a real dharma which] one could take hold of, or settle down in” [cf. AsP.tr.II 182 = AsP.tr. 103]); not found at ZQ. 492c1.; not found at Zfn.; Kj. 559c16. 可生著; Xz(I). 819a10. 可於其中攝受執著; Xz(II). 896b6 = Xz(I); Sh. 633b15. 亦(不)可受亦(不)可著; Tib.Pk. 169a6 = D. 156b7. *gang la yongs su 'dzin pa'am mngon par zhen par 'yur pa.*

cf. Karashima 2010, 312: 六衰(liù shuāi)“the six kinds of decay, decline, degeneration, calamities”

not found at HD. 2.40.; cf. Soothill 638(“the six ruinners, i.e. the attractions of the six senses, idem 六塵, 六賊”), Nakamura 1456a = Nakamura2 1769a (= 六塵 *ṣaḍ viśayāḥ* “six spheres [of the senses]; 六入 *ṣaḍ āyatanāni* “the six senses [sense-organs and their respective objects]”, BHSD, s.v. *āyatana*)

Lk. 427a24~26. 幻如色。色六衰、五陰。如幻痛痒、思想、生死、識。作是語，字六衰、五陰。(p)

AS. 9.8., 10 = R. 17.3, 5 = AAA. 72.16, 19. *ṣaḍ-indriya~* (“the six sense organs” [AsP.tr.II 88 = AsP.tr. 6]); ps-ZQ. 480b18. 六根; Zfn. 510a15., 16. 六衰; Kj. 538c4. 六情; Xz(I). 766a15. 六根; Xz(II). 868a7. 六根; Sh. 589b25. 六根; Tib.Pk. 10a5 = D. 9b7. *dbang po drug.*

Lk. 474a2. 爾時，即於坐上得六萬三昧門。何等爲三昧門？…… 譬如大海水不可量多慧所入三昧、在須彌山功德莊飾三昧、五陰六衰無形觀三昧、…………… (p)

not found at AS. 255.6 = R. 516.15 = AAA. 977.10.; ZQ. 505c6. (五陰四大)六衰(無形觀定); not found at Zfn.; not found at Kj. 584c20.; not found at Xz(I).; not found at Xz(II).; not found at Sh. 674b24.; not found at Tib.Pk. 304b3 = D. 279a3.

¹¹ 原文は「不念四大」。T 419 は「諸大」、T 416 では「諸界」、チベット訳には *khamś rñams* とあるが、この場合の諸界は六界（または、その中の四界）を指す。「四大」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 462: 四大(sì dà)“the four great (physical elements which constitute the material world, viz. earth, water, fire, and air[or wind])”

HD. 3.570b(明報應論, 圓覺經); Krsh(2001). 253;

Lk. 470a20. 四大本無形。菩薩隨般若波羅蜜教，當如是。(p)

not found at AS. 235.4~29 = R. 475.6~477.8 = AAA. 893.20~900.22.; ZQ. 503b16. 四大; not found at Zfn.; not found at Kj. 579b15~c13.; not found at Xz(I). 859c-14~860c19.; not found at Xz(II).; not found at Sh. 667a17~b25.; not found at Tib.Pk. 279b3~281a1 = D. 257b5~258b6.

¹² 原文は「不失意」。チベット訳相当箇所には *dran pa mi g-yeng ba* とある。

食らないことである¹³。(24) 不浄なものを理解することである。(25) 十方の人を見捨てないことである。(26) 十方の人を活かすことである。

(2F: 904c04-c10) (27) 十方の人をこれは我がものであると思うことである。(28) 十方の人を我がものでないと思うことである。(29) あらゆるものに固執しないことである¹⁴。(30) 戒を無闇にもとめないことである。(31) 三昧の実践を繰り返すことである。(32) 經典の読誦を望むことである。(33) 犯戒に陥らないことである。(34) 三昧を失わないことである。(35) 教えを疑わないことである。(36) 仏に反しないことである。(37) 教えを却けないことである。(38) 比丘の僧団を乱さないことである¹⁵。(39) 妄語を離れることである。(40) 聖者たちを助けることである¹⁶。(41) 愚か者たちを避けることである

¹³ 原文は「不貪性」。チベット訳対応箇所には *rigs smra bas snyems par mi byed/* とある。「性」には *kula, jāti, gotra* などの原語が想定されている。cf. "性" *Digital Dictionary of Buddhism*, <http://www.buddhism-dict.net/cgi-bin/xpr-ddb.pl?q=性>.

¹⁴ 原文は「不欲受」。チベット訳対応箇所には *yongs su mi 'dzin pa* とある。「受」の語は *pari-Grah* の訳語として『道行經』に出る。cf. fn. 9.

¹⁵ 原文は「不亂比丘僧」。「比丘僧」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 36: 比丘僧(*bī qiū sēng*; EH. *bjiəi[bjiəi-] khju səng* > QYS. *bi⁴[bi-⁴] khjəu səng* a transliteration of Skt. *bhikṣu-saṅgha* ("a community of Buddhist monks")) Cf. 摩訶比丘僧(*mó hē bī qiū sēng*).

not found at HD. 5.262.; DK. 6.802b(清代)

Lk. 432b2. 佛語釋提桓因: “云何, 拘翼! 閻浮利人中有幾所人, 信佛, 信法, 信比丘僧(v.l. 比丘僧者)?”(p)

AS. 30.7 = R. 59.21 = AAA. 213.14. *saṃgha*~; ZQ. 484a23. 比丘僧; Zfn. 514c7. 比丘僧; Kj. 542c11. 僧; Xz(I). 775b7. 僧; Xz(II). 873c20. 僧; Sh. 596b5. 僧; Tib.Pk. 35b3 = D. 33b5. *dge 'dun*.

Lk. 441c13. 斷比丘僧者, 爲受不可計阿僧祇之罪。(p)

AS. 92.13 = R. 183.18 = AAA. 401.18. *tathāgata-śrāvaka-saṃgha*~ (“the community of the disciples of the Tathāgata” [cf. AsP.tr.II 141 = AsP.tr. 60]); ZQ. 488b1. 比丘僧; Zfn. 523b7 = Lk; Kj. 551a29. 僧寶; Xz(I). 801b25. 僧寶; Xz(II). 885a14. 僧; Sh. 615c20. 聲聞一切僧寶; Tib.Pk. 111a6 = D. 103b5. *de bzhin gshegs pa'i nyan thos kyi dge 'dun*.

Lk. 451a12. 佛說是經時, 五百比丘僧、二(←三)十比丘尼皆得阿羅漢。(p)

AS. 139.26 = R. 280.13 = AAA. 575.3. *bhikṣu*- (“monk” [AsP.tr.II 181 = AsP.tr. 102]); ZQ. 492b-10. 比丘; not found at Zfn.; Kj. 559b24. 比丘; Xz(I). 818c2. 苾芻; Xz(II). 896a13. 苾芻; Sh. 633a20. 苾芻; Tib.Pk. 168a5 = D. 156a1. *dge slong*.

¹⁶ 原文は「助道德家」。チベット訳対応箇所には *'phags pa mams* とある。「道德」や「○○家」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 115: 道德(*dào dé*) “the virtues of the (Buddha) Path” Cf. 至德(*zhì dé*), 有德人 *yǒu dé rén*, 有德之人 *yǒu dé zhī rén*).

る。(42) 世間の話は喜ばず、聞くことを望まないことである。(43) 出世間の話は詳細に聞くことを望み、そして喜ぶことである。(44) 理由によって畜生に生じたならば、〔話自体〕を聞こうと望まないことである¹⁷。

HD. 10.1084a(韓非子 etc.); DK. 11.134c(周易 etc.); Krsh(1998). 87;

Lk. 440a14. 菩薩道德之人, 當([= mss.]←常)知: “過去、當來、今現在法無所取、……”(p)

AS. 82.9 = R. 161.19 = AAA. 370.6. *bodhisattva-yānika~ pudgala~* (“a person who belong to the vehicle of the bodhisattvas”); ZQ. 487b4. 求闍士道有徳人; Zfn. 521c14. 道德之人; Kj. 549c3. 菩薩; Xz(I). 796c17. 菩薩乘善男子等; Xz(II). 882c28. 菩薩; Sh. 612a25. 菩薩、摩訶薩; Tib.Pk. 98a1 = D. 91b1f. *byang chub sems dpa'i theg pa can*.

Lk. 476a6. 是時薩陀波倫菩薩悉受五百女人及五百乘車珍寶, 既受, 用道德故。既受已, 薩陀波倫菩薩欲持上師, ……(p)

not found at AS. 256.16 = R. 519.12 = AAA. 979.29.; not found at ZQ. 506c23.; not found at Zfn.; not found at Kj. 585a29.; not found at Xz(I).; not found at Xz(II).; not found at Sh. 675a9.; not found at Tib.Pk. 306a5 = D. 280b2.

cf. Karashima 2010, 248: 家(jiā)“one (or those) who …”(used after a verb or adjective, or a verbal or adjective phrase, to indicate a specific class of persons).

HD. 3.1458.*; Zhu 160f(支謙譯 etc.), ZY 251(1996, No.2): 142(安世高譯, 道行般若經), Hu 2002 : 271f(論衡, 安世高譯); cf. also ZY 318(2007, No.3): 285f.

Lk. 461c4. 須菩提! 菩薩當作是知: 如擔死人種; 無所復中直, 反呼是菩薩有短; 是爲菩薩怨家; 是爲厭菩薩。(p)

€AS. 195.27 = R. 394.16 = AAA. 783.1. *bodhisattva-pratirūpaka* (“a mere fake of a Bodhisattva” [AsP.tr.II 235 = AsP.tr. 157]); ZQ. 499a27. 闍士怨家; Zfn. 534c4 = Lk; Kj. 571b5. 似像菩薩; Xz(I). 839a28. 雖似菩薩、摩訶薩相; not found at Xz(II). 910a9.; Sh. 653c5. 形像菩薩; Tib.Pk. 232a3 = D. 215b4. *byang chub sems dpa'i gzugs brnyan*.

Lk. 464b11. 若求菩薩道家與求羅漢道人共諍。爾時, 弊魔自念: “菩薩離薩芸若遠。離遠, 亦不大遠。”菩薩又與菩薩共諍。爾時, 弊魔念言: “兩離佛遠。”(p)

AS. 207.30 = R. 420.3 = AAA. 812.12. *bodhisattvo mahāsattvah*; ZQ. 500b22. 闍士; not found at Zfn.; Kj. 573c5. 求佛道者; Xz(I). 845a21. 菩薩、摩訶薩; Xz(II). 913a2. 菩薩; Sh. 657c21. 菩薩乘人; Tib.Pk. 246a2 = D. 228a3. *byang chub sems dpa' sems dpa' chen po*.

¹⁷ 原文は「從因縁畜生生不欲聞」。難読箇所である。ここでは原文に則しての訳出を試みた。直前の項目である(42)と(43)は人間に生まれた場合、当該箇所(44)が畜生に生まれた場合を述べたものと理解する。しかし「畜生」の解釈によって文意が変わってくる。畜生に関してハリソンは *tiracchāna-kathā* に相当する語が原典にあったと想定する。*tiracchāna-kathā* とは馬鹿話のことである (see Harrison 1990, 27. fn. 5; Harrison 1998, 111. fn. 2; PTSD, s.v., *-kathā* "animal talk"; wrong or childish talk in general)。他の資料を参照すると、T 419 には「畜生音遠棄辟」とあるが、すべての資料に畜生の語が見られるわけではない。T 416 は「雖聞語言。意不樂聽」、チベット訳には *gtam rgyud ma yin pa rnam par spong ba/* とあり、特にチベット訳では伝承された話 (Das:

(2G:904c10-c14) (45) 六和〔敬法〕を修習することである¹⁸。(46) 五〔解脱処〕を行うことである¹⁹。(47) 十悪を離れることである。(48) 十善を修習することである。(49) 九悩を理解することである。(50) 八精進を行うことである。(51) 八懈怠を捨てることである。(52) 八勝処 (**abhibhāvātana*) を修習することである²⁰。(53) 九想観と八大人覺を修習することである。そして、(54) 禅定に執着しないことである。(55) 学んで驕らないことである²¹。(56) 我慢を捨てることである。(57) 説法を聞くことである。(58)

gtam rgyud, ākhyāna, oral tradition, legend. see also Mvy No. 7128) でないものを棄てることを述べている。このチベット訳には異読があり、プダク写本では *bvol song gis rgyud rnams spong ba/* となっている。したがってハリソンの想定通り、*tiracchāna* に相当する語が原典に記されていたとみる方がよい。そしてこの語は畜生として理解することもできるが、一方で本筋から外れている様子を表す場合がある (cf. PTS: *tiraccha*, (adv.)... across, obliquely; in °*bhūta* deviating, going wrong, swerving from the right direction)。以上を踏まえると、「〔伝承から〕はずれて伝わったものを聞こうと望まない」というのが原意であった可能性が高い。

¹⁸ 原文は「六味習」。まず原文に「六味」とあることに関して、『十住毘婆沙論』(T 26, 87c03f.) に見る対応箇所を参照すると、「三十修六和敬法。三十一常修習五解脱處。三十二除九瞋惱事。三十三斷八懈怠法。三十四修八精進。三十五常觀九相。三十六得大人八覺...」とあり、「六味」に対応する語を「六和」としていることがわかる。このことから原文の「六味」が「六味」の誤写である可能性が指摘できる。また T 419 は対応箇所を「六堅法已習」と訳しており、訳語に混乱が見られる。ハリソンはチベット訳対応箇所に *dga' bar byed pa'i chos drug la brten pa* とあることから、ここに *sārāyaṇīya-dharma/saṃrañjanīya-dharma* (see BHSD, s.v.) の語を想定し、T 419 に「六堅法」とあるのは、*sārāyaṇīya* を *sāra* と誤って理解したためとみる (Harrison 1990, 27. fn. 6)。今回と同様の混乱は《維摩經》にも見られる。すなわち原典に *saṃrañjanīyadharmābhiniṣṭhito'dhyāsayah* (VN 43, 3) とある箇所が、羅什訳には「於六和敬起質直心」(T 14, 543c20) とあるのに対し、支謙訳では「行六堅法不斷學意」(T 14, 525a22) となっており同様の混乱が見られる。尚、これら二つは後代の注釈では同一視されることがある。cf. 『瑜伽論記』「六堅法者。即六和敬也」(T 42, 815b02-b03)。

¹⁹ 原文は「為五習」。T 419 は「五度脱常當習」、T 416 では「熏修五解脱法」となっている。チベット訳対応箇所には *rnam par grol ba'i skye mched lnga sten pa/* とある。

²⁰ 原文は「爲習八便」。当該箇所は他の漢訳や『十住毘婆沙論』の対応箇所 (cf. fn. 18) には存在せず、チベット訳に *zil gyis gnon pa'i skye mched brgyad la kun tu sten pa/* とあるのに相当する。したがって「八便」というのが八勝処 (*aṣṭāv abhibhāvātana*) の訳語であるとみなければならない。尚、高麗本は「八便」、磧沙本などは「八使」とする。

²¹ 原文は「聞不貢高」。「貢高」の語は『道行經』にも出る。
cf. Karashima 2010, 187-188: 貢高(gòng gāo)“pride, arrogance; is proud, arrogant” (an alliterative compound?).

HD. 10.81b(百喻經); DB 322f.(百喻經, 敦煌變文 etc.), DWYC 115f.(敦煌變文), ZHYL 166f.(中本起經 etc.), Zhu 107(道行般若經 etc.), ZY 229(1992, No.4): 304(do.), Yan Qiamao 1997: 74(六度集經 etc.),

教えを聞くことを望むことである。(59) 教えを実践することを望んで、時の経過に惑わされないことである。

(2H: 904c14–c19) (60) 身体の特徴に執着しないことである。(61) 十方の人から離れて執着を望まないことである。(62) 寿命を貪らないことである。(63) 〔五〕蘊を理解して随わないこと、あるいは、(64) ものに随わないことである。(65) 涅槃を求めて輪廻は望まないことである²²。(66) おおいに輪廻を畏れることである。(67) 〔五〕蘊を賊の

TWYC 141(酉陽雜俎, 敦煌變文), Krsh(1998). 166, ZHY 1(2000): 227f.(文殊師利問菩薩署經 etc.), Hu 2002: 90(般舟三昧經).

Lk. 431b27. 是善男子、善女人.....自在所爲, 所語如甘露, 所語不輕, 瞋恚不生, 自貢高不生。(p)

AS. 27.8 = R. 53.16 = AAA. 197.18. *māna*- (“pride”); ZQ. 483c22. 貢高; Zfn. 514a11. 自貢高; Kj. 542a24. 我慢; Xz(I). 773c7. 諂誑矯; Xz(II). 872c28. 諂誑矯(v.l. 矯); Sh. 595b2. 我慢; Tib.Pk. 31b7 = D. 30a6. *nga rgyal*.

Lk. 431c2. 用學般若波羅蜜故, 不受(read 愛?)自瞋恚, 不受(read 愛?)自貢高, 不受(read 愛?)自可。(p)

AS. 27.10 = R. 53.18 = AAA. 198.6. *māna*~; not found at ZQ. 483c23.; Zfn. 514a14. (不愛)貢高; not found at Kj. 542a25.; not found at Xz(I). 773c9.; not found at Xz(II). 873a1.; not found at Sh. 595b3.; Tib.Pk. 31b8 = D. 30a7. *do*.

Lk. 441c20. 斷般若波羅蜜者, 復有四事。何謂爲四? 隨惡師所言, 一; 不隨順學, 二; 不承至法, 三; 主行誹謗, {四}索人短, 自貢高, <四>。(p)

AS. 92.22 = R. 184.10 = AAA. 403.8. *ātmoṭkarṣin*- (“one who exalts himself” [AsP.tr.II 141 = AsP.tr. 61]); SC.11. [a]tmuk(a)[r]ṣak(o) (“do.”); ZQ. 488b5. 自高(v.l. 自貢高); Zfn. 523b14 = Lk; Kj. 551b5. 自高其身; Xz(I). 801c3. 好自高舉; Xz(II). 885a21. 自讚; Sh. 615c29. 執著我相; Tib.Pk. 111b4 = D. 104a3. *bdaḡ la bstod*(D. *stod*) *cing*.

²² 原文は「求無爲不欲生死」。ここでは「涅槃（無為）を求める」とあるが、チベット訳対応箇所には「涅槃を望まないこと」*mya ngan las 'da' ba mi 'dod pa'* とある。「生死」は『道行經』に *saṃsāra* の訳語として出る。

cf. Karashima 2010, 421–422: 生死(*shēng sǐ*)“birth and death” (a translation of Skt. *saṃsāra*“passing from one state of existence to another, transmigration.” In older Chinese translations, the word 生死 often corresponds to Skt. *saṃskāra*, which indicates that its Middle Indic form *saṃkhāra* was confused with *saṃsāra*.) Cf. 牢獄(*láo yù*)

HD. 7.1493b(7)(晉代道安《<人本欲生經>序》 etc.)

Lk. 456b14. 菩薩念深般若波羅蜜, 如是一日心不轉者, 却生死若干劫。(p)

AS. 171.8 = R. 343.19 = AAA. 700.20. *saṃsāra*~; not found at ZQ. 496a10.; Zfn. 529a13. 生死; Kj. 566b2. 生死之難; Xz(I). 829b21. 生死流轉; Xz(II). 903b18 = Xz(I); Sh. 644b27. 輪迴; Tib.Pk. 203b4 = D. 189a6. *'khor ba*.

ようであると思うことである。(68) 四大を〔毒〕蛇のようであると思うことである。(69) 十二処を空〔村〕のようであると思うことである。(70) ながく三界にいても安穩を得ないことである。(71) 涅槃の獲得を忘れないことである。(72) 貪欲を望まないことである。(73) 輪廻の放棄を願うことである。

(2I: 904c19–c25) (74) 人の諍いに随わないことである。(75) 輪廻に堕ちることを望まないことである。(76) 常に仏の前に立つことである。(77) 身体を受けても夢の如きものだと思うことである。(78) 信をもつことで二度と疑わないことである。(79) 心に違和感がないことである²³。(80) あらゆる表象 (**saṃjñā*²⁴) が滅することである。(81) 過去、未来、現在を等しいと考えることである。(82) 常に諸仏の功德を思い返す (**anu-Smṛ*) ことである²⁵。(83) 帰依して仏に依ることである²⁶。(84) 三昧に自在なことである。(85)

²³ 原文は「意無有異」。チベット訳対応箇所には *sems las su rung ba* とある。この項目は T 419 と T 416 には存在しない。

²⁴ 原文は「一切滅思想」。「思想」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 459: 思想(*sī xiǎng*)“perception, recognition”# (a translation of Skt. *saṃjñā*) Cf. 念思想(*niàn sī xiǎng*)

HD. 7.444a(*[公羊傳 etc.])

Lk. 426a19. 菩薩行般若波羅蜜，色不當於中住；痛痒、思想、生死、識不當於中住。(p)

AS. 4.27 = R. 8.5 = AAA. 47.4. *saṃjñā*~ (“perception”); ps-ZQ. 479a24. 想; Zfn. 509a10. 思想; Kj. 537c5. 想; Xz(I). 764b1. 想; Xz(II). 866b12. 想; Sh. 588a1. 想; Tib.Pk. 5a1 = D. 4b2. 'du shes.

Lk. 427c18. 色無著，無縛，無脫。痛痒、思想、生死、識無著，無縛，無脫。(p)

AS. 11.11 = R. 22.1 = AAA. 91.8. *do.*; ps-ZQ. 481a3. 想; Zfn. 510c6. 思想; Kj. 539a10. 想; Xz(I). 767a4. 想; Xz(II). 868c1. 想; Sh. 590b2. 想; Tib.Pk. 13a1 = D. 12b1. *do.*.

Lk. 437a18. 行般若波羅蜜者，不壞色無常視，不壞痛痒、思想、生死、識無常視。何以故？本無故。(p)

AS. 57.20 = R. 113.9 = AAA. 299.22. *do.*; ZQ. 486a5. 五陰; Zfn. 518c26. 思想; Kj. 546c8. 想; Xz(I). 785a6. 想; Xz(II). 879b18. 想; Sh. 605a18. 想; Tib.Pk. 67b3 = D. 64a2. 'du shes.

²⁵ 原文は「常念諸佛功德」。チベット訳対応箇所には *sangs rgyas thams cad rjes su dran pa/* とある。

²⁶ 原文は「自歸爲依佛」。「自歸」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 666: 自歸(*zì guī*)“puts one's trust in, relies upon”

HD. 8.1337a(史記 etc.); DK. 9.406a(漢書 etc.)

Lk. 452b13. 菩薩謙苦安隱於世間護，爲世間自歸，爲世間舍，爲世間度，爲世間臺，爲世間導。(p)

AS. 146.27 = R. 293.18 = AAA. 595.27. *śaraṇa*~ (“refuge” [AsP.tr.II 188 = AsP.tr. 108]); ZQ. 493b5. 自歸; not found at Zfn.; Kj. 561a-4. 歸; Xz(I). 821a10. 歸依; Xz(II). 897b26. 歸依; Sh. 635c22. 歸向; Tib.Pk. 176a1 = D. 163a2. *skyabs* (Pk. *skyobs* [s.e.]).

Lk. 452b17. 何等爲世間自歸？生、老、病、死悉度之。是爲世間自歸。(p)

仏の身体の特徴にとらわれないことである。(86) ものはすべて等しいと考えることである。(87) 世間と諍いのないことである。(88) やるべきことに対して言い争いがいいことである。(89) 原因と結果によって「ものごとが」生じていると把握し理解することである。(90) 仏地「という修行階梯」から「無上正等覚に」至るに、法に対する容認(**kṣānti*)を得ることである²⁷。

(2J: 904c25–905a03) (91) 法界に入ることである²⁸。(92) 空なる我(**ātman*)を理解すること²⁹、人は存在するのでもなく、滅するのでもないと考えることである。(93) 自

AS. 147.3 = R. 294.7 = AAA. 596.18. *do.*; ZQ. 493b7. 自歸, not found at Zfn.; Kj. 561b7. 歸; Xz(I). 821b5. 歸依; Xz(II). 897c10. 歸依; Sh. 636a7. 歸向; Tib.Pk. 176a8 = D. 163b1. *skyabs*.

Lk. 478b5. 書時, 當得好筆, 書好素上。當自歸, 承事, 作禮, 供養<好華>、好香、成搗雜香、澤香、繒綵、華蓋、旗幡。(p)

AS. 260.18f. = R. 528.4f. = AAA. 990.3f. *satkartavyā gurukartavyā māṇayitavyā pūjayitavyā 'rcayitavyā 'pacāyitavyā* (“one should honour, revere, adore and worship it” [AsP.tr.II 299 = AsP.tr. 224]); ZQ. 508b6 = Lk ; not found at Zfn.; Kj. 586b18f. 供養恭敬、尊重、讚歎; not found at Xz(I); not found at Xz(II); Sh. 676b18. 尊重恭敬; Tib.Pk. 311a4f. = D. 285a5. *bkur stir bya bla mar bya rjed par bya mchod par bya ri mor bya bsnyen bkur bya ste*.

²⁷ 原文は「從佛地度得可法中」。難読箇所である。T 419 は「隨如來住地利得忍辱」、T 416 は「窮盡一切如來道地得勝上忍」とあり、チベット訳対応箇所には「出離の道に関して、如来〔への〕段階に対する容認(**kṣānti*)を得る」*nges par 'byung ba'i lam de bzhin gshegs pa'i sa la bzod pa thob pa* とある。ここでは如来となるための長い道のりを受け入れることが言われているとみる。例えば『仏說首楞嚴三昧經』には、これを受け入れられずに独覺乘に退転しようとする菩薩たちが登場する(T 15, 642a17f.)。当該箇所は「仏地より度すに可を法中に得」と読んで、原文の「可」が *kṣānti* に相当するとみるべきか。

²⁸ 原文は「法中得下」。難読箇所である。チベット訳対応箇所には *chos kyi dbyings la 'jug pa/* とあり、T 416 は「入眞法界」と訳している。また T 419 では「已下入法身」となっているが、この「法身」は *dharmakāya* ではなく *dharmadhātu* の訳語であるとみなければならない。T 419 では、チベット訳の *chos kyi dbyings* (法界)、*nam mkha'i kham* (虚空界)、*sems can gyi kham* (衆生界) に対応する語を、それぞれ「法身」、「空身」、「人身」と訳しており、*dhātu* に「身」を対応させる特徴がある。他の資料の示唆するところが *dharmadhātu* で一致することに鑑みると、原文の「法中」というのが *dharmadhātu* の訳であったか。

²⁹ 原文は「以了空意(→我?)」。チベット訳相当箇所は *nam mkha'i kham yongs su shes pa/* となっているが、ここでの「意」が *kham* (界) にあたるとは思えない。原文の「意」は「我」(*ātman*)の誤写の可能性がある。

cf. Karashima 2010, 580: 意(yi) (s.e. for 我?)

Lk. 428a24. 何如爲意? 意(v.l. -)無處處。意無形形。意本是形法。(p)

ら涅槃を証得することである。(94) 智慧の眼が清浄なことである。(95) すべてが不二である〔と見ること〕である。(96) 菩提心に中間も始終もないことである。(97) すべての仏と心が一つになることである³⁰。(98) 愚かさがない〔状態に〕入ることである。(99) 智慧に責められる点がないことである。(100) 自らで覚りの心を得たのだから、仏の智慧は他に依らないもの〔と見ること〕である。(101) 善知識を得て、〔かれを〕仏のように思うことである。(102) 心に変化がないことである。〔すなわち、心が〕いかなるときも菩薩にあり、〔そこから〕離れる時がないことである。(103) たとえあらゆる悪魔でも動かすことはできないことである。(104) あらゆる人は鏡の中の像のようである〔と見ること〕である³¹。(105) あらゆる仏を見るのが昼間のように〔明瞭に見えるように〕なることである。すべて〔以上の〕あり方 (*dharma*³²) にしたがって、清浄な菩薩行は得られるのである」と。

AS. 13.9f. = R. 25.21f. = AAA. 111.20f. *ātman*~ ... *ātman* ... *ātman*; ps-ZQ. 481b8. 我; Zfn. 511a11. 我; Kj. 539b12. 我; Xz(I). 767c16. 我; Xz(II). 869a18. 我; Sh. 591a12. 我; Tib.Pk. 15a8 = D. 14b7. *bdag bdag* ... *bdag*.

Lk. 428b2. 何所爲意? 意誰字意? 至本本意生; 意は無形。(p)

not found at AS. 13.14 = R. 26.6 = AAA. 112.22. (cf. AS. 13.9f. *ātman*~ ... *ātman* ... *ātman*); not found at ps-ZQ. 481b13.(cf.481b8. 我); Zfn. 511a18.我; Kj. 539b17.我; Xz(I). 767c27.我; Xz(II). 869a18. 我; not found at Sh. 591a17.(cf. 591a12. 我); not found at Tib.Pk. 15b2 = D. 15a3.

³⁰ 原文は「一切佛爲一念」。T 419 は「一切於佛一其行」、T 416 には「一切諸佛體無差異」とある。またチベット訳対応箇所には *sems kyi rgyud gcig tu gyur pa/* とある。チベット訳からは **cetas ekotībhāva* という原語が想定され、これが原文の「一念」に相当するとみられる。しかしチベット訳の文脈において *ekotībhāva* は仏との同体性ではなく、心の相続の同体性にして心一境性なる状態を指している。

³¹ 原文は「一切人如鏡中像」。T 419 は「一切世所有如幻」、T 416 は「一切衆事皆悉如化」、チベット訳では *'gro ba thams cad sprul pa dang mtshungs pa/* となっており、**nirmita* を支持する訳語が用いられている。原文に「鏡中像」とあることについて、例えば『佛所行讚』に「一切衆生如觀鏡中」(T 4, 27a05)とあり、対応箇所は *dadarśa nikhilam lokam ādarśa iva nirmale*. (*Buddhacarita* 14. v. 8d) となっている。T 418 の訳した原語はあるいは *nirmala* であったか。

³² 原文は「一切從法行」。この「法行」というのは列挙された 105 項目を指す。チベット訳相当箇所には *chos de rnams* とある。T 418 ではこの他にも「問事品」の終わりに「何等爲第一法行。是三昧名現在佛悉在前立三昧」(T 13, 904b21-b23)とあり、チベット訳対応箇所には *chos gcig po gang zhe na/ 'di lta ste/ da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa zhes bya ba'i ting nge 'dzin te/* とあるから、「法行」は *dharma* の訳語であるとみてよい。尚、*dharma* を「法行」と訳す例は支謙訳にもみられる。すなわち支謙訳『仏說維摩詰經』に、「有八法行。菩薩爲無瘡痂從此忍界到他佛土」(T 14, 533a03-a04)とあるのが、対応箇所では *astābhiḥ kulaputraḥ dharmaih*

(3A: 905a03–a10) 仏陀はこのように言った。「次のような行法によって三昧はもたらされる。すなわち現在諸仏が悉く目の前に立つという三昧を会得するということである。〔では〕、どのようにして現在諸仏が悉く目の前に立つという三昧がもたらされるか〔という〕、颯陀和よ、次のようである。戒を完全に保っている比丘、比丘尼、優婆夷、優婆塞は、ひとりである場所に止まって、今現に在す西方の阿弥陀仏 (*Amitāyus³³) を想う (*cittam ut-Pad³⁴)。〔そして〕聞いた内容に従って作意しなければならない (*yathāśrutam manasi-Kī³⁵)。

samanvāgato bodhisatvaḥ saḥāḥ lokadhātōś cyutvākṣaṭo 'nupahataḥ paṇṇāsaḥ buddhakṣetram gacchati.
(VN 97, 16–18) となっている。

³³ 漢訳はすべて「阿弥陀」と音写する。チベット訳は *tshe dpag med* とする。

³⁴ 原文は「心念」。チベット訳対応箇所には *sems bskyed par bya'o*//とある。「心念」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 543: 心念(xīn niàn) “thought”

HD. 7.377b(水經注 etc.);

Lk. 457a9. 菩薩求般若波羅蜜, 求之, 若守者, 發心念, 持是功德施與作阿耨多羅三耶三菩。

(p)

AS. 174.22 = R. 350.18 = AAA. 714.16. *manasikāra*~ ... *cittotpāda*~ (“the mental activities, the productions of thought” [AsP.tr.II 212 = AsP.tr. 133]); ZQ. 496b13. 念發心; Zfn. 529c19. 發心; Kj. 567a14. (是)念、(是)心; Xz(I). 830c17. 作意...起心; Xz(II). 904b21 = Xz(I); not found at Sh. 646a9.; Tib.Pk. 208a3 = D. 193a5. *yid la byed pa* ... *sems bskyed pa*.

³⁵ 原文は「隨所聞當念」。チベット訳相当箇所には *ji skad du thos pa'i rnam pas* [...] *yid la byed de*/とある。

〔つまり〕『ここから千億万の仏国土を過ぎた³⁶〔所にある〕その国は須摩提 (**Sukhāvati*³⁷) と呼ばれる。〔そこで阿弥陀仏が〕多くの菩薩たちの中央におられて、教えを説いておられる』〔と、このようにして〕いかなる時も常に阿弥陀仏を作意しなければならない」と。
(3B: 905a10–a17) 仏陀は颯陀和に言った。「例えば、人が眠りに落ちて³⁸、夢の中であらゆ

³⁶ 原文は「去是間千億萬佛刹」。「是間」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 441–442: 是間(shì jiān)“here” Cf. 彼間(bǐ jiān), 此間(cǐ jiān), 彼所(bǐ suǒ), 是中(shì zhōng);

not found at HD. 5.661.; Chen Wenjie 1999: 17f. ≡ 2002a: 110f.(道行般若經 etc.), Hu 2002: 114(阿闍世經), Long 2004: 33(摩訶般若抄經), YY 24.2(2004): 95(十誦律), YL 35(2007): 313(支婁迦讖譯);

Lk. 428a18. 菩薩亦不念彼間，亦不於是間念，亦不無中央念。(p)

AS. 12.30 = R. 25.6f = AAA. 109.13f. *pūrvāntato ... aparāntato* (“from where it begins, ... where it ends” [AsP.tr.II 92 = AsP.tr. 10]); ps-ZQ. 481b1. 於始...於終; Zfn. 511a4. 本...當來; Kj. 539b6. 過去世...未來; Xz(I). 767c2. 前際...後際; Xz(II). 869a10. 前際、後際; Sh. 590c27. 前、後、(中)際; Tib.Pk. 14b8 = D. 14b1. *sngon gyi mthar ... phyi ma'i mthar*.

Lk. 429c5. 阿羅漢道不動成就，不當於中住。阿羅漢道成已，不當於中住。何以故？阿羅漢道成已，便盡是間，無處所，於泥洹中般泥洹。是故阿羅漢道不當於中住。(p)

AS. 18.29 = R. 36.16 = AAA. 143.4. *iha* (“here”); not found at ZQ. 482c6.; Zfn. 512a30. 是間; Kj. 540b17. 今世; Xz(I). 770b4. 今世; Xz(II). 870c7. 今世; Sh. 592c9. 現世; Tib.Pk. 22a4 = D. 21a5. *‘di (nyid) du*.

Lk. 435a2. 十方無央數佛國諸天人、諸龍、阿須倫、諸閼叉鬼神、……諸摩睺勒鬼神、諸人、諸非人都盧賜來到是間，問訊法師，聽受般若波羅蜜。(p)

not found at AS. 44.10 = R. 88.3 = AAA. 257.16.; not found at ZQ. 485a8.; Zfn. 516c29. 是間; not found at Kj. 544c22.; Xz(I). 780b15. 此; Xz(II). 876c15. 此; not found at Sh. 600c27.; not found at Tib.Pk. 52b8 = D. 50a3.

³⁷ 原文は「其國名須摩提」。チベット訳対応箇所には *jig rten gyi khams bde ba can* とある。この「須摩提」から原語が *suhamadi* のようなガンダーラ語の音韻で記されていたことが想定されている (cf. 藤田 1970, 432–433, 辛嶋 2010, 33–34)。尚、これと同じ音写語は T 419 にも見られる。

³⁸ 原文は「譬如人臥出」。「臥出」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 506: 臥出(wò chū)“sleeps, falls into a (deep) sleep”

not found at HD. 8.722.; ZY 282(2001, No.3): 260f.(安世高譯, 道行般若經 etc.), Cao Xiaoyun 2001: 80 = 2005a: 590 = 2005b: 155f.(六度集經), Chen Wenjie 2002a: 86f.(道行般若經, 內藏百寶經 etc.), Li Weiqi 2004: 319f.(道行般若經 etc.), Wang Yunlu 2006: 95f.(道行般若經 etc.); cf. HYJ 10(2007): 31f. 寢臥.

Lk. 470c28. 時菩薩臥出。天人於夢中語言：「汝當求索大法！」覺起，即行求索，了不得。其意惆悵不樂。(p)

る金や銀や珍しい宝、父母、兄弟、妻子、親族、友人と一緒に楽しみ、喜び、意に逆らうことのない³⁹のを見るようなものである。その者は夢から覚めると、その〔夢での〕ことを人に話す。後に涙を流しながら夢で見たことを思い返す（*anu-Smṛ⁴⁰）。同じように、毘陀和菩薩よ、もし出家者〔あるいは〕在家者が西方の阿弥陀仏国土を聞いたならば、その方角の仏を作意しなければならない。戒を欠くことなく、ひたすらに作意する（*manasi-Kṛ⁴¹）こと一昼夜、もしくは七日七夜すれば、七日が過ぎて以降に阿弥陀仏を見る。目覚めている時に見られなくとも夢の中でかの〔阿弥陀仏〕を見る」

（3C: 905a17-a27）「例えば、人が夢で見るものは昼かもわからず、夜かもわからず、また内にいるのかもわからず、外にいるのかさえわからないようなものである。〔夢の中では〕暗闇の中にいるからといって見えないということもなく、障害物があるからといって見えないということもない。同じように毘陀和よ、菩薩が〔阿弥陀仏を〕想う（*cittam ud-Pad⁴²）時には、諸仏国との間に須弥山と呼ばれる大きな山があり、真つ暗な場所（*lokāntarika⁴³）があるとしても完全に見通すようになる。目も障られず心が礙げられることもない。その菩薩摩訶薩は天眼をもつことによって見徹すわけでもない。天耳をもつことによって聞き徹すわけでもない。神足をもつことによってその仏国土に到達するのでもない。この〔世界〕で〔の生涯を〕終えて、彼方の仏国土に生まれてやっと見ることができるのでもない。

not found at AS. 238.6 = R. 481.9 = AAA. 927.11.; ZQ. 503c-2. 臥出; not found at Zfn.; not found at Kj. 580a-4.; not found at Xz(I).; not found at Xz(II).; not found at Sh. 668a27.; not found at Tib.Pk. 283b7 = D. 261a6.

³⁹ 原文は「無輩(←背)」。チベット訳対応箇所には *mi mthun pa med pa* とある。

⁴⁰ 原文は「念夢中所見」。チベット訳対応箇所には *de rmi lam gyi mtshan ma rjes su dran pas...* とある。

⁴¹ 原文は「一心念。若一晝夜。若七日七夜」。チベット訳対応箇所には *nyin zhag gcig gam/[...] nyin gzhaḡ bdun du yid la bya'o//* とある。

⁴² 原文は「心當作是念時」。チベット訳相当箇所には *de ltar de ltar sems bskyed de/* とある。

⁴³ 原文は「幽冥之處」。チベット訳対応箇所には *jig rten gyi bar*（*lokāntarika）とある。中間の世界（lokāntarika）とは世界と世界との間にある真つ暗な場所のことであるが、神通力に頼らなければこれを超えることはできないとされている。例えば《十地經》（DBh 118, 11-13）は中間の世界に関して以下のように説いている。

ああ、実に勝者の息子たちよ、例えば、雑染と清浄の世界と完全に清浄な世界、二つの世界にある中間の世界（lokāntarika）は、偉大な神通力の力を除いて、越え難い。

tadyathāpi nāma bho jinaputrā dvayor lokadhātvoḥ saṃkṣīṣaviśuddhāyāś ca lokadhātor ekāntapariśuddhāyāś ca lokadhātor lokāntarikā duratikramāṇyatra mahato 'bhijñābalādhānāt.

尚、この他に《法華經》（SP 163, 8）、《悲華經》（KarP 5, 8-13）にも言及がある。

この〔世界〕にいながらにして阿弥陀仏を見て、説かれた教えを聞き、〔その教えを〕すべて把握し理解する。三昧の中で〔教えを〕すべて具足して、人々のためにそれを説くのである」

(3D: 905a27-b08) 「例えば、ある男が墮舎利國⁴⁴ (**Vaiśālī*) に須門 (**Sumanā*) という遊女がいることを聞き、〔別な〕ある男が阿凡和梨 (**Āmrapālī*) という遊女のことを聞き、〔さらに別な〕ある男は優陂洹 (**Utpalavarṇā*) という女が遊女となったと聞いたとしよう。その時、〔三人の男〕それぞれは〔それぞれの遊女たちの〕ことを考える。その男たちはいまだかつてその三人の遊女たちを見たことがなかったけれども、その〔遊女たちの〕ことを聞いて姪欲がすぐにはたらいだ。そして夢の中でそれぞれがその遊女のところへと出掛け

⁴⁴ 「墮舎利」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 142–143: 墮舎利(duò shè lì; EH. hjiwei śja- ljiəi-> QYS. xjwie śja- li-) a transliteration of Skt. *Vaiśālī* (name of a city)

Lk. 434a11. 釋提桓因作是念：“弊魔乘四馬之車來欲到佛所。是弊魔車馬，無異。非國王泝沙四馬車，不類；亦非國王波斯匿四馬車，不類；亦非釋種四馬車，不類；亦非墮舎利*四馬車，不類。是弊魔所作。晝夜弊魔常索佛便，常亂世間人。”(p)

* 墮: only Kr reads 墮 (= Zfn. 516a19), while other editions, incl. J, read 隨 instead. For 墮, corresponding to Skt. *vai*, *ve* in the Eastern Han Chinese translations, see Coblin 1983: 69. For the confusion of 墮/隨, cf. HX 2(2002): 40.

≠AS. 39.19 = R. 78.15 = AAA. 243.20. *Licchavi*; ZQ. 484c6. 維耶利; Zfn. 516a19. 墮舎利; Kj. 544a10. 黎車; not found at Xz(I). 778b26.; not found at Xz(II). 875b27.; not found at Sh. 599b7.; Tib.Pk. 47a6. *Li tsabyi*, D. 44b6. *Li tstsha bī*.

ていった⁴⁵。この時、三人すべては羅閱祇國⁴⁶ (**Rājagṛha*) におり、時を同じくして〔それぞれの遊女を〕作意した (**manasi-Kṛ*⁴⁷)。それぞれが夢のなかでその遊女のところに行き

⁴⁵ 原文は「往到其所」。「往到」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 490–491: 往到(wǎng dào) “visits, goes over” Cf. 來到(lái dào)

not found at HD. 3.937; Hu 2002: 294(道行般若經), HX 5(2005): 283(支婁迦讖譯), Cui 2005: 94(道行般若經), HYJ 9(2006) 13(義淨譯), ZY 315(2006, No.6), p. 523(道行般若經)

Lk. 434c23. 天上四天王天上諸天人索佛道者，往到彼所，問訊，聽受般若波羅蜜，作禮遶竟已(←以)，去。忉利天上諸天人索佛道者，往到彼所。問訊，聽受般若波羅蜜，作禮遶竟已，去。鹽天上諸天人索佛道者，往到彼所，問訊，聽受般若波羅蜜，作禮遶竟已，去。(p)

AS. 42.26 = R. 85.7 = AAA. 254.12. (*tatra*) *āgantavyam* (“[they] will come [there]”); ZQ. 485a14. 往; Zfn. 516c20. 到(彼所); Kj. 544c6. 來至(般若波羅蜜所); Xz(I). 780b6. 來(此處); Xz(II). 876c7 = Xz(I); Sh. 600c4. 往詣(其所); Tib.Pk. 51a4 = D. 48a7. (*der*) 'ong ba.

Lk. 435a4. 兜術陀天上諸天人索佛道者，往到彼所，問訊，聽受般若波羅蜜。(p)

AS. 43.12 = R. 86.5 = AAA. 255.10. do.; ZQ. 485a14. 往; Zfn. 517a2. 到(彼所); Kj. 544c9. 來至(般若波羅蜜所); Xz(I). 780b6. 來(此處); Xz(II). 876c7 = Xz(I); Sh. 600c11. 往詣 (其所); Tib.Pk. 51b5 = D. 49a1. do..

Lk. 455a15. 復有弊魔，化作異人，往到菩薩所，作是語：“若(“you”)所求爲勤苦耳。……”(p)

AS. 164.11 = R. 329.14 = AAA. 676.3. *upasaṃkramya* (“having come to”); ZQ. 495a20. 往到; Zfn. 527b16. 到; Kj. 564c8. 至; Xz(I). 827a7. 來至; Xz(II). 901b27. 來詣; Sh. 642a20. 來; Tib.Pk. 195b8 = D. 182a4. 'ongs nas.

⁴⁶ 「羅閱祇」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 316: 羅閱祇(luó yuè qí; EH. la źjwat gjei[tśjei] > QYS. lâ jiwāt gje[tśje]) a transliteration of Skt. *Rājagṛha* (name of the ancient capital city of Magadha)

Krsh(2001).418(STF).

Lk. 425c4. 佛在羅閱祇耆闍崛山中。摩訶比丘僧不可計——諸弟子舍利弗、須菩提等；摩訶 {薩}菩薩無央數——彌勒菩薩、文殊師利菩薩等。月十五日說戒時。(p)

AS. 1.4 = R. 3.12 = AAA. 2.1. *Rājagṛha*~; ps-ZQ. 478b-7. 王舍(國); Zfn. 508b.-9 = Lk; Kj. 537a-5. 王舍(城); Xz(I). 763b5 = Kj; Xz(II). 865c5 = Kj; Sh. 587a7 = Kj; Tib.Pk. 1b4 = D. 1b2. *rGyal po'i khab*.

Lk. 478b9. 佛說是《般若波羅蜜》時，在羅閱祇耆闍崛山中，在衆弟子<中>央坐。佛年三十得佛。十二月十五日過食後，說經。(p)

not found at AS. 261.5 = R. 529.9 = AAA. 991.4.; ZQ. 508b9. 王舍; not found at Zfn.; not found at Kj. 586c3.; not found at Xz(I).; not found at Xz(II).; not found at Sh. 676c10.; not found at Tib.Pk. 311b6 = D. 285b6.

⁴⁷ 原文は「同時念」。チベット訳相当箇所には *de dag phyi phyir zhing de yid la byed bzhin du...* とある。

共に夜を過ごした。かれらが夢から覚めると、それぞれがその〔夢を〕思い返す(**anu-Smr*⁴⁸)」
と。

仏陀は颯陀和に告げた。「私は三人〔の遊女の譬喩〕を〔汝に〕托そう⁴⁹。汝（颯陀和）はこの〔譬喩での〕事例とともに人の為に教えを説いて、その意味するところを理解させ⁵⁰、不退転に至らせて、無上なる正等覚を得させなさい。後に〔その者たちが〕覚りを得たならば、善覚という〔仏〕となるだろう」

(3E: 905b8–b10) 「このように颯陀和よ、菩薩はこの世界の国土で阿弥陀仏を聞き、何度も作意する(**manasi-Kī*⁵¹)。この作意によって阿弥陀仏を見るのである。〔そして、阿弥陀〕

⁴⁸ 原文は「其覺已各自念之」。チベット訳相当箇所には *de dag sad nas ji ltar mthong ba dang/thos pa dang/shes pa dang/rtogs pa'i rmi lam na myong ba rjes su dran nas/* とある。

⁴⁹ 原文は「我持三人以付」。T 417 は「我持是三女人以爲喩。汝持是事爲人説經」としており、今はこの読みにしたがって訳した。T 419 は「爲汝説如是。從是因縁如是法説」とするのみであるが、T 416 ならびにチベット訳では颯陀和が譬喩に現れた三人の男の為に無上正等覚から退転しないような教えを説き、そしてその三人が「善覚」という仏になると仏陀が預言している。また『大智度論』第七卷に見る対応箇所 (T 25, 110b17–b19) においても「颯陀婆羅答言。諸法實爾。皆從念生。如是種種。爲此三人方便巧説諸法空。是時三人即得阿鞞跋致」となっており、ここでも颯陀婆羅 (i.e. 颯陀和) が三人の男を不退転に導いたことになっている。したがって原文の「三人」を三人の男と理解して読むことも可能である。

⁵⁰ 原文は「使解此慧」。「慧」の語は『道行經』で *artha* を意味する場合がありますと報告されている。cf. Karashima 2010, 230–231: 慧(huì)“wisdom” or “meaning” (?; a translation of Skt. *artha*~ [“matter, thing; wealth, property; advantage, use; sense, meaning, notion”]) Cf. 事(shì) Lk. 451b22. 若復有菩薩從兜術天上來生是間，或從彌勒菩薩聞是深經中慧，今來生是間，持是功德今逮得深般若波羅蜜。(p)

AS. 142.20 = R. 285.9 = AAA. 582.23. *prajñāpāramitā*~; ZQ. 492c16. 慧; not found at Zfn.; Kj. 560a13. 般若波羅蜜; Xz(I). 819c3. 深般若波羅蜜多; Xz(II). 896c9 = Xz(I); Sh. 634a18. 甚深般若波羅蜜多正法; Tib.Pk. 171a1 = D. 158a7. *shes rab kyi pha rol tu phyin pa*.

Lk. 451b25. 若復有菩薩前世佛時，聞深般若波羅蜜，不問中慧，來生是間，聞深般若波羅蜜，心便有疑，不信樂，不問中慧。(p)

not found at AS. 142.22f. = R. 285.11f. = AAA. 583.2f.; ZQ. 492c18f. 中慧...中事; not found at Zfn.; Kj. 560a15. 其義; Xz(I). 819c7. 甚深義趣; Xz(II). 896c12 = Xz(I); Sh. 634a23. 其義; not found at Tib.Pk. 171a2f. = D. 158b1f..

Lk. 451b27. 若復有菩薩，前世聞深般若波羅蜜，問中慧一日、二日、三日若至七日，持是功德今復逮得深般若波羅蜜，..... (p)

AS. 142.29 = R. 285.19 = AAA. 583.17.; ZQ. 492c20 = Lk; not found at Zfn.; Kj. 560a20. 其中事; Xz(I). 819c12. 甚深義趣; Xz(II). 896c16. 其中義趣; Sh. 634a29. 其義; not found at Tib.Pk. 171a6 = D. 158b4.

⁵¹ 原文は「數數念」。チベット訳相当箇所には *des phi phir zhing yid la byed pas...* とある。

仏を見てから問いかけた。『どのような徳目 (**dharma*) を具えれば、阿弥陀仏国に生まれることができるのでしょうか』と。

(3F: 905b10–b19) その時、阿弥陀仏はその菩薩に次のように語った。「私の国に生まれたと思う者は常に私を何度も随念 (**anu-Smṛ*) しなさい。常に随念を修して⁵²、中断することがあってはならない。このようにすれば私の国に生まれることができる」と⁵³。

仏陀は言った。「その菩薩は念仏 (**buddhānusmṛti*) によって阿弥陀仏国に生まれることを

⁵² 原文は「常當守念」。この場合の「守」は修するという意味で理解する。

cf. Karashima 2010, 448–453: 守(shōu)“cultivates, develops; practises” Cf. 守入(shōu rù), 入(rù)(2), 自守(zì shōu)

HD. 3.1296a(11)(尚書 etc.); DK. 3.902d(2)(イ)(左傳 etc.);

Lk. 426a7. 當聞般若波羅蜜，當學，當持，當守。欲學辟支佛法，當聞般若波羅蜜，當學，當持，當守。欲學菩薩法，當聞般若波羅蜜，當學，當持，當守(p)

AS. 4.2 = R. 6.15 = AAA. 41.22. *yogam āpattavyaṃ* (“one should ... exert oneself” [AsP.tr.II 84 = AsP.tr. 2]); ps-ZQ. 479a7.-; Zfn. 508c27 = Lk; Kj. 537b23. 如說修行; Xz(I). 764a4. 修(學); Xz(II). 866a26 = Kj; Sh. 587b28 = Kj; Tib.Pk. 3b8 = D. 3b3. *rnal 'byor du bya'o*.

Lk. 426c8. 作是守行者，爲不守般若波羅蜜，爲不行般若波羅蜜，若想行者。菩薩護行，當莫隨其中。(p)

≠ AS. 6.26f. = R. 12.8f. = AAA. 57.27f. *evaṃ carati sa prajñāpāramitāyāṃ carati sa prajñāpāramitāṃ bhāvayati* (“he who courses thus, courses in perfect wisdom and develops it.” [AsP.tr.II 86 = AsP.tr. 4]); ps-ZQ. 479c15. 如是行，如是惟，爲惟行此道; Zfn. 509b24. 行是守行般若波羅蜜，爲不行般若波羅蜜; Kj. 538a19. 能如是行者，是行般若波羅蜜; Xz(I). 765a22f. 若能如是行，是修行般若波羅蜜多; Xz(II). 867a24f. 能如是行者，是修行般若波羅蜜多; Sh. 588c8. 如是行，乃名行般若波羅蜜多; Tib.Pk. 7b1f. = D. 7a2. *gang de ltar spyod pa de ni shes rab kyi pha rol tu phyin pa la spyod pa ste de ni shes rab kyi pha rol tu phyin pa sgom par byed pa yin no*.

Lk. 437b22. 其人當從是學，深入般若波羅蜜中，學智慧(=v.l.←惠)般若波羅蜜，轉增多守，無有極智悉成就，得其福轉倍多。(p)

AS. 65.19f. = R. 129.2 = AAA. 315.27f. (*pajñāpāramitāṃ*) *bhāvayan vṛddhiṃ virūḍhiṃ vipulatāṃ gataḥ* (“While developing [the perfection of wisdom], he obtained the growth, increase, and abundance [of it]” [cf. AsP.tr.II 122 = AsP.tr. 41]); not found at ZQ. 486a12.; Zfn. 519b3. 轉增益多守; Kj. 547a20f. 當能修習(般若波羅蜜).....增廣流布; Xz(I). 786c5f. 修(般若波羅蜜多)，疾得圓滿; Xz(II). 879c17. 修行(般若波羅蜜多)，疾得圓滿...廣行流布; Sh. 607b2f. 修學相應，堅固，增長，廣大，圓滿; Tib.Pk. 77b5 = D. 72b7. *sgom pa dang 'phel ba dang rgyas pa dang yangs par gyur pas*.

⁵³ 原文は「常念我數數。常當守念。莫有休息。如是得來生我國」。チベット訳相当箇所には *sangs rgyas rjes su dran pa kun tu bsten/ nges par bsten cing bsgoms la mang du byas na/ 'jig rten gyi kham* 'dir *skye bar byed do// sangs rgyas rjes su dran pa kun tu bsten/ nges par bsten cing bsgoms la mang du byas na/ sangs rgyas kyi zhing 'dir skye bar 'gyur ro//* とある。

得る。常に次のように念じなければならない。〔すなわち〕仏の身体は三十二相を具足し、光明は遮られることなく照らし、端正で他に比べるものがなく、比丘の僧団の中であって教えを説いて、「壊れないもの」を説く。壊れないものとは何かというと、色受想行識、靈魂、地水火風、世界では天から上の梵天から大梵天に至るまでが壊れないものである。仏を念じることによって空三昧を得る。このようなものが仏随念 (**buddhānusmṛti*⁵⁴) である」と。

(3G: 905b19–b23) 仏陀は毘陀和菩薩に告げた。「誰が〔般舟〕三昧を直証 (**sākṣāt-Kṛ*⁵⁵) す

⁵⁴ 原文は「如是爲念佛」。チベット訳対応箇所には *de ni sangs rgyas rjes su dran pa zhes bya ste/* とある。

⁵⁵ 原文は「於三昧中誰當證者」。「證」の語は *pra-Āp* と *sākṣāt-Kṛ* の訳語である可能性がある。ここでは後者の意味で理解する。

cf. Karashima 2010, 634–635: 證(zhèng)(1) “realisation, actualisation, attainment of the fruit” Cf. 證得(zhèng dé)

HD. 11.429b(6)(唐代); DK. 10.583b(8)(唐代); Krsh(2001). 362(“realises, attains, reaches”)

Lk. 429c25. 已得須陀洹道證, 若於中住不樂, 因出去。已得斯陀含道證, 若於中住不樂, 因去。(p)
AS. 20.1 = R. 38.21 = AAA. 156.22. *śrotaāpatti-phalaṃ* (R. *śrotaāpatti-phalaṃ*) *prāptu-(kāma~)* (“[wants] to attain the fruit of a Streamwinner”); ZQ. 482c24. 溝港; Zfn. 512b19. 得須陀洹道證; Kj. 540c2. 證須陀洹果; Xz(I). 770c21. 證...預流; Xz(II). 870c28 = Xz(I); Sh. 593a13. 得須陀洹果; Tib.Pk. 23b1f. = D. 22b2. *rgyun tu zhugs pa'i 'bras bu thob par* ('dod pa)

Lk. 429c29. 已([v.l.]←以)得佛道證, 若於中住不樂, 因去。(p)

AS. 20.5 = R. 39.4 = AAA. 156.28. *anuttarāṃ samyaksambodhiṃ prāptu-(kāma~)* (“[wants] to attain unsurpassed, perfect enlightenment”); ZQ. 482c25. 無上正眞道; Zfn. 512b25. 得佛道證; Kj. 540c5. 證佛法; Xz(I). 770c21f. 證.....諸佛無上正等菩提; Xz(II). 870c28f. = Xz(I); Sh. 593a17. 得阿耨多羅三藐三菩提果; Tib.Pk. 23b4 = D. 22b4. *bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub thob par* ('dod).

證(zhèng)(2) “realisation, assurance”

HD. 11.429.*

Lk. 457c11f. 舍利弗言：「彌勒菩薩！所說爲得證？」彌勒言：「不也。我所說法不得證。」(p)

AS. 178.8 = R. 360.7 = AAA. 736.8. *sākṣāt-kṛta~ ... sākṣāt-kṛta~* (“[Maitreya, have you then perhaps really] witnessed [those dharmas in the way in which you teach?]” [AsP.tr.II 216 = AsP.tr. 138]); ZQ. 496c25. 有證...得證; Zfn. 530c8. 已得證...得證; Kj. 567c23. 證...證得; Xz(I). 832b26. 所證...所證; Xz(II). 906a3 = Xz(I); Sh. 647b11. 證...證; Tib.Pk. 212b2 = D. 197b1. *mngon sum du byas ... mngon sum du (ma) byas te*.

Lk. 458b-7. 須菩提言：「佛所說：『不於空中作證』。云何菩薩於三昧中住，於空中不得證？」(p)

AS. 183.9 = R. 370.13 = AAA. 750.4. *śūnyatā na sākṣātkaṛoti* (“[How does a Bodhisattva] not realise emptiness?” [AsP.tr.II 222 = AsP.tr. 143]); ZQ. 497b18. 不得證; Zfn. 531b9f. 不以空作證耶; Kj.

る者なのかというと、我が弟子、摩訶迦葉 (*Mahākāśyapa)、因坻達菩薩 (*Indradatta)、須眞天子 (*Susīma)、そして適時にこの三昧を知る者、この三昧を体得しようと実践する者が直証する者である。何をもって証したとするのかというと、この三昧が空三昧であると知ることを証とする」と⁵⁶。

(3H: 905b23–c03) 仏陀は颯陀和に告げた。「遙か昔に須波日⁵⁷と呼ばれる仏がおられた時、ある者が出掛けていくと、広大な湿地に入ってしまう⁵⁸、食べ物を得ることができずに飢

568c18. 不證空; Xz(I). 834a23. 不作證; Xz(II). 907a16 = Xz(I); Sh. 649a20. 不證空耶; Tib.Pk. 217b7 = D. 202b3. *stong pa nyid mngon sum du mi bgyid*.

⁵⁶ 他の資料には T 418 に見られない内容が説かれている。その内容をチベット訳にしたがって示すと、「その菩薩は、この三昧を修習し、そしてこの三昧に入った後、その三昧から出て、バドラパーラよ、汝のいるところへ向かい、やって来たところで、この三昧を説いた。バドラパーラよ、そこで汝は、その菩薩が決して無上なる正等覺から退転しなくなるような、そのような教えを説いたのである。そこで私も、その男(菩薩)が、将来に如来、阿羅漢、正等覺者なる「弁才を獲得した者」(*Prāptapratibhāna?, cf. Harrison 1990, 38. fn. 13) という仏陀となるだろう、と授記(*vyākaraṇa)した。バドラパーラよ、汝自身と、長老マハーカーシャパ、インドラダッタ菩薩、スシーマ菩薩と、その他にもこの三昧を獲得した菩薩たちは、この三昧に対する自在者(*vaśībhūta)である」とあり、他の資料では下線で示した授記の話が説かれている。

⁵⁷ 「須波日」と呼ばれる仏に関して、これは T 416 にも同じ音写語で出ている。しかし T 419 ならびにチベット訳には言及されていない。

⁵⁸ 原文は「入大空澤中」。「空澤」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 294: 空澤(kòng zé)“a vast vacant marsh”Cf. 空閑處(kòng xián chù)

not found at HD. 8.425.; not found at DK. 8.649.

Lk. 445a27. 譬如男子行萬里。天中天！若數萬里者，到大空澤中。(p)

AS. 107.17 = R. 215.19 = AAA. 471.8. *aṭavī-kāntāra*~ (“a huge wild forest” [AsP.tr.II 156 = AsP.tr. 76]);

ZQ. 489c17. 大深澤; not found at Zfn.; Kj. 554b7. 險道; Xz(I). 806c18. 曠野……嶮道; Xz(II). 888c1.

曠野……險道; Sh. 621b12. 曠野險路; Tib.Pk. 129a5 = D. 120a3. *'brog dgon pa*.

Lk. 448b9. 其處無穀，有虎狼、多賊、大(?←五)空澤。我樂往至彼間。(p)

AS. 122.13 = R. 247.19 = AAA. 522.2. *pāṇīya-kāntāra*~ *durbhikṣa-kāntāra*~ (“a wild place where there is neither food nor water” [cf. AsP.tr.II 169 = AsP.tr. 90]); ZQ. 491a18. 五空澤間; not found at Zfn.; Kj.

557a26. 無水之處; not found at Xz(I). 813b-12.; not found at Xz(II). 892b8.; Sh. 627b21. 飢饉、枯涸、

險難等處; Tib.Pk. 146b5 = D. 136b2. *chu'i dgon pa dang mu ge'i dgon gang na yod pa*.

Lk. 461b10. 是有無漚沍拘舍羅菩薩正使於百千躡(←由)旬空澤中，在其中行，…… 不知是遠離法，會無所益。(p)

AS. 195.5 = R. 393.5 = AAA. 781.15. *aṭavī-kāntāra*~ (“deserted forests” [AsP.tr.II 234 = AsP.tr. 156]);

ZQ. 499a15 = Lk ; Zfn. 534b15 = Lk ; Kj. 571a16. 空曠之處; Xz(I). 838c19. 曠野; Xz(II). 909c19. 深

山野; Sh. 653b10. 曠野; Tib.Pk. 231a5 = D. 214b7. *'brog dgon pa*.

えと渴きで眠ってしまった。すると夢のなかでいい香りのする甘美な食べ物を得て食べ終えたが、〔夢から〕覚めるとお腹は満たされていなかった。〔そして〕自ら『存在するものは皆すべて夢のようなものだ』と考えたのである」。仏陀は言った。「この者は〔すべてのものが〕空であると考えることによって、無生法忍を得て⁵⁹、不退転に至ったのである。このように毘陀和よ、菩薩はある方角に現在仏〔がおられると〕聞いたなら、常にその方角を作意する（**manasi-Kṛ*⁶⁰）。仏を見たいと願うなら仏を作意しなさい。〔見る対象が〕存在するとも存在しないとも考えてはならない。私が立っているのを〔見て〕、空を思うようにしなさい⁶¹。〔すなわち〕、仏が立っている〔その姿が〕まるで珍しい宝石を琉璃の上で寄せ合わせたようだと言意しなさい⁶²。菩薩はこのようにして十方に無数の仏の

⁵⁹ 原文は「逮得無所從生法樂」。チベット訳対応箇所には *mi skye ba'i chos la bzod pa thob par gyur to//* とある。「無所從生法樂」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 513: 無所從生法樂(wú suǒ cóng shēng fǎ lè)“the delight of (the principle of) non-arising dharma” (樂 is a translation of BHS. *kṣānti* [“intellectual receptivity; predilection, preference; delight”]) Cf. 樂(lè).

not found at HD. 7.119.; not found at DK. 7.441.; cf. Krsh(1998). 472. 無所從生法忍.

Lk. 451a14. 佛說是經時，……二(←三)十菩薩皆逮得無所從生法樂，皆當於是婆羅劫中受決。(p)
AS. 139.29 = R. 280.17 = AAA. 575.8. *anutpattiṣṭhu dharmesṭhu kṣāntiḥ* (“the acceptance of [the principle of] non-arising dharma” [cf. AsP.tr.II 181 = AsP.tr. 102]); ZQ. 492b.-8 = Lk; not found at Zfn.; Kj. 559b26. 無生法忍; Xz(I). 818c5 = Kj; Xz(II). 896a16 = Kj; Sh. 633a23 = Kj; Tib.Pk. 168a7 = D. 156a3. *mi skye ba'i chos la bzod pa*.

Lk. 453c1. 五百諸天人皆逮無所從生法樂，於中立。(p)

AS. 155.3 = R. 310.2 = AAA. 644.2. *do.*; ZQ. 494a12 = Lk; Zfn. 525c3. 無所從生法樂忍; Kj. 562c29. 無生法忍; Xz(I). 823c28 = Kj; Xz(II). 899b19 = Kj; Sh. 639a8 = Kj; Tib.Pk. 185b4 = D. 172b2. *do.*

Lk. 456a21. 如是菩薩逮無所從生法樂，於中立。(p)

AS. 169.13 = R. 339.18 = AAA. 692.8. *do.*; ZQ. 495c22 = Lk; Zfn. 528c16. 無所從生法樂忍; Kj. 565c25. 無生忍; Xz(I). 828c24 = Kj; Xz(II). 903a11 = Kj; Sh. 643c27. 無生法忍; Tib.Pk. 202a1 = D. 187b5. *do.*

⁶⁰ 原文は「菩薩其所向方聞現在佛。常念所向方」。チベット訳相当箇所には *phyogs gang dang gang na de bzhin gshegs pa bzhugs par thos pa'i phyogs de dang de logs su de bzhin gshegs pa de yid la byas na/* とある。

⁶¹ 原文は「我所立如想空」。チベット訳相当箇所を参照すると「その〔菩薩は〕虚空の想（**saṃjñā*）を確立しつつ、仏の想をよく作意することによって」 *de nam mkha'i 'du shes la shin tu gnas shing sangs rgyas kyi 'du shes shin tu yid la byas pas/* とある。

⁶² 原文は「當念佛立如以珍寶倚琉璃上」。この譬えは難解である。琉璃の台の上に珍しい宝石を置いた様子を言っているのか。T 419 は「淨如琉璃寶中尊」、T 416 には「得見彼佛光明清徹如淨琉璃」とある。またチベット訳相当箇所には「バイドゥールヤの像（**pratimā*, see Harrison 1990,

清浄な〔姿〕を見る」

(3I: 905c03–c09) 「例えば、人が遠くへ出掛けて他の国に到着し、郷里、妻子、親族、財産を思い返す(**anu-Smṛ*⁶³)と、その人が夢のなかで故郷に帰り着いて、妻子、親族に会って喜び、一緒に話すようなものである。夢のなかで見て、そして〔夢から〕覚めて、友人にそのことを話す。「私は故郷に帰り着いて、我が妻子と親族を見た」と。

仏陀は言った。「菩薩も同じ様にある方角に仏の名前を聞いたならば、常にその方角を作意(**manasi-Kṛ*⁶⁴)して仏を見たいと望みなさい。〔すると〕菩薩は仏〔の姿〕がまるで珍しい宝石を琉璃の上に寄せて置いたようであるのをすべて見る」

(3J: 905c09–c18) 「例えば、比丘が死人の骨を観じて〔その面〕前に置くようなものである。ある時は青を観じ、ある時は白を観じ、ある時は赤を観じ、ある時は黒を観じる。その骨を持って来た誰かがいるのでもなく、骨が存在しているのでもなく、〔骨が〕どこからかやって来たのでもない。それは心が作った表象に他ならないのである。菩薩はこのように仏の威神力によって三昧の中にとどまって、見ようとするいかなる方角の仏であっても、見ようと望めばすぐに見ることができる。それはなぜかという、毘陀和よ、次のようである。つまり、この三昧は仏力によって成り立っているからである。仏の威力をもって三昧の中にとどまる者には三事がある。〔すなわち〕、仏陀の威神力(**anubhāva*⁶⁵)をもつ事、

39. fn. 17) のように美しい如来を、その菩薩は目の当たりに見ることができるだろう」*de bzhin gshegs pa bai dū rya'i sku gzugs lta bu bzang po byang chub sems dpa' des mngon sum du mthong bar 'gyur tel/* とある。少なくとも、仏の立ち姿が光り輝いて美しい様子(金色相/丈光相)を猫目石のような宝石で表現した、あるいは宝石の光の反射のように実体のないことを表現したものであることは理解できるが、具体的な内容は不明である。同じような譬えは行品にもう一箇所(T 13, 905c09)と「請佛品」(T 13, 916a13–14)にも見られる。

⁶³ 原文は「念本郷里家室親屬財産」。チベット訳相当箇所には *rang skyes pa'i yul de rjes su dran nas/* とある。

⁶⁴ 原文は「菩薩其所向方聞現在佛。常念所向方」。チベット訳相当箇所には *byang chub sems dpa' sems dpa' chen po khim pa 'am rab tu byung ba yang rung/ phyogs gang dang gang na de bzhin gshegs pa bzhugs par thos pa'i phyogs de dang de logs su dran pa dang ldan zhing sems g-yeng ba med pas sangs rgyas mthong ba thob par bya ba'i phyir de bzhin gshegs pa de yid la bya'o//* とある。

⁶⁵ 原文は「持佛威神力」。チベット訳対応箇所には *sangs rgyas kyi mthu* とある。「威神」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 491: 威神(*wēi shén*)“imposing, supernatural dignity” Cf. 威神力(*wēi shén lì*);

HD. 5.221b(漢書); DK. 3.703c(漢書); Krsh(2001). 276.

Lk. 425c10. 舍利弗心念言: “今使須菩提爲諸菩薩說般若波羅蜜。自用力說耶? 持佛威神說乎?”(p)

AS. 2.6 = R. 4.3 = AAA. 28.3. (*buddha*)-*anubhāva*~ (“[through the Buddha's] might” [AsP.tr.II 83 = AsP.tr. 1]); ps-ZQ. 478b-1. (佛)聖恩; Zfn. 508b.-1 = Lk; Kj. 537b2. (佛)神力; Xz(I). 763b16. (如來)威

仏の三昧力をもつ事、〔自らが積んだ〕過去の功德力をもつ事である。この三事があることによって〔菩薩は〕仏を見ることができる」

(3K: 905c18-c25) 「例えば、飢陀和よ、端正な青年が美しく身を飾り終えてから⁶⁶、きれいな器に満たされたよい麻油⁶⁷、あるいはよい器に満たされたきれいな水、あるいは磨いた

神之力; Xz(II). 865c14. (如來)威神之力; Sh. 587a-11. (佛)威神及加持力; Tib.Pk. 2a6 = D. 2a3. (*sangs rgyas kyi*) *mtshus*.

Lk. 426c21. 持佛威神須菩提說是語：“菩薩皆得阿惟越致字，前過去佛時：‘得作佛’。……”(p)

AS. 7.14 = R. 13.12 = AAA. 60.21. *do.*; ps-ZQ. 480a7. (佛)聖旨; Zfn. 509c8 = Lk; Kj. 538b1 = Lk; Xz(I). 765b11. (佛)神力; Xz(II). 867b11 = Xz(I); Sh. 588c29 = Lk; Tib.Pk. 8a5 = D. 7b5. *do.*

Lk. 430b17. 釋提桓因問尊者須菩提：“持何威神恩，當學知？”(p)

AS. 22.18 = R. 44.6 = AAA. 172.10. *anubhāva~ ...adhiṣṭhāna~* (“might ... authority”) [AsP.tr.II 100 = AsP.tr. 19]); ZQ. 483b3 = Lk; Zfn. 513a13 = Lk; Kj. 541a20. 神力; Xz(I). 771c11. 神力爲依持; Xz(II). 871c2 = Xz(I); Sh. 593c28. 神力所加持; Tib.Pk. 26b1 = D. 25a5. *mtshu ... byin gyi rlabs*.

⁶⁶ 原文は「端正姝好莊嚴」。「姝好」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 457: 姝好(*shū hǎo*)“beautiful”

HD. 4.342b(法華經); Krsh(1998). 417, Krsh(2001). 249, 422(STF)

Lk. 470b6. 譬如月盛滿姝好。菩薩隨般若波羅蜜教，當如是。(p)

not found at AS. 235.31~237.7 = R. 477.11~479.20 = AAA. 901.13~913.5.; ZQ. 503b22. 好([= v.l.]←如); not found at Zfn.; not found at Kj. 579c14~580a15.; not found at Xz(I). 860c21~865a14.; not found at Xz(II); not found at Sh. 667b27~668a8.; not found at Tib.Pk. 281a2~283a4 = D. 258b7~260b4.

Lk. 473a20. 是何等臺？交露七寶服飾姝好乃爾。(p)

not found at AS. 250.10 = R. 507.3 = AAA. 955.21.; ZQ. 505a29. 姝好; not found at Zfn.; not found at Kj. 583b26.; not found at Xz(I); not found at Xz(II); not found at Sh. 673a4.; not found at Tib.Pk. 299a5 = D. 274a7.

Lk. 473b9. 是時薩陀波倫菩薩及五百女人……遙見曇無竭菩薩在高座上坐，爲人幼少，顏貌姝好，光耀明照，爲數千巨億人中說般若波羅蜜。(p)

not found at AS. 250.27 = R. 508.6 = AAA. 956.24.; cf. AS. 249.23 = R. 505.18 = not found at AAA. 954.18.; ZQ. 505b11. 端正; not found at Zfn.; not found at Kj. 583c10.; not found at Xz(I); not found at Xz(II); not found at Sh. 673a29.; not found at Tib.Pk. 300a1 = D. 275a2.

⁶⁷ 原文は「持淨器盛好麻油」。「麻油」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 316: 麻油(*má yóu*)“sesame oil” or “hemp-seed oil” Cf. 油麻(*yóu má*)

HD. 12.1273b(三國志); Krsh(1998). 280, Wang Weihui 2007b: 257(齊民要術)

Lk. 460b20. (*Māra*) 或見自守(←字) 或見乞食 ……，或時在樹間止，或時有受請者，或時不受請，或時少多取足，或時麻油不塗身，…… (p)

AS. 192.7 = R. 387.9 = AAA. 774.4. (*apagata-pāda-*)*mrakṣaṇa~* (“[one who does not use] oil [for rubbing the feet]”; not found at ZQ. 498c5.; Zfn. 533c5 = Lk; Kj. 570b23. (不受塗脚)油; not found at

ばかりの鏡、あるいは傷のない水晶に映った姿を自分で見ようと思い、そこに自分を映して、隅々まで自分の像を見る。毘陀和よ、どう思うか。この麻油や水や鏡や水晶という場所にその〔青年〕自らが映し出した像は、〔麻油などの〕外から入ってきた、〔あるいはそれらの〕中〔から出てきた〕のだろうか」と。

毘陀和は答えた。「世尊よ、そうではありません⁶⁸。麻油や水晶や水や鏡の淨らかさによって⁶⁹、自分で自分の像を見ているに過ぎません。その像は〔麻油などの〕中から出て

Xz(I). 837b27.; not found at Xz(II). 909b4.; Sh. 652b4. (不受塗足)油; Tib.Pk. 227b7 = D. 211b6. (*rkang pa*) *skud pa* (*dang bral ba*).

⁶⁸ 原文は「不也。天中天」。「天中天」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010: 天中天(tiān zhōng tiān)“the god of gods, the god surpassing all other gods, i.e. a buddha”

HD. 2.1408a(梁代); DK. 3.502d(法華經); Krsh(1998). 444, Nattier 2003 : 234.

Lk. 427a4. 舍利弗白佛言：「天中天！菩薩學如是，爲學般若波羅蜜？」(p)

AS. 7.30 = R. 14.16 = AAA. 64.11. *bhagavan*; ps-ZQ. 480a18. 佛; Zfn. 509c21. 天中天; Kj. 538b12. 世尊; not found at Xz(I). 765c2.; not found at Xz(II). 867b29.; Sh. 589a18. 世尊; Tib.Pk. 8b6f. = D. 8a7. *bcom ldan 'das*.

Lk. 427a16. 須菩提言：「天中天！若有問者：'是幻爲學佛，得作佛?'或作是問，當何以教之？」(p)

AS. 8.23 = R. 16.2 = AAA. 69.20. .do.; ps-ZQ. 480b8. 世尊; Zfn. 510a6 = Lk; Kj. 538b23 = ZQ; not found at Xz(I). 766a2.; Xz(II). 867c24 = ZQ; Sh. 589b13 = ZQ; Tib.Pk. 9b3 = D. 9a4. *bcom ldan 'das*.

Lk. 428a4; (not found at AS. 12.11 = R. 23.21 = AAA. 105.3.; not found at ps-ZQ. 481a17.; not found at Zfn. 510c21.; not found at Kj. 539a22.; not found at Xz[I]. 767b10.; Xz[II]. 868c25.; not found at Sh. 590b28.; not found at Tib.Pk. 14a4 = D. 13b5.)

⁶⁹ 原文は「用麻油水精水鏡淨潔故」。「淨潔」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 276–277: 淨潔(jìng jié)(1) “clean”

not found at HD. 5.1180.; DK. 7.26b(墨子);

Lk. 454c8. 阿惟越致(an irreversible bodhisattva) 時徐舉足蹈地，安隱顧視。所裴(←斐)服衣被淨潔，無垢圻(v.l. 圻)，無塩質。(p)

not found at AS. 162.24 = R. 326.12 = AAA. 671.11.; ZQ. 494c21. 清淨; Zfn. 527a5. 淨潔; not found at Kj. 564b1.; Xz(I). 826b9. 香潔; Xz(II). 901a14 = Xz(I); Sh. 641c2. 清淨香潔; not found at Tib.Pk. 194a3 = D. 180b1.

Lk. 455b21. 與婦人交接，念之：「惡露臭處，不淨潔，非我法也。盡我壽命，不復與相近。」當脫是惡露中去。(p)

not found at AS. 166.4 = R. 332.20 = AAA. 682.4.; ZQ. 495b19. 淨; not found at Zfn. 527c28.; not found at Kj. 565a17.; not found at Xz(I). 827c5.; not found at Xz(II). 902a11.; not found at Sh. 642c19.; not found at Tib.Pk. 198a1 = D. 184a3.

Lk. 459c30. 或我受決已(←如?)，過去恒薩阿竭、阿羅訶、三耶三佛授我阿耨多羅三耶三菩阿惟三佛。是阿耨多羅三耶三菩所念悉淨潔故。(p)

くることもなく、外から入ってくることもありません」と。

(3L: 905c25–906a01) 仏陀は言いました。「すばらしい、すばらしい。颯陀和よ、その通りである。颯陀和よ、〔麻油などの〕物質（色）が清浄だから、それに映ったものも清浄なのである。仏を見たいと思えば見る。見れば質問する。質問すれば〔仏が〕答えてくれる。教えを聞けば大いに喜んで、次のように考える。『仏はどこかからやって来たのか。私がどこかへ行ったのか』と。〔そして〕『仏がどこかからやって来たのでもなく、私がどこかへ行ったのでもない』と自らで考える。〔さらに〕『欲界、色界、無色界の三界は心が作ったものでしかない。私は思考した (*vi-Klp⁷⁰) の物を見ているのである』と自らで考えるのである」

(3N⁷¹: 906a01–a07) 「心が仏となり、心自らが〔仏を〕見る。心が仏である。心が如来である⁷²。心は我が身である。心が仏を見る。心自らは心を知らない。心自らは心を見ない。心に表象があれば〔それが〕無明である。心に表象がなければそれが涅槃である。この〔三界に属する〕ものに楽しむべきものはなく、すべて思考が作りだしたものである。たとえ思考があるとしても空に他ならない。たとえ思考があるとしても、〔その思考に〕もまっ

AS. 190.3 = R. 384.1 = AAA. 768.4. *parisuddha*~ (“perfectly pure”); not found at ZQ. 498b20.; not found at Zfn. 533a17.; not found at Kj. 570a18.; Xz(I). 836c22. 清浄; Xz(II). 909a1. 清浄; Sh. 651c4. 清浄; Tib.Pk. 225b7 = D. 210a2. *yongs su dag*.

⁷⁰ 原文は「我所念即見」。チベット訳対応箇所には *bdag ji lta ji ltar rnam par rtog pa de lta de ltar snang ngo*// とある。

⁷¹ すべての漢訳に 3M 対応箇所は存在しない。またチベット訳に 3N 対応箇所は存在していない。

⁷² 原文は「心是恒薩阿竭」。「恒薩阿竭」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 98: 恒薩阿竭(*dá sà ā jié*); EH. *tat sat* ²*a gjiat* > QYS. *tât sât* ²*â gjot*[*gjät*³]) a transliteration of *Gāndhārī *tasa-agada* (< Skt. **tathā-āgata*); cf. *Gāndhārī tasagada* (< Skt. *tathāgata*); cf. also Karashima 2006 : 356 = 2007: 294.

not found at HD. 7.475.;

Lk. 429a27. 過去時，恒薩阿竭、阿羅呵、三耶三佛皆使諸弟子爲諸菩薩說般若波羅蜜。(p)

AS. 17.22 = R. 34.10 = AAA. 135.12. *tathāgata*~; ZQ. 482b-9. 如來; Zfn. 512a1 = Lk; Kj. 540a23. 佛; Xz(I). 769c27. 佛; Xz(II). 870b16. 佛; Sh. 592b7. 如來; Tib.Pk. 20b2 = D. 19b4. *de bzhin gshegs pa*.

Lk. 429c14; (AS. 19.12 = R. 37.14 = AAA. 151.13. *do*.; ZQ. 482c13. 如來; Zfn. 512b9 = Lk; Kj. 540b23. 如來; Xz(I). 770b21. 如來; Xz(II). 870c15. 如來; Sh. 592c25. 如來; Tib.Pk. 22b6 = D. 21b5. *do*..

Lk. 464c12. 佛語須菩提：“……於須菩提意云何？是恒薩阿竭本無隨因緣得恒薩阿竭。本無字寧有盡時不？”(p)

AS. 210.11 = R. 424.16 = AAA. 817.21. *do*.; ZQ. 500c11. 如來; not found at Zfn.; Kj. 574a8. 如來; Xz(I). 846b9. 如來; Xz(II). 913c3. 如來; Sh. 658b-6. 如來; Tib.Pk. 248a6 = D. 230a3. *do*..

たく実在性はない⁷³。このように毘陀和よ、菩薩が三昧の中にとどまっている時に見ている対象とは以上のようなものである」と。

(30: 906a07-a11) その時、仏陀は偈頌を説いて言った。

心は心を知らない。心は心を見ない。

心が表象を起こせば無明であり、表象がなければ涅槃である。

この〔三界に属する〕ものに堅固さはなく、常に思考の中にとどまっている。

理解でもって空と見れば、すべてにおいて表象はない〔と知る〕。

⁷³ 原文は「設有念者亦了無所有」。「無所有」の語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 516: 無所有 (“does not exist”)

Lk. 475a22. 譬如佛現飛, <無所有>。般若波羅蜜現, 無所有如是。(p)

not found at AS. 259.4f. = R. 525.4f. = AAA. 985.26f.; not found at ZQ. 506b15. (如佛現飛, 本無所有, 明度亦然); not found at Zfn.; Kj. 586a6f.; not found at Xz(I.); not found at Xz(II.); not found at Sh. 675c21f.; not found at Tib.Pk. 309a3f. = D. 283a7f..

Lk. 475a23. 前於愛欲中相娛樂, 計之, 無所有。般若波羅蜜計之, 亦無所有如是。(p)

not found at AS. 259.4f. = R. 525.4f. = AAA. 985.26f.; ZQ. 506b16 = Lk; not found at Zfn.; not found at Kj. 586a6f.; not found at Xz(I.); not found at Xz(II.); not found at Sh. 675c21f.; not found at Tib.Pk. 309a3f. = D. 283a7f..

Lk. 475a24. 人名及聲無所有。恒薩阿竭亦無所有。於前見者, 念所作, 因見。般若波羅蜜念所作, 本無所有如是。(p)

not found at AS. 259.4f. = R. 525.4f. = AAA. 985.26f.; ZQ. 506b16 = Lk; not found at Zfn.; not found at Kj. 586a6f.; not found at Xz(I.); not found at Xz(II.); Sh. 675c21f.; not found at Tib.Pk. 309a3f. = D. 283a7f..

付録 B

付録 B は諸本対照表となっている。表に先立って凡例を示す。

- 一、付録 A で和訳した T 418 を筆頭に、諸本（Tib., T 416, T 417, T 419）を対照させた。
- 二、各頁の冒頭に付した英数字は PSS の区分であり、対照表の区分は PSS による。
- 三、漢訳諸本および脚注は『大正新脩大蔵経』による。但し句読点は筆者の読みを反映する。
- 四、漢訳テキストにみる A(←B)などは異本に基づく訂正を示し、A(→B?)などは根拠を欠き、訂正に確信がない場合を示す¹。
- 五、チベット訳テキストは基本的に PSS に基づく。PSS はデルゲ版を底本とし、北京版、ナルタン版、ラサ版、後にトクパレス版を校合したもの（see Harrison 1990, 307–317）であるが、脚注には新たにブダク写本とウランバートル写本に見る異読を加えた。
- 六、対照表の配列は右に漢訳、左にチベット訳を示すものとする。
- 七、諸本に対応がない場合は別頁にて示し、表の配列が一部異なる場合がある。

¹ cf. Karashima (2011 xxi) .

[2D]

T 418, 904b24–b29:

佛告颺陀和菩薩。若有菩薩所念現在定意¹⁾向十方佛。若有定意一切得菩薩高行。何等爲定意。從念佛因緣向佛。念意不亂。從得點不捨精進。與善知識共行空。除睡眠²⁾。不聚會。避惡知識。近善知識。不亂精進。飯知足。不貪衣。不惜壽命。

¹⁾(意)+向<知>.²⁾ 眠=臥<三><知><磧>.

T 417 DIFFERS FROM THE OTHERS. see pp. 142–143.

T 419, 921b17–b24:

何等爲一法。見在佛定意名爲止定住者。所謂因緣佛意作。念意不邪冥不亂。已默(→點?)得持精進不跌。無形有待遇¹⁾。常興空(→罕?)厚睡臥。爲劇怨且遠避²⁾。衆會身常隱。避³⁾惡知識莫親。隨善政友可法道。直根莫妄⁴⁾占。近饜欲少食。不願貪好法衣。不願壽長隨本命慧。身無所愛。

¹⁾遇=過<宋><元><宮><聖>.²⁾ 避=辟<聖>.³⁾ 避=辟<宮><聖>.⁴⁾ 妄=忘<宮>.

T 416, 875a02–a11:

賢護。云何名爲菩薩思惟一切諸佛現前三昧。若有菩薩具足成就此三昧者。即獲如前諸功德事。亦得其餘殊異功德。所謂心念諸佛皆現在前。其心不亂。不捨作業。求勝上智。勇猛精勤。荷負重擔。度脫衆生。承事供給諸善知識。常修空寂廣大思惟。親善知識。滅除諸蓋。遠離惡友。息世語言。塞諸根門。初中後夜減損睡眠。不貪衣服食飲湯藥堂房¹⁾屋宇床²⁾座衆具。恒樂空閑住阿蘭若。不愛己身不重我命。不著形色。

¹⁾ 房=戶<宮>.²⁾ 床=林<聖>.

[2D]

PSS 21–22, D 9a5, N 15a1, P 9b3, L 13b3, S 307a4, Ph_a 130b3, U 262a4:

བཟང་སྒྲོང་།¹⁾ དེ་ལ་ད་ལྟར་གྱི་སངས་རྒྱལ་མཛོད་སྤྱད་བཅུགས་པ་ཞེས་བྱ་བའི་ཏིང་ངེ་འཛིན་དེ་གང་ཞེན། འདི་ལྟ་སྟེ།²⁾ སངས་རྒྱལ་ལ་དམིགས་པའི་
 སེམས་ཡིད་ལ་བྱེད་པ། སེམས་མི་གཡེང་བ། དྲན་པ་ཉི་བར་གནས་པ། ཤེས་རབ་ཐོབ་པ།³⁾ བརྩོན་འགྲུས་མི་⁴⁾གཏོང་བ། དག་བའི་བཤེས་གཉིན་
 རྣམས་ལ་བསྟེན་བཀྲུང་⁵⁾བྱེད་པ། སྟོང་པ་ཉིད་ལ་⁶⁾ཀྱན་ཏུ་སྟེན་⁷⁾པ། སྟོམ་པ། མང་དུ་བྱེད་པ། སྒྲིབ་པ་རྣམས་སྟོང་⁸⁾པ། ལྷུགས་པ་དང་གཉིད་རྣམ་
 པར་⁹⁾སྟོང་བ། གཏམ་¹⁰⁾ཡོངས་སུ་སྟོང་བ¹¹⁾། སྒྲིག་པའི་གྲོགས་པོ་རྣམས་¹²⁾རྣམ་པར་སྟོང་བ། དག་བའི་བཤེས་¹³⁾གཉིན་རྣམས་ལ་ངེས་པར་སྟེན་
 པར་¹⁴⁾པ། དབང་པོ་རྣམས་མི་གཡེང་བ། ཟས་གྱི་ཚོད་ཤེས་པ། རྣམ་གྱི་ཆ་སྟོད་དང་ཆ་སྟོད་¹⁵⁾ལ་མི་ཉལ་བའི་བརྩོན་འགྲུས་དང་ལུན་པ། གོས་དང་། ཟས་
 དང་། མལ་སྟན་དང་།¹⁶⁾ རྣམ་པའི་གསོལ་¹⁷⁾སྟན་དང་། ཡོ་བྱད་རྣམས་ལ་མི་¹⁸⁾ཆགས་པ། དགོན་པ་ལ་གནས་པ་མི་གཏོང་བ། ལུས་ལ་ཆེད་ཆེར་
 མི་བྱེད་པ། སྒྲོག་ལ་མི་ལྟ་བུ། ལུས་གཏོང་པ། སེམས་ཅན་ལ་ཕན་འདོགས་པ།

¹⁾ Ph_aU omit ! (hereafter not noted). ²⁾ Ph_a omits འདི་ལྟ་སྟེ། ³⁾ Ph_a སེམས་མི་གཡེང་བཤེས་རབ་ཐོབ་པ། for སེམས་མི་གཡེང་བ། དྲན་
 པ་ཉི་བར་གནས་པ། ཤེས་རབ་ཐོབ་པ།, DU གནས་པ་དང་ཤེས་རབ་ཐོབ་པ། ⁴⁾ Ph_a མ་ ⁵⁾ Ph_a བསྟེན་ ⁶⁾ NPL omit ལ་ ⁷⁾ Ph_a བསྟེན་ ⁸⁾ Ph_a སྟོངས་
⁹⁾ U omits པར་ ¹⁰⁾ Ph_a inserts རྒྱུད་ ¹¹⁾ Ph_a སྟོངས་པ་ ¹²⁾ Ph_a omits རྣམས་ ¹³⁾ Ph_a གཤེས་ ¹⁴⁾ Ph_a བསྟེན་, U བསྟེན་ ¹⁵⁾ Ph_a སྟོད་
 དང་ཐོངས་ for རྣམ་གྱི་ཆ་སྟོད་དང་ཆ་སྟོད་ ¹⁶⁾ Ph_a གོས་དང་ཟས་དང་མལ་བསྟན་དང་། ¹⁷⁾ Ph_a རྣམ་གྱི་ for རྣམ་པའི་གསོལ་ ¹⁸⁾ Ph_aU མ་ ¹⁹⁾ NPLPh_aU
 ཆེབ་ for ཆེར་

[2D-2J]^(T 417)

T 417, 898b10-899a08:

佛告陀和。菩薩欲疾得是定者。常立大信。如法行之則可得也。勿有疑想如毛髮許。是定意法。名爲菩薩超衆行。

立一念	信是法	隨所聞
念其方	宜一念	斷諸想
立定信	勿狐疑	精進行
勿懈怠	勿起想	有與無
勿念進	勿念退	勿念前
勿念後	勿念左	勿念右
勿念無	勿念有	勿念遠
勿念近	勿念痛	勿念痒
勿念飢	勿念渴	勿念寒
勿念熱	勿念苦	勿念樂
勿念生	勿念老	勿念病
勿念死	勿念身	勿念命
勿念壽	勿念貧	勿念富
勿念貴	勿念賤	勿念色
勿念欲	勿念小	勿念大
勿念長	勿念短	勿念好
勿念醜	勿念惡	勿念善
勿念瞋	勿念喜	勿念坐
勿念起	勿念行	勿念止
勿念經	勿念法	勿念是
勿念非	勿念捨	勿念取
勿念想	勿念識	勿念斷
勿念著	勿念空	勿念實
勿念輕	勿念重	勿念難
勿念易	勿念深	勿念淺
勿念廣	勿念狹	勿念父
勿念母	勿念妻	勿念子
勿念親	勿念疎	勿念憎
勿念愛	勿念得	勿念失

勿念成	勿念敗	勿念清
勿念濁	斷諸念	一期念
意勿亂	常精進	勿懈怠
勿歲計	勿日倦	立一念
勿中忽	除睡眠	精其意
常獨處	勿聚會	避惡人
近善友	親明師	視如佛
執其志	常柔弱	觀平等
於一切	避鄉里	遠親族
棄愛欲	履清淨	行無爲
斷諸欲	捨亂意	習定行
學文慧	必如禪	除三穢
去六入	絕姪色	離衆受
勿貪財	多畜積	食知足
勿貪味	衆生命	慎勿食
衣如法	勿綺飾	勿調戲
勿憍慢	勿自大	勿貢高
若說經	當如法	了身本
猶如幻	勿受陰	勿入界
陰如賊	四如蛇	爲無常
爲恍惚	無常主	了本無
因緣會	因緣散	悉了是
知本無	加慈悲	於一切
施貧窮	濟不還	是爲定
菩薩行	至要慧	起衆智

[2E]

T 418, 904b29–c04:

子(←子¹⁾)身避親屬。離鄉里。習等意得悲意(←喜²⁾)心護行。棄蓋習禪。不隨色。不受陰。不入衰。不念四大。不失意。不貪性。解不淨。不捨十方人³⁾。活十方人⁴⁾。

¹⁾ 子=子<三><積>. ²⁾ 意=喜<三><知><積>. ³⁾ (人)–<宋>. ⁴⁾ (十方人)–<宋>.

T 419, 921b24–b28:

不顧¹⁾其親屬。本所生國速棄去。已親慈心。已得哀意²⁾。已住喜意。已行護心。諸蓋已棄。諸禪已習。色想³⁾已分別。陰想不取。諸入不受。諸大不宥意。已不亂生受。不住不淨。已得一切舍。向一切脫人。

¹⁾ 顧=雇<聖>. ²⁾ 意=愍<宮>. ³⁾ 想=相<宮>.

T 416, 875a11–a16:

不縱其心。修以慈心薰以悲行。一切時喜常行捨心。破壞煩惱成就諸禪。於中思惟不著滋味。觀察色想唯得空心不亂正念。不取諸陰。不著諸入。不思諸界。不貪生處。調伏慢高。不妬他財。爲諸世間多作饒益。

[2E]

PSS 22, D 9b2, N 15b1, P 9b6, L 14a1, S 307b2, Ph_a 130b8, U 262b2:

གཉིན་རྣམས་ཡོངས་སུ་སྤོང་བ། སྤྱི་པའི་ས་རིང་དུ་བྱེད་པ། བྱམས་པ་¹⁾ལ་ཀུན་ཏུ་²⁾སྟོན་³⁾པ། སྤྱིང་ཇེ་ཐོབ་པ། དགའ་བ་ལ་གནས་པ། བཏང་
⁴⁾སྟོམས་སྟོམ་པ། ཉི་བའི་ཉོན་མོངས་པ་རྣམས་⁵⁾ཡོངས་སུ་གཏོང་⁶⁾བ། བསམ་གཏན་རྣམས་⁷⁾སྦྱབ་⁸⁾ཅིང་དེ་དག་གི་རོ་⁹⁾སྤོང་¹⁰⁾བར་མི་བྱེད་པ།
 གཞུགས་ཀྱི་འདུ་ཤེས་རྣམས་པར་འཇིག་པ་¹¹⁾། མི་སྦྱུག་¹²⁾པའི་འདུ་ཤེས་¹³⁾ཆེད་པ། དྲན་པ་མི་¹⁴⁾གཡོང་བ།¹⁵⁾ ཡུང་པོ་རྣམས་ཡོངས་སུ་མི་འཇོན་པ།
 ཁམས་རྣམས་ལ་སྤྱོམ་སེམས་མེད་པ། སྤྱི་མཆོད་¹⁶⁾རྣམས་ལ་མངོན་པར་མི་ཆགས་པ།¹⁷⁾ རིགས་སྡུ་¹⁸⁾བས་སྟེམས་པར་མི་བྱེད་པ། ང་རྒྱལ་ཚར་
 གཅོད་པ། གཞན་གྱི་¹⁹⁾ཆེད་པ་ལ་ཕྱག་དོག་མེད་པ། སེམས་ཅན་ལ་ཕན་པའི་གཞིར་²⁰⁾གྱུར་པ། སེམས་ཅན་ཐམས་ཅད་ལ་སེམས་མཉམ་པ། སེམས་
 ཅན་ཐམས་ཅད་མི་གཏོང་བ། སེམས་ཅན་ཐམས་ཅད་ཡོངས་སུ་གྲོལ་བར་བྱེད་པ།

¹⁾ Ph_a omits པ་ ²⁾ Ph_a omits ཏུ་ ³⁾ NL བཏོན་, Ph_a བསྟན་ ⁴⁾ Ph_a བཏང་ ⁵⁾ Ph_a inserts ལ་ ⁶⁾ D སྤོང་, Ph_a བཏང་ ⁷⁾ Ph_a
 omits རྣམས་ ⁸⁾ Ph_a བསྦྱབ་, U སྦྱབ་ ⁹⁾ Ph_a omits གི་རོ་ ¹⁰⁾ U སྤོང་ ¹¹⁾ Ph_a སེལ་བ་ ¹²⁾ Ph_a དགའ་མི་སྦྱིག་ for མི་སྦྱུག་ ¹³⁾ Ph_a inserts
 སང་ཏུ་ ¹⁴⁾ Ph_a inserts དགེ་བ་ ¹⁵⁾ Ph_a omits ། ¹⁶⁾ Ph_a ཆོད་ ¹⁷⁾ Ph_a omits ། ¹⁸⁾ U སྡུ་ ¹⁹⁾ NL བྱིས་ ²⁰⁾ Ph_a བཞིར་

[2F]

T 418, 904c04–c10:

十方人¹⁾計爲是²⁾我所。十方人計爲非我所。一切(+不³⁾)欲受。不貿戒⁴⁾。習空(←定⁵⁾)行。欲諷經。不中犯戒。不失定意。不疑法。不諍佛。不却法。不亂比丘僧。離妄語。助道德家。避癡人。世間語不喜不欲聞。道語具欲聞亦喜。從因緣畜生生⁶⁾不欲聞。

¹⁾(十方人)–<宋>.²⁾(是)–<元><明><磧>.³⁾切+(不)<三><知>.⁴⁾戒=誠<三><磧>.⁵⁾空=定<三>.
⁶⁾(生)–<三><知><磧>.

T 419, 921b28–c05:

一切於人如己身。一切人皆非我。一切法無所取。從戒無所願。常習欲定。多聞欲樂。戒陰不漏毀。定陰不動墮。於法無所復疑。與佛無諍。於法無所棄。於僧不誹謗。麤惡言以斷止。待遇於有道過者。常遠離世音無樂不用。過世音常用愛樂。畜生音遠棄辟。

T 416, 875a16–a23:

於諸衆生起平等心。又於衆生生父母想。亦於衆生所作一子心。一切法中無有諍想。雖念持戒而不執著。常在禪定亦無耽染。好樂多聞不起分別。戒聚不缺。定聚不動。智聚不妄。諸法無疑。不¹⁾背諸佛。不謗正法。不壞衆僧。不好乖離。親近衆聖遠離愚癡。不志求出世。雖聞語言意不樂聽。亦不耽著世間。

¹⁾不=下<明>.

[2F]

PSS 22–23, D 9b5, N 15b5, P 19a2, L 14a6, S 307b6, Ph_a 131a5, U 262b6:

སེམས་ཅན་ཐམས་ཅད་ལ་བདག་ཏུ་འདུ་ཤེས་པ། སེམས་ཅན་ཐམས་ཅད་ལ་མར་འདུ་ཤེས་པ། སར་འདུ་ཤེས་པ། བུར་འདུ་ཤེས་པ། གཉིན་དུ་འདུ་ཤེས་པ།
 སེམས་ཅན་ཐམས་ཅད་ལ་ཉོན་མོངས་པ་མེད་པར་འདུ་ཤེས་པ། དངོས་པོ་ཐམས་ཅད་ཡོངས་སུ་མི་¹⁾འཛིན་པ། རྩལ་ཁྲིམས་མཆོག་ཏུ་མི་འཛིན་པ²⁾། ཉིང་
 ང་འཛིན་ལ་ངས་པར་སྟོན་³⁾པ། མང་དུ་ཐོས་པ་⁴⁾འདོད་ཅིང་དེས་ཀྱང་སྟོན་སེམས་སུ་མི་བྱེད་པ། རྩལ་ཁྲིམས་ཀྱི་⁵⁾ཕུང་པོ་ལ་སྟོན་མེད་པ། ཉིང་ང་འཛིན་
 གྱི་⁶⁾ཕུང་པོ་ལ་གཡོ་བ་མེད་པ། ཆོས་རྣམས་ལ་ཐེ་ཆོམ་⁷⁾མེད་པ། སངས་རྒྱས་དང་འཕུན་⁸⁾པ། ཆོས་མི་སྤྱོད་⁹⁾བ། དག་འདུན་མི་¹⁰⁾འབྱེད་པ། སྤ་
 མའི་ཆོག་སྤྱོད་¹¹⁾བ། འཕགས་པ་རྣམས་¹²⁾ཀྱི་¹³⁾བྱང་དུ་ཉེ་བར་འགྲོ་ཞིང་དེ་དག་ལ་བསྟེན་བཀྲར་བྱེད་པ། གྲིས་པ་རྣམས་¹⁴⁾རྣམ་པར་སྤྱོད་¹⁵⁾བ།
 འཇིག་རྟེན་པའི་གཏམ་¹⁶⁾ལ་མཛོན་པར་མི་དགའ་ཞིང་¹⁷⁾མི་འདོད་ལ་¹⁸⁾ཇིང་དུ་བྱེད་པ་¹⁹⁾། འཇིག་རྟེན་ལས་འདས་པའི་གཏམ་ལ་མཛོན་པར་
²⁰⁾དགའ་ཞིང་²¹⁾འདོད་ལ་²²⁾འདུན་ཅིང་སྟོན་པ་²³⁾ གཏམ་རྒྱུད་མ་ཡིན་པ་རྣམ་པར་²⁴⁾སྤྱོད་བ་²⁵⁾

1) Ph_a མ་ 2) Ph_a མི་སྟེམས་ལ་ for མཆོག་ཏུ་མི་འཛིན་པ་ 3) U བསྟེན་ 4) Ph_a inserts ། 5) Ph_a གྲིས་ 6) Ph_a གྲིས་ 7) U ཅོམ་ 8) NLU མཕུན་
 9) Ph_a སྤྱོདས་ 10) Ph_a omits མི་ 11) Ph_a སྤྱོདས་ 12) U རྣམ་ 13) Ph_a གྲིས་ 14) Ph_a inserts ལ་ 15) Ph_a སྤྱོདས་ 16) Ph_a ཏམ་ 17) Ph_a
 inserts རང་དུ་ 18) U inserts ། 19) Ph_a omits ས་ 20) Ph_a inserts མི་ 21) Ph_a inserts མི་ 22) Ph_aU inserts ། 23) Ph_a
 omits འདུན་ཅིང་སྟོན་པ་ 24) NPL omit རྣམ་པར་ 25) Ph_a ཆོས་ཤིང་རྟེན་པ་བྱོལ་སོང་གིས་རྒྱུད་རྣམས་སྤྱོདས་བ་ for གཏམ་རྒྱུད་མ་ཡིན་པ་སྤྱོད་བ་

[2G]

T 418, 904c10–c14:

六味(→味?)¹⁾習。爲五習。爲離十惡。爲習十善。爲曉九惱。行八精進。捨八懈怠。爲習八便²⁾。爲習九思八道家³⁾念。又不著禪⁴⁾。聞不貢高。棄自大。聽說法。欲聞經。欲行法不隨歲計。

¹⁾ 六味=六味<知>.²⁾ 便=使<三><積>.³⁾ 道家=大人<三><知>.⁴⁾ 又不著禪=文不若禪<知>.

T 419, 921c05–c10:

六堅法已習。五度脫常當習。十惡作足已棄。十善作足親習。於九燒能自解。於八無勢悉違捨。八精進常已習。九想行已行。八大人念爲已得。諸禪莫取愛。莫以聞自大理可綺。下耳聽常重法常欲法。

T 416, 875a23–a27:

六味(→味?)習近。熏修五解脫法。除滅十惡。念修十善。斷滅衆生九種惱處。心常不離九想觀門。常思棄捐八種懈怠。一心修習八大人覺。不著禪味。不恃多聞。摧伏我慢。一心聽受。求法愍重修道證知。

[2G]

PSS 23, D 10a1, N 16a4, P 10a6, L 14b4, S 308a5, Ph_a 131b3, U 263a4:

དགའ་བར་བྱེད་པའི་ཆོས་དྲག་ལ་ཞུན་¹⁾པ། ཞུན་པ་ནམས་སྒྲ་བ། སྒྲིབ་པ་ལྟ་བུ་བྱེད་པ། རྣམ་པར་གྲོལ་བའི་སྒྲིམ་ཆེད་ལྟ་བུ་ཞུན་²⁾པ། སྤང་པོ་ལྟ་བུ་ཡོངས་སུ་
ཤེས་པ། མི་དགོང་བ་བཅུ་ལྷམ་གྱི་³⁾ལམ་རྣམ་པར་སྤྲོད་པ། དགོང་བ་བཅུ་ལྷམ་གྱི་⁴⁾ལམ་⁵⁾སྒྲིམ་པ། སྒྲོབས་⁶⁾བཅུ་སྒྲིབ་⁷⁾པ། གྲུན་ནས་མནར་སེམས་
གྱི་⁸⁾དངོས་པོ་དགྲུ་རྣམ་པར་སྤྲོད་པ། འདུ་ཤེས་དགྲུ་རྣམ་པར་འཇིག་⁹⁾པ། ལེ་ལེ་འི་¹⁰⁾དངོས་པོ་བརྒྱུད་རྣམ་པར་སྤྲོད་པ། བརྩམས་¹¹⁾པའི་དངོས་པོ་
བརྒྱུད་¹²⁾ལེ་ལེ་པར་སྤྲོད་¹³⁾པ།¹⁴⁾ ཟེལ་གྱིས་¹⁵⁾གཞོན་པའི་སྒྲིམ་ཆེད་¹⁶⁾བརྒྱུད་¹⁷⁾ལེ་གྲུན་བྱ་སྤྲོད་¹⁸⁾པ། རྣམ་པར་གྲོལ་བ་བརྒྱུད་སྒྲིམ་པ། སྒྲིས་
བྱ་ཆེན་པོའི་¹⁹⁾རྣམ་པར་རྟོག་པ་²⁰⁾བརྒྱུད་ཐོབ་པ། འཕགས་པའི་ལམ་ལན་ལག་བརྒྱུད་པ་དང་འཕྱུན་པ་²¹⁾། བསམ་གཏན་ལེ་མི་ཆགས་པ། ཐོས་པས་
སྒྲོམ་སེམས་མི་བྱེད་པ།²²⁾ ང་²³⁾རྒྱལ་²⁴⁾བཅོམ་པ། ཆོས་ཉན་པར་འདོད་པ། ཆོས་འདོད་པ། ཆོས་དོན་དུ་གཉེར་བ། ཆོས་ལ་འདུན་²⁵⁾པ། ཆོས་
ལ་ཕྱོགས་པ། ཆོས་ལ་འབབ་པ། ཆོས་ལ་གཞོལ་བ། ཆོས་ལ་བརྩོན་པ།

¹⁾ NL བརྟེན་, P རྟེན་, Ph_a བཟླན་ ²⁾ NLPh_a བརྟེན་, U རྟེན་ ³⁾ Ph_a གྱིས་ ⁴⁾ Ph_a གྱིས་ ⁵⁾ Ph_aU insert རྣམས་ ⁶⁾ Ph_a སྒྲོབ་ ⁷⁾ Ph_a
བསྒྲིབས་ ⁸⁾ Ph_a གོད་པའི་ for གྲུན་ནས་མནར་སེམས་གྱི་ ⁹⁾ Ph_a སྒྲིམ་ for འཇིག་ ¹⁰⁾ Ph_a ལེ་ལེ་གྱིས་ for ལེ་ལེ་འི་ ¹¹⁾ NL བརྩམ་, P བརྩོམ་, U
བཅོམ་ ¹²⁾ Ph_a དགྲུ་ ¹³⁾ NL བརྟེན་པ་, Ph_a རྟེན་, U བཟླན་ ¹⁴⁾ U omits | ¹⁵⁾ Ph_a གྱིས་ ¹⁶⁾ Ph_a འཆེད་ ¹⁷⁾ Ph_a བརྒྱུད་ ¹⁸⁾ NL བརྟེན་, Ph_a
རྟེན་ for གྲུན་བྱ་སྤྲོད་ ¹⁹⁾ Ph_a པོ་ for པོའི་ ²⁰⁾ U inserts | ²¹⁾ NL མཐུན་ (hereafter not noted), U འཕྱུན་པ་ ²²⁾ Ph_a omits | ²³⁾
Ph_a omits ང་ ²⁴⁾ Ph_a inserts བརྩམས་ ²⁵⁾ Ph_a མོས་

[2H]

T 418, 904c14–c19:

不受身想¹⁾。離十方人不欲受。不貪壽。爲了陰不隨。惑(←或²⁾)爲不隨³⁾所有。求無爲不欲生死。大畏生死。計陰如賊。計四大如蛇。十二衰計空。久在三界不安隱。莫忘得⁴⁾無爲。不欲貪欲。願⁵⁾棄生死。

¹⁾ 想=相<三>. ²⁾ 惑=或<三><知><積>. ³⁾ 隨=墮<知>. ⁴⁾ (得)–<知>. ⁵⁾ 願+(欲)<三>.

T 419, 921c10–c15:

色想已別。自想身無所取。想人已悉捨。雖生不爲可陰想。已分別所有。已不住常求。欲泥洹願。不用生死行。於生死恐懼想。於諸陰想如怨。於四大如蛇。於諸入已想空。想三界無所住。見泥洹而獨樂。世作不復用捨世。

T 416, 875a27–b03:

憐愍衆生離我分別。求壽命想畢竟難得。觀察諸陰無有物想。不住涅槃不著生死。諸行煩惱輪發大恐怖想。諸陰怨家想。諸入空宅想。諸界毒蛇想。三界衰惱想。涅槃利安想。觀諸欲惡猶如唾涕¹⁾。深樂出家。

¹⁾ 涕=洩<三><宮>.

[2H]

PSS 23–24, D 10a5, N 16b3, P 10b2, L 15a2, S 308b3, Ph_a 131b8, U 263b1:

བདག་ཏུ་འདུ་ཤེས་པས་སྒྲོམ་སེམས་སྤྲི་བྱེད་པ། སེམས་ཅན་¹⁾ཏུ་འདུ་ཤེས་པ་²⁾སྒྲོང་བ། སྒྲོག་ཏུ་འདུ་ཤེས་པ་མི་³⁾དམིགས་པ། གང་ཟག་ཏུ་འདུ་ཤེས་
 པ་ཡོངས་སུ་སྒྲོང་བ། ཡུང་པོར་⁴⁾འདུ་ཤེས་པ་རྣམ་པར་⁵⁾སེལ་བ། དངོས་པོར་⁶⁾འདུ་ཤེས་པ་⁷⁾ལ་⁸⁾མི་⁹⁾གནས་པ། ལྷ་ངན་ལས་འདའ་བ་མི་¹⁰⁾འདོད་
 པ། ཡུང་པོ་རྣམས་མི་འདོད་པ།¹¹⁾ འཁོར་བ་ལ་མི་བཟད་¹²⁾པའི་འཇིགས་པར་འདུ་ཤེས་པ། ཡུང་པོ་རྣམས་ལ་གཤེད་མར་¹³⁾འདུ་ཤེས་པ། ཁམས་
 རྣམས་ལ་སྤྱལ་གདུག་པར་¹⁴⁾འདུ་ཤེས་པ། སྒྲིམ་ཆེད་རྣམས་ལ་གྲོང་སྒྲོང་བར་འདུ་ཤེས་པ། ཁམས་གསུམ་ལ་མི་བདེ་བར་འདུ་ཤེས་པ། ལྷ་ངན་ལས་
 འདས་པ་ལ་ཕན་ཡོན་¹⁵⁾ཏུ་ལྷ་བ། འདོད་པ་རྣམས་ལ་མཆིལ་མའི་ཐལ་བ་¹⁶⁾ལྷར་སྒྲོང་¹⁷⁾བར་འདུ་ཤེས་པ།¹⁸⁾ ཟས་ལ་མི་འཐུན་¹⁹⁾པར་འདུ་ཤེས་པ།
 མངོན་པར་འབྱུང་བ་ལ་གཞོལ་བ།²⁰⁾ ཁྱིམ་ན་གནས་པ་ལ་མངོན་པར་མི་དགའ་བ།²¹⁾ བྱ་དང་བྱ་མོ་རྣམས་ལ་དགྲར་²²⁾འདུ་ཤེས་པ། རྩེ་མ་ལ་
²³⁾སྤྲིན་²⁴⁾མོར་འདུ་ཤེས་པ།

- 1) Ph_a omits ཅན་ 2) Ph_a inserts ། 3) Ph_a ལ་ 4) Ph_a པོ་ལ་ for པོར་ 5) DP རྣམས་ for རྣམ་པར་ 6) Ph_a པོ་ for པོར་ 7) Ph_a inserts
 རྣམས་ 8) U omits ལ་ 9) Ph_a omits མི་ 10) Ph_a omits མི་ 11) Ph_a omits ཡུང་པོ་རྣམས་མི་འདོད་པ།, U omits ། 12) NLPh_a ཟད་ 13)
 Ph བཏད་པར་ for གཤེད་མར་ 14) Ph བྱ་དག་པོར་ for སྤྱལ་གདུག་པར་ 15) Ph_a ཡོན་ཏན་ for ཕན་ཡོན་ 16) Ph_a ངར་སྤྱབས་ཀྱིས་ཡུང་པོ་ for མཆིལ་མའི་
 ཐལ་བ་ 17) Ph_a སྒྲོང་ 18) U omits ། 19) LPU མཐུན་ 20) Ph_a omits མངོན་པར་འབྱུང་བ་ལ་གཞོལ་བ། 21) Ph_a འབྱུང་བ་ཕྱོགས་པ་ཁྱིམ་ན་གནས་པ་
 ལ་མི་དགའ་བ། for ཁྱིམ་ན་གནས་པ་ལ་མངོན་པར་མི་དགའ་བ། 22) Ph_a སྒྲོར་ 23) Ph_a omits ལ་ 24) D སྤྲིང་

[2I]

T 418, 904c19–c25:

不隨人諍。不欲墮¹⁾生死。常²⁾立佛前。受身計如夢。以受信不復疑。意無有異。一切滅思想。過去事未來事今現在事等意。常念諸佛功德。自歸爲依佛。定意得自在。不隨佛身相。法一切一計。不與天下諍。所作不諍。從因緣生受了。從佛地度得可法中。

¹⁾ 墮=隨<知>. ²⁾ 常=尚<知>.

T 419, 921c15–c21:

隨佛令於人無諍。一切於世無所親。一切諸佛常得面。有是身如夢見。向脫常淨潔善作。常爲求一切諸想。分別計三堅定。常著念一切諸佛。依怙著善本。常思願一切諸佛。自在欲定。不自願佛身相等。一切法不分別計世。知義不與諍。從受有能次第。隨如來住地利得忍辱。

T 416, 875b03–b11:

不違佛教。於衆生所勸行功德。於諸世界無復染心。見一切佛皆悉現前。受一切身皆若幻夢。一切諸相觀察滅除。思惟往來不見三世。於信清淨深信真妙。念一切佛。三世平等無有動轉。而能持諸善根。一切諸佛三昧自在。終不染著諸佛相身。於一切法皆悉平等。不與一切世間共諍。所可應作不相違背。通達甚深十二因緣。窮盡一切如來道地得勝上忍。

[2I]

PSS 24–25, D 10b1, N 17a1, P 10b5, L 15a7, S 309a1, Ph_a 132a6, U 263b6:

སངས་རྒྱལ་གྱི་བསྟན་¹⁾པ་ལ་མི་ཐྱིད་པར་དད་པ་²⁾། སེམས་ཅན་ཐམས་ཅད་དང་མི་འཕུན་³⁾པ་མེད་པ། འཇིག་རྟེན་གྱི་⁴⁾ཁམས་ཐམས་ཅད་དུ་གནས་པ་
མེད་པ། སངས་རྒྱལ་ཐམས་ཅད་མཛོན་སྤྲུལ་དུ་གྱུར་པ། ལེགས་པར་བསྟེན་པར་⁵⁾རྫོགས་ཤིང་ཚངས་པ་⁶⁾ལེགས་པར་⁷⁾སྤྲད་པ། ལུས་ཐམས་ཅད་རྟོགས་
8)པ། མོས་པས་⁹⁾ཡོངས་སུ་དག་པ།¹⁰⁾ ལྷག་པའི་¹¹⁾བསམ་པས་¹²⁾དགོང་¹³⁾། སེམས་ལས་སུ་རུང་བ། མི་¹⁴⁾རིགས་པ་¹⁵⁾ལ་བརྩོན་པ་རྣམས་
16)རྣམ་པར་སྤོང་བ། རིགས་པར་¹⁷⁾བརྩོན་པ་རྣམས་ལ་བརྩོན་པ་¹⁸⁾། མཚན་མ་ཐམས་ཅད་རྣམ་པར་སེལ་བ། དུས་གསུམ་མཉམ་པ། སངས་རྒྱལ་
ཐམས་ཅད་རྫེས་སུ་བྲན་པ། དགོང་ལོ་ཅུ་བ་ཐམས་ཅད་སྤྲིད་¹⁹⁾པ།²⁰⁾ སངས་རྒྱལ་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་²¹⁾བྱིན་གྱིས་བརྒྱབས་པ་²²⁾། ཉིང་འཇིན་ཐམས་
ཅད་ལ་དབང་བ། སངས་རྒྱལ་གྱི་²³⁾སྤྱི་མཚན་ལ་²⁴⁾མཛོན་པར་མི་²⁵⁾ཆགས་པ། ཆོས་ཐམས་ཅད་ལ་མཉམ་པ། འཇིག་རྟེན་དང་མི་རྩོད་པ་²⁶⁾ གྲ་
བརྣམས་ལ་མི་འཕུན་²⁷⁾པ་མེད་པ། རྟེན་ཅིང་འབྲེལ་བར་འབྱུང་བ་རྟོགས་པ། དེས་པར་འབྱུང་བའི་ལམ་²⁸⁾དེ་བཞིན་གཤེགས་པའི་ས་ལ་²⁹⁾འཕྱོང་པ་ཐོབ་
པ།

1) P ལྟན་ 2) Ph_a དང་བ་ for དད་པ་ 3) LPPPh_aU མཐུན་ 4) Ph_a གྱིས་ 5) Ph_a པ། for པར་ 6) Ph_a པར་ 7) Ph_a omits ལེགས་པར་ 8) Ph_a
རྟོག་ 9) SU མོས་པ་ 10) U omits ། 11) Ph_a omits ལྷག་པའི་ 12) DSPPh_aU པ་ 13) Ph_a དག་པ་ for དགོང་བ་ 14) Ph_a མ་ 15) Ph_a omits
པ་ 16) Ph_a omits རྣམས་ 17) Ph_a omits པར་ 18) D རྣམ་པར་སྤོང་, SU རྣམ་པར་སྤོང་པ་, Ph_a རྣམས་ལ་རྟེན་པ་ for རྣམས་ལ་བརྩོན་པ་ 19) U
བསྤྲིད་ 20) Ph_a སངས་རྒྱལ་ཐམས་ཅད་ལ་བསྤྲིད་པ། for སངས་རྒྱལ་ཐམས་ཅད་རྫེས་སུ་བྲན་པ། དགོང་ལོ་ཅུ་བ་ཐམས་ཅད་སྤྲིད་པ། 21) NPDU གྱི་ 22) Ph_a omits
པ་, U རྒྱབས་པ་ 23) Ph_a omits གྱི་ 24) P པ་ for ལ་ 25) Ph_a མ་ 26) Ph_a འཇིག་རྟེན་ལ་བརྩོན་པ་མེད་པ། for འཇིག་རྟེན་དང་མི་རྩོད་པ། 27) PL
མཐུན་ Ph_a ཐུན་ 28) Ph_a inserts ། 29) Ph_a omits ས་ལ་

[2]

T 418, 904c25–905a03:

法中得下。以了空意(→我?)計人亦不有亦不滅。自證無爲。點眼以淨。一切不二。覺意不在中邊。一切佛爲一念。入無有疑¹⁾。點無有能呵。自得曉覺意故。佛點不從他人。待得善知識計如佛。無有異意。一切在菩薩無有離時。縱一切魔不能動。一切人如鏡中像。見一切佛如畫(←畫²⁾)。一切從法行爲入清淨菩薩行。

¹⁾ 疑=癡<三><知>。²⁾ 畫=畫<知>。

T 419, 921c21–c29:

已下入法身。空身爲已知。人身不生不滅。泥洹身常以觀。點慧眼已爲淨。一切法非我。願佛意不墮不踰。一切於佛一其行。不念知欲求到。爲無數識申直意。於爲業¹⁾不爲彼。隨佛智遇善友如見尊。一切於諸菩薩無異意。悉反魔所作。一切世²⁾所有如幻。一切諸佛如光照見如來。常行求菩薩意。度無極悉等。等億(←億³⁾)誠信。見諸佛一切等善法。拔陂。是爲現在佛面住定意。

¹⁾ 爲業=佛乘<三>。²⁾ (世)–<宮>。³⁾ 億=億<三><宮>。

T 416, 875b11–b20:

入眞法界。見衆生界性無生滅。見涅槃界本來現前。慧眼清淨。觀法無二。彼菩提心無中無邊。一切諸佛體無差異。入於無礙清淨智門。明見菩提自然覺知。於善知識起諸佛想。於菩薩所不念乖離。已於生死破壞魔軍。一切衆事皆悉如化。見諸如來如鏡中像。應當求彼菩提之心。諸波羅蜜莫不平等。實際無盡。集佛功德。賢護。是爲菩薩思惟諸佛現前三昧。若有菩薩摩訶薩欲具成就如是三昧。當先成就如是功德。

[2J]

PSS 25, D 10b4, N 17b1, P 11a1, L 15b5, S 309a7, Pha 132b4, U 264a4:

ཆོས་ཀྱི་¹⁾དབྱིངས་ལ་འཕྲུག་པ་²⁾ རྣམ་མཁའ་ཁོའི་ཁམས་ཡོངས་སུ་ཤེས་པ་³⁾ སེམས་ཅན་གྱི་⁴⁾ཁམས་ལ་མངོན་པར་མི་ཆགས་པ། མི་སྐྱེ་བ་⁵⁾ མི་
འགག་པ། གནས་པ་མེད་པ་⁶⁾ ལྷ་དན་ལས་འདས་པའི་དབྱིངས་མངོན་སུམ་དུ་གྱུར་པ། ཤེས་རབ་ཀྱི་མིག་རྣམ་པར་སྤྱོད་⁷⁾བ། ཆོས་ཐམས་ཅད་ལ་
གཉིས་སུ་མེད་པ། བྱང་རྒྱལ་གྱི་སེམས་ལ་མཐའ་དང་དབྱས་⁸⁾མེད་པ། སེམས་ཀྱི་རྒྱུད་གཅིག་⁹⁾ཏུ་གྱུར་པ་¹⁰⁾། སངས་རྒྱལ་ཐམས་ཅད་དང་ཐོགས་པ་མེད་
པའི་ཡེ་ཤེས་ལ་¹¹⁾འཕྲུག་པ། ཡེ་ཤེས་ལ་¹²⁾སྒྲིབ་པ་¹³⁾མེད་པ། བྱང་རྒྱལ་གྱི་¹⁴⁾ཕྱིར་སེམས་ཡོངས་སུ་སྒྲིན་པ། སངས་རྒྱལ་གྱི་¹⁵⁾ཡེ་ཤེས་གཞན་ལ་
རག་མཁའས་¹⁶⁾པ། དགོ་བའི་བཤེས་¹⁷⁾གཉིན་རྣམས་ལ་སྟོན་པར་འདུ་ཤེས་པ། བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔའ་རྣམས་ལ་མི་¹⁸⁾འབྱེད་པ། བདུད་ཀྱི་ལས་རྣམས་
¹⁹⁾རྣམ་པར་སྤྱོད་བ། འགྲོ་བ་ཐམས་ཅད་སྤྱུལ་པ་དང་མཚུངས་²⁰⁾པ། དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་བཏྲ་²¹⁾བ་ལ་²²⁾མིག་ཡོར་²³⁾དང་མཚུངས་པ། བྱང་རྒྱལ་
གྱི་སེམས་ཡོངས་སུ་ཆོལ་²⁴⁾བ། སངས་རྒྱལ་ཐམས་ཅད་ལ་ཡོན་ཏན་གྱི་²⁶⁾ཆོས་ཐམས་ཅད་མཉམ་པ་འདི་ནི་²⁷⁾ བཟང་སྤྱོད་²⁸⁾ ད་ལྟར་གྱི་སངས་རྒྱལ་མངོན་སུམ་²⁹⁾དུ་
བཞུགས་པ་³⁰⁾ཞེས་བྱ་བའི་དྲིང་ངེ་འཛོན་ཅེས་བྱའོ།

བཟང་སྤྱོད་གིས་ལྷས་པའི་དྲིང་ངེ་འཛོན་གྱི་³¹⁾ཡེ་ཤེས་ཀྱི་གཉིས་པའོ། །

1) Pha ཀྱིས་ 2) Pha omits | 3) Pha རྣམ་མཁའ་ཁོའི་དབྱིངས་ལ་འཕྲུག་པ་རྣམ་མཁའ་ཁོའི་དབྱིངས་སུ་ཤེས་པ། for རྣམ་མཁའ་ཁོའི་ཁམས་ཡོངས་སུ་ཤེས་པ། 4) Pha ཀྱིས་
5) Pha omits | 6) Pha omits གནས་པ་མེད་པ། 7) Pha སྤྱོད་ས་ 8) DSU དབྱས་ 9) Pha ཅིག་ 10) Pha omits བ་ 11) Pha omits ལ་ 12)
Pha ཀྱི་ for ལ་ 13) Pha སྒྲིབས་ལ་ for སྒྲིབ་པ་ 14) Pha ཀྱིས་ 15) Pha ཀྱིས་ 16) NLPhaU ལུས་ 17) Pha གཤེས་ 18) Pha མ་ 19) Pha
omits རྣམས་ 20) Pha ཚུངས་ 21) Pha ཏྲ་ 22) Pha omits ལ་ 23) Pha གཞུགས་བསྟེན་ for མིག་ཡོར་ 24) N འཛོལ་ 25) Pha omits པ། 26)
Pha ཀྱིས་ 27) PhaU omit | 28) PhaU omit | 29) Pha omits སུམ་ 30) Pha ལྷ་བ་ for བཞུགས་པ་ 31) Pha ཡེ་ཤེས་ཀྱི་གཉིས་པའོ། for བཟང་
སྤྱོད་གིས་ལྷས་པའི་དྲིང་ངེ་འཛོན་གྱི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་གཉིས་པའོ།

[3A]

T 418, 905a03–a10:

如是佛言。持是行法故致三昧。便得三昧現在諸佛悉在前立。何因致現在諸佛悉在前立三昧。如是毘陀和。其有比丘比丘尼。優婆塞優婆夷。持戒完具。獨一處止。心念西方阿彌陀佛今現在。隨所聞當念。去是間千億萬佛刹。其國名須摩提。在衆菩薩中央說經。一切常念阿彌陀佛。

T 417, 899a09–a14:

佛告毘陀和。持是行法便得三昧現在諸佛悉在前立。其有比丘比丘尼。優婆塞優婆夷。如法行持戒完具。獨一處止。念西方阿彌陀佛今現在。隨所聞當念。去此千億萬佛刹。其國名須摩提。一心念之。一日一夜若七日七夜。過七日已後見之。

T 419, 921c29–922a08:

亦用是法定意爲具來。何等定意具將是法來。所謂現在(+佛面住定意?)。現在佛面住定意爲何等。拔陂。若有比丘比丘尼優婆塞優婆夷。於戒常具足。常獨處不與衆。便起意念言。阿彌陀佛爲在何方常在說法。如其所聞便生念。在西方阿彌陀佛如來正覺所治也。去是佛國當過百千億佛刹。名須摩提國。衆菩薩所聚。聽尊說法。已不亂意。常當念是國地。

T 416, 875b20–875c06:

賢護。當知更有無量功德。然亦緣此三昧而生。佛復告賢護言。是中何等三昧能生如是諸功德行。所謂菩薩思惟諸佛現前三昧。能生如是諸功德法。復次賢護。云何名爲菩薩思惟諸佛現前三昧也。賢護。若有比丘比丘尼優婆塞優婆夷。清淨持戒具足諸行。獨處空閑如是思惟。於一切處隨何方所。即若西方阿彌陀如來應供等正覺。是人爾時如所聞已。即應自作如是想念。如我所聞。彼阿彌陀如來應供等正覺今在西方。經途去此過百千億諸佛國土。彼有世界名曰安樂。如是如來今現在彼。爲諸菩薩周匝圍遶。處大衆中說法教化。然而人依所聞故。繫念思惟觀察不已。了了分明。終獲見彼阿彌陀如來應供等正覺也。

བཟང་སྐྱོད་། ཆོས་དེ་རྣམས་ནི།¹⁾ ཉིང་²⁾ངའི་ན་དེ་ཡོངས་སུ་སྐྱེད་³⁾པར་འགྱུར་ཏེ། བཟང་སྐྱོད་། དེ་ལ་ཉིང་⁴⁾ངའི་འཛིན་གང་ཆོས་དེ་རྣམས་ཀྱིས་
5)ཡོངས་སུ་སྐྱེད་⁶⁾པར་འགྱུར་བའི་ཉིང་ངའི་འཛིན་དེ་⁷⁾གང་ཞེན། འདི་ལྟ་སྟེ། ད་ལྟར་གྱི་⁸⁾སངས་རྒྱུ་མཛོན་སུམ་⁹⁾དུ་བཞུགས་པ་ཞེས་བྱ་བའི་ཉིང་ངའི་
འཛིན་ཏོ། །བཟང་སྐྱོད་། ད་ལྟར་གྱི་སངས་རྒྱུ་མཛོན་སུམ་¹⁰⁾དུ་བཞུགས་པ་ཞེས་བྱ་བའི་ཉིང་ངའི་འཛིན་དེ་ཡང་¹¹⁾གང་ཞེན། བཟང་སྐྱོད་། དེ་ལ་དགོ
སྟོང་ངམ།¹²⁾ དགོསྟོང་མ་འམ།¹³⁾ དགོ་བསྟེན་ནམ། དགོ་བསྟེན་མ་ཚུལ་ཁྲིམས་ཡོངས་སུ་རྫོགས་པར་སྐྱོད་པར་འགྱུར་¹⁴⁾ལ། དེས་གཅིག་ལུ་
15)དབེན་པར་སོང་སྟེ་¹⁶⁾འདུག་ནས་¹⁷⁾འདི་སྟུམ་དུ།¹⁸⁾ བཅོམ་ལྷན་འདས་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དག་བཅོམ་པ་ཡང་དག་པར་རྫོགས་པའི་སངས་རྒྱུ་མཛོ
དཔག་¹⁹⁾མེད་དེ་²⁰⁾ཕྱོགས་གང་རོལ་ན་གནས་ཏེ་²¹⁾འཛོལ་ཞིང་གཞེས་ལ་²²⁾ཆོས་ཀྱང་སྟོན་ཅིང་བཞུགས།²³⁾ སྟུམ་དུ་སེམས་བསྐྱེད་པར་བྱའོ། །དེས་ཅི
སྐད་དུ་ཐོས་པའི་རྣམ་པས་²⁴⁾ སངས་རྒྱུ་མཛོན་²⁵⁾ཞིང་འདི་ནས་²⁶⁾རྣམ་ཕྱོགས་འོགས་སུ་སངས་རྒྱུ་མཛོན་ཞིང་བྱེ་བ་ཕྲག་འབུམ་འདས་པ་ན་²⁷⁾འཇིག་རྟེན་
གྱི་²⁸⁾ ཁམས་བདེ་བ་ཅན་ན་²⁹⁾བཅོམ་ལྷན་འདས་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དག་བཅོམ་པ་³⁰⁾ཡང་དག་པར་³¹⁾རྫོགས་པའི་སངས་རྒྱུ་མཛོད་པག་མེད་དེ་
32)ད་ལྟར་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའི་རྫོགས་ཀྱིས་³³⁾ཡོངས་སུ་³⁴⁾བསྐྱོར་ཅིང་མ་དུན་³⁵⁾དུ་བདར་ཏེ་བཞུགས་སོ། །³⁶⁾འཛོལ་། ³⁷⁾གཞེས་སོ། ³⁸⁾ཆོས་
ཀྱང་སྟོན་ཏོ།³⁹⁾ སྟུམ་དུ་ཡིད་ལ་བྱེད་དེ་⁴⁰⁾། དེས་ཀྱང་སེམས་མ་གཤིངས་པས་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཡིད་ལ་བྱེད་དོ། །

141

[3B]

T 418, 905a10–a17:

佛告毘陀和。譬如人臥出於夢中見所有金銀珍寶父母兄弟妻子親屬知識相與娛樂喜樂無輩(←背¹⁾)。其覺以²⁾爲人說之。後³⁾自淚出念夢中所見。如是毘陀和菩薩。若沙門白衣。所聞西方阿彌陀佛刹。當⁴⁾念彼方佛。不得缺戒。一心念。若一⁵⁾晝夜。若七日七夜。過七日以⁶⁾後。見阿彌陀佛。於覺不見。於夢中見之。

¹⁾ 輩=背<三>。²⁾ 以=已<三><知>。³⁾ 後=復<知>。⁴⁾ 當=常<三>。⁵⁾ 一+(日)<三><知>。

⁶⁾ 以=已<三><知>。

T 417 -

T 419, 922a08–a17:

拔陂。譬如人臥夢見聚銀若金及衆寶親友知識極愛¹⁾親屬。常樂欲見不饜²⁾。便與共戲樂。至意親密談。至寤尚識其所見如事爲人說。便爲墮淚念識其想。拔陂。亦如是。菩薩白衣者若學者。聞³⁾阿彌陀佛所在國。常當念其方。無毀漏於戒於戒陰。莫用亂意。淨心念一日一夜至七日七夜。如是七日七夜畢念。便可⁴⁾見阿彌陀佛。或在夢中如來。阿彌陀佛如來當面自見。

¹⁾ 愛=受<聖>。²⁾ 饜=厭<三><宮>。³⁾ 聞=問<三><宮><聖>。⁴⁾ 可=亦<元><明>。

T 416, 875c06–c19:

復次賢護。譬如世間若男若女。於睡夢中見種種事。所謂金銀衆寶珍財倉庫。或見朋友諸知識輩。或見覺時心不樂者。是人夢中所對境界。或違或順或憂或喜。有時語言歡欣極樂。有時躁¹⁾感盡意悲哀。是人寤已思惟憶念。如夢所見爲他廣宣。追念夢中便生憂喜。如是賢護。彼善男子善女人。端坐繫念專心想彼阿彌陀如來應供等正覺。如是相好如是威儀。如是大衆如是說法。如聞繫念一心相續次第不亂。或經一日或復一夜。如是或至七日七夜。如先所聞具足念故。是人必覩阿彌陀如來應供等正覺也。若於晝時不能見者。若於夜分或睡夢中。阿彌陀佛必當現也。

¹⁾ 躁=慘<三><宮><聖>。

[3B]

PSS 27, D 11a7, N 18b2, P 11b4, L 16ba6, S 310a7, Ph_a 133b3, U 265a3:

བཟང་སྟོང་། འདི་ལྟ་སྟེ་དཔེར་ན་¹⁾སྒྲིམ་པའམ།²⁾ བྱད་མེད་གང་ལ་ལ་ཞིག་ཉལ་བའི་རྩི་³⁾ལམ་དུ་⁴⁾གཞུགས་ཀྱི་⁵⁾རྣམ་པ་མཐོང་སྟེ། དུལ་ལམ།⁶⁾ གསེར་རམ།⁷⁾ མཛེའ་བཤེས་སམ།⁸⁾ ཉི་དུའམ།⁹⁾ ལྷག་གི་¹⁰⁾གཉིན་མཚམས་སམ། མཛེའ་བོ་¹¹⁾འམ་¹²⁾། ཡིད་དུ་འོང་¹³⁾བ་དང་། ལྷག་པ་ དང་།¹⁴⁾ མི་འཕུན་¹⁵⁾ པ་མེད་པ་དག་མཐོང་ལ། དེ་¹⁶⁾རྩི་ལམ་ན་¹⁷⁾དེ་དག་དང་ལྷན་ཅིག་ཏུ་ཅེ་ཞིང་¹⁸⁾དགའ་ལ་¹⁹⁾དགའ་དགྲར་²⁰⁾སྟོན་ཅིང་སྟེ། བ་²¹⁾ཀྱན་ཏུ་སྟེ་བར་²²⁾རྩིས་པ་ལམ་²³⁾དེ་²⁴⁾སུད་ནས་ཇི་ལྟར་མཐོང་བ་དང་།²⁵⁾ ཐོས་པ་དང་།²⁶⁾ བྱེ་བྲག་ཕྱིད་པ་དང་། རྣམ་པར་ཤེས་པ་དང་།²⁷⁾ ལྷག་པ་དང་།²⁸⁾ ཀྱན་ཏུ་སྟེ་སྟེ་པ་དེ་ཐམས་ཅད་གཞན་དག་²⁹⁾ལ་ཡང་བཞེད་³⁰⁾ཅིང་།³¹⁾ དེ་རྩི་ལམ་གྱི་³²⁾མཚན་མཛེས་སུ་བྲན་པས་མཆི་³³⁾མ་ལྷག་ ³⁴⁾པར་བྱེད་པ་³⁵⁾དེ་བཞིན་དུ།³⁶⁾ བཟང་སྟོང་། ³⁷⁾བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་³⁸⁾བྱིས་པའམ།³⁹⁾ རབ་ཏུ་བྱུང་བ་ཡང་⁴⁰⁾རུང་⁴¹⁾གཅིག་དུ་⁴²⁾དབེན་ པར་སོང་སྟེ་⁴³⁾འདུག་ལ། དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དག་བཅོམ་པ་ཡང་དག་པར་རྒྱུགས་པའི་སངས་རྒྱས་ཆོད་པག་⁴⁴⁾མེད་⁴⁵⁾ཇི་སྟེ་དུ་⁴⁶⁾ཐོས་པའི་རྣམ་ པས་ཡིད་ལ་བྱས་ཏེ།⁴⁷⁾ རྩལ་བྱིས་ཀྱི་ཕུང་པོ་ལ་སྟོན་⁴⁸⁾མེད་ཅིང་⁴⁹⁾བྲན་པ་གཡེང་⁵⁰⁾བམེད་པར་ཉིན་ཞག་གཅིག་གསུམ། གཉིས་སམ། གསུམ་ མམ།⁵¹⁾ བཞིའམ།⁵²⁾ ལྷའམ། དུག་གསུམ།⁵³⁾ ཉིན་ཞག་བདུན་དུ་ཡིད་ལ་བྱེད་། དེ་གལ་ཏེ་ཉིན་ཞག་བདུན་དུ་སེམས་མི་གཡེང་བར་དེ་བཞིན་ གཤེགས་པ་ཆོད་པག་⁵⁴⁾མེད་ཡིད་ལ་བྱེད་ན།⁵⁵⁾ དེ་⁵⁶⁾ཉིན་ཞག་བདུན་ཡོངས་སུ་⁵⁷⁾ཆང་⁵⁸⁾སྟེ་འདས་ནས།⁵⁹⁾ བཅོམ་ལྡན་འདས་དེ་བཞིན་གཤེགས་ པ་ཆོད་པག་⁶⁰⁾མེད་མཐོང་ངོ་། དེ་⁶¹⁾གལ་ཏེ་ཉིན་མོ་⁶²⁾བཅོམ་ལྡན་འདས་དེ་མ་⁶³⁾མཐོང་ན།⁶⁴⁾ དེ་ཉལ་བའི་རྩི་ལམ་དུ་བཅོམ་ལྡན་འདས་དེ་བཞིན་ གཤེགས་པ་ཆོད་པག་⁶⁵⁾མེད་⁶⁶⁾དེའི་ཞལ་སྟོན་ཏོ།

1) Ph_a omits དཔེར་ན, U inserts | 2) Ph_a omits | 3) Ph_a རྩི་ 4) Ph_a རྩི་ for དུ་ 5) Ph_a ཀྱིས་ 6) Ph_a འམ་ for ལམ། 7) Ph_a འམ་ for རམ། 8) Ph_a བྱམས་པའམ། for མཛེའ་བཤེས་སམ། 9) Ph_a གཉིན་ནས་ for ཉི་དུའམ། 10) Ph_a ཀྱིས་ 11) Ph_a འཛེའ་ for མཛེའ་བོ་ 12) DNPLPh_a དང་ 13) Ph_a འོངས་ 14) Ph_a omits | 15) PLU མཕུན་ 16) Ph_a inserts ལ་ 17) Ph_a དུ་ for རྩི་ 18) Ph_a omits ཞིང་ 19) Ph_a omits ལ་ 20) L མགྲར་, Ph_a ཡོངས་སུ་ for དགའ་དགྲར་ 21) DSU omit བ་, Ph_a བར་ 22) Ph_a omits ཀྱན་ཏུ་སྟེ་བར་ 23) Ph_aU insert | 24) P དྷ་ 25) Ph_aU omit | 26) U omits | 27) Ph_a ཤེས་པ་དང་རྟོག་པ་དང་། for བྱེ་བྲག་ཕྱིད་པ་དང་། རྣམ་པར་ཤེས་པ་དང་། 28) Ph_aU omits | 29) NPL omit དག་ 30) P རྩི་ 31) Ph_aU omit | 32) Ph_a ཀྱིས་ 33) Ph_a འཆི་ 34) em. DNPLSPh_aU རྟོག་ 35) Ph_a བྱེད་ ཏོ། 36) Ph_a omits དེ་བཞིན་དུ། 37) Ph_a inserts དེ་ 38) N inserts མ།, PL insert འམ་ 39) Ph_a omits | 40) L འང་ 41) Ph_aU inserts | 42) NPL ཅི་, Ph_a ཅི་ 43) Ph_a inserts | 44) Ph_a inserts ཅི་ 45) Ph_a inserts ས་ 46) Ph_a omits སྟོན་ 47) Ph_a ཐེ། 48) Ph_a སྟེན་ 49) Ph_aU insert | 50) Ph_a གཡེངས་ 51) P འམ།, Ph_a འམ་ for མམ། 52) Ph_a omits | 53) Ph_a འམ། 54) Ph_a inserts ཅི་ 55) NPL ས་, U omits | 56) U omits དེ་ 57) Ph_a omits ཡོངས་སུ་ 58) P རང་ 59) L omits | 60) Ph_a inserts ཅི་ 61) Ph_a omits དེ་ 62) Ph_a ཉིན་ཞག་བདུན་ན་ for ཉིན་མོ་ 63) NP omit མ་ 64) Ph_a དེ་མཐོང་ནས་འགྱུར་ཏེ། for དེ་མ་མཐོང་ན། 65) Ph_a inserts ཅི་ 66) Ph_a inserts ས་

[3C]

T 418, 905a17–a27:

譬如人¹⁾夢中所見。不知晝不知夜。亦不知內²⁾不知外。不用在冥中故不見。不用有所弊³⁾礙故不見。如是毘陀和。菩薩心當作是念時。諸佛國(+境⁴⁾)界名大山須彌山。其有幽冥之處悉爲開闢⁵⁾。目亦不弊⁶⁾。心亦不礙。是菩薩摩訶薩。不持天眼徹視。不持天耳徹聽。不持神足到其佛刹。不於是間終生彼間佛刹乃⁷⁾見。便於是間坐。見阿彌陀佛。聞所說經悉受得。從三昧中悉能具足。爲人說之。

¹⁾ (人) – <三> <知> . ²⁾ 內(+亦) <三> . ³⁾ 弊=蔽 <知> . ⁴⁾ 國+(境) <三> <知> . ⁵⁾ 闢=避 <知> .

⁶⁾ 弊=蔽 <知> . ⁷⁾ (爾)+乃 <知> .

T 417, 899a14–a20:

譬如人夢中所見。不知晝夜。亦不知內外。不用在冥中有所蔽礙故不見。毘陀和。菩薩當作是念時。諸佛國境界中。諸大山須彌山。其有幽冥之處。悉爲開闢無所蔽礙。是菩薩不持天眼徹視。不持天耳徹聽。不持神足到其佛刹。不於此間終生彼間。便於此坐見之。

T 419, 922a17–a27:

譬如上頭夢男子。自想爲住在空。不想夜亦不想晝。其眼根不爲壁牆所遮。不爲陰冥所蔽。拔陂。菩薩亦爾。作意行如是。如是於佛界中間雖有須彌山。有遮迦謗摩呵遮迦謗山及餘黑山。不能遮其眼視。亦不能遮其意。菩薩亦未得天眼。視見阿彌陀佛。亦不得天耳。聽聞阿彌陀佛說經。亦未得神足。得往到阿彌陀佛國。菩薩亦不從是下世往生彼。但自故住是世。見阿彌陀佛如來。亦聞其說法如聞奉行。菩薩便從是定意寤如所聞法。便爲人廣說。

T 416, 875c19–876a06:

復次賢護。譬如世間若男若女遠行他國。於睡夢中見本居家。時實不知爲晝爲夜。而亦不知爲內爲外。是人爾時所有眼根牆壁石山終不能障。乃至幽冥黑闇亦不爲礙也。賢護。菩薩摩訶薩心無障礙亦復如是。當正念時於彼所有佛刹中間。凡是一切須彌山王及鐵圍山大鐵圍山乃至自餘諸黑山等。不能與此眼根爲障。而亦不能覆蔽此心。然是¹⁾人者其實未得天眼能見彼佛。亦無天耳聞彼法音。復非神通往彼世界。又亦不於此世界沒生彼佛前。而實但在此世界中。積念熏修久觀明利故。終得覩彼阿彌陀如來應等正覺僧衆圍遶菩薩會中。或見自身在彼聽法。聞已憶念受持修行。或時復得恭敬禮拜尊承供養彼阿彌陀如來應等正覺已。是人然後起此三昧。其出觀已次第思惟。如所見聞爲他廣說。

¹⁾ (是) – <三> <宮> <聖> .

PSS 28, D 11b5, N 19a5, P 12a2, L 17a7, S 311a1, Ph_a 134a4, U 265b3:

བཟང་སྐྱོང་། འདི་ལྟ་སྟེ¹⁾དཔེར་ན²⁾བྱུང་མེད་དམ་³⁾སྐྱེས་པ་ཉལ་བའི་མི་ལམ་ན་བདག་ཉིད་བྱིས་ན་འདུག་པར་ཡང་མི་ཤེས། ཐུགས་ན་འདུག་པར་ཡང་
མི་ཤེས་ཤིང་⁴⁾། དེའི་མིག་གི་⁵⁾དབང་པོ་ལ་ཕྱིག་⁶⁾པས་སྒྲིབ་⁷⁾པར་ཡང་⁸⁾མི་བྱེད། ལུན་པ་དང་⁹⁾རབ་རིབ་ཏུ་ཡང་¹⁰⁾མི་བྱེད་པ་དེ་བཞིན་དུ།¹¹⁾
བཟང་སྐྱོང་། བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་འཕེལ་ཆེན་པོ་དེ་ཡང་¹²⁾ཇི་ལྟར་འཇིག་རྟེན་གྱི་¹³⁾བར་དག་གིས་སྒྲིབ་¹⁴⁾པར་ཡང་མི་བྱེད་¹⁵⁾། རིའི་
16)རྒྱལ་པོ་རི་རབ་དང་།¹⁷⁾ རིའི་རྒྱལ་པོ་ཁོར་¹⁸⁾ཡུག་དང་། ཁོར་¹⁹⁾ཡུག་ཆེན་པོ་དང་། དེ་བཞིན་དུ་གཞན་ཡང་རི་ནག་པོ་རྣམས་ཀྱིས་མིག་གི་
20)དབང་པོ་ལ་སྒྲིབ་པར་²¹⁾མི་²²⁾བྱེད་པ་དེ་ལྟར་ལྟར་སེམས་བསྐྱེད་དེ། བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་དེ་ལྟར་མིག་ཐོབ་པས་²⁴⁾དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་
མཐོང་བ་ཡང་²⁵⁾མ་ཡིན། ལྷའི་རྣ་བའི་²⁶⁾ཁམས་ཐོབ་པས་²⁷⁾དམ་པའི་ཆོས་ཉན་²⁸⁾པ་ཡང་²⁹⁾མ་ཡིན། 30)རྩ་འཕུལ་གྱི་³¹⁾སྟོབས་ཐོབ་པས་འཇིག་
རྟེན་གྱི་ཁམས་དེར་³²⁾སྐྱད་ཅིག་ཏུ་འགོ་བ་ཡང་³³⁾མ་ཡིན་གྱི་³⁴⁾། བཟང་སྐྱོང་། བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་དེ་འཇིག་རྟེན་གྱི་³⁵⁾ཁམས་འདི་ཉིད་ན་གནས་
བཞིན་དུ། བཅོམ་ལྷན་འདས་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཆོད་པག་³⁶⁾མེད་³⁷⁾དེ་མཐོང་ཞིང་³⁸⁾བདག་ཉིད་འཇིག་རྟེན་གྱི་³⁹⁾ཁམས་དེ་ན་འདུག་པ་སྟུམ་དུ་
40)ཤེས་ལ། ཆོས་ཀྱང་ཉན་ཏོ། །འཆད་པ་ཐོས་ནས་ཀྱང་ཆོས་དེ་དག་ཀྱང་འཛིན་ཏོ། །ཀྱུན་རྒྱལ་པར་བྱེད་དོ། །འཛིན་པར་བྱེད་དོ། །བཅོམ་ལྷན་འདས་དེ་
བཞིན་གཤེགས་པ་དག་བཅོམ་པ་ཡང་དག་པར་རྒྱུགས་པའི་སངས་རྒྱུས་ཆོད་པག་⁴¹⁾མེད་⁴²⁾དེ་⁴³⁾ལ་⁴⁴⁾བཀྱར་སྒྲིར་⁴⁵⁾བྱེད་དོ། །ཐུགས་བྱེད་དོ། །རི་
མོར་བྱེད་དོ། །མཛོད་པར་བྱེད་དོ། །བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་⁴⁶⁾དེ་⁴⁷⁾ཉིད་དེ་འཛིན་དེ་ལས་ལངས་ནས་ཀྱང་ཇི་⁴⁸⁾སྐྱད་དུ་ཐོས་པ་དང་། ཇི་ལྟར་བཟུང་བ་
དང་། ཇི་ལྟར་ཀྱུན་རྒྱལ་པར་བྱས་པའི་⁴⁹⁾ཆོས་དེ་དག་གཞན་དག་⁵⁰⁾ལ་⁵¹⁾ཡང་⁵²⁾རྒྱ་ཆེར་ཡང་དག་པར་འཆད་དོ། །

1) Ph_a inserts | 2) U insert | 3) U inserts | 4) Ph_a ཤེས་ 5) Ph_a གྱིས་ 6) NP བཅིག་ 7) Ph_a བསྐྱེད་ 8) U omits ཡང་ 9) Ph_a inserts | 10) L འང་, Ph_a དང་། འམ་ for ཏུ་ཡང་ 11) Ph_a omits | 12) L འང་ 13) Ph_a གྱིས་ 14) U བསྐྱེད་ 15) Ph_a ཤེས་ 16) U དེའི་ for རིའི་ 17) U omits | 18) Ph_a འཁོར་ 19) Ph_a འཁོར་ 20) Ph_a གྱིས་ 21) U བ་ 22) Ph_a omits མི་ 23) Ph_a omits དེ་ལྟར་ 24) U inserts | 25) L འང་ 26) Ph_a བས་ 27) Ph_a inserts | 28) Ph_a ཉན་ 29) L འང་ 30) Ph_a inserts དེ་ལ་ 31) Ph_a omits གྱི་ 32) Ph_a omits དེར་ 33) L འང་ 34) Ph_a གྱིས་ 35) Ph_a གྱིས་ 36) Ph_a inserts ཅུ་ 37) Ph_a inserts བ་ 38) U inserts | 39) Ph_a གྱིས་ 40) Ph_aU insert ཡང་ 41) Ph_a insert ཅུ་ 42) Ph_a inserts བ་ 43) NPLS omit དེ་ 44) Ph_a inserts | 45) Ph_a ཉི་, U བསྒྲིར་ 46) Ph_a དཔའི་ 47) NPL དེའི་, Ph_a omits དེ་ 48) Ph_a འདི་ for ཇི་ 49) NL ཁྱེད་པའི་, Ph_a བྱ་བའི་ 50) NPL omit དག་ 51) Ph_a omits ལ་ 52) L འང་

[3D]

T 418, 905a27–b08:

譬若¹⁾有人。聞墮舍利國中。有姪女人名須門。若復有人。聞姪女人阿凡和梨²⁾。若復有人。聞優陂³⁾洹作姪女人。是時各各思念之⁴⁾。其人未曾見此三女人。聞之姪意即爲動。便於夢中各往到其所。是時三人皆在羅閱祇國。同時念。各於夢中到是姪女人所與共棲宿。其覺已各自念之。佛告毘陀和。我持三人以⁵⁾付。若持是事爲人⁶⁾說經。使解此慧至不退轉地得⁷⁾無上正真道。然後得佛號曰善覺。

¹⁾ 若=如<三><知>。²⁾ 梨=利<三><知>。³⁾ 陂=婆<三><知>。⁴⁾ 各各思念之=三人皆在羅閱念<三>，各各思念<知>。⁵⁾ 以=已<三><知>。⁶⁾ (人)–<三><知>。⁷⁾ (得)–<三><知>。

T 417, 899a20–a27:

譬如人聞墮舍利國有姪女字須門。復有人聞姪女阿凡和利。復有人聞優婆洹復作姪女。時其人未曾見此三女人。聞之姪意即動。是三人皆在羅閱祇國。同時念。各於夢中到其女邊與共棲宿。覺已各自念之。佛告毘陀和。我持是三女人以爲喻。汝持是事爲人說經。使解此慧至不退轉地(+得?)無上正真道。若後得佛號曰善覺。

T 419, 922a27–b10:

拔陂。譬如人從隨(←墮¹⁾)沙離聞有好女字須聞。復有第二男子。聞有好女字阿凡和利。復有第三男子。聞有好女名爲蓮華色。從聞展轉著污轉自作貪。是諸男子皆未見好女。但遙聞數數起意生念。便有姪²⁾起。從臥便夢見。便往到女處。是故羅閱祇城中男子。如是起意。如是便見。與共會合。便亂習姪³⁾法。曉⁴⁾竟便寤故。識如問(←聞⁵⁾)如知。拔陂。爲汝說如是。從是因緣如是法說。從是不還受別⁶⁾於無上覺道。我復爲其說。當來於後久遠。當名爲善寤如來無所著正覺。其人但得恣意見。想如是正見如是菩薩。

¹⁾ 隨=墮<三><宮>。²⁾ 姪=淫<聖>。³⁾ 姪=淫<聖>。⁴⁾ 曉=燒<聖>。⁵⁾ 問=聞<三>。⁶⁾ 別=荊<元><明>。

T 416, 876a06–a21:

復次賢護。如此摩伽陀國有三丈夫。其第一者。聞毘耶離城有一姪女名須摩那。彼第二人聞有姪女名菴羅波離。彼第三人聞有姪女名蓮華色。彼既聞已各設方便。繫意勤求無時暫廢。然彼(←後¹⁾)三人實未曾覩如是諸女。直以遙聞即興欲心專念不息。後因夢已在王舍城。與彼女人共行欲事。欲事既成求心亦息。希望既滿遂便覺寤。寤已追念夢中所行。如所聞見如所證知。如是憶念來詣汝所。具爲汝說者。汝應爲彼方便說法隨順教化。令其得住不退轉地。究竟成就阿耨多羅三藐三菩提。彼於當來必得成佛。號曰善覺如來應供等正覺明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。如是三人既得忍已。還復憶念往昔諸事了了分明也。

¹⁾ 彼=後<聖>。

[3D]

PSS 29–30, D 12a4, N 20a1, P 12b1, L 18a2, S 311b2, Ph_a 134b7, U 266a4:

བམ་པོ་གཉིས་པ།¹⁾

བཟང་སྐྱོང་། འདི་ལྟ་སྟེ་²⁾དཔེར་ན་³⁾སྐྱེས་བུ་ཞིག་རྒྱལ་པོའི་ཁབ་ཀྱི་གྲོང་བྱང་ཆེན་པོ་ན་འདུག་པ་ལས་⁴⁾ཡངས་པ་ཅན་གྱི་⁵⁾གྲོང་བྱང་ན་⁶⁾སྤྲད་འཛོང་⁷⁾མ་
ཡིད་བཟངས་⁸⁾ཞེས་⁹⁾བྱ་བ་ཞིག་ཡོད་པར་ཐོས་སོ། །སྐྱེས་བུ་གཉིས་པས་ནི་སྤྲད་¹⁰⁾འཛོང་¹¹⁾མ་ལས་སྤྲ་¹²⁾སྐྱོང་ཞེས་བྱ་བ་ཞིག་ཡོད་པར་ཐོས་སོ། །སྐྱེས་
བུ་གསུམ་པས་ནི་སྤྲོན་གྱི་¹³⁾སྤྲད་¹⁴⁾འཛོང་¹⁵⁾མ་ལུང་པ་ལའི་¹⁶⁾མདོག་ཅེས་བྱ་བ་¹⁷⁾ཡོད་པར་ཐོས་སོ། །དེ་རྒྱམས་ཀྱིས་དེ་དག་¹⁸⁾ཐོས་ནས་¹⁹⁾སོ་
སོར་སོ་སོ་²⁰⁾ལ་སེམས་ཆགས་པར་གྱུར་²¹⁾མོད་ཀྱི།²²⁾ སྐྱེས་བུ་དེ་རྒྱམས་ཀྱིས་²³⁾སྤྲད་འཛོང་²⁴⁾མ་དེ་རྒྱམས་མཐོང་བ་ནི་²⁵⁾མ་ཡིན་ཏེ། མིང་
དང་²⁶⁾གཟུགས་དང་²⁷⁾ཁ་དོག་ཙམ་ཞིག་ཐོས་པས་²⁸⁾འདོད་ཆགས་ཀྱི་²⁹⁾སེམས་སྐྱོད་³⁰⁾པར་གྱུར་ཏོ། །དེ་དག་ཕྱི་³¹⁾ཕྱིར་ཞིང་དེ་³²⁾ཡིད་ལ་བྱུང་
བཞིན་དུ་ཉལ་བ་དང་། མི་ལམ་དུ་ཡང་³³⁾སྤྲད་འཛོང་³⁴⁾མ་དེ་དག་གི་³⁵⁾བྱུང་དུ་བདག་ཅག་དོང་བསྟམ་³⁶⁾དུ་ཤེས་ཏེ། ཇི་ལྟར་སྐྱེས་བུ་དེ་དག་རྒྱལ་པོའི་
ཁབ་ཀྱི་གྲོང་བྱང་ཆེན་པོ་ན་འཁོད་ཅིང་སྤྲོན་མ་ཉལ་བར་³⁷⁾དེ་ལྟ་དེ་ལྟར་འདོད་ཆགས་དང་ལྷན་པའི་སེམས་སྐྱོད་³⁸⁾པ་དེ་བཞིན་དུ་³⁹⁾སྐྱེས་བུ་⁴⁰⁾དེ་དག་
ཉལ་ནས་ཀྱང་⁴¹⁾མི་ལམ་ན་སྤྲད་⁴²⁾འཛོང་⁴³⁾མ་དེ་དག་མཐོང་ཞིང་ཡན་ཚུན་སྤྲད་དེ།⁴⁴⁾ འབྲིག་པའི་ཆོས་ལ་བསྟན་⁴⁵⁾ནས།⁴⁶⁾ འབྲིག་པ་ལ་དད་པ་
དེ་དང་ཡང་⁴⁷⁾བྱལ་བར་གྱུར་པར་⁴⁸⁾མྱིས་སོ། །དེ་དག་སད་ནས་ཇི་ལྟར་མཐོང་བ་དང་⁴⁹⁾ ཐོས་པ་དང་། ཤེས་པ་དང་། རྟོགས་⁵¹⁾པའི་མི་ལམ་
ན་⁵²⁾སྤྲོད་བཞེས་སུ་བྲན་ནས། བཟང་སྐྱོང་། ཁྱོད་གང་ན་བདེར་དོང་སྟེ་ཕྱིན་ནས།⁵³⁾ ཁྱོད་ལ་དོན་དེ་དག་བཟོད་⁵⁴⁾དོ། །ཁྱོད་ཀྱིས་⁵⁵⁾དོན་དེ་དག་ཐོས་
ནས་⁵⁶⁾ལུང་འདི་ཉིད་ཀྱིས་⁵⁷⁾ཅི་ནས་⁵⁸⁾ཀྱང་དེ་དག་སྒྲན་མེད་པ་ཡང་དག་པར་རྟོགས་པའི་བྱང་རྒྱུ་ལས་ཕྱིར་མི་ལྟོག་པར་འགྱུར་བ་དེ་ལྟ་དེ་ལྟར་
⁵⁹⁾ཆོས་བསྟན་⁶⁰⁾ཏོ། །ངས་ཀྱང་སྐྱེས་བུ་⁶¹⁾དེ་དག་མ་འོངས་པའི་⁶²⁾དུས་ན་⁶³⁾དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དག་བཅོམ་པ་ཡང་དག་པར་རྟོགས་པའི་སངས་
རྒྱུ་ལེགས་པར་⁶⁴⁾སད་པ་ཞེས་བྱ་བ་རྒྱམས་སུ་འགྱུར་ལོ།⁶⁵⁾ ཞེས་ལུང་སྟོན་ཏོ། །སྐྱེས་བུ་དེ་དག་བཟོད་པ་རྟོད་ཀྱང་དུང་སྤྲོན་⁶⁶⁾གྱི་མཚན་མ་⁶⁷⁾དེ་
དག་མཐོང་ཞིང་རྟོགས་སུ་བྲན་ནོ།

1) S omits བམ་པོ་གཉིས་པ།, Ph_a ད་ལྟར་གྱིས་སངས་རྒྱུ་མཛོད་དུ་བཞག་པའི་ཉིང་འཛོན། །བམ་པོ་གཉིས་པའོ། 2) Ph_a inserts ། 3) Ph_aU inserts །
4) Ph_aU insert ། 5) Ph_a གྱིས་ 6) U inserts ། 7) LPh_a ཚོང་ 8) NL བཟང་ 9) P ཤེས་ 10) Ph_a མོད་ 11) LPh_a ཚོང་ 12) Ph_a འབྲ
13) Ph_a གྱིས་ 14) Ph_a མོད་ 15) LPh_a ཚོང་ 16) L ལྟར་ལའི་, Ph_a ལྟར་དཔ་ལའི་ 17) Ph_a བར་ 18) Ph_a omits དེ་དག་ 19) Ph_aU inserts །
20) Ph_a རེ་འེ་ for སོ་སོ་ 21) Ph_a འགྱུར་ 22) Ph_a གྱི། 23) Ph_a inserts བུ་དེ་རྒྱམས་ཀྱིས་ 24) LPh_a ཚོང་ 25) Ph_a omits ནི་ 26) Ph_a omits
དང་ 27) U གྱི་ for དང་ 28) Ph_a inserts ། 29) Ph_a གྱིས་ 30) NPL བསྐྱོད་, Ph_a སྐྱེས་ 31) Ph_a omits ཕྱི་ 32) Ph_aU omit དི་ 33)
LPh_a འང་ 34) LPh_a ཚོང་ 35) Ph_a གྱིས་ 36) Ph_a སྟམས་ 37) Ph_a inserts ། 38) Ph_a བསྐྱོད་ 39) U inserts ། 40) Ph_a omits སྐྱེས་བུ་
41) Between ཁྱང་ and མི་ P inserts two circles rather like the symbol for Skt. *visarga*, Ph_aU insert ། 42) Ph_a མོད་
43) LPh_a ཚོང་ 44) Ph_a ཏེ། 45) NPL བཞིན་, Ph_a བསྟན་ 46) U omits ། 47) Ph_a inserts མ་ 48) D inserts ཡང་ 49) Ph_a omits །
50) Ph_a omits ། 51) N རྟོག་ 52) Ph_a omits ན་ 53) Ph_aU omit ། 54) P ཚོད་ 55) N གྱི་ 56) U inserts ། 57) N omits གྱིས་ 58)
Ph_a inserts ལུང་འདི་ཉིད་ཀྱིས་ཅི་ནས་ 59) Ph_a དེ་དག་ for དེ་ལྟ་དེ་ལྟར་ 60) Ph_a སྟོན་ 61) Ph_a སྐྱོབ་ for སྐྱེས་བུ་ 62) Ph_a པ་ 63) U inserts །
64) Ph_a ཤེན་དུ་ for ལེགས་པར་ 65) Ph_aU omit ། 66) PL མཛོན་ 67) Ph_a inserts དེས་ཀྱང་སྐྱོབ་དེ་དག་མ་འོངས་པ་དུ་ན་དེ་བཞིན་གཤེགས་

[3E]

T 418, 905b8–b10:

如是毘陀和。菩薩於是間國土聞阿彌陀佛。數數念。用是念故見阿彌陀佛。見佛已從問。當持何等法生阿彌陀佛國。

T 417, 899a27–a29:

佛言。菩薩於此間國土。念阿彌陀佛專念故得見之。即問。持何法得生此國。

T 419, 922b10–b13:

拔陂。亦如是住在是世間。彼有阿彌陀佛已聞。數數念。便見如來阿彌陀佛。見在佛面見住上定意見便難問如來。從何法會菩薩得生是世。

T 416, 876a21–a28:

賢護。彼善男子善女人等。若欲成就菩薩摩訶薩思惟一切諸佛現前三昧。亦復如是。其身常住此世界中。暫得聞彼阿彌陀如來應供等正覺名號。而能繫心相續思惟次第不亂。分明觀彼阿彌陀佛。是為菩薩思惟具足成就諸佛現前三昧。因此三昧得見佛故。遂請問彼阿彌陀佛言。世尊。諸菩薩等成就何法。而得生此佛刹中耶。

[3E]

PSS 30, D 12b4, N 20b4, P 12b8, L 18b4, S 312a5, Ph_a 135b3, U 266b5:

བཟང་སྒྲོང་། རི་བཞིན་དུ་བྱུང་རྒྱུ་མཐོན་སྤྲུལ་¹⁾ལྟར་གྱི་²⁾སངས་རྒྱུ་མཐོན་སྤྲུལ་³⁾དུ་བཞུགས་པའི་ཉིང་ཅེ་འཛིན་འདི་དང་ལྷན་པ་དེ་ནི་⁴⁾འཛིན་ཉིན་གྱི་⁵⁾ཁམས་⁶⁾འདི་ཉིད་ན་འདུག་བཞིན་དུ་⁷⁾བཅོམ་ལྷན་འདས་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དགྲ་བཅོམ་པ་⁸⁾ཡང་དག་པར་ཚུགས་པའི་སངས་རྒྱུ་མཐོན་སྤྲུལ་⁹⁾མེད་¹⁰⁾དེ་ཐོས་སོ། རིས་¹¹⁾དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དེའི་མཚན་དང་གཟུགས་དང་¹²⁾ཡོན་ཏན་ཙམ་ཞིག་ཐོས་ནས་¹³⁾མཐོན་སྤྲུལ་མི་གཡོང་བར་¹⁴⁾བཅོམ་ལྷན་འདས་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དགྲ་བཅོམ་པ་ཡང་དག་པར་ཚུགས་པའི་སངས་རྒྱུ་མཐོན་སྤྲུལ་¹⁵⁾དཔག་མེད་དེ་ཡང་དག་པར་¹⁶⁾རྒྱུ་སྤྲན་པར་བྱེད་དོ། རི་¹⁷⁾མྱ་¹⁸⁾མྱིར་ཞིང་ཡིད་ལ་བྱེད་པས་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དེ་མཐོང་ངོ། རྒྱ་ལྟར་གྱི་¹⁹⁾སངས་རྒྱུ་མཐོན་སྤྲུལ་²⁰⁾དུ་བཞུགས་པའི་²¹⁾བྱུང་རྒྱུ་མཐོན་སྤྲུལ་དཔའི་ཉིང་ཅེ་འཛིན་དེ་²²⁾ལ་གནས་ཏེ། རིས་དེ་²³⁾བཞིན་གཤེགས་པ་དེ་མཐོང་ནས། བཅོམ་ལྷན་འདས། ཆོས་²⁴⁾གང་དང་ལྷན་ན།²⁵⁾ བྱུང་རྒྱུ་མཐོན་སྤྲུལ་མཐོན་སྤྲུལ་ཆེན་པོ་འཛིན་ཉིན་གྱི་²⁶⁾ཁམས་འདིར་སྤྲོ་བར་འགྱུར།²⁷⁾ ཞེས་ཞུ་བ་ལྟོ། རི་བཞིན་དུ་སངས་རྒྱུ་མཐོན་སྤྲུལ་གྱི་²⁸⁾ཞིང་གང་དང་²⁹⁾གང་དུ་སྤྲོ་བར་འདོད་པ་³⁰⁾དེའི་ཆོ་³¹⁾དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ལ་ལྟོ།

1) Ph_a རི་ 2) Ph_a གྱིས་ 3) Ph_a omits སྤྲུལ་ 4) U inserts ོ 5) Ph_a གྱིས་, U omits གྱི་ 6) U omits ཁམས་ 7) U inserts ོ 8) Ph_a omits པ་ 9) Ph_a inserts ཅུ་ 10) Ph_a inserts པ་ 11) Ph_a omits རིས་ 12) U inserts ོ 13) U inserts ོ 14) Ph_a བྱུངས་པར་ for གཡོང་བར་ 15) NP འོད་ 16) Ph_a omits ཚུགས་པའི་སངས་རྒྱུ་མཐོན་སྤྲུལ་མེད་དེ་ཡང་དག་པར་ 17) NPL རིའི་ 18) Ph_a omits མྱ་ 19) Ph_a གྱིས་ 20) Ph_a omits སྤྲུལ་ 21) Ph_a པ་ཞེས་ for པའི་ 22) DSPPh_aU omit རི་ 23) Ph_a omits རི་ 24) Ph_a ཆོགས་ 25) Ph_a omits ོ 26) Ph_a གྱིས་ 27) Ph_aU omit ོ 28) Ph_a གྱིས་ 29) Ph_a omits གང་དང་ 30) Ph_a inserts ོ 31) U inserts ོ

[3F]

T 418, 905b10–b19:

爾時阿彌陀佛。語是菩薩言。欲來生我國者。常念我數數。常當守念。莫有休息。如是得來生我國。佛言。是菩薩用是念佛故。當得生阿彌陀佛國。常當¹⁾念如是佛。身有三十二相悉具足光明徹照端正無比。在比丘僧中說經。說(一經?)不壞敗色。何等爲不壞敗色。(+)色?)痛痒²⁾思想生死識。魂神。地水火風。世間天上上至梵摩訶梵。不壞敗色。用念佛故得空三昧。如是爲念佛。

¹⁾ (當)–<三><知>。²⁾ 痒=癢<三>。

T 417, 899a29–b06:

阿彌陀佛報言。欲來生者當念我名。莫有休息則得來生。佛言。專念故得往生。常念佛身有三十二相八十種好。巨億光明徹照。端正無比。在菩薩僧中說法不壞色。何以故。色痛痒思想生死識。魂神。地水火風。世間天上上至梵摩訶梵。不壞色。用念佛故得是三昧。

T 419, 922b13–b21:

阿彌陀佛便爲諸菩薩說言。常念佛意善習不捨。常行幻作便得生是佛國。何等常念佛。念如來法不忘。今是如來無所著正覺。身有三十二大人相。紫磨金色身。如淨明月水精珠身。譬如衆寶所瓔珞¹⁾。在衆弟子中獨說法。如是爲其誠說。何以無所壞故。何所不壞敗者。地水火風神天梵王。是皆不亡色痛想行識。如有念如來。因緣如²⁾空。空便爲已得。是爲念佛意。

¹⁾ 珞=絡<聖>。²⁾ 如+(如)<宮>。

T 416, 876a28–b20:

爾時阿彌陀佛語是菩薩言。若人發心求生此者。常當繫心正念相續阿彌陀佛便得生也。既得生已。世尊於是知彼心故亦即念彼。彼方得見佛世尊耳。賢護。時彼阿彌陀如來應等正覺。告彼人言。諸善男子。汝當正念精勤¹⁾修習發廣大心必生此也。賢護。時彼菩薩復白阿彌陀佛言。世尊。是中云何念佛世尊精勤修習發廣大心得生此刹耶。賢護。時彼阿彌陀佛復告彼言。諸善男子。若汝今欲正念佛者。當如是念。今者阿彌陀如來應等²⁾正覺明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。具有如是三十二相八十隨形好。身色光明如融金聚。具足成就衆寶輦輦。放大光明坐師子座。沙門衆中說如斯法。其所說者。謂一切法本來不壞亦無壞者。如不壞色乃至不壞識等諸陰故。又如不壞地乃至不壞風等諸大故。又不壞色乃至不壞觸等諸入故。又不壞梵乃至不壞一切世主等。如是乃至不念彼如來。亦不得彼如來。彼作如是念如來已。如是次第得空三昧。善男子。是名正念諸佛現前三昧也。

¹⁾ 精勤=勤精<聖>。²⁾ (等)–<三><宮>。

[3F]

PSS 31–32, D 13a1, N 21a4, P 13a5, L 19a3, S 312b4, Pha 136a1, U 267a3:

དེ་སྐད་ལྷན་ནས་¹⁾བཅོམ་ལྷན་འདས་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཚེ་²⁾དཔག་མེད་³⁾དེས་⁴⁾བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་དེ་ལ་འདི་སྐད་ཅེས་བཀའ་སྤྲུལ་ཏོ། །རིགས་ཀྱི་
བྱ་⁵⁾ སངས་རྒྱལ་རྒྱུ་སྤྲན་པ་⁶⁾ཀྱན་ཏུ་བསྟེན།⁷⁾ ངེས་པར་བསྟེན་⁸⁾ཅིང་བསྟོམས་ལ་མང་དུ་བྱས་ན།⁹⁾ འཇིག་རྟེན་གྱི་¹⁰⁾ལམས་འདིར་སྐྱེ་བར་བྱེད་
དོ། །སངས་རྒྱལ་རྒྱུ་སྤྲན་པ་ཀྱན་ཏུ་བསྟེན།¹¹⁾ ངེས་པར་བསྟེན་¹²⁾ཅིང་བསྟོམས་¹³⁾ལ་མང་དུ་བྱས་ན།¹⁴⁾ སངས་རྒྱལ་གྱི་¹⁵⁾ཞིང་འདིར་སྐྱེ་བར་
འགྱུར་རོ། །རིགས་ཀྱི་བྱ།¹⁶⁾ དེ་ལ་སངས་རྒྱལ་རྒྱུ་སྤྲན་པ་དེ་གང་ཞིན། འདི་ལྟ་སྟེ། གང་¹⁷⁾དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཡིད་ལ་བྱེད་པ་སྟེ།¹⁸⁾ འདི་
ལྟར་དེ་ནི་¹⁹⁾དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དག་བཅོམ་པ་ཡང་དག་པར་རྫོགས་པའི་སངས་རྒྱལ་²⁰⁾ རིག་པ་²¹⁾དང་ཞབས་སུ་ལྷན་པ། བདེ་བར་གཤེགས་པ།
འཇིག་རྟེན་མཁུན་པ། སྐྱེས་བུ་འདུལ་བའི་ཁལ་སྤྲུང་བ། སྐྱེས་མེད་པ།²²⁾ ལྷ་དང་མི་རྣམས་ཀྱི་²³⁾སྟོན་པ།²⁴⁾ སངས་རྒྱལ་བཅོམ་ལྷན་འདས་²⁵⁾
སྐྱེས་བུ་ཆེན་པོའི་²⁶⁾མཚན་སུམ་ཅུ་²⁷⁾ཅུ་གཉིས་དང་²⁸⁾གསེར་གྱི་མདོག་ལྷ་བུའི་སྤྲིང་ལྷན་པ།²⁹⁾ གསེར་གྱི་³⁰⁾གཟུགས་འཛེར་ཞིང་གསལ་ལ་
ལེགས་པར་གནས་པ་དང་³¹⁾འབྲུག། རིན་པོ་ཆའི་མཚན་སྤྲིང་³²⁾ལྷ་ལོན་ཏུ་བརྒྱན་³³⁾པ། ཉན་ཐོས་ཀྱི་³⁴⁾དགེ་འདུན་གྱི་ནང་ན་ཆོས་ཀྱང་སྟོན་ཏེ།³⁵⁾
ཅེ་ནས་ཀྱང་རྒྱུད་མི་ཟབ་དེ་ལྷར་སྟོན་ཏོ། །ཅི་ཞིག་རྒྱུད་མི་ཟ་ཞིན།³⁶⁾ ས་³⁷⁾རྒྱུད་མི་གཞོན་³⁸⁾ཏོ་³⁹⁾། རྒྱུད་དང་⁴⁰⁾ མི་དང་⁴¹⁾ རྒྱུད་དང་⁴²⁾
འབྲུང་པོ་དང་⁴³⁾ ལྷ་དང་⁴⁴⁾ བྲམ་ཟེ་དང་། སྐྱེད་གྲུའི་⁴⁵⁾བདག་པོ་རྒྱུད་མི་གཞོན་⁴⁶⁾ཏོ། །གཟུགས་རྒྱུད་མི་⁴⁷⁾གཞོན་ཏོ། །ཚོར་བ་དང་⁴⁸⁾ འདུ་
ཤེས་དང་། འདུ་བྱེད་⁴⁹⁾དང་⁵⁰⁾ རྣམ་པར་ཤེས་པ་རྒྱུད་མི་གཞོན་⁵¹⁾ཏོ་⁵²⁾། །དེ་⁵³⁾དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་རྫོམ་སེམས་སུ་མི་བྱེད། མི་དམིགས་⁵⁴⁾
མངོན་པར་མི་ཆགས། ཡང་དག་པར་མི་ཤེས། མི་རྟོག་⁵⁵⁾ རྣམ་པར་མི་རྟོག། ⁵⁶⁾ཡང་དག་པར་རྒྱུ་སྤྲན་པ་མཐོང་སྟེ། གང་དེ་ལྷར་དེ་བཞིན་གཤེགས་
པ་མི་དམིགས་པར་⁵⁷⁾ཡིད་ལ་བྱེད་པས་⁵⁸⁾སྟོང་པ་ཉིད་ཀྱི་⁵⁹⁾ཉིང་ངེ་འཛོན་ཐོབ་པ་དེ་ནི་སངས་རྒྱལ་རྒྱུ་སྤྲན་པ་ཞེས་བྱ་སྟེ།

1) Pha བསྟན་ 2) NP འོད་ 3) Pha མཐའ་ཡས་ for ཚེད་པག་མེད་ 4) PhaU insert | 5) PhaU omit | 6) Pha inserts | 7) Pha བསྟན་ for
བསྟེན། 8) Pha བསྟན་ 9) Pha omits | 10) Pha ཀྱིས་ 11) Pha བསྟན་ for བསྟེན། 12) Pha omits ངེས་པར་བསྟེན་ 13) Pha སྟོན་ 14) Pha
omits | 15) Pha ཀྱིས་ 16) PhaU omit | 17) Pha inserts རྟོ 18) Pha དེ་ 19) NPL omit དེ་ནི་, Pha འདི་ལྷར་འདི་ནི་ for འདི་ལྷར་དེ་ནི་
20) PhaU omit | 21) Pha མཁུན་པ་ for རིག་པ་ 22) Pha སྐྱེས་མེད་པ། སྐྱེས་བུ་འདུལ་བའི་ཁལ་སྤྲུང་བ། for སྐྱེས་བུ་འདུལ་བའི་ཁལ་སྤྲུང་བ། སྐྱེས་མེད་པ།
23) Pha ཀྱིས་ 24) Pha omits | 25) PhaU omit | 26) Pha སྟོན་ 27) PPha སྟོན་ 28) PhaU insert | 29) Pha omits གསེར་གྱི་མདོག་ལྷ་
བུའི་སྤྲིང་ལྷན་པ།, U omits | 30) Pha ཀྱིས་ 31) Pha omits དང་ 32) Pha རིན་པོ་ཆའི་མཚན་སྤྲིང་པ་ for རིན་པོ་ཆའི་མཚན་སྤྲིང་ 33) PPha རྒྱན་ 34) Pha
ཀྱིས་ 35) PhaU ཏོ། 36) Pha omits | 37) Pha omits ས་ 38) Pha གཞོན་, U གསོན་ 39) NP རྟོ 40) PhaU omit | 41) PhaU omit |
42) U omits | 43) U omits | 44) Pha omits ལྷ་དང་ 45) L རྟོའི་ 46) Pha གཞོན་, U གསོན་ 47) Pha མ་ 48) Pha omits | 49) Pha
འདུ་ 50) Pha omits | 51) Pha བསྟན་, U རྟོན་ 52) P ཏོ། 53) NPL omit དེ་ 54) Pha omits | 55) Pha ཡང་དག་པར་མི་རྟོག་ for ཡང་དག་
པར་མི་ཤེས། མི་རྟོག་, U omits | 56) Pha omits རྣམ་པར་མི་རྟོག་ 57) Pha བ་ 58) Pha inserts | 59) Pha ཀྱིས་

[3G]

T 418, 905b19–b23:

佛告颺陀和菩薩。於三昧中誰當證¹⁾者。我弟子摩訶迦葉。因坻達菩薩。須真天子。及時知是三昧者。有行得是三昧者。是爲證。何等爲證。證是三昧知爲空定²⁾。

¹⁾ 證+(得)<三><知>.²⁾ 定=空<知>.

T 417, 988b06–b08:

佛告颺陀和。是菩薩三昧誰證者。我弟子摩訶迦葉因坻達須真天子。及時知者。有行得者。是爲證也。

T 419, 922b21–b26:

菩薩常寤已捨其定。拔陂。汝用是便到彼所。從到便說是事。從有是如是法說。可使¹⁾受別²⁾。不復還墮於無上得正覺。拔陂。亦汝及摩訶迦葉。及因陀達菩薩。及須深天子。亦及餘³⁾。於是定意有得者。

¹⁾ 使=便<聖>.²⁾ 別=薊<元><明>.³⁾ 餘=能<宋><宮>.

T 416, 876b20–c11:

賢護。爾時彼菩薩從三昧起已來詣汝所。說此三昧相者。汝時即應爲彼說法隨順教化。令於阿耨多羅三藐三菩提得不退轉。賢護。我時則亦授彼佛記。是人當來必得成佛。號曰德光明如來應供等正覺乃至佛世尊。賢護。是中三昧誰當證知。今我弟子摩訶迦葉。帝釋德菩薩。善德天子。及餘無量諸菩薩輩。咸已修得此三昧者。是爲證。云何證。所謂空三昧也。

[3G]

PSS 32, D 13a7, N 21b7, P 13b4, L 19b6, S 313a6, Ph_a 136b3, U 267b6:

བྱང་རྩལ་སེམས་དཔལ་དེ་ཉིང་ངེ་འཛིན་དེ་¹⁾བསྐྱོམས་ཤིང་ཉིང་ངེ་འཛིན་དེ་ལ་མཉམ་²⁾པར་བཞག་³⁾ནས། ཉིང་⁴⁾ངེ་འཛིན་དེ་ལས་ལངས་⁵⁾ཏེ་⁶⁾བཟང་
 གློང་། ཁྱོད་གང་ན་བདེ་རེས་ནས་⁷⁾ཐྱིན་པ་དང་།⁸⁾ ཉིང་ངེ་འཛིན་འདི་⁹⁾བཙུང་¹⁰⁾དོ། །བཟང་གློང་། དེ་ལ་ཁྱོད་ཀྱིས་¹¹⁾ཅི་ནས་ཀྱང་བྱང་རྩལ་སེམས་
 དཔལ་དེ་གླུ་ན་མེད་པ་ཡང་དག་པར་རྫོགས་པའི་བྱང་རྩལ་ལས་ཐྱིར་མི་ལྟོག་པར་འགྱུར་བ་དེ་ལྟ་དེ་ལྟར་ཆོས་སྟོན་ཏོ། །དེ་ལ་ངས་ཀྱང་སྐྱེས་བུ་དེ་ནི་མ་འོངས་
 པའི་དུས་ན་¹²⁾དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དག་བཅོམ་པ་ཡང་དག་པར་རྫོགས་པའི་སངས་རྒྱུས་སྟོབས་¹³⁾པ་རྟེན་པ་ཞེས་བྱ་བར་འགྱུར་རོ།¹⁴⁾ ཞེས་ལུང་སྟོན་
 ཏོ། །བཟང་གློང་། ཁྱོད་ཉིད་དང་།¹⁵⁾ གནས་བརྟན་¹⁶⁾འོད་སྤང་ཆེན་པོ་དང་།¹⁷⁾ བྱང་རྩལ་སེམས་དཔལ་འདབ་པོས་བྱིན་དང་། བྱང་རྩལ་སེམས་དཔལ་
 མཚམས་བཟངས་¹⁸⁾དང་། གཞན་ཡང་བྱང་རྩལ་སེམས་དཔལ་འདབ་དག་གིས་¹⁹⁾ཉིང་ངེ་འཛིན་འདི་ཐོབ་པ་²⁰⁾རྣམས་²¹⁾ཉིང་ངེ་འཛིན་འདི་ལས་
²²⁾དབང་དུ་གྱུར་པ་ཡིན་ཏེ།

¹⁾ Ph_a omits ཉིང་ངེ་འཛིན་དེ་ ²⁾ Ph_a སྟོན་ ³⁾ PU གཞག་ ⁴⁾ Ph_a གཉིང་ ⁵⁾ Ph_a ལང་ ⁶⁾ Ph_a ཐེ། ⁷⁾ Ph_a inserts ། ⁸⁾ Ph_a omits ། ⁹⁾
 NPL དེ་ ¹⁰⁾ P རྟོན་ ¹¹⁾ PPh_a omits ཀྱིས་ ¹²⁾ Ph_aU insert ། ¹³⁾ Ph_a སྟོབས་ ¹⁴⁾ U omits ། ¹⁵⁾ Ph_a omits ། ¹⁶⁾ Ph_a རྟོན་ ¹⁷⁾
 Ph_a omits ། ¹⁸⁾ NLPh_a བཟང་ ¹⁹⁾ U omits དག་གིས་ ²⁰⁾ Ph_a ཐོབ་། for ཐོབ་པ་ ²¹⁾ Ph_a omits རྣམས་ ²²⁾ NPLPh_a ལ་

[3H]

T 418, 905b23–c03:

佛告毘陀和。乃往(←過¹⁾)去時有佛。名須波日。時有人行出入大空澤中不得飲食²⁾飢渴而臥出。便於夢中得香甜美食。飲食已其覺腹中空。自念一切所有皆如夢耶³⁾。佛言。其人用念空故。便逮得無所從生法樂。即逮得阿惟越致。如是毘陀和。菩薩其所向方聞現在佛。常念所向方。欲見佛即念佛。不當念有亦無。我所立如想空。當念佛立如以珍寶倚⁴⁾琉璃⁵⁾上。菩薩如是見十方無央數佛清淨。

¹⁾ (過)+去<三>。²⁾ 飲食=飯食<三><知>。³⁾ 耶=邪<知>。⁴⁾ 倚=致<宋>, 琦<知>。⁵⁾ 琉璃=瑠璃<三><知>, 下同。

T 417, 899b08–b10:

如是毘陀和。欲得見十方諸現在佛者。當一心念其方。莫得異想。如是即可得見。

T 419, 922b26–c05:

拔陂。過去久遠有一男子。於曠¹⁾野澤中便大飢復渴。於澤中便得臥。夢得好飯食極意飽食。所飢渴便飽。適寤自意身飽滿。便自計是法譬如夢食。其如是觀便忍受別²⁾於佛法。菩薩亦如是。居家或學聞佛所在方。常至意當念其方。常願欲見佛。莫取想於胎。亦莫想自有身。常住空想。有想當想念佛。從以空想便以住。以能想念佛。淨如琉璃寶中尊。如是念便見如來。

¹⁾ 曠=廣<聖>。²⁾ 別=薊<元><明>。

T 416, 876c11–c24:

賢護。我念往昔有佛世尊。號須波日。時有一人行值曠野。飢渴因(←困?)苦遂即睡眠。夢中具得諸種上妙美食。食之既飽無復飢虛。從是寤已還復飢渴。是人因此即自思惟。如是諸法皆空無實。猶夢所見本自非真。如是觀時悟無生忍。得不退轉於阿耨多羅三藐三菩提。如是賢護。有諸菩薩若在家若出家。聞有諸佛隨何方所即向彼方至心頂禮。心中渴仰欲見彼佛故。作如是專精思惟。復應當觀如是色相。亦即作彼虛空之想。而彼成就虛空想已。得住如是正思惟中。住思惟已。得見彼佛光明清徹¹⁾如淨琉璃。其形端正如真金²⁾柱。如是念者彼見如來亦復如是。

¹⁾ 徹=澈<宮>。²⁾ 金=釜<宮>。

[3H]

PSS 32–33, D 13b3; N 22a6; P 13b7; L 20a3; S 313b4; Ph_a 136b8; U 268a2:

བཟང་སྐྱོང་། མྱོན་བྱུང་བ་¹⁾འདས་པའི་དུས་ན་²⁾སྐྱེས་བུ་གཅིག་ཅིག་³⁾དགོན་པའི་མྱ་ངམ་⁴⁾ཞིག་ཏུ་སོང་བ་དང་། དེ་བྲག་ས་ཤིང་⁵⁾སྐོ་མས་⁶⁾ནས་སྐྱུགས་
པ་དང་⁷⁾གཉིད་ཀྱིས་ནོན་⁸⁾ཏེ། དེ་⁹⁾ཉལ་བ་དང་།¹⁰⁾ མི་ལམ་ན་བཟའ་¹¹⁾བ་དང་¹²⁾བཏུང་བ་མང་པོ་ཞིག་ཆེད་དོ། ཆེད་ནས་ཀྱང་ཇི་ཙམ་¹³⁾ཆོག་
པ་དང་¹⁴⁾པར་ཐོས་ཏེ། བྲག་ས་པ་དང་སྐོ་མ་པ་དེ་དག་ཀྱང་མེད་པར་གྱུར་ཏོ། །དེ་སད་པ་དང་།¹⁵⁾ ལུས་དང་ལྗོ་¹⁶⁾མ་རྒྱས་པར་གྱུར་ནས། དེ་¹⁷⁾འདི་སྐྱམ་
དུ།¹⁸⁾ འདི་ལྟ་སྟེ་¹⁹⁾མི་ལམ་དང་²⁰⁾འབྲ་བ་དེ་²¹⁾ལྟ་བུའི་ཆོས་ཤིག་²²⁾ཡོད་དོ།²³⁾ སྐྱམ་སྟེ། དེ་དེ་ལྟར་རྟོགས་པས་མི་སྐྱེ་བའི་ཆོས་ལ་བཟོད་པ་ཐོབ་
པར་གྱུར་ཏོ།²⁴⁾ །ཐོན་མེད་པ་ཡང་དག་པར་རྫོགས་པའི་བྱང་རྒྱུ་ལས་²⁵⁾ཀྱང་²⁶⁾ཕྱིར་མི་ལྟོག་པར་གྱུར་ཏོ།²⁷⁾ །བཟང་སྐྱོང་། དེ་བཞིན་དུ་བྱང་རྒྱུ་
སེམས་དཔལ་འབྱིས་པ་འམ། རབ་ཏུ་བྱུང་བ་ཡང་²⁸⁾རུང་།²⁹⁾ ཕྱོགས་གང་དང་གང་ན་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་བཞུགས་པར་³⁰⁾ཐོས་པའི་³¹⁾ཕྱོགས་དེ་དང་
དེ་ལོགས་སུ་³²⁾དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དེ་ཡིད་ལ་བྱས་ན།³³⁾ དེས་³⁴⁾སངས་རྒྱས་མཐོང་བ་ཐོབ་པོ། །དེས་³⁵⁾དངོས་པོའི་འདུ་ཤེས་སུ་མི་བྱའི་³⁶⁾ ནམ་
མཁའི་འདུ་ཤེས་སུ་བྱས།³⁷⁾ དེ་ནམ་མཁའི་འདུ་ཤེས་ལ་ཤིན་ཏུ་གནས་ཤིང་³⁸⁾སངས་རྒྱས་ཀྱི་³⁹⁾འདུ་ཤེས་⁴⁰⁾ཤིན་ཏུ་ཡིད་ལ་བྱས་པས། དེ་བཞིན་
གཤེགས་པ་བེད་དུ་⁴¹⁾སྐྱེ་གཟུགས་ལྟ་བུ་བཟང་པོ་བྱང་རྒྱུ་བ་སེམས་དཔལ་དེས་མཛོན་སུ་དུ་མཐོང་⁴²⁾བར་འགྱུར་ཏེ། བྱང་རྒྱུ་བ་སེམས་དཔལ་དེས་དེ་
བཞིན་གཤེགས་པ་དག་བཅོམ་པ་ཡང་དག་པར་རྫོགས་པའི་སངས་རྒྱས་དེ་ལྟ་བུ་དེ་⁴³⁾མཐོང་བར་འགྱུར་རོ།

1) Ph_a omits མྱོན་བྱུང་བ་ 2) Ph_a inserts འབྱུང་བ་, U inserts ། 3) Ph_a omits ཅིག་ 4) Ph_aU ངན་ 5) Ph_a པ་དང་ for ཤིང་ 6) NPLU
སྐོ་མ་ 7) U inserts ། 8) U གཞོན་ 9) NPL omit དེ་ 10) Ph_a དེ་ལ་ལ་བ་དང་ for དེ་ཉལ་བ་དང་། 11) Ph_a གཟའ་ 12) U inserts ། 13) Ph_a
inserts བྱིས་ 14) Ph_a ཆགས་ 15) Ph_aU ཡང་ for ། 16) Ph_a ལོ་ 17) Ph_a ང་ 18) Ph_aU omit ། 19) Ph_aU insert ། 20) Ph_a omits
དང་ 21) Ph_a འདི་ 22) Ph_a ཞིག་ 23) Ph_a omits རོ།, U omits ། 24) Ph_a འགྱུར་རོ། 25) Ph_a omits ལས་ 26) NPLPh_a omit ཡང་
27) Ph_a འགྱུར་རོ། 28) L འང་ 29) U omits ། 30) Ph_a པའི་ 31) Ph_a omits ཐོས་པའི་ 32) Ph_a omits དེ་ལོགས་སུ་ 33) Ph_a omits ། 34)
Ph_aU དེ་ 35) Ph_a དེ་ 36) Ph_a བྱས། for བྱའི།, U omits ། 37) Ph_a omits ནམ་མཁའི་འདུ་ཤེས་སུ་བྱས། 38) U inserts ། 39) Ph_a ཀྱིས་ 40)
DU inserts སུ་ 41) L བེད་དུ་འི་, SU བེད་དུ་འི་, Ph_a བེད་དུ་འི་ 42) Ph_a ཐོང་ 43) Ph_a omits དེ་

[3I]

T 418, 905c03–c09:

譬如人遠出到他郡國。念本鄉里家室親屬財產。其人於夢中歸到故鄉里見家室親屬。喜共言語。於夢中見以¹⁾覺爲知識說之。我歸到故鄉里見我家室親屬。佛言。菩薩如是。其所向方聞佛名。常念所向方欲見佛。菩薩一切見佛如持珍寶著琉璃上。

¹⁾ 以=已<三><知>。

T 417, 899b10–b14:

譬如人遠出到他郡國。念本鄉里家室親族。其人於夢中歸到故鄉里。見家室親屬。喜共言語。覺爲知識說之如是。佛言。菩薩聞佛名字欲得見者。常念其方即得見之。

T 419, 922c05–c12.

拔陂。譬如人從本生國到他方。久久還念本所生國。遊戲所見樂臥。便夢還故國。便遊戲生想如故所到處。於國中恣意戲¹⁾。寤便爲親近及知識左右侍人說言。我往如是我見如是。我所到所作(一到?)如²⁾是。拔陂。菩薩亦如是。居家及學聞佛所在方。常當念其方。願常欲見佛。如是念菩薩。會見如來淨如琉璃寶中尊。

¹⁾ (遊)+戲<三><宮>。²⁾ 如=知<三><宮><聖>。

T 416, 876c24–877a04:

復次賢護。譬如有人忽從本國至於他方。雖在他方而常追憶本所生處。曾如是見。亦如是聞。如是憶念。如是了知。久追憶故於睡夢中明見自身在本生¹⁾處。遊從見聞如前所更。是人後時向諸眷屬。具論夢中所見之事。我如是見。我如是聞。我如是營爲。如是獲得。如是賢護。有諸菩薩若在家若出家。若從他聞有佛世尊。隨何方所即向彼方。至心頂禮欲見彼佛正念不亂。應念即見彼佛形像。或如瑠璃或純金色亦復如是。

¹⁾ 生=見<宮>。

[3I]

PSS 33–34, D 14a1, N 22b7, P 14a5, L 20b3, S 314a4, Ph_a 137b1, U 268b2:

བཟང་སྐྱོང་། འདི་ལྟ་སྟེ་¹⁾དཔེར་ན་²⁾སྐྱེས་བུ་ལ་ལ་ཞིག་རང་སྐྱེས་པའི་³⁾ཡུལ་ནས་⁴⁾ལྷོངས་ཀྱི་⁵⁾ཕྱོགས་གཞན་ཞིག་ཏུ་སོང་སྟེ་ཕྱིན་པ་དང་། རང་སྐྱེས་
པའི་ཡུལ་དེ་རྗེས་སུ་བྲན་ནས་⁶⁾ 7)ཇི་ལྟར་མཐོང་བ་དང་།⁸⁾ ཐོས་པ་དང་།⁹⁾ ཤེས་པ་དང་།¹⁰⁾ རྟོགས་པའི་ཚོས་རྣམས་ཡིད་ལ་བྱེད་པ་ལས་¹¹⁾རྣམས་
པ་དང་གཉིད་ཀྱིས་¹²⁾ཞོན་ཏེ། དེ་ཉལ་བ་དང་། མི་ལམ་ན་¹³⁾རང་སྐྱེས་པའི་ཡུལ་དུ་སོང་ནས་¹⁴⁾དེ་ན་བདག་ཉིད་འདུག་པ་སྟེ་¹⁵⁾ཤེས་ཤིང་།¹⁶⁾
ཇི་¹⁷⁾ལྟར་སྟོན་¹⁸⁾མཐོང་།¹⁹⁾བ་དང་། ཐོས་པ་དང་། བྱི་བྲག་ཕྱིད་པ་དང་།²⁰⁾ རྣམ་པར་ཤེས་པ་དེ་དག་ཀྱང་མཐོང་ངོ་། །དེ་ན་²¹⁾འགྲོ་ཞིང་ལྷོག་པ་དག་
ཀྱང་བྱེད་དོ། །དེ་སྔ་པ་དང་།²²⁾ 23)གཉིན་འདབ་²⁴⁾དང་།²⁵⁾ མཛའ་བཤེས་དང་།²⁶⁾ ཉི་དུ་དང་།²⁷⁾ སྒྲག་གི་²⁸⁾གཉིན་²⁹⁾མཚམས་རྣམས་ཀྱི་
ནང་དུ་³⁰⁾ ང་³¹⁾ཞི་འདི་ལྟར་སོང་།³²⁾སོང་ངོ་། །ངས་ནི་འདི་དག་³³⁾མཐོང་ངོ་། །དེར་ངས་ནི་འདི་དག་སྐྱོང་ངོ་།³⁴⁾ ཞེས་དོན་དེ་དག་ཀྱང་བཟོང་
³⁵⁾དོ། །བཟང་སྐྱོང་། དེ་བཞིན་དུ་བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་འཕེལ་ཆེན་པོ་བྱིས་པ་ལས་³⁶⁾རབ་ཏུ་བྱུང་བ་ཡང་³⁷⁾རུང་། ཕྱོགས་གང་དང་གང་ན་དེ་
བཞིན་གཤེགས་པ་བཞུགས་པར་³⁸⁾ཐོས་པའི་ཕྱོགས་དེ་³⁹⁾དང་དེ་ལོགས་སུ་བྲན་པ་དང་ལྷན་ཞིང་སེམས་གཤེང་⁴⁰⁾བཅིང་པས་སངས་རྒྱས་མཐོང་བ་
⁴¹⁾ཐོབ་པར་བྱ་བའི་ཕྱིར་⁴²⁾དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དེ་ཡིད་ལ་བྱེད། །དེ་ལྟར་བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་འཕེལ་དེས་⁴³⁾དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་⁴⁴⁾བྲེན་ཏེ་⁴⁵⁾སྐྱེ་
གཞུགས་བཟང་པོར་གནས་པ་⁴⁶⁾མཐོང་པར་འགྱུར་ངོ་།

¹⁾ Ph_aU insert | ²⁾ Ph_aU insert | ³⁾ Ph_a སྐྱེ་བའི་ for སྐྱེས་པའི་ ⁴⁾ Ph_a omits རས་, U inserts | ⁵⁾ Ph_a inserts | ⁶⁾ Ph_a omits | ⁷⁾ Ph_a inserts དེ་ ⁸⁾ U omits | ⁹⁾ Ph_a omits ཐོས་པ་དང་། ¹⁰⁾ Ph_a omits | ¹¹⁾ Ph_aU insert | ¹²⁾ Ph_a ཀྱི་ ¹³⁾ Ph_a inserts | ¹⁴⁾ Ph_aU insert | ¹⁵⁾ Ph_a omits སྟེ་ ¹⁶⁾ Ph_aU omit | ¹⁷⁾ Ph_a omits ཇི་ ¹⁸⁾ P མཛོན་, Ph_a omits སྟོན་ ¹⁹⁾ Ph_a ཐོང་ ²⁰⁾ Ph_a རྟོགས་པ་དང་ for བྱི་བྲག་ཕྱིད་པ་དང་། ²¹⁾ Ph_a omits ན་ ²²⁾ U omits | ²³⁾ Ph_a inserts ནང་གིས་སྐྱོབ་དང་། བྲོགས་པོ་དང་ ²⁴⁾ PU མདབ་, Ph_a omits འདབ་ ²⁵⁾ Ph_a omits | ²⁶⁾ Ph_a omits མཛའ་བཤེས་དང་།, U omits | ²⁷⁾ Ph_a omits ཉི་དུ་དང་། ²⁸⁾ Ph_a གིས་ ²⁹⁾ P མཉིན་, Ph_a གཉིན་ ³⁰⁾ Ph_aU omit | ³¹⁾ Ph_a omits ང་ ³²⁾ Ph_a omits སོང་ ³³⁾ Ph_a inserts ཀྱང་ ³⁴⁾ Ph_a omits རོ་, U omits | ³⁵⁾ D ཇོན་ ³⁶⁾ Ph_a inserts | ³⁷⁾ L འང་ ³⁸⁾ NPL བ་ ³⁹⁾ NPL omits དེ་ ⁴⁰⁾ Ph_a གཤེངས་ ⁴¹⁾ Ph_a inserts དང་ ⁴²⁾ U inserts | ⁴³⁾ U inserts | ⁴⁴⁾ Ph_aU པ་ལས་ ⁴⁵⁾ L བྲེན་ཏེ་, SU བྲེན་ཏེ་, Ph_a བྲེན་ for བྲེན་ཏེ་ ⁴⁶⁾ D པར་, Ph_a omits བཟང་པོར་གནས་པར་

[3]

T 418, 905c09–c18:

譬如比丘觀死人骨著前。有觀青時。有觀白時。有觀赤時。有觀黑時。其骨無有持來者。亦無有是骨。亦無所從來。是意所作想有耳。菩薩如是持佛威神力。於¹⁾三昧中立。在所欲見何方佛欲見即見。何以故。如是毘陀和。是三昧佛力所成。持佛威神。於三昧中立者。有三事。持佛威神力。持佛三昧力。持本功德力。用是三事故。得見佛。

¹⁾ (於) – <知>.

T 417, 899b14–b18:

譬如比丘觀死人骨著前觀之。有青時。有白時。有赤時。有黑時。其色無有持來者。是意所想耳。菩薩如是持佛威神力。於三昧中立自在。欲見何方佛即得見。何以故。持佛力。三昧力。本功德力。用是三事故得見。

T 419, 922c13–c20:

拔陂。譬如觀汚露比丘。取半壞敗色著其前。便見已青黑亦(←赤?)見壞。亦¹⁾見空隨如烟。但見白骨在前。是骨從何來誰持著。是誰所作。是皆意所作耳。拔陂。菩薩亦如是。持佛不歸他。住在是定意。所向方便願見佛。其方有佛者即見如來身。何以故。以倚²⁾著定故。復已持佛故。住在是定以佛威神。復已定力。自復以宿功德。作三令悉見如來。

¹⁾ 亦=赤<三><宮><聖>.²⁾ 倚=猗<宋><宮>.

T 416, 877a04–a15:

復次賢護。譬如比丘修不淨觀。見新死屍形色始變。或青或黃或黑或赤。或時臃¹⁾脹或已爛壞膿血俱流。蟲獸食噉肉盡。骨白其色如珂²⁾。如是乃至觀骨離散。而彼骨散無所從來亦無所去。唯³⁾心所作還見自心。如是賢護。若諸菩薩欲得成就彼念諸佛現前三昧。隨何方所。先念欲見彼佛世尊。隨所念處即見如來。何以故。因緣三昧得見如來。得見彼佛有三因緣。何者爲三。一者緣此三昧。二者彼佛加持。三者自善根熟。具足如是三因緣故即得。明見彼諸如來應供等正覺亦復如是。

¹⁾ 臃=肱<宮>.²⁾ 珂<聖>.³⁾ 唯=惟<三><宮>, 下同.

[3J]

PSS 34–35, D 14a5, N 23b1, P 14b2, L 21a3, S 314b4, Ph_a 138a1, U 269a2:

བཟང་སྐྱོང་། འདི་ལྷ་སྟེ་¹⁾དཔེར་ན་²⁾དགོ་སྐྱོང་མི་སྟེ་ཕ་སྐྱོང་པ་ཞིག་གིས་མདུན་ན་³⁾རྣམ་པར་བམ་པའི་⁴⁾གཟུགས་རྣམས་མཐོང་ཞིང་།⁵⁾ རྣམ་པར་སྐྱོང་⁶⁾པ་དང་། རྣམ་བར་རྣགས་⁷⁾པ་དང་། རྣམ་པར་དམར་བ་དང་། རྣམ་པར་ཐོས་⁸⁾པ་དང་། འགྲུལ་པ་གས་⁹⁾པ་འཇམ། འདད་ཁྲག་མེད་པ་འཇམ། དཀར་པོ་འཇམ། ཁ་དོག་¹⁰⁾དུང་དང་འབྲ་བ་འཇམ། ཀའ་རུས་ཤིག་མདུན་དུ་མཐོང་ན།¹¹⁾ རྣམ་པར་སྐྱོང་པ་ནས་¹²⁾ཀའ་རུས་ཀྱི་¹³⁾བར་དུ་དེ་དག་གང་རྣམས་ཀྱང་མ་འོངས།¹⁴⁾ གང་དུ་ཡང་¹⁵⁾མ་སོང་ངོ་། །དེ་དག་སྐུས་ཀྱང་མ་བྱས།¹⁶⁾ སྐུས་ཀྱང་མ་བགགས་ཏེ། བཟང་སྐྱོང་། འོན་ཀྱང་དགོ་སྐྱོང་དེའི་སེམས་ཅུ་གཅིག་པའི་དབང་གིས་མདུན་¹⁷⁾ན་ཀའ་རུས་འདུག་པ་མཐོང་ངོ་། །བཟང་སྐྱོང་། དེ་བཞིན་དུ་སངས་རྒྱུས་ཀྱིས་ཡོངས་སུ་བཟུང་བའི་བྱང་རྒྱུ་སེམས་དཔལ་ཉིང་ངེ་འཛིན་འདི་¹⁸⁾ལ་གནས་པ་རྣམས་¹⁹⁾ཕྱོགས་གང་དང་གང་ན་²⁰⁾དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དགྲ་བོམ་པ་ཡང་དག་པར་རྒྱུགས་པའི་སངས་རྒྱུས་བཞུགས་པའི་ཕྱོགས་དེ་དང་དེ་ལོགས་སུ་སངས་རྒྱུས་མཐོང་བ་འཐོབ་²¹⁾པར་བྱ་བའི་ཕྱིར་ཡིད་ལ་བྱེད་དོ། །ཕྱོགས་དེ་དང་དེ་ལོགས་སུ་ཡིད་ལ་བྱས་པས་²²⁾དེས་ཕྱོགས་དེ་དང་དེ་ལོགས་སུ་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དགྲ་བོམ་པ་ཡང་དག་པར་²³⁾རྒྱུགས་པའི་སངས་རྒྱུས་དེ་དག་མཐོང་ངོ་། །དེ་ཅིའི་ཕྱིར་ཞེ་ན། བཟང་སྐྱོང་། འདི་ལྷ་སྟེ། སངས་རྒྱུས་མཐོང་བ་འཐོབ་²⁴⁾པར་འགྲུར་བ་འདི་ནི་²⁵⁾ཉིང་ངེ་འཛིན་འདིའི་རྒྱ་འཇུག་²⁶⁾པ་ཡིན་ནོ། །ཉིང་ངེ་འཛིན་འདི་ལ་གནས་པའི་བྱང་རྒྱུ་སེམས་དཔལ་ཉིང་སངས་རྒྱུས་ཀྱི་²⁷⁾མཐུན་དང་།²⁸⁾ རང་གིས་²⁹⁾དགོ་བའི་རྩ་བའི་³⁰⁾སྟོབས་བསྐྱེད་པ་དང་། ཉིང་ངེ་འཛིན་ཐོབ་པའི་བྱིན་³¹⁾དང་། འདི་དག་གསུམ་ཚོགས་ཤིང་འདུས་པས་དེས་³²⁾དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་རྣམས་མཐོང་ཞིང་སྤང་བར་འགྲུར་རོ། །

¹⁾ U inserts ། ²⁾ Ph_aU insert ། ³⁾ Ph_a འདུན་དུ་ for མདུན་ན་ ⁴⁾ Ph_a omits རྣམ་པར་བམ་པའི་ ⁵⁾ Ph_a སྟེ། for ཞིང་། ⁶⁾ S བསྐྱོང་ ⁷⁾ NP བརྣགས་, Ph_a རུས་ ⁸⁾ Ph_a ཐོས་ ⁹⁾ DSU འཕགས་, N ཐུགས་, Ph_a རྣམ་པ་གས་ for རྣམས་པ་གས་ ¹⁰⁾ Ph_a omits ཁ་དོག་ ¹¹⁾ Ph_a སྟེ། for ན། ¹²⁾ U inserts ། ¹³⁾ Ph_a ཀྱིས་ ¹⁴⁾ Ph_a omits ། ¹⁵⁾ L འང་ ¹⁶⁾ Ph_a omits ། ¹⁷⁾ N འདུན་ ¹⁸⁾ Ph_a ཇི་ for འདི་ ¹⁹⁾ Ph_a inserts ། ²⁰⁾ Ph_a omits གང་ན་ ²¹⁾ Ph_a ཐོབ་ ²²⁾ Ph_aU inserts ། ²³⁾ P omits པར་ ²⁴⁾ Ph_a ཐོབ་ ²⁵⁾ U inserts ། ²⁶⁾ LPh_a མཐུན་ ²⁷⁾ Ph_a ཀྱིས་ ²⁸⁾ Ph_a མ་དང་ for མཐུན་དང་། ²⁹⁾ PSU གི་ ³⁰⁾ Ph_a omits དགོ་བའི་རྩ་བའི་ ³¹⁾ DNPLPh_a ཕྱིར་ ³²⁾ NPLPh_a omit དེས་

[3K]

T 418, 905c18–c25:

譬若¹⁾颺陀和。年少之人端正姝好莊嚴已。如²⁾持淨器盛好麻油。如持好器盛淨水。如新磨鏡。如無瑕水精。欲自見影於是自照悉自見影。云何。颺陀和。其所麻油水鏡水精其人自照。寧有影從外入中不。颺陀和言。不也³⁾。天中天。用麻油水精水鏡淨潔故。自見其影耳。其影亦不從中出。亦不從外入。

¹⁾ 若=如<三><知>.²⁾ 已如=以<三>.³⁾ (也)–<三><知>.

T 417, 899b19–b23:

譬如人年少端正著好衣服。欲自見其形。若以持鏡若麻油若淨水水精。於中照自見之。云何。寧有影從外入鏡麻油水水精中不也。颺陀和言。不也。天中天。以鏡麻油水水精淨故。自見其影耳。影不從中出。亦不從外入。

T 419, 922c20–c26:

拔陂。譬如人年尚少。樂自拭淨器受麻油¹⁾。淨器受清水新磨鏡。若於水精器自觀其身。悉於是中見其形。拔陂。汝寧謂是人形入油水鏡水精器不。若已在其中耶。對言。如來不。我謂內不可得。及麻²⁾油水鏡水精悉見影。住其前亦不從光中來。亦不從身中出。

¹⁾ 麻油=油麻<三><宮><聖>.²⁾ 麻=摩<聖>.

T 416, 877a15–a26:

復次賢護。如人盛壯容貌端嚴。欲觀己形美惡好醜。即便取器。盛彼清油或持淨水。或取水精。或執明鏡。用是四物觀己面像。善惡好醜顯現分明。賢護。於意云何。彼所見像。於此油水水精明鏡四處現時。是為先有耶。賢護答言。不也。曰是豈本無耶。答言。不也。曰是為在內耶。答言。不也。曰是豈在外耶。答言。不也。世尊。唯彼油(+水¹⁾)水精(+明²⁾)鏡諸物清明無濁無滓。其形在前彼像隨現。而彼現像不從四物出。亦非餘處來。非自然有。非人造作。當知。彼像無所從來。亦無所去。無生無滅無有住所。

¹⁾ 油+(水)<三><宮>.²⁾ (明)+鏡<三><宮>.

[3K]

PSS 35–36, D 14b4, N 24a3, P 15a1, L 21b5, S 315a6, Ph_a 138b2, U 269b2:

བཟང་སྐྱོང་། འདི་ལྟ་སྟེ་¹⁾དཔེར་ན་²⁾བྱད་མེད་དམ་སྐྱེས་པ་གང་ལ་ལ་མཐོ་³⁾འཁྱུ་ཞིང་རྒྱན་འདོགས་པའི་རང་བཞིན་ཅན་ཞིག་ཡོད་ལ། དེ་འབྲུ་མར་དང་
བའི་སྟོང་དམ་⁴⁾ རྒྱ་དང་བའི་སྟོང་དམ་⁵⁾། ཡོངས་སུ་ཕྱིས་པའི་མེ་ལོང་གི་⁶⁾དགྲིལ་འཁོར་རམ། མཐིང་བྱས་⁷⁾བསྐྱས་⁸⁾པའི་ས་ཕྱོགས་ལ་བདག་ཉིད་
བལྟ་བར་⁹⁾བསམ་མས་¹⁰⁾ནས་¹¹⁾དེས་དེར་བདག་ཉིད་ཀྱི་¹²⁾གཞུགས་¹³⁾མཐོང་ན་¹⁴⁾། བཟང་སྐྱོང་། དེ་ལ་¹⁵⁾ཇི་སྟུང་དུ་སེམས། འབྲུ་མར་དང་པའི་
སྟོང་དམ། རྒྱ་དང་བའི་སྟོང་དམ་¹⁶⁾ ཡོངས་སུ་ཕྱིས་པའི་མེ་ལོང་གི་¹⁷⁾དགྲིལ་འཁོར་རམ། མཐིང་བྱས་¹⁸⁾བསྐྱས་པའི་སའི་¹⁹⁾ཕྱོགས་དེ་ལ་གང་སྐྱེས་
པ་འམ། བྱད་མེད་ཀྱི་²⁰⁾གཞུགས་སྐྱང་བ་དེ་སྐྱེས་པ་འམ་²¹⁾བྱད་མེད་གང་ཡང་²²⁾དེའི་ནང་དུ་སོང་བ་འམ། དེའི་ནང་དུ་ཞུགས་པ་ཡོད་དམ། །བཟང་
སྐྱོང་གིས་གསོལ་པ། །བརྩན་པ་བཅོམ་ལྡན་འདས་²³⁾ དེ་ནི་མ་མཆིས་མོད་ཀྱི་²⁴⁾ བརྩན་པ་བཅོམ་ལྡན་འདས་²⁵⁾ འབྲུ་མར་དང་²⁶⁾ཆབ་དེ་དང་
²⁷⁾ཞིང་²⁸⁾རྟོག་པ་མ་མཆིས་པ་འམ། ²⁹⁾མེ་ལོང་གི་³⁰⁾དགྲིལ་འཁོར་དེ་ལེགས་པར་ཡོངས་སུ་ཕྱིས་པ་འམ། མཐིང་བྱས་བསྐྱས་³¹⁾པའི་ས་ཆེན་པོ་དེ་
དག་པའི་སྤྲད་དུ་³²⁾གཞུགས་བརྟན་³³⁾མདུན་ན་མཆིས་ཏེ། ཆབ་དང་།³⁴⁾ འབྲུ་མར་དང་།³⁵⁾ མེ་ལོང་དང་། ས་ཆེན་པོ་དེ་ལས་སྐྱེས་པ་འམ་³⁶⁾བྱད་
མེད་ཀྱི་ལུས་དེ་³⁷⁾བྱུང་³⁸⁾བ་འང་མ་ལགས་།³⁹⁾ གང་ནས་ཀྱང་མ་མཆིས། ⁴⁰⁾གང་དུ་ཡང་⁴¹⁾མ་མཆིས། གང་ནས་ཀྱང་མ་སྐྱེས། གང་དུ་ཡང་
⁴²⁾མ་འགགས་⁴³⁾སོ།།

1) U inserts | 2) Ph_aU insert | 3) Ph_a inserts ཐོ 4) Ph_a omits | 5) Ph_a inserts རྒྱ་དང་ 6) Ph_a གྱིས་ 7) Ph_a རྩད་ 8) PPh_a
སྐྱས་ 9) Ph_a omits བར་ 10) L བསམ་ 11) U inserts | 12) Ph_a གྱིས་ 13) Ph_a གཞུང་ 14) Ph_a རྟོག་ 15) Ph_a omits ལ་ 16) Ph_a
omits | 17) Ph_a གྱིས་ 18) Ph_a རྩད་ 19) NPLPh_a ས་ 20) Ph_a གྱིས་ 21) Ph_aU insert | 22) Ph_a omits ཡང་ 23) Ph_aU omit | 24)
Ph_a གྱིས་ 25) Ph_aU omit | 26) U inserts | 27) Ph_a དངས་ 28) Ph_a རིང་ 29) Ph_a inserts བཟང་སྐྱོང་ 30) Ph_a གྱིས་ 31) Ph_a སྐྱས་
32) Ph_a inserts བྱམ་རྩྱེ 33) Ph_a གཞུན་ 34) Ph_a omits | 35) Ph_a omits | 36) Ph_aU insert | 37) NPL omit དེ 38) NPLPh_a
འབྲུང་ 39) Ph_a omits | 40) Ph_a inserts ས་ 41) LPh_aU འང་ 42) L འང་ 43) Ph_aU ལགས་

[3L]

T 418, 905c25–906a01:

佛言。善哉。善哉。颺陀和。如是。颺陀和。色清淨所有者清淨。欲見佛即見。見即問。問即報。聞¹⁾經大歡喜。作是念。佛從何所來。我爲²⁾到何所。自念佛無所從來我亦無所至。自念三處欲處色處無想處是三處意所爲耳。我所念即見。

¹⁾ 聞=問<知>. ²⁾ 我爲=去<三><知>.

T 417, 899b23–b28:

佛言。善哉。颺陀和。色清淨故。所有者清淨。欲見佛即見。見即問。問即報。聞經大歡喜作是念。佛從何所來。我爲到何所。自念佛無所從來我亦無所至。自念欲處色處無色處是三處意所作耳。我所念即見。

T 419, 922c26–923a02:

佛言。善哉善哉。拔陂。實如是。以淨色已分別。諸菩薩欲見佛易無難見。即¹⁾能問得問能對。所聞內喜其復內爾。是諸佛從何來我到何所。是皆無從來。知如來無從去。云其自身其復生意爾。但意行是三界耳。我欲觀天意即見天。

¹⁾ 即=如<三>.

T 416, 877a26–b05:

時彼賢護如是答已。佛言賢護。如是。如是。如汝所說。諸物清淨彼色明朗。影像自現。不用多功。菩薩亦爾。一心善思見諸如來。見已即住。住已問義。解釋歡喜。即復思惟。今此佛者從何所來。而我是身復從何出。觀彼如來竟無來處及以去處。我身亦爾。本無出趣豈有轉還。彼復應作如是思惟。今此三界唯是心有。何以故。隨彼心念還自見心。

[3L]

PSS 36, D 15a1, N 24b4, P 15a6, L 22a5, S 315b6, Ph_a 139a1, U 270a1:

བཅོམ་ལྷན་འདས་ཀྱིས་བཀའ་སྤྲུལ་པ། །བཟང་སྟོང་། 1)ལེགས་སོ། 2)ལེགས་སོ། །བཟང་སྟོང་། ཁྱོད་ཡང་ལེགས་སོ། །བཟང་སྟོང་། དེ་དེ་བཞིན་
 རོ། 3)ཇི་སྐད་སྒྲུབ་པ་4)བཞིན་ཏེ། གཟུགས་5)རྣམས་ཤིན་ཏུ་6)ཡོངས་སུ་དག་པ་ལས་གཟུགས་7)བརྟན་8)རྣམས་སྤང་བར་འགྱུར་རོ། །དེ་བཞིན་དུ་བྱང་
 རྒྱུ་སེམས་དཔའ་དེ་ཡང་9)ཏིང་ངེ་འཛིན་འདི་ཤིན་ཏུ་བསྟོམས་10)པས་ཚགས་11)རྒྱང་དུས་12)དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དེ་13)རྣམས་14)བྱང་རྒྱུ་སེམས་
 དཔའ་དེས་15)མཐོང་ངོ་། །མཐོང་ནས་ཀྱང་ཁྱབ་ཁྱེད་16)ཁྱེད་པ་17)ལྷུང་བསྟན་བས་18)ཡི་19)རངས་པར་འགྱུར་རོ། །དེ་འདི་སྒྲུབ་དུ།20) དེ་བཞིན་
 གཤེགས་པ་འདི་གཞིག་ནས་བྱོན་ཏམ།21) །བདག་གཞིག་ཏུ་སོན་ཏམ།22) སྒྲུབ་པ་ལས་23)དེས་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དེ་གང་ནས་ཀྱང་མ་བྱོན་པར་རབ་
 ཏུ་ཤེས་སོ། །བདག་གི་24)ལུས་ཀྱང་25)གང་དུ་ཡང་26)མ་སོང་བར་རབ་ཏུ་27)ཤེས་ནས།28) དེ་འདི་སྒྲུབ་དུ།29) །ཁམས་གསུམ་པ་30)འདི་དག་ནི་
 སེམས་ཙམ་མོ། །དེ་ཅི་འཕྲིར་ཞེན། །འདི་ལྟར་བདག་ཇི་ལྟར་རྣམ་པར་རྟོག་31)པ་དེ་ལྟ་32)དེ་ལྟར་སྤང་ངོ་།།

1) Ph_a inserts ཁྱོད་ཡང་ 2) Ph_aU omit ། 3) Ph_a omits དེ་དེ་བཞིན་རོ། 4) Ph_a inserts དེ་ལྟར་དེ་ 5) Ph_a གཟུགས་ 6) Ph_a omits རྣམས་
 ཤིན་ཏུ་ 7) Ph_a གཟུགས་ 8) Ph_a བརྟན་ 9) L འང་ 10) PPh_a སྟོམས་ 11) Ph_a ཚགས་ 12) Ph_a དུས་ 13) Ph_a ངེས་ 14) U inserts ། 15) Ph_a
 omits དེས་ 16) Ph_a omits ཁྱེད་ 17) Ph_a inserts ལས་ 18) Ph_a པས་ 19) PL ཡིད་, Ph_a སེམས་ 20) Ph_aU omit ། 21) Ph_a གང་ནས་
 གཤེགས་ཤེམ། for གཞིག་ནས་བྱོན་ཏམ། 22) Ph_a གང་དུ་སོང་ for གཞིག་ཏུ་སོན་ཏམ།, U omits ། 23) Ph_aU insert ། 24) Ph_a གྱིས་ 25) Ph_a
 འདི་ for ཀྱང་ 26) LU འང་ 27) DNPL insert འདྲུ་, Ph_a omits རབ་ཏུ་ 28) Ph_a སོ།། for རྣམ། 29) Ph_aU omit ། 30) PL མོ་, Ph_a
 སུ་ for གསུམ་པ་ 31) N རྟོགས་ 32) Ph_a omits དེ་ལྟ་

付録 B

[3M]

APPEARS IN TIBETAN ONLY.

[3M]

PSS 36–37, D 15a5, N 25a2, P 15b2, L 22b3, S 316a4, Ph_a 139a6, U 270a6:

སེམས་དེ་¹⁾ནང་ན་ཡང་²⁾མེད། བྱི་ཚེ་ན་ཡང་³⁾མེད། གཉི་ག་⁴⁾མེད་པར་ཡང་⁵⁾མི་དམིགས་ཏེ་⁶⁾ གཞན་དུ་ན་དམིགས་པ་ལ་བརྟེན་⁷⁾ནས་
སྐྱེའོ། །གང་རྟེན་ཅིང་འབྲེལ་པར་བྱུང་⁸⁾བ་དེ་ནི་དངོས་པོ་མེད་པའོ། །⁹⁾གང་དངོས་པོ་མེད་པ་དེ་ནི་མ་སྐྱེས་པའོ། །གང་¹⁰⁾མ་སྐྱེས་པ་དེ་ནི་དམིགས་སུ་
མེད་པའོ། །གང་དམིགས་སུ་མེད་པ་དེ་¹¹⁾ནི་རང་བཞིན་སྟོང་པའོ། །གང་རང་བཞིན་སྟོང་པ་དེ་¹²⁾ནི་གདགས་¹³⁾སུ་མེད་པའོ། །གང་གདགས་¹⁴⁾སུ་
མེད་པ་དེ་ནི་བཟོ་བ་ལས། རྣམ་པར་ཤེས་པ་ལས།¹⁵⁾ རྟགས་པར་བྱ་བ་ལས། བསྟན་པ་¹⁶⁾ལས། རྒྱད་གཟུན་¹⁷⁾པར་བྱ་བ་ལས། རབ་ཏུ་གཞག་¹⁸⁾པར་
བྱ་¹⁹⁾མི་རྣམས་སོ།།

¹⁾ NL insert རང་, PPh_a inserts ཡང་ ²⁾ L རང་, Ph_a omits ཡང་ ³⁾ LPh_a རང་ ⁴⁾ PPh_a གཉིས་ག།, U གཉིས་ག། ⁵⁾ Ph_a omits ཡང་ ⁶⁾ Ph_a སོ།། for ཏེ། ⁷⁾ Ph_a རྟེན་ ⁸⁾ NPLPh_a འབྲུང་ ⁹⁾ Ph_a པ་ལས། for པའོ།། ¹⁰⁾ Ph_a inserts ལ་ ¹¹⁾ Ph_a omits རི་ ¹²⁾ Ph_a omits རི་ ¹³⁾ Ph_a བདག་, U གདག་ ¹⁴⁾ Ph_a བདག་, U གདག་ ¹⁵⁾ Ph_a དངོས་ for ལས། ¹⁶⁾ Ph_a པར་ ¹⁷⁾ Ph_a གསན་ ¹⁸⁾ Ph_a བཞག་ ¹⁹⁾ U inserts བ

[3N]

T 418, 906a01–a07:

心作佛。心自見。心是佛。心是怛薩阿竭。心是我身。心見佛。心不自知心。心不自見心。心有想爲癡。心無想是泥洹。是法無可樂者。皆念所爲。設使念爲空耳。設有念者亦了無所有。如是毘陀和。菩薩在三昧中立者所見如是。

T 417, 899b28–c03:

心作佛。心自見。心是佛心。佛心是我身。心見佛。心不自知心。心不自見心。心有想爲癡心。無想是涅槃。是法無可樂者。設使念爲空耳。無所有也。菩薩在三昧中立者。所見如是。

T 419, 923a02–a07:

以意作佛。亦以意見。但是我意爲佛。如來但意耳。及我身意也。以意見佛。意不能見意。意不能知意。意想爲無智。不想意爲泥洹。是法無堅。皆從自可起。自可悉空。求自可亦無有。拔陂。菩薩亦如是住在其定。

T 416, 877b05–b10:

今我從心見佛。我心作佛。我心是佛。我心是如來。我心是我身。我心見佛。心不知心。心不見心。心有想念則成生死。心無想念即是涅槃。諸法不眞思想緣起。所思既滅能想亦空。賢護當知。諸菩薩等因此三昧證大菩提。

APPEARS IN CHINESE ONLY.

付録 B

[30]

T 418, 906a07-a11:

佛爾時頌偈曰¹⁾

心者不知心 有心不見心

心起想則癡 無想是泥洹

是法無堅固 常立在於念

以解見空者 一切無想念

¹⁾ 曰=言<三>.

T 417, 899c03-07:

佛爾時說偈言

心者不自知 有心不見心

心起想則癡 無心是涅槃

是法無堅固 常立在於念

以解見空者 一切無想願

T 419 -

T 416 -

[30]

PSS 37–38, D 15a7, N 25a6, P 15b4, L 22b6, S 316a7, Ph_a 139b1, U 270b1:

དེན་ས་དེའི་ཆོ་བཅོམ་ལྷན་འདས་ཀྱིས་ཆོག་ས་སྤྲུབ་ཅད་¹⁾པ་འདི་དག་གསུངས་སོ།།

སེམས་ཀྱིས་སངས་རྒྱས་བྱེད་པ་སྟེ། །སེམས་ཉིད་ཀྱིས་ཀྱང་མཐོང་བའོ།།²⁾

སེམས་ཉིད་ངའི་³⁾སངས་རྒྱས་ཏེ། །སེམས་ཉིད་དེ་བཞིན་གཤམ་པའོ།། 1

སེམས་ཉིད་ངའི་⁴⁾ལྟ་ས་⁵⁾ཡིན་ཏེ། །སངས་རྒྱས་སེམས་ཀྱིས་མཐོང་བའོ།།

སེམས་ཉིད་ངའི་⁶⁾བྱང་རྩལ་སྟེ།⁷⁾ །སེམས་ཉིད་རང་བཞིན་མེད་པའོ།། 2

སེམས་ཀྱིས་⁸⁾སེམས་ནི་མི་ཤེས་ཤིང་། །སེམས་ཀྱིས་⁹⁾སེམས་ནི་མི་མཐོང་ངོ་།།

སེམས་སྤྲུལ་འདྲུལ་ས་¹⁰⁾མི་ཤེས་ཡིན་¹¹⁾། །སེམས་སྤྲུལ་མི་ཤེས་སྤྲུལ་འདྲུལ་ས་¹²⁾།། 3

ཆོས་འདི་དག་ནི་སྟོང་པོ་མེད། །སྟོང་སེམས་ལས་ནི་ཀྱན་འབྱུང་¹³⁾སྟེ།།

སྟོང་པ་ཉིད་ལས་¹⁴⁾གང་སྟོང་¹⁵⁾པའི། །སྟོང་སེམས་དེ་འདི་རྟོང་པ་ཡིན།། 4

བཟང་སྟོང་གིས་ཞུས་པའི་ཉིང་ངེ་འཛིན་གྱི་ལེའུ་སྟེ་གསུམ་པའོ།། །¹⁶⁾

¹⁾ P གཅད་ ²⁾ Ph_a omits སེམས་ཉིད་ཀྱིས་ཀྱང་མཐོང་བའོ།། ³⁾ PPh_a ངའི་ for ངའི་ ⁴⁾ PPh_a ངའི་ for ངའི་ ⁵⁾ Ph_a ལྟ་ས་ ⁶⁾ P ངའི་ for ངའི་ ⁷⁾

Ph_a omits སེམས་ཉིད་ངའི་བྱང་རྩལ་སྟེ། ⁸⁾ P ཉི་ ⁹⁾ Ph_a ཉིས་ for ཉིས་ ¹⁰⁾ Ph_a inserts འདྲུལ་ ¹¹⁾ Ph_a omits ཡིན་ ¹²⁾ Ph_a འདྲུལ་ ¹³⁾ NPL ལྟོང་

¹⁴⁾ Ph_aU ལ་ ¹⁵⁾ Ph_a inserts སེམས་ ¹⁶⁾ Ph_a omits བཟང་སྟོང་གིས་ཞུས་པའི་ཉིང་ངེ་འཛིན་གྱི་ལེའུ་སྟེ་གསུམ་པའོ།། །

略号・参考文献

略号

- AAA *Abhisamayālaṃkāra'ālokā Prajñāpāramitāvyākhyā The work of Haribhadra*, ed. Unrai Wogihara. Tokyo: Toyo Bunko, 1932–1935. [repr. Tokyo: Sankibo Buddhist Book Store, 1973].
- AKBh *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*, ed. P. Pradhan. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1967.
- AN *Āṅguttara-Nikāya* (Pali Text Society Edition).
- ASP →see AAA
- BhK III *Minor Buddhist Texts: Third Bhāvanākrama Part III*, (Serie Orientale Roma XLIII), ed. G. Tucci. Roma: Istituto Italiano Per Il Medio Ed Estremo Oriente, 1971.
- BK-IV 宮崎泉ほか『『中観五蘊論』における五位七十五法対応語: 仏教用語の現代基準訳語集 および定義的用例集 バウツダコーシャⅣ』(インド学仏教学叢書 20) 山喜房佛書林, 2017.
- D デルゲ版.
- DBh 『梵文大方広仏華嚴經十地品』, ed. Ryūkō Kondō. Tokyo: The Daijyō Bukkyō Kenyō-Kai, 1936.
- Dhp *Dhammapada* (Pali Text Society Edition).
- KarP *Karuṇāpūṇḍarīka the white lotus of compassion: Edited with Introduction & Notes*, Vol. II, ed. Isshi Yamada. New Delhi: Heritage Publishers, 1989.
- KP *The Kācāyapaparivarta: a Mahāyānasūtra of the Ratnakūṭa class: Edited in the Original Sanskrit in Tibetan and in Chinese*, ed. Baron A. von Staël-Holstein. Shanghai: Commercial Press, 1926. [repr. Tokyo: Meicho-Fukyū-kai, 1977].
- L ラサ版.
- L.Sukh *The Larger and Smaller Sukhāvātīvyūha Sūtras: Edited with Introductory Remarks and Word Indexes to the Two Sūtras*, ed. Fujita Kotatsu. Kyoto: Hozokan, 2011, pp. 1–80.
- MSg *Mahāyānasamgraha*.
- Mvy *Mahāvīyūtpatti*, 榊亮三郎編『梵蔵漢和四訳対校 翻訳名義大集』真言宗京都大学, 1916. [再版 国書刊行会, 1981] .
- N ナルタン版.

- NidSa *A New Edition of the First 25 Sūtras of the Nidhānasamyukta*, ed. Jin-il Chung & Takamichi Fukita. Tokyo: Sankibo Buddhist Book Store, 2020.
- P 北京版.
- Ph_a プダク写本 (No. 175) .
- Ph_b プダク写本 (No. 217) .
- PSS *The Tibetan Text of the Pratyuṭpanna-Buddha-Saṃmukhāvasthita-Samādhi-Sūtra*, (Studia Philologica Buddhica Monograph Series I), ed. Paul Harrison. Tokyo: Reiyukai Library, 1978.
- ŚrBh III 大正大学総合佛教研究所 声聞地研究会『瑜伽論 声聞地 第三瑜伽处: サンスクリット語テキストと和訳』(大正大学総合仏教研究所研究叢書 32) 山喜房佛書林, 2018.
- Śgs *Śūraṅgama-samādhi-sūtra*.
- S トクパレス写本.
- Sn *Sutta-Nipāta* (Pali Text Society Edition).
- SP *Saddharmapuṇḍarīka*, (Bibliotheca Buddhica 10), ed. H. Kern & Bunyiu Nanjio. St.-Petersbourg: Imprimerie de l'Académie Impériale des Sciences, 1912.
- SRS I *Gilgit Manuscripts*, Vol. II(1), ed. Nalinaksha Dutt & Vidyavaridhi Shiv Nath Sharma. Srinagar, 1941.
- SSP *Saptaṭṭikāprajñāpāramitā*, ed. G. Tucci. *Memorie della Classe di Scienze Morali, Storiche e Filologiche*. serie V 17, 1923, pp. 116–139.
- SSP *Çatasāhasrikā-Prajñā-Pāramitā: A Theological and Philosophical Discourse of the Buddha with His Disciples (in a Hundred Thousand Stanza)*, ed. Pratāpacandra Ghoṣa. Calcutta: Baptist Mission Press, 1902–1914.
- S.Sukh *The Larger and Smaller Sukhāvatīvyūha Sūtras: Edited with Introductory Remarks and Word Indexes to the Two Sūtras*, ed. Fujita Kotatsu. Kyoto: Hozokan, 2011, pp. 81–94.
- T 『大正新脩大蔵経』
- T 416 闍那崛多訳『大方等大集経賢護分』(T 13, 872a1–897c15) .
- T 417 支婁迦讖訳『仏説般舟三昧経』(T 13, 897c26–902c19) .
- T 418 支婁迦讖訳『般舟三昧経』(T 13, 902c24–919c05) .
- T 419 失訳『拔陂菩薩経』(T 13, 920a4–924b17) .
- U ウランバートル写本.
- Up 本庄良文『俱舍論註ウパーイカーの研究 訳註篇(上/下)』大蔵出版, 2014.

- VC *Vajracchedikā Prajñāpāramitā*, (Serie Orientale Roma 13), ed. Edward Conze. Roma: Istituto Italiano Per Il Medio Ed Estremo Oriente, 1974 (Second Edition).
- Vism *Visuddhimagga* (Pali Text Society Edition).
- Vism (W) *The Visuddhimagga of Buddhaghosācariya*, (Harvard Oriental Series 41), ed. Henry Clarke Warren. Massachusetts: Harvard University Press, 1950.
- 『大阿弥陀経』 支謙訳『阿弥陀三耶三仏薩婆仏檀過度人道経』 (T Vol. 12, no. 362) .
- 『平等覺経』 支婁迦讖訳『無量清浄平等覺経』 (T Vol.12, no. 361) .
- 『阿弥陀経』 鳩摩羅什訳『仏説阿弥陀経』 (T Vol. 12 no. 366) .
- 『称讃浄土経』 玄奘訳『称讃浄土仏摂受経』 (T Vol. 12 no. 367) .
- 『道行経』 支婁迦讖訳『道行般若経』 (T Vol. 8 no. 224) .
- 『発智論』 玄奘訳『阿毘達磨発智論』 (T Vol. 26, no. 1544) .
- 『新婆沙』 玄奘訳『阿毘達磨大毘婆沙論』 (T Vol. 27 no. 1545) .
- 『旧婆沙』 浮陀跋摩訳『阿毘曇毘婆沙論』 (T Vol. 28 no. 1546) .
- 『仏教大辞典』 望月信亨編『望月仏教大辞典 第五巻』 仏教大辞典発行所, 1933 [再版 世界聖典刊行協会, 1958] .
- 『平川索引 II』 平川彰『阿毘達磨俱舍論索引: Part Two Chinese-Sanskrit』 大蔵出版, 1977.
- 『大乘經典辞典』 勝崎裕彦ほか『大乘經典解説辞典』 北辰堂, 1997.

参考文献

ALLON, Mark & SALOMON, Richard

- 2010 "New Evidence for Mahayana in Early Gandhāra," *The Eastern Buddhist* (New Series) 41(1): 1–22.

ARAMAKI, Noritoshi

- 2003 "Towards a New Working Hypothesis on the Origin of Mahāyāna Buddhism," *The Eastern Buddhist* (New Series) 35(1): 203–218.

BIDYABINOD, B.B.

- 1927 "Fragment of a Prajnaparamita Manuscript from Central Asia," *Memoirs of the Archaeological Survey of India* 32: 1–11.

BOUCHER, Daniel

- 1998 "Gāndhārī and the Early Chinese Buddhist Translations Reconsidered: The Case of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra," *Journal of the American Oriental Society* 118(4): 471–506.
- 2000 "On Hu and Fan Again: The Transmission of 'Barbarian' Manuscripts to China," *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 23: 7–28.
- 2008 *Bodhisattvas of the Forest and the Formation of the Mahayana: A Study and Translation of the Rāṣṭrapālāparipṛcchā-sūtra*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- 2013 "What Do We Mean by 'Early' in the Study of the Early Mahāyāna and Should We Care?," *Bulletin of the Asia Institute* 23:31–39.

BRONKHORST, Johannes

- 2012 "Reflections on The Origins of Mahā," *Estudios Filológicos* 337: 489–502.

BROUGH, John

- 1982 "Amitābha and Avalokiteśvara in an Inscribed Gandhāran Sculpture," *Indologica Taurinensia* 10: 65–70.

CHAROENSRISET, Samawadee

- 2007 「カニシカ起源の問題をめぐって」『印仏研』56(1): 339–336.

COX, Collet

- 1995 *Disputed Dharmas: Early Buddhist Theories on Existence: An Annotated Translation of the Section on Factors Dissociated from Thought from Saṅghabhadra's Nyāyānusāra*. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.

DELEANU, Florin

- 2000 "A Preliminary Study on Meditation Buddhism," *The Annual Report of the International Buddhology at Soka University* 3: 65–113.
- 2006 *The Chapter on the Mundane Path (Laukikamārga) in the Śrāvakabhūmi: A Trilingual Edition (Sanskrit, Tibetan, Chinese), Annotated Translation, and Introductory Study*, Volume I, (Studia Philologica Buddhica Monograph Series XXa). Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.

DESSEIN, Bart

- 2009 "The Mahāsāṃghikas and the Origin of Mahayana Buddhism: Evidence Provided in the Abhidharmamahāvibhāṣāśāstra," *The Eastern Buddhist* (New Series) 40(1): 25–61.

FALK, Harry

- 2001 "The Yuga of the Sphujiddhvaja and the Era of the Kuṣāṇas," *Silk Road Art and Archaeology* 7: 121–136.
- 2004 "The Kaniṣka Era in Gupta Records," *Silk Road Art and Archaeology* 10: 167–176.

FUJITA, Koutatsu

- 1990 "The Textual Origins of the *Kuan Wu-liang-shou ching*: A Canonical Scripture of Pure Land Buddhism," *Chinese Buddhist Apocrypha*, ed. Robert E. Buswell Jr.. Honolulu: University of Hawai'i Press. pp. 149–173.

GÓMEZ, Luis O. & SILK, Jonathan A.

- 1989 *Studies in the Literature of the Great Vehicle: Three Mahāyāna Buddhist texts*, (Michigan Studies in Buddhist Literature 1). Ann Arbor: Collegiate Institute for the Study of Buddhist Literature and Center for South and Southeast Asian Studies, University of Michigan.

HARRISON, Paul

- 1978a →PSS
- 1978b "Buddhānusmṛti in the Pratyutpanna-buddha-saṃmukhāvasthita-samādhi-sūtra," *Journal of Indian Philosophy* 6: 36–57.
- 1990 *The Samādhi of Direct Encounter with the Buddhas of the Present: An Annotated English Translation of the Tibetan Version of the Pratyutpanna-Buddha-Saṃmukhāvasthita-Samādhi-Sūtra*, (Studia Philologica Buddhica Monograph Series V). Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies. [Ph.D. thesis Australian National University, 1980].
- 1992 "Commemoration and Identification in Buddhānusmṛti," *In the Mirror of Memory: Reflections on Mindfulness and Remembrance in Indian and Tibetan Buddhism*, ed. Janet Gyatso. Albany: State University of New York. pp. 215–238.
- 1993 "The Earliest Chinese Translations of Mahāyāna Buddhist Sūtras: Some Notes on the Works of Lokakṣema," *Buddhist Studies Review* 10(2): 135–177.
- 1995 "Searching for the Origins of the Mahāyāna: What Are We Looking For?," *The Eastern Buddhist* (New Series) 28(1): 48–69.
- 1998 *The Pratyutpanna Samādhi Sutra; The Śūraṅgama Samādhi Sutra*, (BDK English Tripiṭaka 25–II & III). Berkeley: Numata Center. pp. 1–116.

HARRISON, Paul, LENZ, Timothy and SALOMON, Richard

- 2018 "Fragments of a Gāndhārī Manuscript of the Pratyutpannabuddhasaṃmukhāvasthitasamādhisūtra," *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 41: 117–141.

HOERNLE, A.F.R

- 1916 *Manuscript Remains of Buddhist Literature Found in Eastern Turkestan*. Oxford: Clarendon Press.

INAGAKI, Hisao

- 1989 「Pan-Chou-San-Mei-Ching 般舟三昧經」『藤田宏達博士還暦記念論集：インド哲学と仏教』平楽寺書店. 49–88 頁.

LAMOTTE, Étienne

- 1965/1998 *Śūraṅgamasamādhisūtra. The Concentration of Heroic Progress*. An Early Mahāyāna Buddhist Scripture Translated and Annotated by Etienne Lamotte; English Translation by Sara Boin-Webb. Surrey: Curzon Press/London: The Buddhist Society.

LINK, Arthur E.

- 1958 "Wei Shou; Treatise on Buddhism and Taoism; An English Translation of the Original Chinese Text of Wei-shu cxiv and the Japanese Annotation of Tsukamoto Zenryū. by Leon Hurvitz," *Journal of the American Oriental Society* 78(1): 60–70.

NATTIER, Jan

- 2003 *A Few Good Men: The Bodhisattva Path According to the Inquiry of Ugra (Ugraparipṛcchā)*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- 2008 *A Guide to the Earliest Chinese Buddhist Translations: Texts from the Eastern Han 東漢 and Three Kingdoms 三国 Periods*, (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica X). Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University.

KARASHIMA, Seishi

- 2010 *A Glossary of Lokakṣema's Translation of the Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā 道行般若經詞典*, (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica XI). Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University.
- 2011 *A Critical Edition of Lokakṣema's Translation of the Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā 道行般若經校注*, (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica XII). Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University

OSTO, Douglas

- 2018 "Altered States and the Origins of the Mahāyāna," *Setting Out on the Great Way: Essays on Early Mahāyāna Buddhism*, ed. Paul Harrison. Sheffield: Equinox. pp. 177–205.

REICHELT, Hans

- 1928 *Die Soghdischen Handschriftenreste des Britischen Museums: in Umschrift und mit Übersetzung: I Teil: Die Buddhistischen Texte*, Heidelberg: Carl Winter's Universitätsbuchhandlung.

ROBINSON, Richard H.

- 1967 *Early Mādhyamika in India and China*. Madison: University of Wisconsin Press. [repr. Delhi: Motilal Banarsidass, 1976].

RUEGG, David Seyfort

- 2004 "Aspects of the Study of the (Earlier) Indian Mahāyāna," *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 27 (1): 3–62.

SASAKI, Shizuka

- 1997 "A Study on the Origin of Mahāyāna Buddhism," *The Eastern Buddhist* (New Series) 30(1): 79–113.

SALOMON, Richard & SCHOPEN, Gregory

- 2002 "On an Alleged Reference to Amitābha in a Kharoṣṭhī Inscription on a Gandhāran Relief," *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 25(1–2): 3–31.

SCHOPEN, Gregory

- 1975 "The Phrase 'sa pṛthivīpradeśaś caityabhūto bhavet' in the Vajracchedikā," *Indo-Iranian Journal* 17(3): 147–181.
- 1979 "Mahāyāna in Indian Inscriptions," *Indo-Iranian Journal* 21(1): 1–19.
- 1987 "The Inscription on the Kuṣāṇ Image of Amitābha and the Character of the Early Mahāyāna in India," *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 10(2): 99–134.

SKILLING, Peter

- 2010 "Authenticity and the Śrāvaka Schools: An Essay Towards an Indian Perspective," *The Eastern Buddhist* (New Series) 41(2): 1–47.

SKILTON, Andrew

- 1999 "Dating the Samādhirāja Sūtra," *Journal of Indian Philosophy* 27: 635–652.

- 2002 "State or Statement?: Samādhi in Some Early Mahayāna Sūtras," *The Eastern Buddhist* (New Series) 34(2): 51–93.

YAMABE, Nobuyoshi

- 1999a *The Sūtra on the Ocean-Like Samādhi of the Visualization of the Buddha: The Interfusion of the Chinese and Indian Cultures in Central Asia as Reflected in a Fifth Century Apocryphal Sūtra*. [Ph.D. Thesis, Yale University].
- 1999b "The Significance of the "Yogalehrbuch" for the Investigation into the Origin of Chinese Meditation Texts," *Buddhist Culture* 9: 1–74.

WALEY, Arthur

- 1957 "Review of Zenryū Tsukamoto, Chōron kenkyū," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* (19): 195–196.

WELLAR, Friedrich

- 1936–1937 "Bemerkungen zum Soghdischen Dhyāna-Texte," *Monumenta serica* 2: 341–404.
- 1938 "Bemerkungen zum Soghdischen Dhyāna-Texte," *Monumenta serica* 3: 78–129.

WHITE, David Gordon

- 2009 *Sinister Yogis*. Chicago/London: The University of Chicago Press.

赤沼智善

- 1927a 「般舟三昧經の研究（上）」『宗教研究』4(1): 97–117.
- 1927b 「般舟三昧經の研究（下）」『宗教研究』4(2): 51–70.
- 1939 『仏教經典史論』三宝書院。〔再版 法藏館, 1981〕。

赤松明彦

- 2011 「ヒンドゥー教と大乘仏教」『大乘仏教の誕生』（シリーズ大乘仏教 2）春秋社, 206–229 頁。

安藤俊雄

- 1962 「廬山慧遠の禅思想」『慧遠研究』249–285 頁。〔『天台学論集: 止観と浄土』平楽寺書店, 1975. 184–228 頁 所収〕。

池田英淳

- 1937 「鳩摩羅什訳出の禅經典と廬山慧遠」『大正大学学報』(26): 101–118.

井ノ口泰淳

- 1966 「西域出土の梵文瑜伽書」『龍谷大学論集』381: 2–15.

- 池本重臣
1958 『大無量寿経の教理史的研究』 永田文昌堂.
- 宇井伯寿
1971 『訳経史研究』 岩波書店.
- 宇治谷祐顯
1955 「「念仏」語の原典学的解釈」『東海仏教』1: 23-28.
- 漆間正徳
1937 「般舟三昧経成立私考: 特に道行般若経との関係に就き」『浄土学』11: 71-83.
- 大田利生
1983 「般舟三昧と浄土教」『龍谷大学論集』423: 134-158.
- 岡田行弘
2001 「法華経の成立と構造に関する試論: 林住者と僧院住者という視点を中心として」勝呂信静編『法華経の思想と展開』平楽寺書店, 251-271 頁.
- 香川孝雄
1958 「般舟三昧経における浄土教思想」『佛教大学研究紀要』35: 118-140.
1962 「カダリック出土 Bhadrāpāla-sūtra の梵文断簡について」『印仏研』10(2):199-203.
- 梶山雄一・末木文美士
1992 『観無量寿経 般舟三昧経』（浄土仏教の思想 2）講談社.
- 春日井眞也
1953 「観無量寿仏経における諸問題」『仏教文化研究』(3): 37-50.
- 辛嶋静志
2010 「阿弥陀浄土の原風景」『佛教大学総合研究所紀要』17:15-44.
- 川越英真
2005 『*dKar chag 'Phang thang ma*』（東北インド・チベット研究叢書）東北インド・チベット研究会.
- 木村泰賢
1968 『木村泰賢全集 第四巻』大法輪閣.
- 肥塚隆
1985 「大乘仏教の美術: 大乘仏教美術の初期相」『大乘仏教とその周辺』（講座大乘仏教 10）春秋社, 263-291 頁.

境野黄洋

- 1935 『支那仏教精史』 境野黄洋博士遺稿刊行会.

櫻部建

- 1974 山口益編『仏教聖典』 平楽寺書店.
1975a 「般舟三昧経管見: 一卷本と三巻本との関連について」『仏教研究論集: 橋本博士退官記念仏教研究論集刊行会編』 清文堂出版, 173-180 頁.
1975b 『般舟三昧経記』 東本願寺出版部.
1978 「般舟三昧経管見: 一卷本と三巻本の関連について再説」『同朋仏教』12:127-138.
1991 「書評・紹介 Paul Harrison: The Samādhi of Direct Encounter with the Buddhas of the Present, Tokyo, 1990.」『仏教学セミナー』53: 48-58.
1983 「念仏三昧という語について」『仏教と文化: 中川善教先生頌徳記念論集』 同朋社出版, 483-488 頁.

佐々木閑

- 2011 「大乘仏教起源論の展望」『大乘仏教とは何か』(シリーズ大乘仏教 1) 春秋社, 74-112 頁.

椎尾辨匡

- 1933 『仏教經典概説』 甲子社書房.

色井秀讓

- 1963 「般舟三昧経の成立について」『印仏研』11(1): 203-206.
1978 『浄土念仏源流考』 百華宛.

静谷正雄

- 1974 『初期大乘仏教の成立過程』 百華宛.

下田正弘

- 1997 『涅槃経の研究: 大乘經典の研究試論』 春秋社.
2011 「經典研究の展開からみた大乘仏教」『大乘仏教とは何か』(シリーズ大乘仏教 1) 春秋社, 40-71 頁.
2020 『仏教とエクリチュール: 大乘經典の起源と形成』 東京大学出版会.

末本文美士

- 1989 「『般舟三昧経』をめぐって」『インド哲学と仏教: 藤田宏達博士還暦記念論集』 平楽寺書店, 313-332 頁.

杉本卓洲

- 1999 「マトゥラーにおける仏像崇拜の展開（その3）」『金沢大学文学部論集: 行動科学・哲学篇』19: 83-118.

橘瑞超

- 1912 『西域に於ける浄土教』（二楽叢書 第一号）橘瑞超.

玉城康四郎

- 1981 「『般舟經』における念仏三昧の考察」『大乘仏教から密教へ: 勝又俊教博士古稀記念論集』春秋社, 85-103 頁.

丹治昭義

- 1974 『維摩經 首楞嚴三昧經』（大乘仏典 7）中央公論社.

塚本善隆

- 1968 『中国仏教通史 第一巻』春秋社.

月輪賢隆

- 1971 『仏典の批判的研究』百華宛.

藤堂恭俊

- 1960 「鳩摩羅什訳出と言われる禅經典の説示する念仏観」『東洋思想論集: 福井博士頌寿記念』福井博士頌寿記念論文集刊行会, 398-411 頁.

常盤大定

- 1939 『後漢より宋齊に至る訳経総録』東方文化学院東京研究所.

長尾雅人

- 1982 『摂大乘論: 和訳と注解（上）』講談社.

中村元

- 1980 『ブッダの世界』学習研究社.

西義雄

- 1972 「般舟三昧の研究資料と其の意義に就いて」『浄土教の思想と文化: 恵谷隆戒先生古稀記念』佛教大学, 1265-1286 頁.

西岡祖秀

- 1981 「『プトゥン仏教史』目録部索引 I」, 『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』4: 61-92.

西村実則

- 1988 「ガンダーラ語仏教圖と漢訳仏典」『三康文化研究所年報』20: 49-125.

能仁正顕

2018 『仏説般舟三昧経序説』 永田文昌堂.

羽田亨

1958 『羽田博士史学論文集: 下巻 言語・宗教篇』 (東洋史研究叢刊之三之二) 東洋史研究会.

羽田野伯猷

1983 「チベット流伝前期の王室仏教備考」 『仏教と文化: 中川善教先生頌徳記念論集』 同朋舎出版, 281–312 頁.

原田覺

1982 「*lDan dkar ma* 目録考」 『仏教教理の研究: 田村芳朗博士還暦記念論集』 春秋社, 607–617 頁.

林純教

1994a 『藏文和訳 般舟三昧経』 大東出版社.

1994b 「般舟三昧経」 西藏訳および漢訳諸本における比較研究 (一): 「般舟三昧」 "Pratyutpanna-buddha-Saṃmukha-avasthita-samādhi" の語義について 『仏教論叢』 38: 93–98.

1995 「『般舟三昧経』 チベット訳及び漢訳諸本に於ける比較研究: 特に『般舟三昧経』 と空思想との関係について」 『東洋学研究』 32: 81–93.

2004 「『七百頌般若経』 (Saptaśatikā-prajñāpāramitā) の研究: 特に「一相莊嚴三昧」 (ekavyūha samādhi) と「般舟三昧」 (pratyutpannabuddha saṃmukhāvasthita samādhi) との関連に於いて」 『浄土学仏教学論叢: 高橋弘次先生古稀記念論集 第二巻』 山喜房佛書林, 161–181 頁.

林屋友次郎

1940 『経録研究 前篇』 岩波書店.

1945 『異訳経類の研究』 東洋文庫.

平川彰

1968 『初期大乘仏教の研究』 春秋社.

藤田宏達

1964 「臨終来迎思想の起源」 『印仏研』 12(2): 14–25.

1970 『原始浄土思想の研究』 岩波書店.

1979 「原始仏教における業思想」 『業思想研究』 平楽寺書店, 99–144 頁.

- 1985 『観無量寿経講究:『観経四帖疏』を参看して』真宗大谷派宗務所出版部.
- 1990 『大無量寿経講究』真宗大谷派宗務所出版部.
- 2007 『浄土三部経の研究』岩波書店.
- 藤原凌雪
- 1938 「般舟三昧経の念仏思想」『顕真学報』(19):16-25.
- 1940 『念仏思想開展史 印度之部』顕真学苑出版部.
- 舟橋一哉
- 1972 「初期仏教の業思想について: 相応部の一經典の解釈をめぐって」『仏教学セミナー』16: 1-11.
- 1974 「仏教における業論展開の一側面: 原始佛教からアビダルマ仏教へ」『仏教学セミナー』20: 45-65.
- 前田慧雲
- 1903 『大乘仏教史論』文明堂.
- 松岡由香子
- 2013 『仏教になぜ浄土教が生まれたか』(東西霊性文庫 5) ノンブル社.
- 松濤誠廉
- 1981 『馬鳴・端正なる難陀』山喜房佛書林.
- 眞野龍海
- 1966 「小阿弥陀経の成立」『印仏研』14(2): 171-180.
- 宮崎展昌
- 2012 『阿闍世王経の研究: その編纂過程の解明を中心として』山喜房佛書林.
- 宮治昭
- 2010 『インド仏教美術史論』中央公論美術出版.
- 明神洋
- 1993 「禅観經典における念仏観: その意義と起源について」『仏教学』35: 59-79.
- 村上真完
- 1970 「Praśāntavinīścayaprātihāryasūtra について」『印仏研』36(2): 867-871.
- 望月信亨
- 1930 『浄土教の起源及発達』共立社. [再版 山喜房佛書林, 1972].
- 1933 →『仏教大辞典』
- 1942 『中国浄土教理史』法蔵館.

- 1946 『仏教経典成立史論』法蔵館.
- 山部能宜
- 2011 「大乘仏教の禅定実践」『大乘仏教の実践』（シリーズ大乘仏教 3）春秋社, 96-125 頁.
- 芳村修基
- 1974 『インド大乘仏教思想研究』百華苑.
- 島田明
- 2011 「仏塔から仏像へ」『大乘仏教の実践』（シリーズ大乘仏教 3）春秋社, 128-165 頁.
- 山口瑞鳳
- 1978 「吐蕃王国仏教史年代考」『成田山仏教学研究紀要』3: 1-52.
- 1985 「デンカルマ八二四年成立説」『成田山仏教研究所紀要』9: 1-61.
- 山崎利男
- 1998 「カニシカ 1 世の年代をめぐる新研究紹介」『中央大学 アジア史研究』23: 1-21.
- 渡邊章悟
- 2010 「大乘経団のなぞ」奈良康明/下田正弘編『仏教の形成と展開』（新アジア仏教史 02 インドⅡ）佼成出版社, 171-202 頁.

謝辞

仏教学を始めて十年が経った。博士（文学）を志してから七になる。専門分野を変更したこともあり最初の二年間は苦い思いをしたが、それでも七年は充実していた。指導教授の松田和信先生、並川孝儀先生、本庄良文先生からは専門知識だけでなく、研究者としてのあり方を教えて頂いた。初めての印仏発表の際には、東京大学で朝一番であったにもかかわらず会場まで足を運んで下さり、安心した私は落ち着いて発表を終えることができた。人生初の印仏は今でも良い思い出になっている。日頃は大学の皆で集まって様々な文献を読み、他大学の研究会にも参加させてもらうことで交流も深まった。そして鄭鎮一先生と工藤順之先生からは、それぞれ *Pañcavastuka* と *Samādhirāja-sūtra* の研究にお誘い頂き、誠に恐縮ながら出版まで携わらせて頂いた。四年目に留学できることになったコーネル大学（Cornell University）では、一年間、ダニエル・ブシェー（Daniel Boucher）先生に大乘仏教の基礎から教えて頂いた。同時期に大学にやってきたジョセフ・マリノ（Joseph Marino）先生や同居していた院生たちは非常に親切で、いろいろな場所に連れ出してもらい、出かける度に貴重な経験をさせてもらった。この留学で得られた知見や友人は研究を超えた大きな財産となっている。また留学中には自坊のことで後輩の中島正淳氏に世話になり、同期の田中裕成氏には物資を送ってもらう他、時差十四時間の Portal 2 は精神面での支えともなっていた。七年のすべてをここに記すことはできないが、私が七年間の充実を感じているのは研究の進展もさることながら人に恵まれたからであった。

博士論文を執筆するにあたっては、まず小野田俊蔵先生に必須となるチベット語を初等文法から教えて頂いた。なんとか修得することができたのは先生のわかりやすい解説があったからこそであった。五島清隆先生には論文の構想段階から最後のチェックに至るまでお世話になった。特に授業で『般舟三昧経』と一緒に読んで頂いたことが研究を大きく進展させた。工藤順之先生からはウランバートル写本の写真を頂戴し、中島正淳氏と伊藤匡誠氏には原稿チェックの件で、マーク・ブラム（Mark Blum）先生には提出書類の英文チェックの件でお世話になった。ここに感謝申し上げたい。それから、ゴンちゃん。博論提出の報告を直接できないのが残念でならない。そして最後となったが、研究に費やす時間を自由に与えてくれた両親と伊藤匡誠氏に心より感謝いたします。

令和二年 十一月三十日

吹田隆徳